

空前の「純文学」ブーム

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
◆あなたなら、どうしますか？	
あなたなら、どうしますか？	22
◆やっぱり、ハンコはえらい（続・「あなたなら、どうしますか？」）	
やっぱり、ハンコはえらい（続・「あなたなら、どうしますか？」）	32
◆不思議	
不思議	44
◆聞こえてる？	
聞こえてる？	52
◆文字の顔	
文字の顔	60
◆空前の「純文学」ブーム	
空前の「純文学」ブーム（前編）	68
空前の「純文学」ブーム（後編）	74
◆女装文学の登場	
女装文学の登場	82
◆角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？	
角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？	92
◆仮面と人形	
仮面と人形（仮面編）	100
仮面と人形（人形編）	106
◆分身	
分身	116
◆捨てられた名前たち	

捨てられた名前たち	122
◆爪を切る	
爪を切る	128
◆交信欲=口唇欲	
交信欲=口唇欲	132
ケータイ依存症と唇 (続・交信欲=口唇欲)	139
オバマさんとノッチさん (続・ケータイ依存症と唇)	149
もしかして、出来レース? (続・オバマさんとノッチさん)	159
カジノ人間主義 (続・もしかして、出来レース?)	169
◆かわる	
かわる (1) ~ (5)	184
かわる (6) ~ (10)	195
◆まぼろし	
ああでもあり、こうでもある	214
差別化	222
飽きっぽくて、忘れっぽい	231
まぼろし	242
トリトメのない話	254
◆かく・かける	
かく・かける (1)	266
かく・かける (2)	279
かく・かける (3)	294
かく・かける (4)	303
かく・かける (5)	316
かく・かける (6)	326
かく・かける (7)	340
かく・かける (8)	346
書く・書ける (2) 【かく・かける (9)】	358
奥付	
奥付	372

はじめに

はじめに

電子書籍『うつせみのあなたに』（全11巻）の中から比較的読みやすい文章を選び、タイトルを変えたり若干の加筆をしたものを集めました。エッセイの形を取っていますが、もとはブログ記事であったものばかりです。中には文章の勢いを尊重して古いデータや情報をそのままにしたものもあります。悪しからず、ご了承ください。

なお、本書はときどきエッセイの数が増えますので、ときどき覗いていただければうれしいです。

以下に『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事のタイトルを紹介します。本書をきっかけに、お読みいただければ幸いです。

*

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

- 08.12.25 遠い所、遠い国
- 08.12.26 横たわる漱石
- 08.12.27 信じてはいけない言葉
- 08.12.28 そして、話はお金に行き着く
- 08.12.29 匿名性の恐ろしさ
- 08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について
- 08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった
- 09.01.01 私家版『存在と無』一序文一
- 09.01.02 論理の鬼
- 09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について
- 09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球
- 09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性
- 09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない
- 09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考
- 09.01.08 見えないものを見る
- 09.01.09 読めないけど分かる言葉
- 09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉
- 09.01.11 目は差別する
- 09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？
- 09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

09.01.22 なぜ、ケータイが

09.01.23 お口を空けて、あーん

09.01.24 冬のすずめ

09.01.25 架空書評：彼らのいる風景

09.01.26 交信欲＝口唇欲

09.01.27 ケータイ依存症と唇

09.01.28 オバマさんとノッチさん

09.01.29 もしかして、出来レース？

09.01.30 カジノ人間主義

09.01.31 コラブログとモノブログ

09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー

- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1 カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：P D S ジェネレーションズ
- 09.02.09 1 人に2 台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ
- 09.02.11 マトリックス
- 09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！
- 09.02.13 そっくり
- 09.02.14 「東京」@ 無限大
- 09.02.15 架空書評：九つの命
- 09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

- 09.02.17 ああでもあり、こうでもある
- 09.02.18 差別化
- 09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？

09.03.02 女か男か？

09.03.03 ヒトは本を読めない

09.03.04 作者はいない

09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって

09.03.06 毎度ありがとうございます

09.03.07 ゆうれいをはらう

09.03.08 こんなことを書きました（その4）

09.03.09 要するに、まなかな、なのだ

09.03.10 女心を男が歌う

09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）

09.03.13-09.03.15 でまかせしゆぎじっこうちゆう（後編）

09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお

09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）

09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）

09.03.30 なる（1）～（3）

09.03.31 なる（4）～（6）

09.04.01 なる（7）～（8）

09.04.02 なる（9）～（10）

09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる（3）～（4）

09.04.05 たとえる（5）～（6）

09.04.06 たとえる（7）

09.04.07 たとえる（8）

09.04.08 たとえる（9）

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゆう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる（10）

09.04.18 こんなことを書きました（その5）

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

- 09.04.20 言葉を奪われる
- 09.04.21 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ
- 09.04.22 「人間＝機械」説（1）
- 09.04.23 4月23日にギャグる
- 09.04.24 「人間＝機械」説（2）
- 09.04.25 「人間＝機械」説（3）
- 09.04.26 反「人間＝機械」説
- 09.04.27 あう（1）
- 09.04.28 あう（2）
- 09.04.29 あう（3）
- 09.04.30 あう（4）
- 09.05.01 あう（5）
- 09.05.02 あう（6）
- 09.05.03 あう（7）
- 09.05.04 こんなことを書きました（その6）
- 09.05.05 スポーツの信号学（1）
- 09.05.06 ドラマ信号論（1）
- 09.05.07 信号論から見た経済（1）
- 09.05.07 信号論から見た経済（2）
- 09.05.08 信号学的視線論（1）

09.05.09 信号学的視線論 (2)

09.05.10 信号論 (1)

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論 (2)

09.05.12 信号論 (3)

09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました（その8）

09.05.24 と、いうわけです（1）

09.05.24 と、いうわけです（2）

09.05.25 あらわれる・あらわす（1）

09.05.26 あらわれる・あらわす（2）

09.05.27 あらわれる・あらわす（3）

09.05.28 あらわれる・あらわす（4）

09.05.29 あらわれる・あらわす（5）

09.05.30 あらわれる・あらわす（6）

09.05.31 あらわれる・あらわす（7）

09.06.01 あらわれる・あらわす（8）

09.06.02 こんなことを書きました（その9）

第6巻

09.06.03 つくる（1）

09.06.04 つくる（2）

09.06.05 つくる（3）

09.06.06 つくる（4）

09.06.07 テリトリー（1）

09.06.08 テリトリー（2）

09.06.08 テリトリー（3）

- 09.06.09 テリトリー (4)
- 09.06.10 テリトリー (5)
- 09.06.11 テリトリー (6)
- 09.06.12 テリトリー (7)
- 09.06.13 こんなことを書きました (その 10)
- 09.06.18 なわ=わな
- 09.06.19 台風と卵巣
- 09.06.20 出る
- 09.06.21 うんちと言葉
- 09.06.22 地と知と血 (1)
- 09.06.22 地と知と血 (2)
- 09.06.23 「あつい」と「わからない」
- 09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり
- 09.06.25 時の神=あわいわあい (1)
- 09.06.25 時の神=あわいわあい (2)
- 09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第7巻

- 09.06.27 空前の「純文学」ブーム
- 09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

09.07.05 マンネリズム・マニエリズム

09.07.06 こんなことを書きました (その 12)

09.07.07 いみのいみ

09.07.08 何となく

09.07.14 記述＝奇術＝既述

09.07.15 3 人のゲンちゃん

09.07.16 あつさのせい？

09.07.17 システムと有効性と比喻

09.08.01 気になるというか

09.08.02 もう 1 つ気になることが

09.08.03 さらに気になることが

09.08.04 できないのにできる

09.08.05 何もないところから

09.08.06 めちゃくちゃこじつけて

09.08.07 銃が悪いのではなく

09.08.08 どうにもならないときには

09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第 8 巻

09.08.11 たわむれる

09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

- 09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）
- 09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）
- 09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）
- 09.11.13 代理だけの世界（1）
- 09.11.14 代理だけの世界（2）
- 09.11.15 代理だけの世界（3）
- 09.11.19 代理だけの世界（4）
- 09.11.27 1年前の記事を読んで
- 09.11.28 今、考えていること
- 09.11.29 社会復帰はあきらめました
- 09.11.30 代理だけ
- 09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その16）
- 09.12.02 でまかせ・いず・む
- 09.12.03 もてあそばれるしかない
- 09.12.04 わかるはわかるか
- 09.12.05 翻訳の可能性と不可能性
- 09.12.06 わかるという枠
- 09.12.07 わかるはわからない
- 09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

09.12.10 政治とは「分ける」こと

09.12.11 きな臭い話

09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて

09.12.09 続・社会復帰はあきらめました

09.12.10 ブログと心中？

09.12.11 よくないなあ

09.12.12 素面でいたい

09.12.13 儀式

09.12.14 爪を切る

09.12.15 わける（1）

09.12.16 わける（2）

09.12.XX こんなことを書きました（その18）

09.12.16 二句

09.12.19 ずらす

09.12.20 かえるのではなくてかえる

09.12.21 とりとめもなく

09.12.22 パラレル

09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）

09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）

09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（4）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（5）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け==く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

10.02.02 うつせみのたわごと -1-

10.02.02 うつせみのたわごと -2-

10.02.03 うつせみのたわごと -3-

10.02.04 うつせみのたわごと -4-

10.02.06 うつせみのたわごと -5-

10.02.07 うつせみのたわごと -6-

10.02.08 うつせみのたわごと -7-

10.02.09 うつせみのたわごと -8-

10.02.10 うつせみのたわごと -9-

10.02.11 うつせみのたわごと -10-

10.02.12 うつせみのたわごと -11-

- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと
- 10.02.27 はかる -1-
- 10.02.28 はかる -2-
- 10.02.XX はかる -3-
- 10.02.XX はかる -4-
- 10.03.XX こんなことを書きました（その 20）
- 10.03.04 代理としての世界 -1-
- 10.03.05 代理としての世界 -2-
- 10.03.06 代理としての世界 -3-
- 10.03.07 代理としての世界 -4-
- 10.03.09 代理としての世界 -5-
- 10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界（改訂版）(1)

代理としての世界（改訂版）(2)

代理としての世界（改訂版）(3)

代理としての世界（改訂版）(4)

◆あなたなら、どうしますか？

あなたなら、どうしますか？

たとえば、電車で通勤途中のある男性が、乗り換えの駅に着き、プラットフォームに降り立つ。突然、見知らぬ女性が男性の手を取り、「この人、痴漢でーす！」と叫ぶ。数時間後、男性は最寄りの警察署で逮捕される。

たとえば、ある女性がデパートの化粧品売り場で口紅を選んでいる。気に入ったものがないため、そのフロアーから上のフロアーへとエスカレーターで移動する。エスカレーターを降り、服の売り場に向かおうとした瞬間、「お客様、まことに失礼でございますが、そのバッグの中を拝見してもよろしいでしょうか？」と、呼び止められる。女性は手に提げたマイバッグに、口紅が転がりこんだことを知る。数時間後、その女性は最寄りの警察署にいる。

たとえば、朝起きたばかりの耳に、ドアをノックする音が聞こえる。賃貸マンションに住む、その社員がドアホールから外を覗くと、数人の黒っぽい色のスーツを着た男たちが立っている。ドアホン越しにやり取りをする。「〇〇さんですね、(E)署の者です」。「な、何ですか？ いきなり」。念のためにチェーンをかけたまま、ドアを開けると、外にいる男たちの一人が警察手帳を示した後、裁判所からの搜索令状を差し出す。ん？ 何だ、これ？ 心当たりは、全くない。

もし、上の三つの例のうち、どれかの事態が自分の身に降りかかったとしたら、あなたならどうしますか？

*

ところで、すべての人が絶対に逃れられないもの、つまり免れないものって、何でしょう？ お金？ 言葉？ 病気？ 老い？

ここで話したいと思っているのは、今挙げたものではなく、「法」です。「法」は、掟、法律、風習、習慣、ルール、マナーなどを含む、広い意味のものとして解釈することができます。今回は、特に「法律」に的を絞ってみましょう。的を絞るとはいえ、これだけでも、非常に大きな問題です。法律を専門に勉強したことのない者が、このテーマで何を書けるのか？ 心もとなさを覚えます。

でも、これから取り上げようとしている法律は、決して他人事ではありません。人として生まれた以上、誰も避けたり無視したりできるものでは全然ないと言えそうです。

さて、六法全書というものがあります。かつて、小型のものを持っていたことがありますが、今は手元にありません。法律はどんどん変わりますから、古いものを大切に保存していても、使い道は限定されます。

いずれにせよ、六法全書には人とその行動にまつわる多岐にわたる事柄について書いてあります。百科事典並み、いや、それ以上かもしれません。人が生まれて死ぬまで、そして死んだ後のことについてまで、詳細に記述されているさまは壮観です。

この国に限ったことではないでしょう。大陸法系であれ、コモン・ロー系であれ、イスラム法であれ——素人なのであとは続きませんが——人とその関係をめぐるありとあらゆる事象が、言葉という形態で体系化され集成されているのです。

*

かつて職業としての小説家を目指したことがあります。

最初は、「純文学」。これは、辞書的な定義の「死語」に当たるかもしれません（現在もなお、一生懸命「純文学」されている方、ごめんなさい）。とある新人文学賞の最終候補作五編の中に残ったこともありましたが、とある大都市の元・知事（当時の選考委員）に、けちょんけちょんにけなされて落とされました。今はご高齢ながらも、出家者兼現役作家として活躍されている、別の選考委員の方からは励ましのお言葉を頂戴しましたが.....。

その後、掌編と呼ばれる、ごく短い小説を対象とした賞の月間優秀作になったのが、ピークでしょうか。あとは、二次落ち、三次落ち、下読み落ち。悪あがきに、大衆小説（この言葉も、もう死語（死後）？ いや、死んでなんかいませんよね。出世魚のごとく、現在はエンターテインメント小説と名を変えたようです）とか、ミステリーを書いて、また二次落ち、三次落ち、下読み落ち。いつの間にか書かなく（いや、書けなく）になりました。いやはや、悔しさを思い起こし、つい要らぬことを、ねちねちと書いてしまいました。自己嫌悪。

ミステリーを書こうとしていたころ、困ったことがありました。人の殺し方は何とか、想像できるのですが、その殺した後のことが、書けないのです。もっとも、クライム・ノベル、犯罪小説、サスペンスを含む、「広義のミステリー」という、新人文学賞の募集要項によくある言葉に素直に従うことで、そうした面倒くさいことを避ける方法もあります。殺すまでの経緯や、殺す課程だけに、集中すればいいのです。

でも、苦手です。人を殺めるだけでは、良心がとがめる。なんて、格好をつけるわけではありませんが、どうも後味が悪い。夢見が悪い。というわけで、警察、警察組織、警察官の日常生活、捜査法、法律、法医学（検屍や検死も含みます）、検察、裁判所……について、お勉強をしました。当時は、インターネットの黎明期で、日本語で読めるウェブサイトは実に貧弱なものでした。つまり、使えない。

図書館をおおいに利用しました。で、分かったことがありました。大発見です。

すべてはハンコのためにある。

びっくり仰天。図書館のしーんとした閲覧室の席で、引っくり返りそうになるほど驚きました。何しろ、警察官にしろ、検察官にしろ、裁判官にしろ、ペーパーワークが半端じゃないのです。

何かあったら、書類にする。つまり、文字にする。そして、然るべき上の人から、ハンコをもらう。こればっかしなのです。これ、マジな話です。嘘ではございません。

いつ、捜査するの？ テレビドラマみたいに、警察官は、歩き回って、暇じゃなくて、

靴一足をつぶす暇（いや、時間）なんて、本当にあるの？

そんな疑問の念をいだきました。もちろん、靴を履きつぶすほどの苦労があることは、薄々知っています（おまわりさん、刑事さん、いつもご苦労さまです）。それにしても、です。書類作りが多い。並みの多さではない（ところで、キャリアさん、最終的には、あなたたちがハンコをポンポン押すのですか？ そうでしたら、あなたがたの、おててにだけに、ご苦労さまと申し上げます）。

*

『司法の目的は、人を拘束することではない。まして、処罰することでもない。書類を作成することだ』

思い出しました。懐かしいです。かつて長い長いセンテンスから成る文章を書いて、一部の学生たちに多大な影響を与えていた身長一八〇センチ強の、大学教員兼文芸批評家兼映画批評家が、雑誌か何かにそういう意味のことを書いていました。昔のことなので、詳しいことは覚えていませんが、大筋は、そうした趣旨のことが書かれていたと記憶しております。

簡単に言えば、司法と捜査機関において大切なのは、身柄の拘束や裁判や刑の執行ではなく書類作り。もっと、単純化すれば、「人じゃなくて紙」という身も蓋もない話なのです。

言えてます、よね。その慧眼（けいがん）に感服しました。さすが、元・総長（「総長」と言っても、暴走族の頭（かしら）ではありませんよ、ウカジ氏ではありません、念のため、ちなみにウカジ氏の身長は一九〇センチだそうです）。

この辺で、ここまで書いたことを整理してまとめます。

一、すべては、ハンコのためにある

二、『司法の目的は、(中略)書類を作成することだ』by 元・総長

以上に、尽きます。

ん？ はあ？

ですか？ では、もう少し詳しく述べます。公務員つまり役人にとって、何よりも大切なことは、国民への奉仕(シビル・サーバント=公僕(これも死語？)としての義務)などでは毛頭なく、自分に与えられた書類作りと、作成した書類に上司からのハンコをもらうこと、なのです。話を戻し、極論を言えば、大部分の警察官にとって(一部、例外はいます)、重要なのは現場ではなくデスクワークなのです。

*

話は変わります。古い話ですが、「ハンコ注射」ってありましたよね？ スタンプ注射ともいうらしい。予防接種ですよ。なんの予防かは、忘れました。とにかく、跡(痕跡)が残ります。

種痘というのも、ありましたよね。何の予防か分からないままに、幼いころに「ん？ ギャー！」と泣き叫んで、打たれたことだけは覚えています。虎馬というやつになって、今も残っています。夜中に、タイガーとホースに襲われる夢を見て、飛び起きることが何度あることか！ おふざけが、すぎました。ごめんなさい。何らかのトラウマに苦しんでいる方、ごめんなさい。

ハンコ注射や種痘については、きっと、グーグルで調べれば、詳しいことは分かるのですが、無精者で無気力な者としては、とりあえず手持ちの知識と記憶で間に合わせながら書き進めます。で、肝心なことだけを以下に述べます。

ミステリーを書くために、法医学に関する本を吐き気をこらえながら読んでいたとき、こんなことを知りました。身元不明の遺体を検死ないし解剖するさいに、腕にある痕跡、

つまりハンコ注射や種痘の跡で、その遺体の年齢が推定できる。もっと詳しく言うと、注射や種痘の痕跡の有無や形が、ある一定の期間ごとに異なっていた。そう言えば、そうですね。心当たりがあります。

ある時、年下の方と、一緒にお風呂に入る機会がありました（深読みなさらないでください）。ある肉体労働（これも深読みなさらないでください）をした後のことです。で、そのさいに左上腕の肩に近い部分にある傷跡を見比べて、その形の違いが話題になりました。結局は、「年齢（とし）が違うね（笑）」で、話が落ち着きました。

*

さきほどの図書館での驚愕事件のことですが、感心すると同時に、ぞーっとしました。今になって思うのは、次のようなことです。

国家は、国民に「烙印」＝ハンコを押している。たとえば、国民総背番号制、犯罪履歴、叙勲・褒章（複数のランクがありますね）、基礎年金番号制度、運転免許証、パスポート、住基ネット（住民票コード）、納税の際の書類に打たれた番号……。

これらは、記号であったり、数字であったりする。つまり、コンピューターにとって、使い勝手が極めてよろしいだけです。その情報処理のしやすさが恐ろしい。ただ、数字や記号は言葉に似て「比喩」っていう感じが、まだある。つまり、抽象的で、つかみどころがない。実感がわからない（だからこそ、怖いのですが）。

でも、上腕の傷跡は、比喩ではない。烙印です。文字通り、烙印＝ハンコなのです。一部の家畜に押される、痛々しい傷跡を思い浮かべてください。アウシュビッツやダッハウを連想する人がいても、責めることはできないと思います。衛生上および医学上の理由。健康福祉のためという大義。エピデミックやパンデミックを防ぐという、国家レベル・自治体レベルでの危機管理。国家の安全保障の一環としての当然の措置あるいは義務。そうしたことは、十分に承知したうえで、あえて次のように言いたいです。

ありがとう。ご苦労さま。でも、やっぱり、気味が悪い。

そう言わずにはいられない心境なのです。

ハンコは怖い。

*

さて、冒頭に挙げた三つの恐ろしい、カフカ的狀況に話を戻します。あれって、めちゃくちゃ怖いですね。ある日、突然、自分が司直の手にゆだねられる事態に遭遇する。想像しただけで、気持ちが暗くなります。

ここで、カフカ、可もなく不可もなく、可不可とかいう、手垢の付いた、使い古しの駄洒落を拝借して、景気付けでもしましょうか？ カフカ可不可あはは、なんて。

駄目ですか？ 元気が出ない？ あまりにもくだらなくて、余計に落ち込みましたか？ ごめんなさい。いずれにせよ、あのような災難（身に覚えがないなら災難です、冤罪です）が自分の身に降りか掛かったとしたなら、あなたならどうしますか？

あくまで、反抗しますか？

残念ながら、あなたはハンコに身をゆだねるしかありません。言い換えると、おとなしく「法の名の下での書類審査」を受ける以外に選択肢はないのです。

なぜなら、「反抗⇒犯行⇒はんこ」だからです。

「このバカタレ！」と言うお叱りの声が聞こえるようです。でも、本気です。反抗しちゃ、駄目です。一つ間違うと反抗から犯行へと即座に発展して有罪になってしまうんです。あくまでも、とりあえず、おとなしくしておいて「ハンコ」ポンポンペタペタ＝ペーパーワーク、に身をゆだねるしか、ないんです。

誰も逃れられない。もし罪を犯せば、判事も、ですよ（いつでしたか、破廉恥な判事

が裁かれましたね)。でも、大丈夫。「法曹界（ほうそうかい）」には、弁護士という味方（強い味方かどうかは、知りません。今のところ、お世話になったことがないのです。これから先も、ありませんように祈っております）もいます。「ほう、そうかい」なんて駄洒落は言っていませんよ。書いていますけど。

つまり、法廷で、正々堂々と「反抗」すればいいのです。その段階にまで行かないうちに「反抗」したんじゃ、即刻「犯行」にされてしまいます。公務執行妨害。現行犯逮捕。そうなれば、向こうの思うつぼです。

*

で、またもや話をさっきのことに戻します。今、思い出したのです。うろ覚えですけど、ハンコ注射はBCG、傷跡が残る種痘や注射は痘瘡（ほうそう＝痘瘡（とうそう）＝天然痘（てんねんとう）と関係があったらしい。「ほう、そう」かい、なんて駄洒落は言ってませんよ。書いてはいますけど（またズルして、ごめんなさい）。

とにかく、人類は天然痘との闘争（とうそう）に勝利し、撲滅した。ですから、これは、痘瘡との闘争に勝ったわけです。WHO万歳！痘瘡ウイルスにとってはさておき、ホモ・サピエンスにとっては、誠にめでたいことだと思っております。

しかしながら、ハンコの話は、それだけにとどまらないのです。

【※文中で、さまざまな疾患や、その他微妙な問題に関する、言葉・用語を用いたことで、当方が思いもよらない不快な思いをされた方々に対し、深くお詫び申し上げます。】

【後記今回の小品の続きは、「やっぱり、ハンコはえらい」というタイトルで次回に掲載いたします。話があちこちに飛びまくっている、この支離滅裂な駄文は、次回において一応収束する予定です。】

◆やっぱり、ハンコはえらい（続・「あなたなら、
どうしますか？」）

やっぱり、ハンコはえらい(続・「あなたなら、どうしますか?」)

結論から申し上げます。

単純化すれば、「反抗⇒犯行⇒はんこ」なので、人は誰もが結局はハンコに身をゆだねるしかない。

そういうお話を致したいと思います。ハンコ。これは、それほど手強い相手なのです。

そもそも、ハンコは、なぜ存在するのでしょうか？ それは、象徴だからです。では、何の象徴なのでしょう？ 法律の象徴です。その法律って、何なのでしょう？ 分かりません。素人の自分には、分かりません。

でも、気になります。法律とは何でしょうか？ 他人事ではありません。人は、生まれてから死ぬまで、いや、生まれる前から死んだ後も、法律と無縁ではられないのです。婚姻、結婚、(中略)、死亡、埋葬、相続——すべて、届けが必要です。どこに？ 嫌な言葉ですが、「お上(かみ)」にです。お上(かみ)に紙(かみ)を届けなければ、下手をすると、罰(ばち、ではなく、ばつ、です、念のため)を受けます。この駄洒落ですが、神(かみ)さまが、相手ではないので、罰(ばち)は当たらないと思います。

ただ、罰(ばち)と罰(ばつ)の違いだけは、考えておきたいです。罰(ばち)は、神仏のたぐいが人に対して与えるもののようです。罰(ばつ)は、原則として、人が人に与えるものです。そのよりどころになるのが、法律という途方もない「象徴の働き」なのだそうです。

簡単に言えば、「△△△してはならない」、「さもないと、㊄㊄㊄するぞ」と脅すのが、人以外の存在か、人自身かの違いです。法律は人が作ったものです（宗教がらみの例外もありますが、ややこしいので、ここでは触れません）。それなのに、人は、どこかで、なにか、なぜか、どういうふうにか、勘違いをしてしまった節があります。

この国以外の複数の国で、法廷に宣誓用のバイブルがあるのが、不思議です。また、この国もそうですが、法廷で判事がお坊さんのような、いかめしい格好をし、ひな壇みたいなところから、人を見下しているのも、不可思議です。開廷前の映像などをテレビで見ていると、芝居じみていて、笑いがこみ上げそうになる時も、あります。でも、これは、自分があの場に当事者としていないからこそ言えることだと思われま

どうやら、ばちとばつは、混同されているらしい。それとも、やはり、つながっていると、考えるべきなのでしょうか？

人が自分で勝手に作ったり築き上げたものによって振り回されている災難を、罰（ばち）などと呼んで、「人に代わるもの」に責任を転嫁する人がたくさんいます。卑怯です。仏教から来ている言葉らしいですが、「自業自得」と心得るべきだと思います。もちろん、自分自身も含めての話です。お説教をするつもりで、こんな大切なことは書けません。

いずれにせよ、紙（届け＝書類）とハンコから、逃れられない人生って窮屈ですね。でも、くだらなく思えることに対して、意地を張り、反抗し、罰（ばつ）を受けるなんて、ばつが悪いですから、やっぱり仕方ないですよ。少なくとも、この国を始めとする、いわゆる「法治国家」に住む以上は致し方ありません。

*

話を戻します。

法律とは何でしょうか？「法律」については、いろいろな定義が可能でしょうが、てっとり早く言えば、「権威」だと理解しております。「国家の権威」と言い換えても、それほど的外れではないのではないかと思います。

そうだとすれば、「やっぱり、ハンコはえらい」。無力な市民は、そうつぶやくしかなさそうです。なぜなら、ハンコは「国家の権威」の「象徴」だからです。それが、ハンコが「偉そう」にしている理由です。「偉そう」は伝染します。ポンポンペタンペタン押すだけが仕事の、役人や官僚に伝染します。

要するに、「伝染るんです（うつるんです、と読みます、念のため）」。恐ろしい言葉が出てしまいました。とうていタミフル（「民振る」とか「民降る」とか「民 full」とか「民 fool」とも書きます）なんかじゃ、太刀打ちできません。吉田シゲルさんのお孫さんも、官僚と役人の「伝染るんです」には勝てませんでした（お孫さんでは役不足が過ぎました）。たとえ戦車を繰り出しても、太刀打ちできないでしょう。

*

ここで、脱線します。

役人・官僚の横柄さと怠惰ぶりは、昔も今も変わりません。毎日、新聞を読んでいれば、よく分かります。ウェーバー（あるいは、ヴェーバー）が、ちょっとだけ予言したとおりです。悪しき官僚制、あるいは官僚制の弊害というやつです。言い換えれば、虎の威＝衣を借りる狐。国家の権威の威＝衣を借りる役人。

だから、汚職が起こります。民間人は、役人からハンコをペタンと押してもらいたい。民間人には、お金の威力くらいしか持ち合わせの威＝衣はない。あるいは、国会議員やその秘書に対して、やはりお金の威＝衣をもって頼みこみ、その威＝衣を借りるほかしかないみたいです。

衣。そうか、だから、法廷では、判事らがお坊さんの着る法衣（ほうえ）みたいな、おベベをまとっているのか。あれは、単なるコスプレじゃなかったんだ。謎が解けました。一人で納得。

法律。そういえば、「法」も「律」も、仏教と関係ありそうです。あとで、広辞苑か何かで調べてみます。ばちとばつの謎も、解けるかもしれません。

*

で、役人への悪態に戻ります。書類作りの名手。法律をもてあそぶ超テクニシャン。辻褃合わせの職人。オヤジギャグや駄洒落も真っ青な牽強付会（けんきょうふかい）のオーソリティー＝権威。

小役人もずる賢いが、キャリアと呼ばれる大役人のすることは、実にえげつない。一言で言えば「省益命」、あるいは「自分（たち）だけ、良ければいい」。少し前に新聞で読んだんですけど、前政権の大臣や副大臣をごまかして、公文書の文言を捏造・改ざんする輩までいたそうです。これって、犯罪にならないんですか？

見逃されて、いったん、ハンコが押されれば、効力を持ってしまふんですよ。ハンコはそれほど威力があるのですよ。発覚したところで、犯罪を犯罪にならなくする（＝ハンコウをハンコウにならなくする）言葉いじりのテクニックくらい、もう自家薬籠中の物ってわけですか？ハンコウやハンコの消しゴムでも隠し持っているのでしょうか？おとがめなし、ですか？それとも、あれって処分されたんですか？続報を読んだ記憶がありません。

「国民？納税者？市民？ああ、そんなのもいたね」。たぶん、そんなふうを考えているのではないのでしょうか？国民などまるで眼中にない、と考えているとしか思えない言動が、役人と呼ばれる人たちには多すぎます。そう、思いませんか？

新聞、テレビ、インターネットなどで報道される、国家・自治体で働く公務員たち、そしてその関連組織（天下りや渡り先の法人・団体など）で働く元・公務員たちの言動を見聞きしていると、あの人たちは、どうやら、自分たちを国民とも納税者とも市民ともみなしていない節がある。そう、思いませんか？

何ごとにも例外があるわけですから、今、上で挙げた悪態に当てはまらない公務員もいるでしょう。でも、その人たちの姿が見えない。言葉が聞けない。それらしきものを見聞きしても、影では何をやっているか、分かったものではない。という気持ちが先に立つ。そんな感じです。たとえば、裏金。あの仕組みにあえて加わらない、あるいは暴露する公務員がいたら、必ずその人は潰されるでしょう。たとえばミツイ氏みたいに。ああ、怖い。cocksuck 捜査＝操作。庁 suck 操作。

あの人たちにとって恐ろしいものって、何でしょう？ 自分、そして部下の「不祥事」くらいでしょうか？ メディアや司法は、どうでしょう？ 人である以上、怖いでしょうね。たぶん。

それで思い出しましたが、役人同士も共食いすることがあります。警察官が警察官を逮捕する。検察官が検察官を起訴する。判事が判事を裁く。市町村役場の職員が市町村役場の職員の死亡届を受理する。公立校の教師が公立校の教師を処分する。財務省のキャリアが財務省のキャリアを刺す（比喩的にも、現実にも）。

あの人たちが、自分は国民でも納税者でも市民でもない、と感じているとすれば、やはり大きな錯覚です。「威=衣」を脱いで、素っ裸になれば、ただの人。

ちなみに、人は共食いをします。グローバルな規模で共食いし合っています。自分を棚に上げたりはしません。自分も含めての話です。自分が夕食に何かを食べることによって、あるいは車に乗るという具合にエネルギー資源をジャブジャブと消費することで、この惑星のほかの人たちの生きる可能性を奪っています。空間的（地理的）にも時間的（歴史的）にもです。今、自分たちが二酸化炭素を排出することで、自分たちの子孫の生き得る期間を短縮しないと誰が断言できるのでしょうか？

*

話を、戻します。

「伝染るんです」。さきほど、この言葉が恐ろしいといったのは、そういう意味です。人のすることは連鎖します。ドミノ倒しです。最後は全部が倒れます。つながっているからです。これも、いわゆるひとつの「法」でしょうか。広い意味の法です。

話を、ハンコに絞ります。繰り返します。

すべては、ハンコのためにあるのです。

チャート化すると次のようになります。

国家 → 権威 → 法律=文書 → ハンコ → やくにん (=役人=厄人=疫人=益人)

象徴の連鎖です。象徴の自己増殖です。ペタペタペタペタペタ……。象徴の象徴の象徴の象徴の象徴……。象徴は模倣し合う。象徴を「表象」と言い換えても良さそうです。

ハンコは複製です。ペタペタペタペタペタ……。複製の複製の複製の複製の複製……。複製は複製し合う。複製を「表象」と言い換えても良さそうです。

要するに「伝染るんです」。上から下に、下から上に。左右はめったになし。だから、恐ろしい。だから、ハンコも「偉そう」にしているのです。社会科で習った「金印」を思い出してください。立派ですよ。あんなの一ヶ、欲しいと思いませんか？

ところで、馬鹿高いハンコを売りつけられそうになったこと、ありませんか？ ハンコで人生や運勢が変わると、脅されたこと、ありませんか？ 買わされたこと、ありませんか？ 偉そうなハンコ、ひょっとして、今お持ちではありませんか？

それです。象徴の恐ろしさというのは、それなんです。リアル（身近）に、感じていただけましたでしょうか？

*

それにしても、どうして、ハンコはこんなに偉くなったのでしょうか？

昔、社会科で勉強したことが役に立ちそうです。確か、次のような話でした。

明治維新の時代、この国は必死で、外国、特に欧米からいろいろな制度を持ち込もうとしました。法律は、確か主にドイツからでしたよね。警察組織を含む行政機構は、主にフランスからでしたよね。この二つの柱が、どうやらハンコの「偉さ」を解くカギの

ようです。この国の明治以降に限定しての話ですけど（ハンコは、明治以前からこの国で威力を発揮していましたが、日本史が苦手なので、この問題はパスします）。

フランス共和国は、ものすごい中央集権国家です。国民一人ひとりについて、徹底的に詳細な書類を作る。そして、それを保管する。こういうことにかけては、ヨーロッパで最高の仕組みを作り上げた国らしいです。

一方、現ドイツ連邦共和国は、連邦という名が示すとおり、複数の国が集まってできた国ですから、中央集権はそぐわない。割とゆったりした結合で成り立っているようです。でも、話は前後しますが、法律の体系、とりわけ憲法は、かつてのドイツの中でも最も力のあったプロイセン（プロシア）のものが、日本がお手本にするには一番都合が良かった。皇帝の地位を法的に位置づける規範となり得たからだ。確か、そう習った記憶があります。

そうした政治的に微妙なところは、正式にお勉強していただくとして、結論を言うと、フランスとドイツの「(都合の) いいところ」を取り入れた結果、紙いじり＝書類作り＝ペーパーワークが増殖し肥大化し、それに伴ってハンコが絶大な力を得た。そんな感じらしいです。

今、思い出しましたが、ハンコが偉いのは、この国だけじゃありません。ヨーロッパでも同じらしいです。うろ覚えですが、すごく凝った「偉そうな」ハンコを、テレビで見たことがあります。

指輪自体がハンコになっているものも見ましたが、しゃれていますね。ゴールドはもちろん、宝石までついていましたよ。

確か、バチカンあたりのお坊さんの指にも、すごく豪華なのがはまっていたような覚えがあります。あちらのお坊さんって、ずいぶんお金持ちなんだなと感心しました。

「信者」が増えると「儲かる」という、手垢の付いた漢字を用いた駄洒落があります。それと同様に、東西を問わず、鐘の鳴る所には、金の成る木があるようです。

なにしろ、全部とは申しませんが、世界各地の宗教組織のトップや幹部を見ていると、ゴールドや宝石をふんだんに用いたアクセサリー類はもちろん、衣装も実にきらびやかなんです。貧富の差と身分の差を実感します。これが人間が勝手に演じているギャグやジョークでないとするなら、神も仏も超越者もずいぶん罪なことをなさいますね。

ちなみに、ハンコ同士にも差別がありますね。実印や認印なんていう格付けがあります。三文判なんて、かわいそう。ランク付けするヒトの習性が、伝染ったんですよ。きっと、世の中のハンコというハンコが差別し合っているんですよ。

そうそう、署名やサインも、ハンコの親戚だということを忘れてはいけません。ハンコに比べてちょっと影が薄いのは、人が書いた「文字」だからでしょう。アイボリーやゴールドといった「物」にはかないません。

とは言っても、署名をあなどってはなりません。かなり権威があり、手強いことは確かです。国家間の協定や条約での調印の儀式では、ペンを走らす、あるいは筆を走らす、偉そうな人たちが、フラッシュライトを浴びます。あの人たち、もともとは国民の「代理人」なんですけどね。

なぜか、代理のほうが偉くなっちゃうんですよ。やっぱりね、という感じです。人間は、本質的に強いリーダーの出現を待望するとか、ファシズムや全体主義に引かれやすい習性があるようです。この点については、いつか書いてみたいと思っております。ここでは、深入りしません。

*

さて、ハンコは、これからどういう運命をたどるのでしょうか？ シャチハタの株を持っている人たちだけの、問題ではありません。この国に住むみんなの問題です。

電子、チップ、ナノテク——このあたりが、からみそうです。ハンコ、スタンプ、サインの代わりに、「電子化された情報」という形で、国家は国民に「烙印」を押し、国民の個人情報を集め、それを処理し保管し利用する。いつか、国民の体内に極小のチップが埋め込められる。ハンコ注射の痕はないけど、見えない刻印が体内に宿る。そこから、超微量の電波が発信されたり、逆に超微量の電波を受信する。

妄想（もうそう）でしょうか？

「そうだよ、もう、そうだ。時間の問題だね」

やっばし。もう、そうでしたか。と、なると、貨幣=お金も、似たような運命を、今後たどりますよね？ もう、すでに、ポイント、マイレージ、電子マネーなどが、お金の行く手を指しているんですよね？ 新聞に書いてあったことの、もろ受け売りですけど。

すべての象徴が、電子という「モンスター」に集約されていく。すると、電子って究極の象徴でしょうか？ 情報を処理するための究極の素（もと）は、「1か0」の二進法だと思っていましたが、それとかぶりますか？ つながりますか？ それとも、量子という説=お話=フィクション=神話がしゃしゃり出てくると、象徴をめぐる仕組みは様変わりするのですか？ 全然理系ではない自分としては、妄想するしかありません。もう、そうするしかありません。

話は飛びますが、加速度的なペーパーレス化に伴い、ハンコレス化にも、拍車がかかっています。キャリアから市町村役場の公務員までが、一人一台のPCを与えられている時代みたいです。既に、紙とハンコなしで多くの事務が処理されているのに違いありません。

現在、自分の体内には、ハンコ注射という烙印を「ひいじいちゃん」に持つ、電子チップ（マイクロチップでしたっけ？）は埋め込まれていないもようです。とはいえ、どこかの役所の秘密の部屋に、自分の個人情報が詰め込まれたチップが、保管されているかどうかは知りません。知るよしもありません。妄想するしかありません。

ハンコの未来。いや、ハンコについて考えるのは、またいつか、ということにします。

*

今、こうして、自分の体内に埋め埋めチップなしに、膝の上にいるネコの重みを楽し

んでいる。それだけでも、幸せだと思うべきなのでしょう。

膝に乗る 猫の毛に見る 線と点

◆ 不思議

不思議

とりとめのない話とか、分かるようで分からない現象が好きです。そうは言っても、漠然とした話ですよ。不思議とか曖昧な事や物が好きだ。こう言い換えれば、分かっていたらいいのでしょうか。

恥ずかしいのですが、一足す一が二になるということが未だによく分かりません。足し算とか引き算とか掛け算とか割り算など、計算はできます。でも、あれは条件反射みたいなものでやっけていて、実は分かっていないのです。どうなのでしょう。大抵の人は一応分かってやっていることなのでしょう。恥ずかしくて、他人様に尋ねたことはありません。

たった今、恥ずかしいと書きましたが、本当のところを申しますと、それほど恥ずかしく思わなくなっているのを、最近ひしひしと感じています。年を取るにつれて、図々しくなってきたのかもしれない。

話は変わりますが、辞書を読むのが好きです。国語辞典も英和辞典もおもしろいです。引くと言うよりも、読むのです。辞書というのは、当然のことながらエッセイや小説ではないのですが、とりとめのない話に満ちているような気がします。

自分にとっては、分かるようで分からない話の宝庫でもあります。各語の項目に解説してある複数の語義のからみ合いなど、こじつけめいていて特に読んでいて楽しいです。語源の解説も駄洒落みたいで結構笑えます。

高校生だった時のことです。

確か二年生になった春でした。新学期が始まって、新任の英語教師が教壇に立ちました。教師も生徒たちも、たがいに相手を探りあう瞬間です。その教師は、黒板に自分の氏名を書き、簡単な自己紹介をした後、生徒たちの氏名と顔を照らし合わせながら、出欠をとり終えました。

「みなさん、辞書は持ってきていますか。ない人は、持っている人のそばに行ってください。どのページでもいいから、そうですね、三回ほどめくって開いてみましょう。ページの中身を読む必要はありません。ただ見るだけでいいです」

教師はそう言いました。英語の授業とはいえ、唐突な感じがしました。教室内がうるさくなり始めました。席を離れてもいいと言われたわけですから、あちこち動き回る生徒もいます。

「じっくり、読む必要はありませんよ。目を細めて、少しページから目を離して見てください。きっと、そのほうが、よく分かりますから」と、さらに教師は言います。

「えーっ」

生徒たちの不ぞろいな声が上がります。なんだか謎々めいてきました。電子辞書など、空想もできなかったころのことです。生徒たちは、ひとりで、あるいは数人が固まって、高校生向けの分厚い辞書を開き、遠視か老眼の人のように、左右見開きのページから目を離し、近視の人のように目を細めています。

三分ほどして、教師は言いました。

「何か、気づいたことはありませんか？ 読んだ感想じゃないですよ。見た目の印象です。気づいたことを聞かせてください」

初めて相手にする英語教師に対し、誰も発言しようとはしません。ただ、ざわざわするだけ。そのうち、教室内が白けた感じになってきました。

一体なんだろう、みたいな謎々めいた疑問の効果も薄れ、室内のざわめきが収まりかけたころ、教師は次のように言い足しました。

「短い単語ほど、たくさん意味が書いてありませんか？」

「なーんだ」とか、「うーん」とか、「おーっ」とか、「はあ？」とか、「……」とか、生徒たちの反応はさまざまでした。

「英語でいちばん短い単語は何でしょう？ そう、a です。a を引いてみましょう」

よくは覚えていませんが、確かそのときに持っていた中型の学習辞典には、番号が振られていて、いくつかの a があり、冠詞の a の項には一ページをはみ出るほどの意味や例文が載っていました。

短いけど長い。単語は短いけど解説は長い。

びっくりしました。それまで何度も英和辞典を引いていながら、そんな見て明らかなのに、全然気づかなかったことに気づいたのです。分かるようで分からなくなりました。不思議でした。

その不思議さに気づかせてくれた英語教師と出会って、数年後、自分が大学生になり、言語について考えるようになったとき、その教師が生徒たちを相手に行った「いたずら」というか「謎々」と、その「種明かし」をよく思い出しました。

そのころには、英語にはゲルマン系（土着の言葉系）とラテン語系（外来語系）という二重構造があるらしいという知識も頭に入っていました。日本語にも、そうした二重構造があるようだという話も知りました。

日本語では、大和言葉系の日常語と、インテリや支配階級の用いた漢語系の二重構造があるそうです。たとえば、「彼女、『おめでた』だって」は大和言葉系、「彼女、『妊娠』したんだって」は漢語系ですね。すごく単純化すると、訓読みと音読みのニュアンスの違いと言ってもいいかもしれません。「書く」と「記述する」の違いみたいに。

さきほども簡単に触れましたが、英語にも、ゲルマン系とかいう土着系の言葉つまり日常語と、侵入者兼征服者兼支配階級だった人たちの言語の二重構造が残っている。こんな話を、大学の語学の授業などでよく聞かされました。

土着の言葉のほうが、日常生活に密着していてよく使うから意味の層が厚い、つまり多義的なのは、何となく分かるような気がします。何となく分かるようだけど不思議です。その曖昧さに心が惹かれます。

今、この文章をパソコンのワープロソフトで書いていますが、文字の変換というのは、よく考えると、分かるようで分からないの典型だという気がします。とりとめがなく曖昧な感じもします。自分は、そういう落ち着かない気分が好きです。わくわく感を覚えます。昔はワープロ専用機なんてありましたね。そのころから、感心していたのですが、日本語の文字変換のソフトを開発した人たちはすごいなあ、と素直に思います。

でも、そのすばらしいソフトを利用して文字を書いている、やっぱり迷いますね。「変える」か「換える」か「代える」か「替える」かなんて、しょっちゅう迷います。そんなとき、モニターに小さめのボックスがひょこりと現れて「候補」を示し、その用法の解説や例文まで教えてくれるようになりました。

それでも確信が持てない場合には、辞書を引きます。そう言えば、さきほど例に挙げた「書く」ですけど、「かく」と読みますね。ちょっと大きめの国語辞典で「かく」とい

うひらがなだけを引いてみると、違う漢字を当てて別項扱いになっていますが、たとえば、「書く」と「描く」と「掻く」と「画く」は、もともと大和言葉としては同じところから出てきていると書いてあります。この四つの「かく」の解説を合わせただけでも、結構な長さになりそうです。

短いけど長い。単語は短いけど解説は長い。

これは、英語だけでなく日本語でも当てはまりそうだと気づきました。不思議です。分かるようで分からない。摩訶不思議。

不思議という言葉で思い出したことがあります。「あいうえお表」とか「五十音表」と言うのでしょうか、小さいころ、親の手製の表が、机の上の壁に貼ってあったのを覚えています。そのとき、不思議だったのが、「や行」と「わ行」です。親が作ってくれたものでは、確か、次のようになっていました。

(前略)

まみむめも

やーゆーよ

らりるれろ

わ——を

ん

この表を見るたびに、不思議に思っていました。

「なんで、あそこが抜けてんだろう？」

今でも不思議です。国語のお勉強をしっかりとしなかったせいでしょう。誰かに話せば笑われそうですが、個人的には、あの「抜け」はたぶん「傷跡」なのだと思っています。だから、かわいそうだと感じてしまいます。歴史的仮名遣いとか呼ばれているものあたりと、関係があるのではないかという気もします。でも、よく分かりません。

いつだったか辞書を読んでいるときに、「ゐ」と「ゑ」に出くわしたことがあります。

「これだ――」と思って説明に目を通しましたが、短く書かれてあるせいか理解できませんでした。追求する気もありませんでした。それっきりです。

グーグルなんかで検索して調べれば、謎が解けるのでしょうか、自分は、これだけは謎のままにしておきたいと思っています。傷跡はそのままそっとしておいて、出来れば触れたくないという気持ちがあります。いつか、傷跡の意味が解けることもあるでしょうが、今のところは、このままでいいです。怠け者だから調べないと言えないこともありませんが、これだけは不思議なままでいい。そう思います。

ここまで書いて、また一つ思い出したことがあります。親の書いてくれたものではなく、学校にあった表です。

(前略)

まみむめも

やいゆえよ

らりるれろ

わいうえを

ん

忘れかけていました。こういうのも確かに見ました。懐かしいです。で、今、こうやって、二つの表を見比べてみると、頭が混乱してきました。めまいに似ています。

どうなっているのでしょうか。

ちよっとうろたえてきました。これもまた、専門の本なり、グーグルでしっかり検索すれば、解決するのかもしれませんが。でも、この謎も、そうっとしておきたいです。曖昧なままで構いません。

それにしても、二番目に挙げた表の「ん」って、どこか寂しそうじゃないですか。英和辞典の最後のほうに載っている「X」や「Z」を思い出します。語数というかページが極端に少なく、かわいそうな気がします。「X」と「Z」みたいにページの少ないアルファベットに「Q」がありますが、この「Q」で始まる単語の二番目に、決まって「U」が来るのも昔から気になって仕方ありません。やっぱり辞書って、引くだけではなく読んで

みると、「不思議」と「曖昧」だらけです。

「あ」で始まって「ん」で終わる表と、「A」で始まって「Z」で終わる表がある。その文字だけやその文字を頭にかぶった語をたくさん収めた辞書がある。そんなことが不思議です。でも、曖昧なままでいいです。

ややこしい謎解きや詮索をするより、そうした文字で記すことの出来る言葉たちが生きて輝くのを聞いたり見たり、一緒に遊んでもらうほうが大切だという気がします。

いずれにせよ、言葉って大好きです。愛しています。陳腐な言い方ですけど、愛に理屈なんて要りません。素性や出自も関係ないです

◆聞こえてる？

聞こえてる？

難聴者であるせいか、人の顔や表情を読もうとする傾向が強いです。顔色をうかがう、顔色を見る、顔色を読む、という言い方がありますが、実感としてよく分かりません。単純に言えば、表情から相手の気持ちをくみ取ろうとするわけです。

聴力が著しく低い、ろう者の中には、話している人の口の形と唇の動きに注視して、話し言葉を読みとろうとする訓練を受けている、または受けた経験のある方が多いそうですが、現実には至難の業だと聞きました。

相手の表情を読もうとする話にもどりますが、とにかく疲れます。ストレスになります。自分の場合には、肩がばんばんに腫れて凝ります。でも、そうするしか仕方がない状況が多いです。

何度も聞き返される目に遭う相手の方も、ストレスを覚えるにちがいません。相手の身になって考えると、つい気を遣い、遠慮してしまうことがあります。いわゆる空返事をしたり、うやむやに会話を済ませることも多いです。いいことではないのですが、流れでそうしてしまいます。

自分の場合、「聞こえにくさ」は、先天的なものではなく、ある年齢から聴力が低下しはじめ、現在では、補聴器なしには生活はできなくなったというものです。中途難聴と呼ぶことがあります。現在では聴力が著しく低くなったために、身体障害者手帳の交付を受けています。

自分が特に感じるのは、聴力が低下するにしたがって、周りの人の表情、目つき、仕草、身ぶりなど、身体が発しているさまざまな「信号」に敏感になってきたということです。

話は変わりますが、川端康成の文章の中に、自分の目つきについて、ある女性からある癖を指摘されて、はっとしたという意味の一節があった記憶があります。家にある川端康成の本を何冊か探し、あちこちめくってみたのですが、どの本に書かれていたのか、見つけることが出来ませんでした。記憶が間違っていたら、許してください。確か次の

ような話でした。

相手が無遠慮または不躰と感じるような目つきで、他人の顔をじっと見つめる癖がある。自分では全く意識したことのなかった癖を指摘されて、大きな衝撃を受けた。これまで無意識のうちに、どれだけ多くの人に不快な思いをさせてきたか考えると心が痛む。

そうした意味の文章に、川端の自己分析が添えられていました。これもうろ覚えなのですが、確か川端が少年時代まで一緒に暮らしていた——二人きりの生活だったと記憶しています——祖父の目が不自由だったために、祖父の顔をじっと見る癖がついていて、それが知らない間に長年の習癖になってしまったのではないだろうか。川端はそう回想し、同時に戸惑っていました。

それを読んでいて、あることをふと思い起こしました。目の不自由な方は、誰もが完全な暗闇の中にいるというわけではなく、明暗を感じとることが出来る方が多いという話です。祖父についての川端の文章の中でも、祖父が日の当たっている方向へよく目を向けていた、という思い出が語られていた記憶があります。こちらの思い違いかもしれません。でも、分かるような気がします。

ところで、「目に見えない障害」という言葉があります。聴覚障害者は、その障害が目につかないために苦労するので、この言葉の意味を日々実感しています。店や銀行や病院で名前を呼ばれても分からないため、係の人に事情をいちいち説明し、合図を送ってもらう必要があります。そのたぐいの不自由さを挙げれば、切りがありません。

内部障害、あるいは内臓障害という言葉もありますね。内臓や身体内部の機能に障害をかかえた人は、たとえば、公共の乗り物の優先席に座って体を休めたいと思っても、周りの人たちに、苦痛や不調が「見えない」ために、遠慮が先立ってなかなか座る勇気が出ない。「すみません、もしよろしければ、席を譲っていただけませんか」と、言い出せない。冷や汗をかきながら、苦しみをひたすら我慢する。そうした経験談を聞いたことがあります。

広く意味をとると、在日の日系外国人や、一部の帰国子女も、そうです。初めての場所を訪ねなければならないとき、ローマ字表示がないために道に迷う。人に尋ねたいが、言葉に不自由する。きょろきょろ辺りを見回していても、髪や目や肌の色、そして容貌にきわだった「異国性」がない場合には、ほとんどの人が親切心を示してくれないそうです。困ったあげくに、道を尋ねようとして、片言の日本語で話しかけると、気味悪がられたり警戒される。場合によっては、相手が逃げて行くこともあるらしいです。

こう考えると、目または視覚というものは、ある意味でとても残酷ですね。もちろん、「見える」つまり「目につく」障害を持つ人にとって、他人の目または視線が残酷なもの

だということは、容易に想像できるでしょう。自分をじろじろ見る相手。あるいは、自分を見たとたんに視線をそらす相手。そうした状況を毎日体験している人たちがいると思うと、視線の残酷さの意味が分かる気がします。

唐突ですが、障害者と健常者という区別に違和感を覚えます。法律、つまりお役所や行政の都合による線引きという印象を拭いきれません。障害とは、誰もがかかえている「程度の問題」であり、健常と障害とは別個のものではなくて連続している。たとえ一時的または短期間であっても、不調や不自由な体験を強いられれば、それは障害ではないかと広く考えています。

体調が悪い、病気になる、怪我をする、生理が重い、妊娠する、過労でダウン寸前、心が痛くて死んでしまいたい、年を取るにしたがって徐々にさまざまな不自由が出てくる。そうした状態や状況も、広義の障害だとみなしても構わないのではないか。実生活や実社会では、それくらい柔軟に障害を受け止めるほうが自然なのではないか、という気がします。

話が広がりすぎました。話をもどし、自分自身の体験で語れる難聴にテーマを絞ります。

切実な悩みに、聞き間違いがあります。頻繁に経験します。笑って済ませられる場合もある一方で、それがもとで他人（家族や親しい人も含みます）との間に不和が生じたり、時には深刻な問題にまで発展する事態やトラブルも起こります。仕事や金銭がからむ場合を想像すると、理解しやすいと思います。当然のことながら、職を探すさいには、難聴は大きなボトルネックになります。

補聴器をつけていれば大丈夫でしょうと、よく言われます。そうお思いになるのも無理はありません。でも残念ながら、それは誤解です。補聴器は「完璧な」解決策ではありません。

難聴には個人差があり、奥が深い問題で一概には言えないのですが、補聴器についてはとても説明しにくい部分があります。個人的な実感を申しますと、「聞こえるけど聞けない」のです。英語を持ち出せば、「hear できるけど、listen できない」のです。分かっていただけでしょうか。英和辞典で両者の意味の違いを確認すれば、「聞こえるけど聞けない」のニュアンスがお分かりになるのではないかと思います。

ヒアリング・テストというのは、本当はリスニング・テストですね。ヒアリング・テストは、聴覚能力を診断する、耳鼻科などの医師が行う検査。リスニング・テストは、聞いた内容の理解度を測るテスト。こう説明すれば、ご理解いただけるでしょうか。厳密に言えば違うのですが、比喩的に言えばほぼそのようなものだと考えてもいいかと思

います。

相手の喋っている言葉が音としては、はっきり聞こえる一方で、意味のある言葉としては聞き取れない。たとえば、次のような感じです。

「あいた うしに ほご いーちに いてね」

聞こえにくさは、人によってさまざまです。ある特定の音域が失聴（または低下）している人、全体的に聞こえが低下している人、耳鳴りが伴う人、片方の耳だけが聞こえない人、ある子音または母音を聞き取るのが苦手な人……。ここで、さきほど書いた意味不明の言葉を再現します。

「あいた うしに ほご いーちに いてね」

「あしたうちに午後一時に来てね」

後者の「言葉」が、前者のような「音の連なり」として「はっきりと聞こえる」のです。あくまでも、たとえばですが、自分の場合には補聴器を着けていても、誇張すればそんなふう聞こえることがあります。こうした聞き間違いについては、笑える話もあります。

スーパーでのことです。レジの前の列に加わっていました。そのときには親と一緒にしました。自分たちの前にいた女性二人が、会話をしていました。ご高齢の方と、五十歳前後に見える方です。ご高齢の方が、ある医院の話をしていました。補聴器をしている自分は、少しだけその話の内容が聞き取れました。実は、その医院はうちの親も通っているところなので、親も聞き耳を立てていたようです。

「あの先生、あそこ、ばっかりいじっていて、ちっとも聴診器を当ててくれないんだから。あんなんで、いいの？」

自分には、はっきりとそう聞こえました。驚きました。それが事実ならドクハラでありセクハラです。大病院から独立して開業されて、それほど経っていない、四十歳を少し過ぎたくらいのお医者さんです。とても優しく、患者さんの話をよく聞き、医院の設備も最新で、自分も親もすごく気に入り頼りにしている方なのです。だから、自分はびっ

くりしました。

ところが不思議なことに、その二人の女性もうちの親も、いっこうに動揺していないのです。自分一人だけが、どぎまぎして赤面していました。レジでの支払いを終え、店内のテーブルでマイバッグに、買った物を詰めながら、さきほどの二人の会話について、親に尋ねようとしたのですが、周りに人がいたので言い出せませんでした。帰り道でも、恥ずかしさが先に立って尋ねられませんでした。でも不思議でなりません。聞き間違えたことは確かです。難聴者ですから、そんなことは日常茶飯事です。

聞き間違いらしきことに関しては、いったん気になると解決せずにはいかない性質なので、家に帰ってから思い切って、親に尋ねました。「さっきスーパーで、〇〇先生のことを話している女の人们、いたよね？」とおもむろに切り出し、ついに核心部分について触れました。自分に聞こえた通りの言葉を繰り返したのです。

親は首を傾げて、げげんな顔をしています。何の話か、分からないというか、あの女性たちの会話が思い出せないみたいなのです。少ししてようやく、「ああ、あの話？」と言った後、一瞬口ごもり、いきなり笑い出しました。中途難聴者を子に持つ親ですから、「あれ、何て言ったの？」に答えるのは、これまた日常茶飯事です。でも、そのときの親は笑ってばかりいるのです。返答がありません。

こっちは納得できません。「『あの先生、あそこばかりいじっていて、ちっとも聴診器を当ててくれないんだから』って、聞こえたよ」。笑い声を上げている親に向かって再度言いました。「あれはねえ、『あの先生、パソコンばかりいじっていて、ちっとも聴診器を当ててくれない』って言ってたんだよ」

謎が解けました。あの医院は設備が最新で、カルテも電子カルテです。だから、先生は問診しながら絶えずキーボードを叩いているのです。親の前では笑えなくて、声を立てて笑ったのは自室に入ってからでした。

よく聞こえない日常を送っていると、聞こえる人とはちょっと違った生活の楽しみ方をしているなど感じる場合があります。

日曜の朝などに、NHKテレビで、生き物たちの生態の映像を集めた番組が放映されることがありますね。音楽や音だけで、ナレーションがほとんどないものもあれば、少し解説が少し入るものもあります。いずれにせよ、静かな番組です。自分は大抵ミュートにして見ます。かすかな音を聞き取ろうとすると、ストレスになり肩が凝るからです。

あの種の番組をミュートにして見ていると、いろいろな発見があります。映像に集中するからでしょうか。いつも思うのですが、どの生き物もビクビクしながら生きていま

す。自分の周囲の様子をすごく気にしながら、生きています。当然ですよ。弱肉強食の世界にいるのですから、のんびりなんかしてられないのでしょう。それに、動きが速い。小動物、たとえば、うさぎ、ねずみ、りすなどの仲間たちは、驚くほど機敏な動作をします。

昔、ジャンガリアンハムスターを飼っていました。ハムスターをケージから出し、よく床に放して遊ばせていましたが、その走るさまを見ていて感心しました。体のサイズと、走る距離を比べてみると、F1並みのスピードで走るんです。参りました。思わず尊敬してしまいました。

こちらも床に這いつくばって、自分の目をハムスターの目線にできるだけ近づけ、走る様子を見ているとうっとりします。とにかく格好いいのです。目線で思い出しましたが、どうしてこんなに可愛い顔をしているのかと思い、ハムスターの目と鼻辺りをじっと見つめていたことがあります。それで気がつきました。黒目ばかりで白目がほとんどないのです。そう言えば――と思い当たり、アニメの番組を見てみました。キャラクターたちが黒目がちなのを確認し、ひとりで納得していました。

BBCという英国のテレビ局が制作した生き物の番組は、よくできていて感動します。BSで放映されていますね。ただ、解説があまりにも出来すぎている感じがしませんか。人間の思い入れがやや強すぎるように思えます。勉強になることは多いのですが、そこだけが気になります。あの番組も、ミュートで見ると印象が、がらりと変わります。言葉による解説から得られる情報とは異質な、生き物たちが発しているさまざまな「信号」に目が行き、新しい発見があるのではないかと思います。

どんな番組でもかまいません。音を消してご覧になると、思いがけない発見がありそうです。バラエティー番組をミュートで見ていると、登場する人たちの間の目配せや、ちょっとした表情なんかはクローズアップされて見えます。スタジオ内の人の位置や配置、雰囲気、漂う空気を始め、音や声を聞いては、音声にとられて、見えない物や出来事がきっと見えます。または「読めます」。目と耳の関係は、意外と奥が深そうです。

バラエティー番組は、特に音がうるさいですね。難聴者の耳には大音響の雑音に聞こえてしまいます。画面の下に字幕もよく出ますが、あれもうざったいです。自分は、カレンダーの裏の白い面を折って作った被いを用意しています。それで字幕を隠しミュートにして番組を見ることがあります。もちろん、親がテレビを見ていないときですけど。

いつもとは、視点や方法を変えてみる。それで、世界ががらりと変わって見えたり感じられる。おもしろいですよ。

話は変わりますが、子どものころ、次のような経験をしたことがありますか。

夜、床につく。目がさえて眠れない。近くで、あるいは隣室から大人たちの声が聞こえてくる。耳をそばだてると、話の内容がはっきりと分かる。誰かの噂話をしている。あっ、知っている人だ。へえー、あの人、そんなことやっているんだ。あんな顔をして。ふーん。えーっ、すごいー。

やがて眠気がおとずれる。噂話には興味があるけど、もうどうでもよくなってくる。聞いている。聞こえている。聞いている。聞こえている。そのうちに、聞こえてくるのが言葉ではなく、音、音楽、旋律のように感じられてくる。そして意識が薄れる。

そうしたことが、ありませんでしたか。もう子どもではない今でも、無意識のうちに似たような経験をしていることがあるのではないかと、思われます。音、音楽、旋律のように聞こえる言葉。いささか甘美すぎる比喻ですが、「聞こえるけど聞けない」というのは、それにちょっとだけ似ています。

「聞こえてる？」

きょとんとしていると、よく言われます。

聞こえているよ。でも聞けないんだ。何を言われたのか分からない――。内心、そうつぶやくことが頻繁にあります。

先天性の難聴、中途難聴、失聴、ろう、という現実を日々生きていらっしゃる方、あるいは、そのご家族や友人の方に、申し添えたいことがあります。筆者の不用意な記述のために、この文章を読んで不快に思われたさいには、心よりお詫び申し上げます。

そして、健聴者の方、どうか耳を大切にしてください。特に、ヘッドホン、イヤホンのたぐいは、あまりお勧めしたくありません。ケータイのスピーカーに長時間耳を押し付けるのも、耳には良くないようです。お節介だと言われるのを承知で申しますが、利用するなら、音を小さめにするとか、時間を短くしてみてもはどうでしょう。

聴力は、ある聞こえの周波数の部分がいったん、低下したり、失われると、それを回復することは、きわめて困難で、不可能に近いと言われています。早期発見、早期治療が決め手だとのこと。もしもお心当たりのある方は、急いで耳の専門医を訪ねてください。すぐにです。煙草が体に悪いように、耳元での大きな音やヘッドホンは、耳に有害です。くれぐれも、気をつけてくださいね。

◆文字の顔

文字の顔

ある文章について思い出そうとしているのですが、なかなか出てきません。自分にとっては、とても大切な意味を持つ文章なので、書き進めながら、何とか思い出してみます。

まずは、その文章の前提というか、背景となる話から書きます。

ヨーロッパのある国に、日本映画、それも一九三〇年代から五〇年代に撮られた作品が好きでたまらない女性がいました。その女性が、日本からその国の大学に留学して文学を研究している男性と、恋愛関係になり、結婚しました。

これは想像ですが、ふたりの仲を取り持ったのは映画だと思います。なにしろ、その男性の映画好きは度を越していました。現在も、そうです。半端じゃありません。

「自分より映画を愛している他者を認めない」

そんな意味の、挑発的なタイトルのウェブサイトをコーディネートしているくらいです。今、コーディネートと書きましたが、サイトにある言葉をそのまま使っただけです。「公式ウェブサイト」なののでしょうか。その辺の事情は、自分にはよく分かりません。

かつて、「さよなら、さよなら、さよなら」と三唱しながらこの世を去った、黒縁眼鏡のおじいさんがいました。映画関連の世界の伝説として残る存在だ、と勝手に思っています。あの映画の化身みたいだった人の向こうを張ろうとでもいうのでしょうか。それだけでも、すごいです。

*

その男性は、夫人を伴って帰国しました。大学の講師になり、子をもうけ、やがて助教授——昔の話です。当時はこの名称が生きていました——になりました。

その助教授は、所属する大学でのアカデミックな仕事以外に、文芸批評や映画批評を専門誌に寄稿し、一部の若者の中でカリスマ的な存在になりました。親衛隊みたいに、その助教授に付きまとい、非常勤講師として授業を行っている他の大学にまで押しかける。そんな熱烈なファンまでいました。

独特の文章を書く人でした。書かれている内容ではなく、その文章の書かれ方の虜（とりこ）になる学生も、たくさんいました。そうした学生の中には、亜流の文章を書く者も少なからずいました。

その意味では、「焼跡闇市派」を名乗り、「黒眼鏡」をトレードマークにしていた、往年の流行作家と似ています。その独特の文体を模倣した、亜流の文章の氾濫という点で似ています。ただし、その助教授とその追随者たちの場合には、「氾濫」の規模は、「焼跡闇市派」連中のそれとは、とても比較にならないほどごく局地的なものでしたが。

この記事を書いている自分も、その助教授——自分の在籍した大学では、その人は非常勤講師でしたが——の文章に幻惑され、呪縛されたひとりです。思えば、長い間、その影響下にありました。今でも、その名残を強く感じることがあります。

時折、読点つまり「、」は打たれるものの、句点つまり「。」になかなかとり着かない、長いセンテンスを書き連ね、漢字を多用した改行の少ない文体が特徴でした。しかも、改行が極端に少ないために、改行なしのページすらありました。読み手による好き嫌いが、はっきりと分かれるたぐいの文体でした。いや、「文体です」と書くべきでしょう。総長という地位を経て名誉教授となった現在も、その人は息の長い文章を書きます。

字面が悪い。日本語としての美しさに欠ける。悪文。そもそも、文が長すぎる——。

その人の文章の書き方に批判的な向きから、そんな意見が出たこともありました。この国の言葉で書かれた文章で「、」と「。」が記されるようになったのが、「つい最近」だという事実をすっかりお忘れになった方々の錯覚だったのだろうと理解しております。

「」や（）も、濁点も、主語という概念も、ましてや「？」とか「！」も無かった長い時代があったという、義務教育でお勉強したはずの「知識」を思い出しましょう。字面が悪いなんて、無知から出る言葉以外の何ものでもありません。

いや、えらそうなことは申せません。なにしろ、この文章を書いているのは、児童・生徒・学生時代には、国語が大の苦手だった者です。この国の文章と表記に関する点で事実誤認がありましたら、どうか、ご容赦とご勘弁を願います。

*

さて、その助教授の夫人である、さきほど触れた女性ですが、この女性もまた、語学学校やアカデミックな場で語学の教師として働きながら、夫と共に子育てをし、日本での生活に満足しているようでした。でも、やはり日本語には相当な苦勞をしていたとの話です。

ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字の混在する書き言葉。敬語の複雑さ。そうした日本語のややこしさに日々悩みながらも、その女性は日本語を覚えようと必死で努力を続けました。

その女性が、ある文章を書きました。確かエッセイだったと記憶しています。その内容からして、おそらく、原文はその女性の母語で書かれていて、その女性の夫が日本語に訳したものと想像しています。

その文章について、冒頭から思い出そうとしているのですが、記憶が定かではありません。それを書いた女性の名も、その夫の名も知っていますが、その文章のタイトルや、何に掲載されていたのかが、どうしても思い出せないのです。グーグルで、検索してみましたが、キーワードが足りないか不適切らしく、その文章に関するデータが得られません。

今、述べましたように、さまざまな点について不明な話であるため、やむなく固有名詞抜きで、この文章を書いている次第です。申し訳ありません。

内容は、次のようなことであったと記憶しています。

その女性は、まだ日本語がよく分からない。日常会話には、それほど不自由しなくなったが、読み書きとなると、心もとない。夫は、毎日書斎で机に向かって何やら書いている。デスクの上の原稿を、見たことはある。その文字の連なりなら、何度か目にしている。でも、何を書いているのかは、さっぱり分からない。

今、思えば、日本人でも、その男性の文章の内容を「理解した」と言い切れる人は、それこそ数えるほどしかいなかったにちがいない文章の書き手です。異国出身の夫人が読めなくて、当然でしょう。

でも、分かる――。

読めはしないけど、夫の書いた文章が雑誌に掲載されていれば、ばらばらめくっているうちに、それだと分かる。読めないが、分かる。愛するあの人の書いたものと分か

る。

その女性の文章には、そうした意味のことが書かれていたと記憶しています。エッセイのテーマとは関係なしに言及してあった部分を、こっちが勝手に拡大して思い出しているだけかもしれません。やはり、固有名詞は出さないほうがよろしいようです。フィクションとして、このままお読みくだされば幸いです。

なぜ、あの文章が、今もなお、これほど気になるのか。自分でも、不思議です。夫婦間の美談でも、男女間の神秘的な体験でも、国際結婚についての「ちょっといい話」でもありません。書かれた日本語の字面を感知できるようになった、一外国人の苦労話でもなければ、言語の実相を垣間見るなどという、大そうな逸話でもありません。

あえて、一言つぶやくとしたら「感動」かもしれない。「感傷」とは遠い「感動」、むしろ知的な興奮に近い「感動」です。

少なくとも、かつて、その女性の文章を読んだときの自分は、文字通り心を動かされたのです。それだけは、はっきりと覚えています。

読めない。でも、あの人の書いたものだと分かる。

こんな夢のようなことが、他の言語でもあり得るのでしょうか。日本語の豊かさ？ 美しさ？ 言霊？ まさか。そんな抽象的なことではないと断言できます。

となると、言葉の物質性、言葉そのものとの遭遇、意味から遠く離れた言葉。そうした小ざかしげなフレーズが、次々と浮かんできますが、「感動」の代わりにそうした空疎な言葉をつづるのは、きょうはやめておきます。

なかなか思い出せないあの文章についての記憶を、今、改めてたどろうとすると、やはり感動のほうが先に立ちます。夢を見ているような、うっとりした心もちです。それでいて、むずがゆい、鳥肌が立つような興奮をうなじから両肩辺りに覚えます。

その皮膚の感覚を大切にしたいと思います。あの幻の文章について、これ以上、言葉をこねくりまわすのは止めておきます。

*

話はがらりと変わりますが、よく「人面〇〇」と言いますね。なかなかおもしろい話です。犬や野菜などの、動物や生物一般。岩や石などの無生物。ちょっと変わったとこ

ろでは、「人面瘡（じんめんそう）」とか、「人面疽（じんめんそ）」などという、尋常ではない言葉もあります。瘡も疽も、できものや腫れ物を指しますから、穏やかではありません。

いろいろなものに仲間の顔を見てしまう。どうやら、人間には、そうした習性があるようです。困ったものですね。いや、困ることはないのかもしれませんが。その想像力というか創造力に、「すごいなあ——」と素直に驚嘆するべきなのかもしれません。

自分も頻繁にいろいろなものに「顔」を見ます。人間であるという証拠だと観念もし、また喜んでもおられます。見慣れたものに「顔」を見る場合が多いような気がします。たとえば、トイレの壁の模様の一部が、そうです。見るたびに、どきっとします。あそこが目、あそこが鼻、あそこが顎、あそこが口——。そんな具合です。

似たような経験はありませんか？ そうですか、やっぱり、ありますか？ よかった。トイレの壁だけではなく、見慣れた天井の染みでも、同じような思いをすることがありませんか？ ありますよね。

「うん、ある、ある」なんて言っていただくと、精神的に落ち着きます。ああ、よかった。自分だけじゃなかった。そんな安心感を覚えます。

*

ところで、文字に「顔」を見るということはありませんか？ 今、ご覧になっているモニター上に映し出されている拙文を構成している活字でも構いません。ぼーっと眺めてみてください。「顔」が見えませんか？

さきほども触れましたが、この国の文字には幾種類かがあります。漢字にいたっては、おびただしい数になるようです。

また、明朝やゴシックなどという言葉でおなじみの、書体とかフォントと呼ばれている文字の形の分け方があります。同じ書体でも、大きさや、印刷の方法、紙質、テレビの画像として見るか、パソコンなどのモニター上で見るかによっても、印象が違います。そうした違いを気にしては、肝心の意味を取るのに支障が出ますから、普通は「文字の顔」など気にしません。

ずいぶん昔のことですが、活字のデザイナーを志したことがありました。写植機（写真植字機）のオペレーターになろうとも思い、その操作を教える学校にも通いました。タイポグラフィと呼ばれる分野の本、印刷会社や活字メーカーが出している書体見本を

集め、虫眼鏡で書体ごとの特徴を鑑賞する楽しみも覚えました。

文字にはそれぞれ「顔」があるみたいです。少なくとも、個人的には、そう信じています。

一口に印刷物と言っても、紙やインクの質、刷り上り具合やレタッチ（写真製版の修整）の状態によって、普段は気にも留めない違いが生じるのを知ったのが、そうした時期でした。今でも、新聞・雑誌の文字や写真を、虫眼鏡で拡大して見る習慣があります。趣味と言ってもいいかもしれませんが。時々熱中しすぎて、時が経つのを忘れてしまいます。

書道、書写、写経という経験をなさった方も多いと思います。また、パソコンのワープロソフトを使って文字を表示あるいは印刷しようとしてフォントの選択に迷う。手書きで年賀状の宛名を書こうとして緊張したり、逆に集中力が薄れてきて何を書いているのか瞬間的に分からなくなる。本や雑誌を読んでいてだんだん眠くなり、活字を目で追うのさえ億劫になる。

ハングルやアラビア文字で書かれたメールや手紙が届いて戸惑う。パソコンのワープロソフトで文章を書いている文字変換にてこずる。読みにくい手書きの文字で書かれた文章を苦労しながら判読する。眼鏡を外した状態で目にしたぼんやりとした文字を見る。虫眼鏡で拡大しなければ小さな虫のようにしか見えない文字を前にまばたきする。

以上は、視覚によって文字を認識するさいに、「文字が文字として感じられなくなる」体験だと考えることができそうです。つまり、「文字」に備わっているはずの「意味」や「読み」が、曖昧になる。または、文字が、「かたち」や「もよう」に見えてくるというわけです。

普段は「読み取る」とは「分かる・悟る・学ぶ」「理解する・納得する・習得する」へと向かう行為だと言われています。それに対して、「文字が文字として感じられなくなる」体験は、「ぼんやりしている」「書かれている内容に集中していない」「ちょっと変だ」と言われそうな気がします。

でも、その「ぼんやり」や「集中していない」や「変」は、誰もが日常生活で頻繁に経験しているはずです。さもないと、起きている間じゅう、ずっと神経を集中していないければなりません。それだけの集中力は、人間には備わっていないようです。

授業中、工作中、自動車の運転中でも、状況は変わらない気がします。無意識のうちに適度に気を抜いているからこそ、然るべきときに集中できる。そんな感じではないかと思われます。

*

ぼけーっとする。

この言葉とイメージが好きです。ぼけーっとするとき、人間は、無意識にいろいろなものに「顔」を見てしまうのではないのでしょうか。だから、安心してぼけーっとしていられる。仲間たちに囲まれているような落ち着きを得られる。人間は森羅万象に「人間」を見ている。そう思っている、この文章では、そこまでは書きませんが。

ぼけーっとした頭で、こんなとりとめのない文章を書いているうちに、目の前のパソコンのモニターに並んでいる文字たちがいろいろな顔に見えてきました。文字の顔、字面、人面字という感じでしょうか。

前のほうで紹介した、「愛するあの人の書いたものだと分かる」、「読めない。でも、あの人の書いたものだと分かる」という字面についての経験は、ある種のぼけーっとした状態でなければ味わえないものだという気がします。「ぼけーっとする」という言い方に抵抗があれば、「リラックスする」とか「宇宙に身を任せる」とか「癒やされモードでいる」でもいいです。

いつも見ているのに、実は見ていないもの——それが文字の顔です。真剣に見ても見えないけど、ぼけーとすれば見えるもの——それが文字の顔です。ぼけーっとしていないと出会えないのです。

この駄文の内容や意味なんか忘れて、たまには文字の顔を見てやってください。モニターは目に良くないですから、きょうの朝刊でもいいです。虫眼鏡なんかで、見出しや記事を拡大し、前後関係など無視して、文字の顔を見てやってください。もちろん、普段のように裸眼で見ても構いません。顔を見てやってください。きっと喜ぶますよ。

文字は、いつも控えめにしていて、表に出ないように気を遣っています。それでいて、意味やメッセージや思想や情報などを信号として送ってくれているのです。けなげで、いとおしくて仕方ありません。

ぼけーっとしましょう。ふざけてなんかいません。お酒なんか飲んでもいません。考えちゃ駄目です。理屈も抜きです。トイレの壁の模様や染みを見る要領です。ぼけーっとしましょう。文字に限りません。辺りを見回してみてください。顔に出会えますよ。

◆空前の「純文学」ブーム

空前の「純文学」ブーム（前編）

現在、かつてないほどの大きな規模で「純文学」ブームが起きているのをご存知でしょうか？

正確に言えば、「純文学」復興運動というべきかもしれません。毎日、数えきれないほどの「純文学」の書き手たちが、数えきれないほどの作品を書いているのです。

いえ、海外の話ではありません。この国で起きている現象であり、現実なのです。嘘ではありません。

さて、純文学とは何でしょう？

古い定義を持ち出すことをお許し願います。

一、島崎藤村の『破戒』や田山花袋の『蒲団』あたりを起源とする自然主義文学の流れをくみ、身辺雑記的な記述に満ちた私小説。

二、白樺派と呼ばれた、武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉の流れをくみ、物語性を極力排除し、ひたすら身辺を写生する手法を追及した心境小説。

この二種類なのですが、どちらもいかにも古めかしい定義であり、これが純文学だというのなら、「死語」または「化石」だと言われても当然のものです。

でも、その「死語」と「化石」が日々多数生み出されているのです。嘘ではありません。

*

いったい、この国のどこで、誰が、どんなふうに「純文学」の作品を書き発表しているのかと申しますと、ネット上なのです。

ケータイ文学ですか？ いいえ、違います。少なくとも今、ここでテーマにしているものは、いわゆるケータイ文学ではありません。つまり、みなさんがケータイ文学という言葉でイメージしていると思われる形態の小説ではありません。

とはいえ、ケータイ小説については興味がありますので、ここで、ちょっと寄り道をし、ケータイ小説について触れてみたいと思います。

ブログで小説を書いているものの、ケータイ小説については詳しくないのですが、何かの雑誌で読んだことを思い出しました。とにかく、その雑誌の記事の筆者はすごい剣幕で怒っていました。ケータイ小説について、です。要約しますと、次のようなことが書いてありました。

「ろくに小説を読んだこともないような者たちが、クズみたいな文章で、クズのような内容の小説を携帯電話を用いて書いている。特に、頭に来たのは、これまで小説なんて全然読んだことがない、などとのたまわっていたことである」

だいたい、以上のような意味の批判でした。

既存の作家なのか、編集者なのか、文芸評論家と呼ばれる人なのか、覚えていません。これに似た意見を、いろいろな媒体でいくつも見聞きしたような気がします。こういうのは、批判でも非難でも見解でもなく。悪態とか罵倒と申します。場合によっては八つ当たりかもしれません。

こういうたぐいのものは、書いてある内容を考えてはいけません。中身に意味はありません。悪態や罵倒とは、感情の表れです。企業のクレーム対応係の人たちが、よく言いますよね。別に内容は聞かなくてもいいから、とにかく、まず相手に喋らせる。気が済むまでどんどん喋らせる。それで九十パーセントは解決だ、なんて。

それとほぼ同じです。悪態や罵倒に対しては、その内容について本気で考えるのではなく、その根底にある「感情」だけを読みとればいいのです。そしてそういう不愉快なことは、すぐに忘れればいいのです。

ケータイ小説に対する悪態や罵倒の数々を分類し、「感情語」に翻訳すると、以下のようになります。

*

A「嫉妬」＝本来なら「感情語」で、「くやしーい」とか、「ぎゃあー」の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、次のように長く語ります。

「こんなに汗水を流して、血の出るような努力を重ねて、日本文学を継承するという崇高なる使命感をもって、たくさんお勉強をしてきた、このわたしの小説が売れなくて、何であんな文学的素養のない者たちの駄文が売れるのでしょうか。危険です。文学は危機に瀕しているのです」

このような具合ですが、みじめっらしいですね。

*

B「恐怖」＝本来なら「感情語」で、「やべーよ」とか、「お金がない」の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、次のように長く語ります。

「このままじゃ、困る。現在、出版界は、危機に直面している。敵はネット、つまり、インターネットとケータイにあることは確かだ。それにしても、われわれの劣勢は、どうして起こっているのか？ われわれのどこが悪いというのだ？ これでも、〇〇大出だぜ。おら、エリートだど。さっぱり分からない。せっかく、高いカネを払って、大手の広告代理店に請け負わせて、HPを作成させたり、ネットの特性を利用したマーケティングとやらを各種試みさせているものの、成果は芳しくない。発想の転換、パラダイムシフトが求められているのかもしれない。ビジネス上有利だと割り切れば、あいつらを利用しない手もないではないか。ちょっと、擦り寄ってみるか」

という感じですが、いかにも往生際が悪そうですね。

*

C「迷い、または動揺」＝本来なら「感情語」で、「どうしたらよかんべ」とか、「!？」の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、次のように長く語ります。

「もう食っていけねーよー。文芸誌からの原稿の依頼は、どんどん減っている。講演会やトークショーへのお呼びもない。非文芸誌からも、声がかからない。このままじゃ、マジで飢え死にするぜ。この間みたいに、変装して、深夜のコンビニで働かせてもらおうか？ それにしても、〇〇の野郎は、あちこちのウェブサイトが登場しているけど、どういうコネがあるんだ。性格悪いから、聞いても教えてくれないだろうなあ。いっそ、「ケータイ小説文学論」つーのを、酒でも飲みながら書いて、一山当ててみようか」

うーんと思わずうなってしまうほど切実そうですね。

*

D「思考停止」＝本来なら「感情語」で、「なんとか言ってやってくださいよ、〇〇先生」(※たいてい、テレビのコメンテーターの名前が入ります)とか、「えっと、あれ何だっけ？」(※何かを思い出そうとしています)の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、いや、この場合には、「知性や考える力」はないのですが、次のように長く語ります。評論家とか、事情通とか、識者と呼ばれる人たちの言葉の受け売りや、パッチワークつまり継ぎ合わせになります。したがって、論旨は支離滅裂になります。

「ケータイは国語を乱します。ケータイは青少年の健全な育成の邪魔になります。ケータイ小説はクズです。ケータイ小説に文学性は皆無です。ケータイがらみの未成年を犠牲者とした事件が増えています。国家主導で未成年のネット規制を実施すべきです。出会い系サイトなんて、口にするのも汚らしいです。ケータイリテラシーを学校で学ばせましょう。未成年のフィルタリングサービスを義務化すべきです。未成年者を有害情報から保護しましょう。ケータイを使用すると電磁波を浴びることになります。ケータイ小説って、軽薄な響きがありますよね。ところで、モバゲーって何ですか、〇〇先生？ ついでにネトゲ廃人とかいうものについてもご教示願います、〇〇先生」

意味や実体を知らないというか、考えたこともない言葉をつなぎ合わせてわめているという感じがしますね。

*

E「八つ当たり」＝本来なら「感情語」で、「何だかしんないけど、むかつくなあ」とか、「こんちくしょう」の一言で済むのに、なまじっか痴性と血の気の多さと性格の悪さとがわざわざして、次のように長く語ります。小さな飲み屋なんかで、ママを相手にぼやく、酔っ払いのセリフが典型です。

「何がケータイ小説だ。きょうは、会社の帰りにパチンコで一万損したし、今月の営業成績は最下位まちがいなさそうだし、何がケータイ小説だ。ママ、おかわり！ 昨日の夜、公園でジョギングしてたら犬のうんちは踏むし、誰が置いたかわかんないバケツを蹴飛ばしてつま先を怪我するし、ふんだりけったりじゃねーか、何がケータイ小説だ。外回りさぼって、ネットカフェで2ch入ってXBOXの悪口を言ったら、十人くらいに囲まれてよってたかっていじめられるし、何がケータイ小説だ。ママ、おかわり！ ネットカフェを出たら、家からケータイに電話が入って、宅配便ででかい荷物が二個も届いたっておふくろが言うし、よく考えたら、先週、酔った勢いで、夜中についでテレビ通販をやって歩行器を買ってしまって、そんな時すごくセクシーな声の女の人が、ちょっと早いですけど彼女へのクリスマスプレゼントにもう一台なんてどうですか、なんて言われて、ああいいねえ、なんて返事をしたっけ。おれ、彼女なんていねーのに、何がケータイ小説だ。ママ、おかわり！」

これは、とりあえず酔いがさめるのを待つしかないようですね。

*

念のためにお断りしますが、みなさんが今お読みになっているこの拙文も、悪態や罵倒の一種でございます。投げた石は自分に返ってくるようです。反省。

ちなみに個人的には、ケータイの使用に対する、国家によるさまざまな規制には反対です。言論統制を排し、表現の自由を守ろうという立場を支持します。

さて、ケータイそのものの使用ではなく、ケータイ小説についてですが、結論から申しますと、ケータイ小説はクズだとは思っていません。新しい形態（ケータイ）の小説だと考えております。

また、ケータイ小説の書き手が本（特に既存の小説）を読んでいないと発言したとしても、それは、ご本人が気づいていらっしゃらないだけで、実際には、本（特に既存の小説）以外から、たくさんの言葉の切れ端を「読む」という経験を積んでいるはずですから、「書ける」のです。

簡単に申しますと、「読んでいなければ書けません」。これって、文学理論的にもそうらしいです。詳しいことは存じませんが。

なお、小説を書くのに不可欠な、ストーリーテリングや展開の仕方、読者を飽きさせないための小道具、読みやすさのテクニック、といったさまざまなスキルやパーツは、別に既存の作家、まして古典的文学作品を読まなくても、身につけることができます。

テレビドラマ、映画、CM、雑誌の記事、知り合いとの会話や雑談や馬鹿話、身近な体験、夢でみたことなどさまざまな物や事や現象を通じて、日々体感したり体験したり体得しているからです。

*

ケータイ小説の未来というか、今後ですけど、たぶん、このまま続くと思います。テレビが登場した時に、「映画やラジオや紙芝居がなくなるぞー」と、うれしそうに言った意地や性格や根性の悪い評論家たちがたくさんいたらしいですが、今も映画とラジオと紙芝居はあります。

それと同じです。いわゆる純文学も、いわゆるエンターテインメント小説も、いわゆるライトノベルも、いわゆるBLも、いわゆる二次小説も、いわゆるケータイ小説も、いわゆるネット小説も、シェアの増減や変化はあるでしょうが、それなりに共存していくと予想しております。ステゴザウルスやドードー鳥やベータマックスやおニャン子クラブのように消えることはない、と信じています。

むしろ、さらにまた、新しい形態（ケータイ）小説が現れるに決まっています。それが、人間のたくましきであり厚かましきであり凶々しきであり頼もしきではないでしょうか。

空前の「純文学」ブーム（後編）

道草はここまでにして、冒頭で挙げた（ふるーい定義の）「純文学」復興運動に話を戻します。

「純文学の作品」を、ネット上でどうやって探せばいいのかと申しますと、たとえば、「小説」とか「ネット小説」とか「ケータイ小説」をキーワードにして、“〇〇”という具合にくくってググってみるのは、賢明な検索方法とは言えません。では、どうすれば、「純文学作品」に出合えるのでしょうか？

「ブログ」です。それも「ブログの日記」なのです。ブログを運営しているサイト、あるいは、ブログランキングを行っているサイトのトップページなどで分類されているジャンルで申しますと、「小説」や「文学」ではなく、あくまでも、「日記」の項目をクリック

すべきです。「エッセイ」も有望です。

とにかく、本命は「日記」です。

さきほどの純文学の古い、ふるーい定義のうちの大切な部分だけを、繰り返します。

一、身辺雑記的な記述に満ちた私小説

二、物語性を極力排除し、ひたすら身辺を写生する作法＝手法を追及した心境小説

これって、「ブログの日記」ではないでしょうか？

*

話を少し変えます。

現在、プロの小説家たちの中で、私小説と心境小説を書いて生計を立てている人たちなんているのでしょうか？ そうした傾向の作品だけを書いていた場合に、その作品たちはご飯を食べていけるだけの部数を確保したうえで、販売（出版→流通→書店に並ぶ→お客様に買っていただく）できるのでしょうか？ 無理でしょう。残念ながら、ほぼ不可能でしょう。

出版界も、現在、大不況の影響をまろに受けています。数年前なら、出版社も販売オーケーしてくれた作品が、現在ではなかなか上梓してもらえない。それが現状のようです。

それだけではありません。とりわけ、私小説をとりまく環境は厳しさを増していると言えそうです。たとえば、柳美里（ゆうみり）氏の場合を考えてみましょう。

さきほどの純文学の定義にもっとも近い小説を書いている作家の一人です。かつて書いたある作品がモデル小説の形をとっていたために、プライバシーを侵害されたと主張する人が訴訟を起こし、最高裁において出版差し止めという判決が下されました。

あの作品は、モデル小説でしたが、私小説すべてがモデル小説であると言えるわけで、あの最高裁判決が私小説の息の根を止めた、と言っても過言ではないと思っております。

また、車谷長吉（くるまたにちょうきつ）という作家・俳人がいらっしゃいます。車谷氏は、「私小説家」を自任している数少ない作家の一人でしたが、ある小説での記述の事実関係をめぐって、ある人から提訴されるという事態に至り、それが原因で、確か二〇〇四年に「私小説を書くことを断念する」と宣言なさったことを何かで読んだ記憶があります。

しかし、かつてすさまじいまでの私小説を書いた筆力は今なお健在であり、エッセイ風の味わいのある作品を書き続けていらっしゃいます。

今、紹介した二人の作家の例を見ても分かるように、定義からしてモデル小説になるしかない運命を持った私小説を出版し流通させることはほぼ不可能になってきている、と言えそうです。

プライバシーの侵害や、名誉毀損といった人権にかかわる問題を見無視することができない情勢になっているからです。人権意識の高まりと、裁判所での判例の積み重ねが、その背景にあります。

*

それにもかかわらず、ブログという形態（ケータイ）で、毎日数えきれない「私小説」や「心境小説」、つまり「日記」とときには「身辺雑記的エッセイ」、が書かれ、ネット上を飛び交っているのです。中には、個人を特定されたくないために、詳細を改変したり、匿名、あるいはハンドルネームで、「日記」というジャンルの文章を公表なさっている方々

がいらっしやるでしょう。

蛇足ですが、書くという行為において、事実と虚構を分けることには意味がありません。あるとすれば、ゴシップ的な意味しかありません。つまり、「誰々さんが何々したのは、本当か嘘か？」という次元での興味本位の話題でしかないという意味です。

フィクションとノンフィクションとの分類こそ、もはや化石というべきでしょう。なぜなら、書かれたものはすべてがフィクション＝虚構＝ただの言葉＝嘘＝お話であり、現実や事実とは異なる、つまり、とてつもなくズレているからです。

*

そうしたややこしい話はどうでもいいです。大切なことを繰り返します。

現在、この国で、かつてのふるーい純文学の伝統に沿った、私小説および心境小説が、ブログの日記という形で、多量に書かれているのです。これを、空前の「純文学」ブーム、あるいは、空前の「純文学」復興運動と言わずして、何と云えばよいのでしょうか？

プロ対アマとか、出版界対ネット空間などといった無意味な分類はしないでおきましょう。みんな仲良くしましょうよ。

ブログという形での「公表」なら、裁判所などというお節介なお役所の世話になることはほとんどないと思います（というか、そう願っています）。ただし、実名を挙げての個人攻撃や中傷や八つ当たりの攻撃をしない限り、です。

自分にも、定期的に読んでいる特定のブログ日記があります。日記ですから、ある程度の長さを読んでいないと、つまり、ある程度前の記事から読んでいないと、登場人物や設定が分からないという側面があります。まさに小説と同じです。

日記の書き手宛に、コメントを書き込むこともあります。ハンドルネームをつかって

の関係ですが、フィードバックがあるとやっぱりうれしいものです。積極的にかかわることなく、ただ見守っているだけのサイトもあります。

*

「純文学なんておおげさだよ。しょせん、素人の日記じゃん」という意見もあるでしょう。でも、ブログ日記、つまりある種の純文学と、個人がノートなどに書いている日記との間には決定的な違いがあると思います。

それは、ネット空間で公表されているという点です。公表されているために、個人的なメモや記録的な要素が弱まり、第三者の目を意識したうえでの「作為」や「演技」や「物語性」という要素が強まります。言い換えるなら、第三者に伝えようとする意思が、文章を書くスタイルに表れるということです。

「作為」「演技」「物語性」とは、「かつて純文学の規範とされた私小説と心境小説が排除しようとし排除し切れなかった要素」、つまり「言葉で書かれたものである、あらゆるテキスト＝フィクションにこびりついている属性」です。こうしたややこしい話も、どうでもいいでしょう。

「純文学の復興運動」に疑問をお持ちになっている方は、これを機に、ぜひブログ日記を実際に読みになってみてはいかがでしょうか。多様な書き手があります。さまざまな文章・文体・スタンスがあります。かつての私小説や心境小説を彷彿させる文章も少なくありません。

ブログに限らず、ケータイや、ネットを介しての音楽配信、各種のビジネス、オークション、SNS、ツイッター、ネットゲームなど、ネット上の多岐にわたる新規な仕組みが、既存の仕組みを変えたり、場合によっては世の中の流れに大きな影響をおよぼしていることは、もはや動かせない、そして元に戻せない現実であり事実です。

だから、権力・既存体制・既存権益の受益者たちは、本気でビビっているのです。危機感を募らせている権力はどのような態度を示すでしょうか？ 手始めとしては、弱い者からいじめます。ほんの一例を挙げると、ケータイの校内への持ち込みや、校内での使用を「禁止する」という動きが見られます。これは放置しておく、だんだんエスカレーターしてさまざまな規制につながっていきます。怖いです。

その一方で、権力の中には、ネットにすり寄ってくる者たちもいます。選挙でのブログの活用がいい例でしょう。あるいは、怪しげな集団に資金援助をしたり、手下を使つてのネット上での組織的な中傷戦略やプロパガンダという方法もありますね。これも怖いです。いろいろな意味でネットは恐ろしいです。

*

ありや、話が飛んでしまいました。ふるーい定義の「純文学」＝「私小説」＝「心境小説」の復興運動のお話をしていたのですね。

最後に、ブログで日記を書いている方たちに対して、陰ながらエールを送らせてもらいます。

かき回せ ネットの力で 世を変えよ

◆女装文学の登場

女装文学の登場

ある文章を読んで、その書き手が女性か男性か区別ができますか？

さまざまな答えが予想されます。「絶対的なイエス」から「絶対的なノー」までの間にグラデーションがあるさまが頭に浮かびます。そのグラデーション、つまり濃淡の部分には多種多様な意見があることでしょう。

問題の設定自体が変だ。そんな答えがあっても不思議ではありません。実は、冒頭の質問は愚問だと考えております。そうなら、最初からするな。そんなお叱りの言葉が聞こえてまいります。お許してください。お詫び申し上げます。

弁解をさせてください。ある文章が誰によって書かれたか、という疑問は、人であれば誰でもごく自然にいただくものだと思っております。自分も含めての話です。自分なんか、たとえば他人様（ひとさま）のブログを拝読し、プロフィールを見て、匿名性が高い記述になっている場合など、すごく気になります。

女性か男性か、ばかりではありません。年齢、住んでいる場所、生い立ち、どんな趣味をお持ちなのだろう、好きな作家は誰だろう、ひょっとして外国に長く滞在された経験があるのではないかと、もしかすると闘病生活を送っていらっしゃるのではないだろうか――。

でも、そんなこと分かりっこない、と自分に言い聞かせるようにしております。

人は文なりとか、人柄が文章に表れるという意味の言葉がありますが、自分のこれまでの経験からすると、そうかなあ？ と素直に納得することができません。

一方で、そうかもしれない、と考えている自分が必ずいます。自分が愚か者だからです。愚鈍だから、そんな荒唐無稽な想像をしてしまうのです。

*

出版物には、たいてい著者名や訳者名が記されています。ゴーストライターとか下訳者という存在もいるそうです。共著とか共訳とか監訳などという言葉もあります。覆面作家なんて言葉もありますね。また、著者の書いた文章にやたら手を加える編集者もいるらしいです（蛇足ですが、オバマ大統領のスピーチのほとんどが、おかかえのスピーチライターによって書かれていることを思い出しましょう。歴代の米大統領もわかりです。この国の首相も、そんな感じだそうです）。

翻訳も、そうです。この大不況下であえぐ出版界では、「この著者名を付ければ必ず売れる」みたいに、特定の数少ない売れっ子の名で本を上梓してリスクを回避します。その書籍を実際に書いたのはゴーストライターがいることが多いのは、上述の通りです。一方の翻訳ですが、これは手間と暇を要します。

専門の翻訳者ですら、そうなのですから、テレビ出演やトークショーや講演活動で忙しい超売れっ子が、翻訳できるわけがありません。「〇〇監訳」とするのなら、まだ良心的ですが、「〇〇訳」なんて表紙や背表紙に書いてあると、この人には良心のかけらもないのか、なんて思ってしまいます。実際、脱税した著名な学者がいますね。ノー・ブーム（これは独り言です）。

そう考えると、出版物における著者って言葉も、ずいぶん怪しいですね。無記名の新聞記事ほどまでは匿名的とは申しませんが、訳が分からない部分がありそうです。

*

自分の場合には、出版物を読むさいだけではなく、ブログやウェブサイトを覗いていて、神秘的とまでは言わないまでも興味津々な思いにさせてくれる文章と出合う機会が多いです。

このような文章を書いているのは、いったいどんな人なのだろう？

ネット空間をさ迷っていて、何度そう思ったことか。

さきほど、冒頭の質問が愚問だと申し上げたのは、いったん書かれた文章は書いた人から離れてしまう、あるいは独立した存在になってしまうという意味です。

著作権・知的所有権とか、お金がらみの話をしているわけではありません。文章を書くという物理的な行為について具体的な話をしているだけです。抽象的な意味は全くありません。念のために、言い添えておきます。

*

「作者はいない」とか、「作者は死んだ」という言葉があるそうです。後者は、「神は死んだ」というヨーロッパのある哲学者の言葉のもじりらしいのですが、詳しいことは知りませんというか忘れまして。

*

話を変えます。

ちょっと想像してみてください。大きな自治体の首長クラスの職にあり（つまり都知事とか府知事とか政令都市の市長という意味です）、小説家でもある七十七歳のおじいさんの映像が YouTube を通じて全世界に広まりました。

映っていたのは、そのおじいさんが、こっそりと二十代くらいの女性がまとっていきそうな服装とメイクとヘアスタイルをしているのです。しかも、二十代くらいの女性が口にしそうな言葉遣いをし、二十代くらいの女性がしそうな仕草と表情をしている。そんな映像です。

もし、こんな映像が世界中に流れたとしたら、スキャンダラスですね。ショッキングですね。オゲーっですか？ でも、当のご本人は真剣でやっているですよ。マジで楽しそうなんですよ。

をとこもすなる日記といふものををむなもしてみんとてするなり

『土佐日記』という紀行文について、中学生か高校生の時に習ったのを思い出しました。冒頭に、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」、つまり「男がさかんに書いている日記をいうものを、女である自分もやってみよう」と書いてあるのです。

作者は、紀貫之（きのつらゆき）という、六十歳のおじさんどころか、当時の平均寿命を考えるとおじいさんだったらしいのです。学校の授業で、その話を聞いたさいには、何とも思わなかったような記憶があります。

でも、今引用した『土佐日記』の一節について、あらためて考えるとすごいことをやったんだ、と感心してしまいます。そこで、いろいろ調べてみました。その結果、この日記には四つの注目すべき点があると思いました。

一、かつて日記は男だけが書いていたらしい。

二、一応男であるおじいさんが、女を装って日記を書いたらしい。

三、『土佐日記』は、全体が仮名（かな）＝ひらがなだけで書かれているらしい。

四、日記＝記録＝ノンフィクションを装っているが、どうやら、虚構＝フィクション＝文学作品と分類すべきらしい。

屈折していますね。ややこしいです。この屈折ぶりややこしきは、『土佐日記』が書かれた時代においては、めちゃくちゃ衝撃的でショッキングで劇的で革命的で画期的だったみたいです。

でも、現在という時点から見ると、何ということもない、みんなやっている、普通のことなんですよ。そんな、当時と現在の落差に、自分なんかは感動してしまいます。みなさんは、どう、お感じになりますか？

自分は『土佐日記』のことを考えていて、どういうわけか、さきほどご紹介したような YouTube の映像を妄想してしまったのです。当時のその女装日記事件は、それくらいにめちゃくちゃ衝撃的で画期的な珍事件として、世の中（文字を読み書きできた、当時のインテリ階級の世界くらいの意味です）をあっと言わせたのではないのでしょうか？

いずれにせよ、『土佐日記』は、文学史的にはスキャンダラスなだけでなく、衝撃的な出来事＝事件だったらしいのです。なにしろ、因果関係があるのかどうかは知りませんが、現象として、その珍事件をきっかけに、女性たちが続々と日記のたぐいを書くようになった。つまり、女流文学＝女性文学の先駆けになった「らしい」のです。「らしい」、つまりそういうお話＝伝説があるのです。

女装が女性運動に火をつけちゃった。つまり、女装が女性運動のさきがけとなった。

そんな話なのです。やっぱり、ややこしいし、屈折していますよね。だって、どうして文学史では、女性が日記を書いたという出来事＝事件が、最初に来ないのだろうか？と疑問に思いませんか？ どうして、「女性が女性する」ではなく、「男性が女装する」が先に来たのか？ 実に不可解です。

ちなみに、初めて女性が仮名＝ひらがなで書いた日記文学は、藤原道綱母（ふじわらのみちつなのはは）の『蜻蛉（かげろう）日記』だとされています。以下、メジャーな作品名が続きます。『和泉式部（いずみしきぶ）日記』『紫式部（むらさきしきぶ）日記』『更級（さらしな）日記』などなど。

*

この辺で、ここまでのまとめをしちゃいましょう。結論から申します。

要するに、まなかな、なのだ。

そう言えそうです。説明を加えます。

一、まなぶみ＝真名文＝漢字の文＝漢文＝中国語＝男の文字＝公用文書・記録で用いられる文字＝支配者階級の文字＝インテリの文字。

二、かなぶみ＝仮名文＝かなで書かれた文や手紙＝大和言葉＝女の文字＝私的文書で用いられる文字＝伝説・説話・和歌・物語・フィクションを書くのに使われる文字。

以上の二つの系統の文字体系＝言語体系があったらしいのです。

で、まなぶみからかなぶみへの「移行＝主流派と非主流派の逆転＝下剋上」に対し、あるおじいさんの「女装＝助走＝序奏」が結果的に寄与したらしい、ということなのです。

この辺の説明は、とても大雑把でテキトーです。正確なことは、どうかお勉強なさってください。個人的には、「まな＝真名」に「真」、「かな＝仮名」に「仮」という文字が当てられていることに、ただならぬものを感じます。

どういうことかと言うと、「これは、きっと差別だ！」と感じてしまうのです。いずれにせよ、自分は古文が大の苦手なので、これくらいで、古典の話はやめておきます。

*

話を変えます。

みなさん、オネエ言葉ってご存知ですよね？

男が女の言葉遣いをまねる形で発せられる、日本語の一種の方言。

そんなふうに定義してもよろしいかと存じます。テレビでオネエさんたちがオネエ言葉を話しているのを聞いて、自分もまねてみたことがあります。で、その感想なんですが、とても気持ちいいのです。正直申しまして、ぞくぞくするような快感を覚えるのです。

幼いころから、自分は物まねが大好きでした。テレビに出てくる、いろんな人の声や仕草をまねていました。特に好きだったのが、関西のお笑い芸人さんの物まねです。

まわりから、すごく馬鹿にされました。でも、懲りずにやっていました。これって、なかなか「直り＝治り」ません。恥ずかしながら、今でもやっております。

女装や、オネエさんすることや、オネエ言葉を使うことの根底にあるのは、「装う」という行動です。

*

ある文章を読んで、その書き手が女性か男性か区別ができますか？

今のは、冒頭に書いた質問です。これは愚問だとも書きました。なぜ、愚問なのかを説明いたします。

文章や言葉は、匿名的で中性的なものである。

ただ今書きましたことが、今回の駄文で一番言いたいことなのでございます。

「匿名的＝中性的＝ニュートラルだ」ということは、「のっぺらぼう＝白紙状態＝何にでもなり得る」ということであり、「何でもあり状態となる可能性を秘めている」とも言うし、「実にわくわくする状態」なのです。

クレヨン一式を与えられた子どもが、何も描かれていない画用紙を前にして、「よし」なんて感じで張り切っちゃっている様子に近いのではないのでしょうか？

または、お金を手にした時のわくわく感とも似ています。今、誰かから五万円を手渡され、「これで何を買ってもいいよ」なんて言われたと妄想してください。わくわくどきどきそわそわしませんか？

お金って、「匿名的＝中性的＝ニュートラル」で、「のっぺらぼう＝白紙状態＝何にでもなり得る」ものです。その金額以内ならば、何にでも化けることができます。

このように、何でも書ける、何を書いてもいい。それが、文章の「匿名的＝中性的＝ニュートラルだ」＝「のっぺらぼう＝白紙状態＝何にでもなり得る」＝「実にわくわくする状態」の正体なのです。

これは話し言葉でもほぼ同じです。何でも喋っていい。どんなふうに話してもオーケー。嘘でも本当のことでも自由に喋っていい。男性が女性みたいに喋っても差し支えなし。女性が男性みたいな話し方をしても構わない。

特に日本という社会と風土、そして日本語の使われ方の伝統においては、性差に関してはかなり寛容なところがあります。近隣諸国の言語については、恥ずかしながら知りません。欧米の言語に関して言えば、男女差＝性差は厳格に区別されていると習った記憶があります。

次回は、「装う」をキーワードに、そうした言葉における性差について考えてみたいと

思います。

◆角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？

角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？

大学を卒業して最初の就職に失敗して、ブラブラしていたころがありました。なにしろ、文学部の文学科卒です。いわゆる「つぶしがきかない」の代表でした。そのうえ、性格はうじうじしているし、往生際が悪いときていました。

何をやろうかな？ どうやって、ご飯を食べていこうかな？ 消えてしまおうかな？ もう少し、人生を楽しもうかな？ そんなふうに、あれこれ迷っていたころ、「活字のデザイナーになりたい」と、どういうわけか思ってしまったのです。

なぜ、「活字」なのかと尋ねられると、いろいろ理屈が浮かぶのですが、本当のところはよくわかりません。ただ、好きだったというか、きれいだと思っていたのです。

写植（しゃしょく）という言葉を見たり、聞いたことがおありでしょうか？ 活版印刷では、金属の活字をつかいます。写植は、「写真植字」を省略した言葉で、文字通り、一種の写真技術を利用して、文字のネガを印画紙などに印字して、印刷の原版をつくる方法です。けっこうな値段の機械を用品います。今でも、コンピューターと組み合わせてつかわれています。電算写植というそうです。

もっとも、現在では、パソコンのワープロソフトと印刷用のソフトやプリンターさえあれば、市販の書籍や雑誌とくらべても、それほど見劣りのしない、きれいな印刷物ができてしまいます。でも、その道の専門家が言うには、活版印刷にはそれなりの味があり、写植には写植の美しさがあり、ワープロとプリンターをつかっての印刷物にも、それなりの魅力があるらしいのです。奥が深いというのでしょうか。

実は、「活字のデザイナーになりたい」とか、「写植を勉強したい」なんて思っていたころに、ある人をだましてお金を取ってしまったことがあるのです。よく考えれば、いや、よく考えなくても、正真正銘の詐欺です。詐欺の時効って何年でしたっけ？ たぶん、この詐欺の時効は成立しているのではないかと想像しています。つまり、他人様にお話しても、警察に告げ口されて事情聴取とかされる心配はない。そう勝手に解釈しております。

とはいえ、たとえ罪は消えても、罪悪感というものはなかなか消えないみたいです。今、思うと、すごく悪いことをしました。というのは、相手の方——はっきり言えば被害者の方——は、当時、経済的に苦しい状況にあったからなのです。

さきほど触れましたように、活版印刷では金属の活字をつかいます。当然のことながら、その活字をつくる元の型があるのです。それを、「母型（ぼけい）」とか「マトリックス」と言います。キアヌ・リーブス主演の『マトリックス』という映画のタイトルと同じです。マトリックスという言葉には、さまざまな意味があるようです。時間がおありの方は、ぜひ、少し大きめの英和辞典で matrix を引いてみてください。いろいろな意味が紹介してあるはずです。

詐欺の話にもどります。短期間ですが、母型をつくる会社でアルバイトをしていたころのことです。

職場には、オフィスのほかに、母型を製作する機械が二十台くらい置かれた一種の作業場みたいなフロアがありました。金属を削ったり切断したり磨いたりする音で、けっこうやかましかった記憶があります。そこに、十人以上の二十歳前後の人たちと、一人の五十歳くらいの人が働いていました。

自分は、アルバイトを始めたばかりで、機械には触らせてもらえませんでした。仕組みや操作を知らないと危険なのです。そんなわけで、オフィスと作業場、そしてその会社とほかの会社や工場との間を、母型や部品のようなものが入った箱を持って行き来するという仕事を与えられていました。

作業場に働いていた人たちのなかに、大学の通信教育を受けている二十歳くらいの学生がいました。わりと気が合ったので、休み時間や駅までの帰り道によく会話をしました。自分が大学を出て、その会社でアルバイトをしていることに、その人は興味を示しているようでした。大学で何を勉強していたのかについても、いろいろ聞かれました。

「どうして、こんな会社でアルバイトをしているの？ 家庭教師の口とか、いくらでもあるのに」と、しきりに言われました。活字に興味があるのだと、その都度正直に答えたのですが、首をかしげてなかなか本気にしてくれないのです。何だか、自分が嘘つきで、その嘘のことで責められているような気分になりました。

その人がこちらに対して、複雑な感情をいだいているらしいのも薄々感じました。いい気なもんだ、と思われているようで、心苦しきにも似た気持ちを覚えたこともありました。どうやら、その人はいわゆる苦学生で、生活はかなり苦しいみたいでした。ある時、その人と会社の近くにある書店に入りました。

この文章をお読みになっている方に、唐突な質問をいたしますが、角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？たとえば、誰かと、両文庫が揃えてある本屋さんに行きます。その連れの人を相手にして、次のようなことを試してみてください。

まず、相手を回れ右させて、こちらを見えないようにします。それから、どちらかの文庫を一冊手にして、あるページを両手で開きます。ページの上には、タイトルなどが印刷されていますから、そこを左右の指でうまく隠し、相手のほうにはページの字面だけが見えるようにして、上下を逆にして持ちます。いいですか、こちらから見て上下逆さまにですよ。ここまでは、分かりましたか？その状態で、開いた文庫を相手に差し出せば、相手は、その見開き二ページを正面から読めることになりますね。もちろん、カバーを見せてはいけません。くれぐれも注意してください。

準備が整ったら、相手をこっちに向かせて、五秒間だけ、そのページを見せます。五秒以上は駄目です。秒を計れる時計があったら、五秒がどれくらいの時間か、確かめてみてください。わりと短い感じがします。五秒経ったら、相手を再び回れ右させて、「今のは、何文庫だった？」と尋ねます。

立場を、逆にして、考えてみましょう。あなたは、五秒間見ただけで、角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？

今、自分がそれを誰かに試されたとしたら、区別はできないと思います。活字については、わりと敏感なほうなのですが、今だったら、自信はまったくありません。「今だったら」がポイントです。その当時は、できたのです。

ここで、詐欺の告白をします。自分は、そのバイト先の仲間をだましたのです。

自分は活字に興味があり、知識もある。だから、数秒間見ただけで、角川文庫と新潮文庫の活字を見ただけで、区別してみせる。そんな調子で、本屋さんで大見得を切ったのです。相手は、「信じられない。ぜったい嘘だ」とそっけなく言いました。自分は、「本当だよ」と言い返しました。

この時点で、自分は相手を挑発しており、しかもだます意思があったのですから、立派に「犯意」があったということになります。その人は意地になりました。

「じゃあ、賭けをしよう」

思い通りの科白を相手に吐かせたのですから、自分って、そうとうワルだったなと思います。

千円を賭けた勝負となりました。さきほど説明した本の持ち方を、相手に教えました。三冊で試して、こちらが二冊以上見分けられたら、こっちの勝ち。一冊だけ、あるいはぜんぜん見分けられなかったら、こっちの負け。まさに賭けです。まったくのまぐれで当てるつもりだったわけではありません。種（たね）あります。とはいうものの、どきどきしました。負ける可能性もあったのです。数学に弱いので、その勝敗の確率については、まったくわかりませんが。

結果は、三冊とも正解しました。その人の顔は、青ざめていました。でも、ちゃんと財布から千円札を出して、手渡してくれました。その時です。

「もう、一回やろう」

その人が言ったのです。こちらは千円札を自分の財布に入れながら、罪悪感を覚えはじめていたので慌てました。これ以上、罪は重ねたくないという気持ちも働き、「やめようよ」と言い残して、店を出ようと思いました。すると、その人は、こちらの手首を強くつかんだのです。

怖かったです。断ろうと思いましたが、相手に悪いという気持ちよりも、相手に対する恐怖心が勝ちました。それで、もう一勝負してしまっただけです。今度は、二冊正解で、一冊は失敗しました。でも、こちらの勝ちには違いありません。また、千円が手に入りました。

振り返れば、あのころの二千円は、生活の苦しかった自分にとってはもちろん、きっとあの人にとっても大金だったはずですが。その貴重なお金を、だまし取ったのです。立派な詐欺ですね。この詐欺の種（たね）については、もう、ピンときた方もいらっしゃると思います。

「今、自分がそれを誰かに試されたとしたら、区別はできないと思います」と、さきほど書きました。新潮文庫と角川文庫を開いてご覧になればわかりますが、見た目には、とてもよく似ています。素人には、区別はしにくいですが。でも、昔は、ある違いがあったのです。図式化して説明します。

(1)

である。

彼女は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「そうよね。○○○○○○○○○○○○○○○○○○」

(2)

である。

彼女は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「そうよね。○○○○○○○○○○○○○○○○○○」

(3)

である。

彼女は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「そうよね。○○○『○○○』○○○○○」

(4)

である。

彼女は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「そうよね。○○○「○○○」○○○○○」

当時の新潮文庫の組版は(1)で、角川文庫は(2)だったのです。難しい顔をして「うーむ」なんて唸りながら活字をじっと見なくても、瞬間的に区別できたのです。自分が、ドキドキしていたのは、会話のまったくないページを開かれたらどうしよう、という不安の表れであり、一回負けたのはまさにそうしたページを見せられたからでした。ちなみに、活字の組み方の違いとしては、(3)と(4)もあったように記憶しています。(3)が圧倒的に多い中で、(4)もあったし、たぶん今もあるはずです。

もしも古い角川文庫があったら、あるいは新しくても組版が変わっていない同文庫があれば、確かめてみてください。(2)のままのものも、まだ売られています。ところで、当時このことを知っていたのは、大学四年生の時に、文章を書く技術を教える学校にも

通っていて、その授業で習ったからでした。

現在では、このトリックはほぼ使えないと思いますが、前述のように、そういう本が残っていますから、絶対に悪用しないでください。へたすると、犯罪になりますよ。

なお、以上の話を読んで、万が一心当たりのある方がいらっしゃいましたら、ご一報願います。弁償しますので。

◆仮面と人形

仮面と人形（仮面編）

仮面と人形の共通点は何でしょう？

難しく考えないでください。両方とも、「人面〇〇」や「何かに浮かんで見える〇〇像」の一種、または「人面〇〇」や「何かに浮かんで見える〇〇像」のチャンピオンみたいなものだと考えてみましょう。

「人面〇〇」や「何かに浮かんで見える〇〇像」とは、トイレの壁の模様とか、天井の染みとか、池の鯉とか、川辺に転がっている石とか、写真の隅っことか、車を正面から見た時なんかには、人間の顔や姿や形を見てしまうことです。錯覚と言えば錯覚だし、神秘と言えば神秘です。人によっていろいろな解釈ができるでしょう。

それに対し、仮面やお面、そして人形やキャラクターなどは、そのものズバリ、人が意図的に人間の顔や体を真似て作るものですね。

もとは、ラスコーやアルタミラの洞くつの絵みたいに、土の壁なんかには人の顔や形、あるいは狩りの獲物の動物などを描いていたのでしょうか。それとも、人の顔や形に似ている石ころや岩や木切れを見て少し細工してみたり、土や砂や粘土で顔や形を作って、「ほほーっ」とか「ぎゃははーっ」とか「ひえーっ」とか叫んで、騒いでいたのでしょうか？

こうしたものは、お絵描きと工作のどちらが先か、という問題ではなく、同時発生的に起こったのかもしれないね。

そういうのが高じると、人形やお面に行き着くって感じがしませんか？ 人形と言えば、ひな祭りが頭に浮かびます。おひな様も、男女の内裏びなだけを飾るごく質素なものから、ひな壇とセットになっている車一台が買えるくらいの豪華なものまであります。

*

話はがらりと変わりますが、「タモちゃんのお代理様」とかいうコーナーが、テレビ番組の「笑っていいとも！」でありましたね。松本小雪とかいう人とタモリが、視聴者の相談に答えるという企画だったような覚えがありますが、あれって、かなり昔の話のほずです。そう思うと、あれも長寿番組ですね。

ところで、なんで、「お代理様」だったのでしょうか？ 視聴者の代理として、疑問に答えていたからでしょうか？ 深読み、またはこじつけをすると、「お代理様＝お内裏様」になります。意味深ですね。

*

人形については次回に譲るとして、今回は主に仮面やお面について考えてみましょう。

お面の場合には、能面ぐらいになると、かなり高価だし、国宝級のものもあります。また、世界中の人たちが、さまざまな素材のお面を作っています。

「面」という言葉に、自分はとても興味を持っています。「面」は「かお」や「つら」のことです。「人形は顔が命」という言い方があるくらいですから、人にとってはとても大切なものだという気がしてなりません。

もしも、あなたの目の前に、いきなり人の顔が「にゅーっ」と出てきたら、不気味ですよ。顔って、自分自身の首の上にもあるのに、実に気味が悪いんです。だから、「人面〇〇」で大騒ぎしたりします。キリストやマリアの像や、観音像が何かに浮かんだとって、大騒動になる場合もあります。なぜでしょう？

顔から考えてみます。個人的な意見を申しますと、顔＝面＝皮膚＝皮で、「厚みがない」・「薄っぺら」だからだと思うんです。言い換えると、実体がないみたいに見える。まるで幽霊です。のっぺらぼうのお化けです。

また、ぺらぺらだから被ることができます。身にまとうことができる被り物です。つまり、自分でないものに「化ける」ことができる。逆に言うと、目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」ものなのではないか、とも考えられるわけです。

こういうのを「表象の働き」とか「象徴の仕組み」とか呼んでいる人もいるみたいで

す。要するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることなのです。言葉がそうですね。言葉は「言葉でないもの」の代わりに人が使っているものです。単純に考えてください。本物の花の代わりに「花という言葉」を使うという意味です。

お金も、表象＝象徴ですね。お金は価値の象徴だとも言えます。したがって、その額によってさまざまなものの代わりになります。ほぼすべてのものがお金で買えるという意味では、お金はほぼすべてのものの象徴だと考えることもできます。そう思うと、お金ってすごいですね。だから、みんなが欲しがるのでしょうか。

*

話を仮面に戻します。

「仮面」とか「能面」を見て、気味が悪いと感じる時がありませんか？ 最高に不気味なのは、何と言ってもデスマスク。デスマスクもマスクデス。自分は、一度だけ、お能を観に行ったことがあるのですが、あまりにも退屈なので途中で眠ってしまいました。能面を、デパートの催しで間近に見たことがあります。もちろん、展示してあるものでしたが、見る位置によって「表情」が変わって見えるのです。ミステリアスなものを感じました。

「表情」という言葉があります。個人的な意見なのですが、「表情」も一種の「仮面」だと思います。文学的な言い方ですが、「表情をまとう」なんて表現もあるくらいです。「表情を浮かべる」という言い方なら、日常会話でも出てきますね。ポイントは、表情は「浮かんでいる」ということです。要するに、内心は分からない。ベール（被い）に包まれている。

やっぱり、「表情」は一種の「仮面」ではないでしょうか。演劇で考えてみましょう。劇場でのお芝居にしる、テレビドラマにしる、映画にしる、劇は「ステージ＝舞台」や「スタジオ」で行われます。観客との間が離れているわけですから、濃いめの「メイク＝お化粧」をしますね。「化粧」は文字通り、「化ける」ことです。役者は「化ける」ことによって、喜怒哀楽などの表情を誇張し、隔たりのある場所にいる観客に伝えるわけです。

すると、「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「表象」＝「象徴」という、つながりが見えてきます。同時に、これらのものに、どこか「あやしい＝怪しい＝妖しい＝面妖（めんよう）」というイメージが備わっているのも、何となく分かる気がしませんか？

「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「表象」＝「象徴」に、もう一つ付け加えたいものがあります。「かつら」です。広辞苑によると、「かつら」は「かずら」「かづら」でもあ

るとのことです。分かったずら？「かつら」も、一種の「象徴」だと言えそうです。人形は顔が命。オヤジはヅラが命。政治家と公務員はおもてヅラが命。言えてませんか？中身とづらがずれている。よくできたづらほど値が張る。しかも鉄面皮。

かつら、お面、仮面、お化粧、表情、顔つき——こうしたものは、さきほど書きました「表象の働き」とか「象徴の仕組み」という言葉でひっくりめることができそうです。要するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることです。ぶっちゃけた話が、何かに「化ける」ことです。もう少しお上品に言うなら「装う」ことです。

*

どうして、人間は、Aの代わりに「Aではないもの」を用いる、などという奇妙なことをするのでしょう？

個人的な意見を申しますと、人間が地球で威張っていることと関係があるような気がします。「威張る」というのは、文字通り「権威」をからだに「張る」こと。つまり、「虎の威を借りる」ということです。

以上のことから「虎の威」とは「虎の衣」に他ならず、雷さまがはいている虎の「皮」のパンツと同じだと言えそうです。また、パンツは「メンツ＝面子」に似ています。これも駄洒落ですが、意外と言えてませんか？

ひょっとして、人は「面子＝体面＝面目」のために、象徴をまとうのではないのでしょうか？

そう言えば、この記事の初めのほうで取り上げた、おひな様もえらそうにしていますね。実際、えらいお方らしいです。内裏雛（だいらびな）は、高貴なお方のお人形。だから、ひな壇の上のほうに控えていらっしゃるのです。

*

話は飛躍しますが、「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きものです。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよいます。そのうようよに「壇＝段」がある、つまり格付けされているのです。なお、お役所では、ハンコペタペタのペーパーワークが主な仕事になっています。ペーパー＝紙の先祖は、草木の皮や生き物の皮だったそうです。パピルス（ペーパーの語源らしいです）や羊皮紙なんて、小学校で習った覚えが

ありませんか。

「ひな壇」は「虎の威＝衣」と二点セットで、クラス分けしたり、棲み分けして、暮らすわけです（今は駄洒落です、念のため）。これが代々続けば、例の二世、三世、そして世襲ということになります。仲間うちで「虎の威＝衣」を譲ったり譲り合えば、天下り、渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威＝衣」は「虎の位」でもあります。ぺいぺいからキャリアまで、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物まで、多岐にわたる種類があります。

引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえます。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんで、これがご奉公なの？ 公僕、最後のご奉公ってわけですか？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないでしょうか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり騒がないが不思議です。

「タモちゃんのお代理様」は、やっぱり言えていると思います。

*

さて、核心に入ります。

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望＝欲求＝祈り＝野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面を被り、表情を真似て、時にはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょうか？ 様になるでしょうか？ だって、こんなふうになれば、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。

どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

たとえば、次のような具合です。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」「ニワトリとブタが増えますように」「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」「今度の戦（いくさ）に勝てますように」「あいつとの賭けに勝てますように」「お父さんの怪我が早く治りますように」「娘がいいところにお嫁に行けますように」「亡くなった後に天国に行けますように」「元気が出ますように」

というふうに庶民が願い、祈ります。すると、虎皮のパンツをはき、お化粧をするか仮面を被り、かつらをつけた代理人がしゃしゃり出て来て、えらそうに次のように言います。

「お任せあれ。任せとき。大丈夫。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなった時には、代理人は即座に仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらも外して、「わたしは、単なる代理でございます」と言って、責任を転嫁すればいい。

または、「あんたの信心が足りんからじゃ」と、これまた責任を転嫁すればいい。

このように、「代理人＝代行者」は、実に気楽でいい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

なんて、恥も外聞もなくおふざけをしてしまいましたが、「代理」とか「代理人」というのは、実はかなりシリアスで怖い問題なんです。だって、そういう仕組みや人たちによって世界は動かされているんですから。

嘘じゃありません。テレビのニュースや新聞をご覧ください。代理、代理人、仮面、虎皮のパンツ、仮装、お化粧、かつら、作り顔、顔芸ばかりです。だまされないように、気を付けましょう。

とは言うものの、本物や中身や真実や事実や現実なんてものがないのが、これまた困った問題なんです。でも、こういうややこしい話はやめておきます。

仮面とお面については、そういうわけでございます（←どういうわけだ？）。次回は、人形について考えてみたいと存じます。

仮面と人形（人形編）

前は、仮面とお面について書きました。身近な体験を例に取れば、仮面とは、トイレの壁の模様や見慣れた天井の染みなどに、人の顔を見てしまうという「人面〇〇」や心霊写真のたぐいと原理は同じみたいです。ないのに、見えちゃうんです。見えちゃうと、信じちゃうんです。それに、伝染るんです。そんなホモ・サピエンスに独特の習性、または病らしいという話をしました。

人は森羅万象、つまり何でもかんでもに、自分とその仲間たちの顔や姿を見てしまう。もう少し正確に言うと、知覚してしまう。そんなふうにも言えそうです。

*

今回は人形について、一緒に考えてみましょう。

その前に、ある有名な話を、引用させてください。どこで聞いたのか、読んだのか、全然覚えていないのですが、ある知り合いも知っていたので、この記事をお読みになっている方も、たぶんご存知ではないかと思います。小・中・高のいずれかの授業で、教師が次のような謎々を出したような記憶がありますので、クイズ形式にします。

ある場所で、半ば化石化したヒトの遺体が発見されました。太古のものと、判断されました。骨とごくわずかな人体の一部が残っているだけの遺体です。土の中から発掘されました。で、こういう場合には、考古学者たちなどが寄ってたかっているいろいろ調べます。それで分かった事実の一つとして、その遺体には目に見えない細かな花粉が多量に付着していたのです。おそらく、学者たちが、遺体の周辺の土や砂を顕微鏡か何かでじっと観察した結果、判明した事実なのでしょう。大変ですね、ああいう職業も。

さて、今述べた事実から、何が分かるでしょう？

ちなみに、花粉アレルギーとは関係ありません。自分は、スギ花粉のほか、いくつかの草の花粉や、ハウスダストや、ダニのたぐいにアレルギー症状を示す体質なので、は

ああああ、くしょん、と思わず、クシャミをしてみました。猫アレルギーでないことだけを感謝しています。ねー、ネコちゃん。ネコというのは、今、この部屋の窓から外をじっと見つめている、うちの猫の名前です。名前を呼んだのに、知らん顔していません。そういうところが、猫さんらしくて好きです。犬だと、呼べばすぐに尻尾を振りながら、そばに寄ってくるんでしょうね。

*

さて、クイズの答えを言います。その半化石化した太古のヒトが、花粉症だったかどうかは不明なのですが、学者の説によると、花粉の存在が、「宗教の誕生ないし発生を物語っている」というのです。えええっ！？ ですよ？ なんてそうなるの？

なんてそうなるのかと申しますと、おそらく、その遺体は仲間たちによって、埋葬されたに違いないからだ。つまり、亡くなった人を葬るさいに花を集めてきて、全身を被ってやり、供養し、あの世へ送り出してやったのだ。たぶん、そうだ。いや、そうにちがいない——という学者の説なのです。

その証拠に、もちろん花々は腐敗し風化して影も形もありませんが、花粉だけがその遺体の全身に付着していて、遺体周辺の土や砂にはいっさい、その花粉は見つからなかったというのです。その人が、たまたまお花畑で行き倒れになったとは、考えられないらしいのです。

うーん。なるほど。そういうものか。神仏のたぐいは信じていない自分ですが、このことに関しては、素直に納得します。そうであっても、不思議はない。たぶん、いや、きっと、そうだったのでしょう。人は、仲間あるいは自分の親族が亡くなったとき、ほったらかしにはしないでしょう。

冷たくなり、動かなくなったとはいえ、一緒に暮らしていた人です。お別れのさいには、美しいもので、その体を飾ってやり、あの世か、どこか知りませんが、送り出してやりたいと思うのは、理解できます。感動すら覚えます。

どうして、こんな話をしたのかと申しますと、人間って、かなり変だ、変わっていると思うからなんです。亡くなった仲間を美しい花で被って弔（ともら）う生き物なんて、ほかにいますか？ 人間の脳には、ほかの生き物と違った何かがあるにちがいません。

*

人は森羅万象、つまり、何でもかんでもに、自分とその仲間たちの顔や姿を見てしまう。もう少し正確に言うと、知覚してしまう。

これは冒頭近くにした文です。話を、そこに戻します。みなさんに、お尋ねします。自分の周りを見回してください。お人形、キャラクターグッズ、または、そうしたものの絵や写真やアイコンがありませんか？ 人のそばには、人や他の生き物の形をしたもの、または、架空のキャラクターなどが、必ずと言っていいほど、ありませんか？ そして、その形は、たとえ人間を模したものではなくても（つまりクマさんやミツバチさんや妖精さんや妖怪さんを模したものあっても）、どこか人間の形をしていたり、人間に似せてありませんか？

自分のこの部屋にも、人形やキャラクターのたぐいが、たくさんあります。「かわいいもの」って割と好きなんです。気が安まりますよね。癒やされますよね。

これって、やっぱり、ホモ・サピエンスの習性（またはビョーキ）みたいですね。うだつの上がらなかった、尻尾のない、ある種のおサルさんの脳の中で、ズレ（または壊れ）という大事件が起こって、すごい脳を持ったおサルさんが誕生してしまったという「説＝おとぎ話＝フィクション＝紙芝居」があるそうです。

脳の中で何かとんでもないことが起きてしまって、晴れてホモ・サピエンスとなったおサルさんは、周りの木の皮や石ころや空の雲の形に仲間の顔や姿を見て、「うひょー」「おっおっ」「けっけっ」「おーおー」「うーうー」「およよ」なんていうふうに、びっくりしたり、喜んだり、感動したり、敬虔な気持ちをいだいたりするだけでは、済まなかったみたいなんです。

それだけじゃ済まなくて、自分の手で、粘土をこねたり、木切れや石ころなどを何かを利用して彫ったり削ったりして、わざわざ仲間や他の生き物の形に似せたものをせっせと細工するように、なっちゃった。住んでいる洞くつの壁に、尖った木か石か分かりませんが、そういうもので絵を描いたり、色の付いた土か草木か知りませんが、そういうもので色を付けたりするように、なっちゃった。どうやら、そうらしいのです。

みなさんは、どうお思いになりますでしょうか？ 自分の場合には、人の端くれである自分の顔を鏡で見たりすると、いかにもそんなことをしそうな、尋常ではないというか、異様な気配を覚えます。

そう考えると、人間って、けっこうおちゃめですね。自分に似たものを、わざわざ、こしらえるなんて。そうとう、ワルいことも、ズルいことも、ザンギヤクなことも、ジコチュウなことも、さんざんやっていますけど、おちゃめな面も確かにありますよね。

*

学校でのお勉強のおさらいになりますが、土偶なんて面白いものが、この国にも大昔にありましたね。それに、古墳から出てくる埴輪なんて、習いました。学校で教わったものではありませんが、中国にある、ものすごく大きなお墓から、たくさんの精巧に作られた土製の人形（ひとがた・にんぎょう）や、家畜の像が発見されたという、いつだったか見たテレビのニュースを思い出しました。

そういえば、確か、エジプトのピラミッドからも、そんなようなものが出てきたんじゃないかなかったですか？ 詳しいことは、もう、すっかり忘れちゃったけど。で、話はちょっと違うみたいですが、イースター島のモアイ像なんてのもありますね。あれって、何なんですか？ 不思議ですね。人が作ったんじゃないと言い張る人もいるようですが、そうだとしたら、人間以外にもおちゃめな存在が、この宇宙のどこかにいるんでしょうか？

ところで、みなさんの家に、ひょっとして肖像画ってありませんか？ おじいさんか、そのまたおじいさんのものとかがありませんか？ そうそう、肖像画で思い出しました。大切なものを、忘れていました。写真です。それに、ビデオで撮られた家族なんかの映像です。そうしたのも、一種の人形（ひとがた・にんぎょう）と呼んでもいいのではないのでしょうか？

前回に、おひな様の人形について書きました。そのとき、「タモちゃんのお代理様」を思い出して、「お内裏様＝お代理様」という話になりました。

今、広辞苑で「ひとがた（人形）」を引いてみたんですが、「古くは清音」とあるので、昔は「ひとかた」とも発音していたみたいです。で、「ひとがた（人形）」の項には、「にんぎょう」という意味のほかに、「身代わりの人。代理」とも書いてあります。どっきっとしませんか？ 身代わり、ですよ。「人身御供（ひとみごくう）」、つまり、人間の代わりに神様に差し出す生贄（いけにえ）を連想しませんか。よく考えると、ものすごく怖いんです。自分は生贄には絶対にされたくありません。

人間は何か土木工事や建設をするさいに、工事中に自分たちの身を守るために、神様なんかには生贄をささげますね。他の動物だったり、植物だったりをお供えします。たいていは、殺します。花や木だったら、切って供えます。あれって、身代わりなんですね。ほら、お葬式や宗教的儀式で、献花とか供物って行いますよね。基本的には、あれと同じです。

ここで、さきほどの太古の遺体に付着していた花粉の意味が、また別の面から分かっ

てきましたね。要するに、花は、広い意味での生贄だったということです。故人と一緒に、あの世か、どこかへ、送るのですね。美しいがゆえに犠牲にされるのです。なんだか、切なくて哀しいです。

*

スケープゴートって言葉をお聞きになったことはありませんか？ 弱い存在が、みんなの犠牲になって罪をかぶるんです。そう思うと、かわいそうですね。スケープゴートも生贄です。人間がそういう仕組みを作ったのも、脳の中で何かとんでもないズレが起こってしまった「狂ったおサルさん」だからだという説があります。

この「狂ったおサルさん」説を信じるかどうかは、みなさんにお任せします。自分の場合には、まず鏡で自分の姿を映してみます。その顔と体をよく見てみます。そして、なぜ自分がそんなことをしているのかと考えてみます。ほかの生き物がそういう行動をするかどうか考えてみます。

ほかには、新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見ます。この惑星に散らばって暮らしている何十億もの仲間たちが、どんなことをやっているのかを調べてみます。自分自身も同じようなことをしているのではないかと反省してみます。そうすると、「狂ったおサルさん」説について、自分が賛成できるかできないかが判断できます。

*

話を戻します。

上で挙げたこの国の古墳、そして中国のお墓はもちろん、ピラミッドもお墓ですね。そうしたお墓で、人間は、自分自身が血を流す代わりに、他の動物や植物を傷つけたり切って供えたり、人間や動物の形をしたものを作って、亡き人と一緒に葬るという「習性＝仕組み＝儀式」を、なぜか作り上げたのです。世界中の人間に共通するのが、興味深いですね。

「ひとがた（人形）」が代理として使われる例としては、傀儡（かいらい）、操り人形、木偶（でく）、でくのぼう、ダミーなどもありますね。どれもが、いい意味を持ってはいません。新薬の臨床実験などで利用される実験動物も、人間との生物学的な共通性や類似性があるから犠牲にされるわけです。その点では、広義の「ひとがた（人形）」とみなしてもよいのではないのでしょうか。

お人形さんの起源は、子どものおもちゃだけでは、説明できないことが分かりますね。もっと、深いというか、恐ろしいというか、言葉にしにくい感情が込められているのではないか。そんな気がします。ですから、人は人形（にんぎょう・ひとがた・ひとかた）に対して、「ひとかたならぬお世話になっております」と、一言お礼を述べてもいいのではないのでしょうか？

人形供養などという、他人任せの儀式だけで済ませてはなりません。敬虔な気持ちで、「ひとかたならぬお世話になっております」と口にして、お人形さんたちに、頭を下げてもいいのではないのでしょうか？ 反省の意味を込めて、たった今、自分はパソコンの脇にあるお手玉のモリゾーちゃんとキッコロちゃんに向かって頭を垂れ、「ひとかたならぬお世話になっております」と言ってみました。

人形に限らず、動物アニメ、ゲームのキャラクター、アイコン、アバター、絵文字などの存在を考えると、これから先も「人は森羅万象、つまり、何でもかんでもに、自分とその仲間たちの顔や姿を見てしまう。もう少し正確に言うと、知覚してしまう」という人間の習性と、その応用編である、「ひとかた」を作るという習性は延々と続くような気がします。

*

前回にも触れましたが、以上述べたことの根っこには、人間に次のような習性があるからだそうです。

Aの代わりに「Aではないもの」を用いる。

こういう行動を「表象の働き」とか「象徴の仕組み」とか呼んでいる人もいるそうです。こんな理屈はややこしいとお思いでしたら、お忘れになってください。人間として生きて行くためには、そうするしかない理屈みたいです。つまり、これをやらないためには人間をやめるしかないみたいです。どうしようもないですね。

*

ここで、気分をがらりと変えて、ちょっとエッチなお話をしてもいいですか？ 実は、さっきの花粉の話を書いている時に、思い出して、書こうかな書かないでおこうかなと、迷っていたのです。

で、そのエッチな話なんですけど、次のことと関係があります。

花は、なぜ美しいか？

何だか、理解に苦しみますよね。でも、さきほどの話を思い出してみてください。亡くなった仲間を美しい花々で被って弔うという儀式は、太古から続く人間の習性のようなのです。なぜ、花なのか？ また、なぜ、人は花を美しいと思うのか？ 不思議です。

花って、どうしてきれいなのか分かりになりますか？ 生殖器だからです。ずばり申しまして性器だからです。花粉というものは雄しべにある細胞だって、学校で習いましたよね？ ところで、生殖器と性器の違いって何でしょう？ ちょっと引き算をしてみます。

生殖器 - 性器 = せいしょくき - せいき = しょく = 殖

解けました。「殖=ふえる・ふやす=増」。フエルアルバムじゃ、ありませんよ。いや、アルバムは写真を収めるものだから、おおいに関係がありそうです。「殖」とは、子や種族が増えること。要するに、繁殖することですね。

繁殖=生殖を目的とする場合に、生殖器。エッチすることだけを目的にする場合に、性器。こんな具合に割り切れればいいのですが、できちゃった婚みたいに、一石二鳥というか、「ありゃ、こんなはずじゃなかった」という場合もあるし、あるいは「確信犯」というか、「できちゃえば、親も許してくれるよね」みたいな乗りもあり、事はそれほど単純じゃないみたいですね。

いずれにせよ、花は生殖器なんですね。雌しべと雄しべがある場合も、片方だけの場合もあるんですけど？ 昔、学校で習ったことなので、忘れちゃいました。

とにかく、美しくしていないと、蜂さんや蝶さん（愛のキューピット役です）などが、わざわざ立ち寄ってかきまわして（「自家受粉」「他家受粉」とか「交配」とも言うそうです）くれないんですよ。他の生き物にかきまわしてもらわないと、植物は繁殖のための「合体」ができないんです。生き物同士って、協力し合っているんですね。人知の及ばぬ、つまり人知などお呼びじゃない、すごい仕組みだ、と思います。

*

どうでしたか、ちょっとエッチなお話だったでしょ？ こんなんじゃ、エッチとは言えないですか？ じゃあ、もう少しエスカレートしていいですか？ 実は、花が生殖器だと気

づかせてくれた人がいたんです。それも、即物的な形で示してくれたんですよ。はい。

大学生のころの話です。すごく変わった人を、変人と言いますね。自分も、近所では、そう思われているらしいのですが、本当のところは未確認です。確認のために一軒一軒を訪ね歩けば、それこそ「ほんまもん」だと、ふれて回るようなものです。

そうなれば、〇〇小学校の校下（通学区域）を、夕方などに散策することができなくなります。不審者というレッテルを貼られてしまいます。きっと、後ろ指をさされます。スーパーへの買出しにも、不自由することになります。バス停で、ぼけーっと突っ立っているわけにもまいりません。

で、大学生のころに、同じ学科にかなりな変人がいました。男性です。自分は、昔から、飲み会のたぐいが嫌いで（お酒の臭いと煙草の臭いに、アレルギーなのです）、ほとんど参加したことがないのですが、その事件の場にはたまたま居合わせました。

その事件というのは、ある男子学生が、女子学生たちのいる席で、性器を露出したというものです。今だったら、セクハラです。場合によっては、警察に、即、身柄を拘束されますよ。あのころだから、穏便に済んだ事件なのです。

前後関係は、よく覚えていないのですが、あるフランス語の詩と関係があったはずで、その詩の中で、花が美しいとか、肉体は悲しいとか、そんな感じの一節があって、ある女子学生が、花の美しさについて、酔いも手伝って気持ち良さそうに、とうとうと語っていたのです。そのとき、その変人の男子学生が、「きみ、花ってそんなに美しいかい？ じゃあ、これも美しいはずだ」とか言って、宴席の椅子の上に立ち、いきなり下半身を露出したのです。

「きゃー」「おえー」「ばかやろー」「なにおー」「こらー」「わーん」「しくしく」

とにかく、大変な騒ぎになりました。ご想像はつくと思います。で、そのけしからん変人ヘンタイ学生が、叫んだのです。

「花は、生殖器だ。文句あっか？」

この話は、現場に居合わせた一部の人たちの間で、今も語り継がれているはずですが、実話です。その珍事件の目撃者が、ひょっとして、この記事を読んでいらっしゃるかもしれません。懐かしーい、とか叫んでいるかもしれません。万が一、お心当たりの方は、当ブログのプロフィールの下にある「メッセージを送る」機能を通じて、ご一報願います。旧交を温めませんか？

◆分身

分身

テープレコーダーが作動していました。

そのことは、はっきりと覚えています。小学六年生の時の記憶です。場所は教室。六年四組。月曜日。そこまで覚えています。何月かは忘れました。

自分を含めた児童たちが緊張していたのは、室内のほぼ中央の机の上に置かれた、テープレコーダーの存在のせいだけではありません。教室の後ろに、見知らぬ大人の男女たちが肩を寄せ合うようにして集まっているのです。二十人前後はいただろうと思います。ぶーンという、テープレコーダーの作動する音が聞こえていたような気がするの、今思えば錯覚でしょう。

それくらいテープレコーダーの存在は不気味で、教室全体に緊張感を漂わせていました。道徳の授業でした。まず、教科書に載っているあるお話を、担任の女性教師に当てられた数人の児童が、分担して朗読しました。内容は、オリンピックで金メダルを取ったある球技のチームをたたえるものでした。

そのチームは、某会社の社員が大半を占め、監督もその会社のチームの監督が務めていました。監督とチームのメンバーたちが、どんなに一生懸命に努力して、五輪での金メダル受賞という栄光を勝ち取ったか。その並々ならぬ努力を児童たちに感動させる。自分たちも頑張らなければならない、という気持ちにさせる。

教科書をつくった会社も、それを検定して「合格」とお墨付きを与えた旧文部省も、そうした筋書きを想定していたことは、容易に想像できます。こういうのを出来レースと言うのでしょうか。

「はい、ありがとう、N君。さて、みなさんは、このお話を読んで、どう思いましたか？感想を聞かせてください」

その直後です。先生は教壇から降り、机のあいだを縫うようにして、教室の空席に歩みより、机の上に据えられたテープレコーダーのスイッチを、カチッと押したのです。

手を挙げる児童はいません。やはり、テープレコーダーと、自分たちの背後に立ち並ぶ大人たちの存在が、いつもの打ち解けた気分になるのを妨げています。そのうち、ためらいがちにぼつぼつと手が挙がり、意見の発表が行われました。めでたし、めでたし。これで、先生の顔も立った。そんな感じで時間が過ぎて行こうとしていました。

ある児童が手を挙げました。普段はわりと無口な生徒です。いたずらも、よくします。通知表の「落ち着きがない」という項目には、一年生の時から決まってチェックマークがついていた子でした。

「Kさんたちは、ずるいと思います。同じ会社の人たちが一生懸命に働いているあいだに、監督さんと練習ばかりしてお給料をもらっているのは、おかしいと思います。オリンピックは、アマチュアの祭典だって、教科書にも書いてあります。練習は、ほかの人たちと一緒に仕事をやったあとからしたほうが良いと思います。プロ野球の選手たちとは違います。だから、この話は変だと思いました」

もちろん、その子の話したことを忠実に再現したわけではありません。ただ、その発言の趣旨からは、ずれていないと思います。発言に出てきた「Kさん」というのは、優勝チームのキャプテンの苗字です。監督の名前とともに、国民的英雄として、そのころは全国的に知られた人でした。昔の話です。今のようにオリンピックにプロが登場するなんて、考えられなかった時代の話です。

教室が、ざわめき始めました。話し声が聞こえてきます。話しているのは、児童たちではなく、教室の後ろでひしめき合っている大人たちでした。その日の授業は、他校の教師たちが授業参観をする――何と呼ぶのでしょうか――研修会の一部だったのかもかもしれません。

後ろから、こそこそ話し声がするけど、何だろう？ 後ろに近い席にいた、さきほどの発言をし終えたばかりの子は、そんなふうに思ったようでした。顔を窓のほうに向ける振りをして、大人たちの様子をうかがいました。その子の顔に、驚きの表情が浮かびました。大人たちがしきりに頷いているのです。笑みを浮かべている人もいます。険悪な雰囲気でないことは、直感的にわかったみたいでした。

その子は、少し心配だったようです。放課後に、担任の先生から叱られるのを、ある程度覚悟していたと思われます。小学六年生だと、それくらいの見当はつきます。やっぱり、ちょっとまずいことを言ったのかな？――。授業が終わるまで、その子はずっとうつむいていました。

授業後も、その翌日も、先生はその子を叱りませんでした。当時は、そうした発言を許す教師たちが、多かったのかもしれない。現在の風潮を思うと、ちょっと考えられ

ないような話だという気がします。そういう時代だったのでしょか。教職員の組合が強い時期だったのでしょか。

そういえば、こんなこともありました。

確か、自分が小学三、四年生のころです。学校で、学年別に映画鑑賞に出かけた日のことです。映画は、ディズニー製作のアニメーションでした。午前中に映画を見終わり、児童たちは学校にもどりました。給食の時間が過ぎ、午後からは映画の感想をクラス内で話し合う特別授業になりました。

いい映画だった。いろいろな動物たちが出てきて楽しかった。出てきたうちでは、お母さんライオンがいちばん好きだ。絵がきれいだった。動きが自然で感心した。意地悪な人間が出てきたのが嫌だった。なかには悪い動物もいたけど、やさしい動物がたくさんいて感動した。あんな世界で暮らしてみたい。

クラスの児童たちの口からは、だいたい以上のような感想が出ました。ある子が挙手もせず着席したまま、こんなことを話し始めました。

「動物なんて一匹も出なかった。全部、人間みたいだった。だって――」

教師は、その子の発言をさえぎりました。その子は担任のその男性教師から、頬や腕をつねられたり、閉じた教科書の背で頭を叩かれたことが、数えきれないほどあったみたいです。担任の教師からは、嫌われていましたが、その子がほかの子たちからいじめを受けることはありませんでした。普段はあまりしゃべらないけど、いたずらはよくする。ときどき突拍子もないことをポツリとつぶやき、みんなを笑わせる。そんな子でした。

男性教師から発言をさえぎられた子と、さきほどテープレコーダーの作動する部屋で発言をした子は、同じ子です。発言をさえぎった教師は男性、話し終えるまで発言をさせた教師は女性で、別人です。現在では、もう大人になったその子は、五年生になって出会い、二年間担任だったその女の先生に、今も年賀状を出しているそうです。先生からは、返事という形で一月五日前後に年賀状が来るのに、今年は来なかったといいます。そのことが、気にかかってならないようです。

話は変わりますが、自分の人生を集約的に表している一枚の写真を選べと言われたら、「これです」という具合に、他人に見せられるものがありますか？

自分は、今、二枚の写真を机の上に置いています。久しぶりに見る写真です。さきほどからお話している子が映っています。これこそ、その子の人生の縮図だと言っても言い過ぎではない写真です。保育園児だったころの、その子の全身が映し出されています。

白黒です。おぼろげながら、その時の状況を覚えています。そうです。その子とは幼なじみなのです。

その日は、保育園の発表会でした。二枚のうち一枚の写真には、舞台の上に、八人の園児が前後二列になって並んでいる様子が映っています。互い違い、つまり上から見ればジグザグに整列しているために、観客席から見ると八人の姿が重ならないように配置されています。その子は、前列の右から二番目にいます。

子どもたちは、頭に紙製の帯を巻き、その帯の正面には花形だの星形だの丸形だのといった大き目の、これまた紙で出来た模様をつけています。その子は白っぽく映っている丸形の模様を額つけています。

もう一枚の写真も、同じアングルから同じ子どもたちを撮ったものです。同一人物が撮った写真でしょう。こちらの写真には、両手を上げ、両足を交互に上げ下げしてお遊戯をしている子どもたちの様子が映っています。その子も踊っていますが、どこかぎこちない感じがします。ほかの子たちに比べて動きが小さいのです。自分がやっていることに納得していない様子がかがわれる。そんな感想を述べれば、それは考えすぎだと言われるかもしれません。

先に紹介した、園児が整列している写真に話をもどします。ほかの七人がちゃんと気をつけの姿勢をしているのに、一人だけが足を開いています。それが、その子です。舞台の上のほかの子どもたちは、口をしっかりと閉じて、指をそろえて伸ばした両手をぴったり腿につけています。その子だけが、口を半分ほど空けています。両手もわずかに曲げています。

正面から見て前列の右にいる、つまりその子から見て左隣にいた別の子が、足を広げたその子のほうに顔を向けて、心配そうな目つきで見ているのが、おかしさをかもし出しています。舞台の上と観客席の両方に、緊張感が漂っていたのは確かです。

そのとき、誰かが、たぶん先生、つまり保育さんたちだったと思いますが、しきりにその子に注意をしていたような記憶があります。

「Jちゃん、気をつけ、気をつけをして――」

観客席にいたその子の親が、目を伏せるか、両手で顔を被っていたような記憶もありますが、昔のことなのでよくは覚えていません。大人の目でこの写真を見ているせいで、今の気持ちから勝手にそうした記憶を作り出しているのかもしれません。

そんな子どもでした。推して知るべし、いわゆる問題児だったようです。今は、変人でしょうか。周りからはそう思われているにちがいません。それはもう、毎日ひしひしと感じています。でも、とても涙もろい人です。根はいい人だと信じているので、別れずにいます。長い付き合いをさせていただいております。

◆捨てられた名前たち

捨てられた名前たち

押入れに古い道具箱があった。大きさと形は蜜柑箱くらいで、広いほうの側面を下にして立てたような格好をしていた。引き出しが三、四本あり、最上段は蝶番付きの蓋で開け閉めができる独立した箱になっていた。

母と父は洋服の仕立てや修理をして生計を立てていたらしい。洋裁だったのか和裁だったのか、その両方だったのかについては、知らない。面と向かって尋ねたことがないからだ。老いた母が生きているうちに、詳しいことを聞いておけばいいのかもしれないが、その気はない。

どうしても父の話をしなければならなくなる。父については触れたくない。私は母と話すのが苦手で、めったに口を利かない。父がどんな人だったのか、母と父が短い結婚生活をどんなふうに通っていたのか。そうしたことは知りたくない。確か、父の写真が一枚どこかにしまっているはずだが、探そうとも思わない。一度、母が見せてくれたことがあるが、その時の記憶は曖昧である。

写真を差し出されたとき、母の目の前で父の顔を見るのをためらったことは覚えている。母に悪いような気がする一方で、父に興味がある自分を母に知られたいという思いもあったような気がする。今も、その気持ちを引きずっているのかもしれない。

道具箱の引き出しを上から順に開いてみた。ほとんど空と言ってもいい状態だった。少しだけ糸が残っている糸巻きが一個、短くなった鉛筆が一本、布切れが数枚。

手帳が一冊入っていたのには驚いた。私の手のひらにすっぽり収まるほどの小型の手帳である。引き出しにしまわれていたせいか、紙があせていない。

その手帳を数年ぶりに開いてみた。なぜか気になって、古いものを収めているファイルボックスから取り出したのである。

表紙の裏に、母の名前が母の実家の住所と共に記されている。道具箱は処分したため、もうない。箱に未練はなかった。この手帳だけは、残しておいた。私の名前が書かれているからだ。正確に言うと、私が生まれる前に、考えられていた私の名前の案である。私につけられるはずだった名前が、何ページにもわたって三十くらい記されている。

実は、私はこの手帳が、父のものだと思い込んでいた。さきほど母の名前が書かれているのを目にしながら、道具箱から手帳を発見した時にも、それを見た覚えがあるのをぼんやりと思い出した。それなのに、父のものだと決めつけていたのはどういうことなのだろう。母と父のことを思うたびに、私の心は鉛のように灰色を帯び重くなるらしい。判断力や思考力が働かなくなるのだ。

小学校の低学年だった頃だと思うが、母がある名前を口にし、父がその名を私につけるつもりだったと言ったことがある。その記憶が強く残っていたために、約三十もの名前の案と父とを無意識に結びつけたのかもしれない。母の持ち物である証拠を無視して、自分の思いつきに都合のいいように解釈していたとも考えられる。

私には、そうしたいい加減なところがある。思いつきをただちに行動に移す。思い込みらしいと意識していても真偽を正さない。矛盾を矛盾のまま受け入れる。事実を直視しない――。

道具箱から見つけた手帳についても、その持ち主について知るための、いろいろな手掛かりになりそうな記述を無視していた。自分の名前の候補だけに頭が行き、母が一度だけ話してくれたエピソードと結びつけ、父が考えていた私の名前の一覧だと決めつけていたようだ。

旧姓、つまり父の苗字に続けて書かれている名もあれば、苗字なしのものもある。男の名がほぼ三分の二、女名は三分の一の割合だ。父の名から漢字を一字とったものもいくつもある。私の名前と一字同じものもある。

母の名から取られた名が見当たらない。不思議だった。気になったので丹念に探してみたが、やはり無い。古風だとかいう理由で、母が自分の名前を嫌いだと言っていたことを思い出した。手帳は母のものにちがいないと、ここで確信した。

名前を書き付けていたとき母は妊娠していたのだと、今になって気づいた。自分の迂闊さにあきれる。手帳の裏に、母の実家の住所が記されていることから、母のものであることははっきりしている。曖昧にしていた事実を意識し、ようやく認めたということか。もう一つ改めて意識したのは、住所に添えられた氏名に母の旧姓が用いられていることだ。どういう意味なのか。

結婚する前の母がもともと持っていた手帳を、結婚後も使っていた。あるいは、結婚

後、母は父と別れるつもりでいて、あえて旧姓を表紙の裏に記した。その二通りの解釈ができそうだ。前者だという気がする。いや、前者と考えるほうが理屈に合っている。

手帳には、洋服の仕立て関係のメモが書かれている。取引先の業者や顧客の名と住所や電話番号。注文を受けた作業の工賃と思われる金額、入金や出金を示すと思われる数字。そして計算の式。

名前を除いた、手帳にある文字や数字は、いつ頃書かれたのだろう。結婚前か、結婚後か。未婚時代の母が、父と同じ洋裁関係の技術を身につけていたという話は聞いた覚えがない。実家が靴屋で、経理面の仕事を任されていたらしいことは聞いた。靴の取り引きに関するメモは見当たらない。

妊娠しているから里帰りをしていたのかという考えも浮かぶが、かつて母の漏らした言葉の断片をつなぎ合わせると、そうでもないようだ。母が結婚した当時は、実家の商売は行き詰っていて、ほとんど廃業状態だったと聞いた覚えがある。戦争ですべてが変わった。そんな話だった。

手帳の表紙の裏にあった実家の住所にこだわりすぎているようだ。母は父と暮らしながら、結婚以前から持っていた手帳を使っていた、とみるほうが妥当な気がする。

前のページの文字を丹念に追ってみると、クリーム、パンプス、帽子、ヒールという言葉があった。やはり私は、この手帳を見ているようで見ていなかった。読んでいるようで読んでいなかった。自分に都合のいいところしか見ていなかった。

数年ぶりにこの手帳を開くまで、あの数々の名前は父が書いたものだと思っていた。顔も知らない父と、自分をつなぐ数少ない物の一つとして手帳を保存し、ファイルボックスから取り出すことはなくても、ときおりその存在を思い出していた。

ここまで考えて、手帳が母のものだったことが、明らかになった。今の母の文字とは趣がずいぶん違うが、文字も母の書いたものにちがいない。母が生きている今なら、聞けば確かめられることなのに、そこまでする気持ちはない。父の話は、母と私とのあいだでは封印されている。

協議離婚が成立し、母と私が父の姓から母の旧姓に変わったのは、私が五歳の時だった。事業に失敗し、借金をつくった父は妻子を置き去りにし、隣県のN市に逃れていた。母と私は母子寮にいた。熱心な寮母が、父の居所をつきとめ、離婚の手續に必要な書類に印鑑を押させて郵送させた。父は私の親権を放棄し母に渡すことを、最初は拒んだという。そんな経緯を母から聞いた覚えがある。

どうして名前が変わったか、と誰かに聞かれたら、「きょうぎりこん」をしたからだど

言いなさい——。ある日、そのように母から言われた。実際、そんな質問をする人が何人かいた。幼い私は「きょうぎりこん」という音だけで知っている言葉を口にするたびに、大人たちが「へーえ」とか「ほーお」とか感心したような反応を示すのがおもしろく、尋ねもしない人に向かって「きょうぎりこん」と言って楽しんでた。

小学校に上がる年、母から自分の氏名を書く練習をさせられた。正式に字を書くのは初めての経験だったと思う。ひらがなと漢字の両方を何度も書かされたような気がする。母の真剣な表情が怖くて、緊張した。緊張するために、うまく書けない。書いてもすぐ忘れた。そんな記憶がある。

入学式が近づいたある日、母が名札に毛筆で名前を書いてくれた。その時、緊張した面差しで筆を運んでいた母の様子をぼんやりと覚えている。硯で墨をするさいの涼しげな匂いが、かすかに鼻を突いて心地よかった。

新聞紙か折り込み広告で何度か下書きをした母が、ようやく清書し、私の左胸に安全ピンで名札をつけてくれた。私は喜んで鏡の前に行った。

私は声を上げた。奇妙な虫が名札にへばりついてた。真っ黒でくねくねした虫だった。私の様子を見た母が笑った。鏡に映った物が左右に見えることを、私は知らなかったのである。形が意味を表している文字を鏡像として見て、初めて鏡の性質に気づいたらしい。

あの時の驚きに匹敵する精神的な衝撃を他に思いつくことはできない。あれほど奇怪なものを見たという経験も、すぐには頭に浮かばない。

今、私は母の手帳に書かれた名前の羅列をながめている。同じ姓を冠して並んでいる名前たち。男名。女名。苗字なしで列をなしている名前たち。男名。女名。

女性の名にはひらがなだけのものもある。「——子」という具合に、ひらがなの下に漢字が添えられている名もある。男名は漢字のものばかりだ。私の名と漢字で一字違いの名がある。

結局は、捨てられた名前たちだが、みんなどこかで生きている気がする。

◆爪を切る

爪を切る

今、私はそわそわしている。ある日が近づいているからだ。

私は2008年用の手帳をメモ帳代わりに使っている。最初のほうのページに、2008年つまり去年と2009年の年間カレンダーが見開きで載っている。カレンダーには、黒と青と赤のボールペンで色分けした、●や○や／やチェックマークが施されている日が各月にいくつかある。

髪をカットした日。医院に行った日。病院に行った日。補聴器の電池を交換した日。補聴器の調整をしてもらいにいった日。自室の掃除をした日。母の寝室を掃除した日。銀行で預金を下ろした日。そういった日に印がついているのだ。その中に、赤で○をした日がある。母の足の爪を切った日だ。

母は足が悪い。腰も悪い。内臓もよくない。母の介護は、わけあって同居している人と私の2人が役割を分担して行っている。母は10年ほど前から、正座ができない状態になっている。歩行の際には、手すりを使うか、誰が手を握って一緒に歩いてやる必要がある。

家では付き添いながらなるべく歩くようにさせている。スーパーでは手押し式のカートを使わせて、足を動かす訓練の代用もしている。ショッピングセンターや公共の施設などでは事故を避けるために、そうした場所に備えてある車椅子を利用させ絶対に歩かせない。転倒が何よりも怖いからだ。

あの年で転倒し骨折をすれば、手術は無理だ。やむなく寝たきり状態になるだろう。同時に、認知症が急速に進行するにちがいない。そのような事態だけは、絶対に避けたい。

母は生後間もなく小児麻痺にかかったらしい。医師の措置が功を奏したのか、奇跡的に歩けるようになった。だが、片足を軽く引くという後遺症と付き合っていかなければならない身になった。もっと重い後遺症をかかえている人たちがたくさんいるのだから、自分は本当に運がよかった。母は、よくそう言う。

私は母子家庭で育った。幼かったころには、どこかへ出掛けるごとに母の自転車の荷台にしがみ付いていた。ある時、母の自転車の乗り方、正確に言えば最初に勢いをつけて自転車のサドルにまたがるまでの様子がほかの人たちと少し違っているのに気が付いたことを覚えている。

片足が曲がらないのだ。その悪いほうの足をかばうために、アンバランスな乗り方を余儀なくされていたのだった。あれっ、変だな。そう思ったが、口には出さなかった。

今、私は手帳のカレンダーを見ている。右ページの下にある11月19日を示す「19」という数字が、赤いボールペンで丸く囲まれている。つまり、12月19日前後に母の足の爪を切らなければならないということになる。カレンダーを見ると、12月19日は今週の土曜日だ。

誕生日。

母が私を産んでくれた日――。

私の気分は落ち着かない。はっきり言えば、嫌な気持ちだ。

現在、母は椅子には座れても、床に腰を下ろした際には正座ができないために、両足を投げ出す格好になる。膝が思うように曲がらないので、足に手が届かない。当然のことながら、自分で自分の足の爪を切るのは無理だ。

母の足の爪は、角質化してかなり厚くなっている。白癬というみずむしの一種が爪に入り込んで起こっているものらしい。飲み薬による治療法もあるそうだが、現在毎食後に5錠ほどの薬をやっとの思いで白湯と一緒に飲み込んでいる年寄りに、これ以上薬を飲ませるのも酷だ。みずむしは、別に命にかかわる病気でもない。

そんなわけで、私が月に1度、2種類の爪切りとやすりを使って手入れしている。これが物理的に、そして精神的にかなりの負担になる。

まず、腰が悪い私にとって、相当無理な姿勢を取らなければならなくなる。この時期には、母の足を冷やさないように、部屋を暖めなければならない。母の足は小児麻痺の後遺症で爪が一本一本いびつな形をしているために、角質化した部分を丁寧に削り切り磨くとなると1時間近くを要する作業になる。

私は母と対面したり、一緒にいるのが苦手だ。沈黙の1時間がしんどくてたまらない。しかも、足の爪を切るたびに、なぜか、いつも同じ重苦しい記憶がよみがえってくる。断

片的なお決まりの記憶が、次々と頭の中を駆けめぐるのだ。それだけで、精神的に参ってしまう。

そんなわけで、カレンダーを見てその日を意識するようになると、居ても立っても居られない気持ちに襲われる。早く済ませてしまおうと思い、予定日の数日前にやってしまうこともある。嫌だなと思いながら、予定日を過ぎてしまうこともある。頓服で飲むように指示されている精神安定剤を服用するという手もあるが、薬に弱い私の場合には、眠気のために手元がくるう可能性があり危険だ。

こんなことで悩んでいる気持ちは、ほかの人にはなかなか理解してもらえないと思う。悩みを打ち明けても、この親不孝者め、と叱りつけられるのが落ちだ。

いつも昼食後の比較的元気な時に、えいっと気合を入れてやるのだが、きょうはぐずぐずしているうちに時機を失してしまった。

ああ、嫌だな。

今日をつむれば、一瞬のうちに1週間ほどの時が過ぎ去っている――。年甲斐もなく、そんな荒唐無稽な空想を、さきほどから何度も心に描いている。

◆交信欲=口唇欲

交信欲＝口唇欲

突然ですが、「交信欲（こうしんよく）＝口唇欲（こうしんよく）」について、書きたいと思います。哲学したいと思います。先週の記事で、紹介した言葉です。いえ、別に、難しいことではありません。簡単に言えば、

「他の人と、つながりたーい」「他の人と、言葉をかわしたーい」「他の人と、文字をかわしたーい」「他の人と、映像をかわしたーい」「他の人と、心をかわしたーい」……

という、ヒトのごく自然な欲求です。つまり、「おしっこがしたーい」「うんちがしたーい」「ご飯が食べたーい」「あの人をぶんなぐってみたいーい」「眠りたーい」と、同じくらい「自然な」欲求です。ふざけてなんか、いませーん。念のため。現に、以上のどれが欠けても、ヒトは生きていくことができない、重要な欲求だからです。そのような大切なことについて、冗談なんか言えません（※少しだけ、「書く」かもしれませんが）。

分解して説明すると、

(1)「他の人と、○○をかわし、その行為をきっかけに、つながり」＝交信＝口唇＝つながる＝かわす＝～しあう＝相互＝まじわる＝くちびる（※唇は必ず「何か」と接する部分です。接する行為以外に目的はない、とも言えます）

(2)「たーい」＝欲＝欲求＝欲望＝願い＝煩惱＝本能＝祈り＝～やりてー＝～したいわ＝したい

ということになります。

既に、お気づきの方もいらっしゃると思いますが、きょうは、ちょっと気分を変えて「フロイト」しています。あるいは、「ジャック・ラカン」しています。フロイト、ラカンについては、グーグルなり、または、いきなりウィキペディアで、お調べになってください。

ただし、お調べにならなくても大丈夫なように、書いていくつもりです。ご安心ください。なお、「ジャック・ラカン」を検索すると、頭がぼーっとなったり痛くなる恐れがありますので、そんな心配がしたら、こりゃアカンということで、即、ご愛用のポータルサイトにでも、逃げ込むことをお勧めします。

蛇足ですが、「ユング」は、当ブログでは、出てこない予定です。これから先、ぜんぜん、出てこないとは、言いきれませんが――。ユングファンの方、すみません。「あなたに、ユングを出してほしいなんて、誰も頼んじやいねーよ」。ああ、まともや、幻聴！ ジャック・デリダ氏とマラルメ師を、きょうお招きしなかった、罰（ばち）が当たったのでしょうか？

フロイトとラカンは、エロくないと理解できません。エラくなる（＝偉くなる）必要はありませんが、エロくならないと絶対に理解できません。一方、ユングは、エロくないと（＝偉くないと）理解できません（※このあたりのオヤジギャグは、デリダ氏にちょっと助けていただきました）。

「ユング」するためには、宗教、神話、哲学などといった古今東西のいろんな知識も必要です。何しろ、集団的無意識＝普遍的無意識＝集合的無意識と呼ばれる、壮大な大風呂敷、いや、失礼、壮大な理論を繰り広げますから、自分のような怠け者にはついていきません。

また、占い、霊、スピリチュアルなどとも親和性がある、つまり、仲がお良ろしいので、お金がかかってしかたありません。自分の場合、いろいろ訳ありの身なので、先立つものがございません。ですので、お布施も、お月謝も、鑑定料も払うことができないのです。要するに、「偉く」なければユングに近づくな、という意味だと勝手に理解しております。

以上、別に喧嘩を売っているわけではありませんので、誤解なきよう、お願い申し上げます。

*

さて、さきほどの「交信欲=口唇欲」に関する分解説明の、(1)と(2)ですが、これも、おふざけだとは、思わないでくださいね。少し、エロいというか、エッチな感じがすると思われた方、正解です。ピンポンです。もう、「死語」ですか、ピンポンなんて？ じゃあ、「死後」、復活させましょうよ。好きなんです。個人的には、あのピンポンという、間の抜けた響きが――。

こうして、いつものように、時折ひとりダジャレを飛ばしながら、ジャック・デリダ氏とマラルメ師の顔を立て、お話を進めたほうがよさそうです。

なお、デリダ氏とマラルメ師のダジャレについて、ご不明の方は、当ブログのバックナンバーである「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17、「それは違うよ」2009-01-20、「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21、「なぜ、ケータイが」2009-01-22のうちの、どれか1つをお読みいただければ、幸いです。おススメは、このブログがダジャレとオヤジギャグに走る言い訳をしている、「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21です。

で、さきほどの(1)と(2)の○=○=○.....」ですが、キーワード、言い換えると、いちばん大切な言葉は、

口唇 (=こうしん・くちびる)

です。小さいころを思い出してください。やたらと、その辺にあるものを口に入れませんでしたか？ 赤ちゃんのころを思い出すと、一番いいのですが、そこまで、記憶のいい人は、まずいません。身近にいる赤ちゃんを思い浮かべてみましょう。

お口に入れて、舌でなめなめ、睡だらけにする。これ、なんです。

「他者との触れ合い」とも、言います。生まれたての赤ちゃんにとって、最初の「他者」、つまり、自分でないものは、お母さん、あるいは、お母さんの代理になる人の「お乳＝乳房＝乳首（＝哺乳瓶）」なのです。哺乳瓶を使う場合には、男性でもオーケーですね。

でも、「他者」なんて難しい言葉や概念が、赤ちゃんにわかるわけがないですから、直感的、または本能的に、「自分とは違うみたいだけど、何だか、気持ちいい、離したくない」という気持ちを抱きます。「違うみたい」という部分が、重要です。要するに、「よく分かんない」んです。言い換えると、「不明」＝「！？」。まだ、言葉なんて、しゃべれないのだから当然です。

*

ヒトは「未熟児」として生まれるって（※お気を悪くされた関係者の方、ごめんなさい）、聞いたことがありませんか？ どんなに元気な子でも、「未熟児」として生まれてくるそうです。体だけじゃなく、頭も、そうなんですって。

ええっ？ 人間様が？

という驚きを覚えませんか？

でも、他の生物の赤ちゃんを見れば、納得できると思います。犬も、猫も、ゴマフアザラシのゴマちゃんも、生まれたての時から、ヒトの赤ちゃんより、ずっとしっかりしていますよ。そりゃあ、お乳は飲みますよ。目も開いていませんよ。母乳なしでは、ほんの数時間も生きられませんよ。それなのに、生まれた直後に、お母さんに全身を舌でなめなめしてもらって（※「舌でなめなめ」は、かなり重要な点です）、お乳をもらい、少し経てば、目を開けて、その辺を動きまわります。やがて歩き回ります。

その点、馬や牛なんて、立派じゃないですか？ テレビで見たことありませんか？ 生まれて間もないのに、もう、オトナづらしてあたりを歩き、ちょっと目を離した間に、走り出す赤ちゃんまでいるんですから。大したものですよ。

それに引きかえ、人間様の赤ちゃんですけど、ちょっと、いや、相当頼りないですね。歩くまでに、どれだけかかると思います？ 子どもを持ったことがないので、よくは知りませんが、かなり遅いですよ。他の生き物と比べて、ですよ。

でも、ご心配は要りません。未熟児で生まれたと言っても、早産しただけであり（※お気を悪くされた関係者の方、ごめんなさい）、遅れながらもすくすくと育ち、いちおう他の動物たちにたちまち「追いつき追い抜く」ということになっています。めでたし、めでたし、人間様、万歳。

で、口唇（=こうしん・くちびる）ですが、この「唇」という、上下1対の赤いチュールリップ（※ tulips = two lips）が「他の人と、つながりたーい」「欲求の素（もと）」、「味の素」の素（もと）なんです。唇が上と下で計2ヶあることは、非常に重要です。これと舌（※なめなめの舌です）が、あって声帯や肺や鼻の力を借りながら、ヒトは言語を獲得したのです。ヒヒーン、モーモー、キャッキョット、たとえば「あいうえお、かきくけこ、さしす……」との、「分かれ」目です。お「分かり」いただけましたでしょうか？ このことについては、後ほど。

*

ちなみに、

唇がさみしい、

って、言う人が時々いますよね。自分自身は言わなくても、その気持ちって分かる気がしませんか？ 手元のいくつかの辞書に、「唇がさみしい」が慣用句として載っていませんでした。俗語表現っていう、失礼な言い方がありますけど、それですかね？ 自分は、「唇がさみしい」という気持ちが分かりすぎるほど、よく分かりません。煙草は吸いませんし、吐き出しもしませんが、よく分かります。愛煙家だけの特権じゃないと、思います、あの気持ち。

人肌が恋しい、

って、いうのにも、ちょっとだけ、似てませんか？ こちらのほうが、ちょっと、オトナっぽいニュアンスがありますが。とにかく、「さみしい」「こいしい」という気持ちは、体感的に分かるような気がしませんか？

自分は、この「体感的に分かる」ということが、非常に大切なことだと思っています。頭ではなく、体で分かる。これこそが、現在のヒトが忘れかかっている、ヒトとしての大切な「たしなみ」ではないかとさえ思うのです。

簡単に言うと、このところ、ヒトは「頭でっかち」になっていないだろうか？「からだ」と「こころ」のつぶやきや叫びに、耳を傾けていないのではないか？だから、「病む」＝「止む」(→「ヤムヤム」＝「yum-yum」)という、「気持ちよくない」＝「癒やされない」状態に陥っているヒトたちが多いのです。自分の場合、他人事ではないので、切実にそう思います。

ところで、「分かる」って、字をよく見てください。「分」という漢字(＝感字)が使われています。なお、「感字」については、漱石先生の「当て字」と関係がありますので、不明の方は、タイトルからして当て字を用いている「お口を空けて、あーん」2009-01-23を一読いただければ嬉しいです。もちろん、このまま読み進めていただいて、かまいません。

「分かる(＝わかる)」＝「別る」＝「解る」＝「判る」

昔、松鶴家千とせ(※「しょかくやちとせ」と読みます。一時期、ビートたけし＝北野武の先生だった人らしいです)という、お笑いの人が、

「わかるかなー、わかんねーだろうな、イエーイ」

という、シュールなギャグを流行(はや)らせたことがありました。「松鶴家千とせ」で、ウィキペディアなどで検索していただくと、どんな人なのかが「解ります」。で、自分はけっこう気に入って、昔よく真似をしていました。

あれは、なかなか「ベケットしていた」なあ、あるいは「吉田戦車していた」なあ、「ぼのぼのしていた」(※いがらしみきおさん、今、あなたはどこに?)、「マザーグースしていた」なあ、と、今になってようやく「判りました」。お「分かり」になりましたでしょうか? ここで「お別れ」なんて、嫌ですよ。もっと、交信しましょうよ、このさいですから(※何だか、乱れてきて申し訳ありません)。

たった今、言葉の「身ぶり=運動」として、真面目かつ本気で「実践=実演=プレゼン」しましたように、「分かる(=わかる)」=「別る」=「解る」=「判る」という言葉は、「多層的=多重的」な「意味構造=コアイメージ」を持っています。

こうした現象は、もとを正せば、上で述べた「交信欲=口唇欲」の結果なのです。言い換えるなら、「ヒト=狂ったサル」特有の習性であり、これなくして、「人類によるこの惑星の征服、および破壊」(=文明)は、あり得なかったのです。今の世界的大不況も、です。トホホな話ですけど、本当なんです。ガセやヨタじゃありません。

自分は、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

またもや、ブログが長くなりました。この調子ですと、もっと長くなりそうです。「わかる」について、さらに書きたいのですが、「どうにも止まらない」状態になりそうな恐れがありますので、できれば、あすにでも、この続きを文字にしたいと思っております。

ここまで辛抱して、お付き合いくださった方に、心からお礼を申し上げます。

また、間違っ、ケータイで、このブログに入ってしまった方、深くお詫び申し上げます。なにぶんにも長い記事なので(※きょうは、いつもよりも、かなり短いのですが)、ぜひ、パソコンで入り直していただければ嬉しいです。

ケータイ依存症と唇（続・交信欲＝口唇欲）

きのうの「交信欲＝口唇欲」（＝こうしんよく）の続きです。さて、

「他の人と、つながりたーい」「他の人と、言葉をかわしたーい」「他の人と、文字をかわしたーい」「他の人と、映像をかわしたーい」「他の人と、心をかわしたーい」……

でしたね、きのうは。で、

「他の人と、○○をかわしたーい」

の○○には、何が入るのでしょうか？ 上で、挙げたのは「言葉」「文字」「映像」「心」でしたが、よく見ると、メールで交わすことができるものばかりですね。スパムメールみたいに「躲す＝かわす（※攻撃から身をかわす、のかわす、です）」ことが、やっかいなものもありますが。

○○に入るものとして、その他、思いつくのは、

「愛」「抱擁」「声」「お金」「挨拶」「覚書」「契約（※契約書）」「キス」「唇」「目配せ」「視線」「信号」「視線」「杯・盃（さかずき）」「ポイント」「マイレージ」「約束」「密約」「贈り物」「意見」「笑み」「議論」「冗談」「握手」……

って、ところですけど、まだまだありそうです。読み直してみると、ダブるものも、ありますね。気にしないで進みましょう。

要するに、「交信欲＝口唇欲」（＝こうしんよく）って、「交換」ですね。「交換」って

というのは、経済学や文化人類学では、けっこう重要な概念らしいのです。ほら、「物々交換」って、学校の社会かなんかの授業で出てきたこと、あるじゃないですか。大げさに言えば、「トレード＝取引＝交易＝貿易」ですよ。あれです。そこで、よく思い出しましょう。原点に戻りましょう。「物々交換」とは、確か、貿易よりも大昔の話でしたよね。どうして「物々交換」をしたのか？ そう、

お金がなかったからです。

じゃーん。

お金がない。

なかなか切実な、問題です。現在の不況でも、お金がないのが大問題。ただ、ここで問題なのは、そういう意味とは違うんです、ちょっと、いや、かなり違う。

「お金＝貨幣＝通貨」という便利な「仕組み」がなかった

ので、物と物とを交換するしか手段がなかった。と、いう意味ですから、だいぶ違いますよね。そうすると、大昔には、

お金がなかったからです。

というよりも、

お金というものが、なかったからです。

と書くべきでした。ごめんなさい。

*

さて、

貨幣の誕生。

じゃーん！

という、鳴り物入りの、大発明があったのです。ヒトにとっては、言葉の誕生以来の、画期的な出来事です。さすが、人間様ですよ。あつたま、いいー。でも、よく考えると、ややこしいことになってきました。

Aという物の代わりに、Bという物を相手に差し出す。つまり、「物々交換」

だけでも、「ブツブツ」もめたのに、今度は、

AやBという「現物」の代わりに、石ころ、貝がら、布きれ、お米、お豆、羽、歯、刀……といった「代わりの物」を使い始めた

んです。こういうものを、「表象＝シンボル＝代用品＝代理＝お代わり」とも言います。A、Bという現物の代わりに、A、Bという代用品を用いる。変換が起きる。ちょっと、ややこしいですか？ 気にせずに、先に進みましょう。

また、ひと悶着（もんちゃく）起こりますよ、絶対に。「ブツブツ」くらいじゃ、済まない、ですよ、きっと。「お金」なんて発明したために、「おっかねー」ことに、なってしまったに違いありません。

「おい、それじゃ、不公平だ。A 5ケの代わりに、B 2ケだって～。「シェー！」笑わせるんじゃねーよ。おいおい、自分で勝手に決めて、持って行くなよ。泥棒野郎！ 変な「まねー」するんじゃねー。おまえ、その袋の中に、もっと「あるじゃん」。そいつを出せ」

【※蛇足ながらの解説：マネー＝ money は、説明は要らないですよ？ アルジャン ＝ argent は、赤塚先生の「おそ松くん」に出てきた、イヤミさんによると、フランス語で「お金」ざんす。シェー＝ cher (ére) は、やっぱりフランス語で「(値段が) 高い」という意味ざんす。「ここで、くだらないと思った人、人気プログラミングに1票ください、応援クリックをポチッと1押し」、なんて、「はした」ないことは、自分は言いませんけど。「はしたがね」ですら、欲しい身ではあります。確かに、くだらない。うん。】

とにかく、以上の「おそ松くん」を出汁（だし）にした「お粗末」なオヤジギャグから、お金＝貨幣の誕生が、大騒ぎになることは想像がつきますよね。

それが、今でも、続いているんですよ。ほら、なんとか、飢えたハアローとか、惚れックスとか、ごちゃになった会社で、ラフな格好のおねえさんや、おばさんや、おにいさんや、おじさんが、テーブルを囲んで怒鳴りあっているのを、テレビニュースで見たことがありますか？ 何をやってるのか知ったのは、恥ずかしながら、比較的最近の話なんです。経済や金融の話は、なにしろ苦手なんです。特に、数字に弱くて。

*

で、少し分かったことを言いますと、問題は、「価値」という「尺度」にあるってことらしいんです。外国為替市場、外国為替取引、FX（＝外国為替証拠金取引）とか、そういう言葉と関係あるらしい。簡単に言うと、いろんな国のお金の「価値や尺度が刻々変動する」ってことらしい。なぜかは、知らないんですけど。

「価値」「尺度」ですか？ それが「刻々変動」するんですか？ で、「相場」っていうのが、あるんですか？ ただでさえ苦手な数字が、あっちこっちにあって、規則的なのか、不規則なのか、分からないんですけど、とにかく動きまくる。超高速の、もぐら叩きみたいに、どこを叩いていいのかわからない状態。パニック、まくる。

うーん。難しすぎて、ダジャレが出ない。マラルメ師のご降臨を待つ身としては、ここでダジャレを飛ばさなければ、格好がつかない。「価値」「尺度」「変動相場」……。

「価値」にかけて、「かちかち山」じゃあ、ウサギに負けっぱなしのタヌキを相手にして

も「勝ち」目がなさそうだし、カニコー（＝「蟹工船」by 小林多喜二）に出てきそうな労働者なんかの「赤銅色（＝しゃく「どう」いろ）の肌」では、「どう」にもならないし。「変動相場（＝へんどうそうば）」に至っては、「きょうのお『弁当（＝べんとう）』はカップ焼き『そば』だ」ぐらいでは、やっぱし、「変」で「どう」しようもない。苦しいなあ――。それにしても、

お金がない（※これは独り言です）。

お金とは「縁＝円」がないので、「交換」といった、経済学のお話はやめたほうがよさそうです。でもですね、

オギャー！！

ウギャー！！

突然、失礼しました。驚かせるつもりは――実は、あったんですよ。ちょっと、ですけど。難しく考える必要はない、と気づきました。素人（＝しろと）は素人なりに、「知ろうと」努力する。これが大切だ。そう、言いたかったんです。どうということかと申しますと、「オギャー！！」「ウギャー！！」という、赤ちゃんの泣き声や、ゴマファザラシのゴマちゃんの「キューツ」（※ハウ・キュート！＝何と可愛いのであろうか！）という鳴き声は、

「（お乳なんかを）もらいたーい」とか、「（おしっこや、うんちなんかを）出したーい、または、出ちゃった、どうにかしてよー」

という、欲求の叫びである。と、気づいたのです。

「もらう」対「出す」

これって、「交換」じゃないですか！？ そうだったのかあ。もらった後は、返さなくてはならない。これって、人間にとって最低限の礼儀であり、たしなみ、ではないか？

そうか、納得。で、赤ちゃんは、何を返してくれるのか？ 何を出すの？

おしっこや、うんちだけじゃ、ありません。その笑みで、愛と、元気と、生きる勇気を、返してくれるんです。だから、親は頑張るんです。一生懸命、生きるんです。

柄にもないことを、言ってしまいました。でも、そのおかげで、ややこしそうな「交換」に「好感」を持つことができました。それにしても、

お金がない（※これは独り言です、くどいですね）。

お金とは「縁＝円」がないので（※またかよ）、やっぱり「交換」といった身の程知らずな経済のお話はやめて、「交信欲＝口唇欲」（＝こうしんよく）に、戻ります。こっちのほうがエロくて、自分の肌に合っている、たぶん。

で、誰もが、言葉を交わしたがつている。唇がさみしい。人肌が恋しい。他の人とながりたいと思っている。

だから、対面で会話する、電話やケータイで会話する、手紙を書く（※すると、返事が来る）、メールを送信する（※または、受信する）、ネットを通じて画像を送り合う。これは、素晴らしいことです。コミュニケーション、人間関係、ラポール、愛、引き寄せ、ひきつけ、かんの虫……いろいろな言葉で表現できますが、とにかく、ヒトにとって欠くことのできない、いとなみです。

*

あっつ！ 気配がします。

ここで、ある方にご登場願います。

じゃあーん。

マラルメ師です。サイコロを振る名人です。サイコロといっても、1から6しか目が出ないものではなく、魔法のサイコロ。言葉のサイコロ。サイコーです。ちなみに、サイコロはちゃんとした日本語であり、「さい（※采・賽子・骰子）」とも言います。

「さい=サイ=サイコ（ロジー）=差異=間=魔=ま」

という、ダジャレの連鎖は、マラルメ師のサイコロをつかって、先週、さんざん哲学させてもらった「さい」の総まとめです。ご興味のある方は、きのう紹介したいくつかの記事を、お読みくださいませ（※そういう方は、いらっしやらないだろうなあ）。

で、当ブログ恒例の、儀式をとりおこないます。先週と同様、アツノさん（※ご不明の方は、ウィキペディアで「泉アツノ」を検索願います）に、ご協力をお願いします。アツノさん、よろしいでしょうか？『『さい』ですか、ほな、ぼちぼちいきまひよか？』。では、まいります。きょうの、お題は「交信欲=口唇欲」（=こうしんよく）です、マラルメ先生。

えいっや！（※これ、サイコロを振っているんです）

bath。「こんなん出ましたけど〜」「ありがとう、ございます、アツノさん」

はあ？先週に引き続き、またもや英語ですか？フランスの詩人兼中学の英語教師であられた、マラルメ先生、ど、どういう、こ、ことなんでしょうか？なぜか、舌がもつれる。thの発音苦手なんです。その点、A六輔さんは日本語でも、うまくthを発音なさっている（※Aさん、ごめんなさい）。うらやましい限りです。ホエア・イズ・ザ・バスルーム・プリーズ？はばかりは、どこじゃ？

それどころじゃない、bathが出たので、考えなければ、この日記が進まない。

うーん、bathですか。「お風呂」ですよ。ね。「入浴」ですよ。ね。まさか、「ニューヨーク」なんて、手垢の付いたダジャレを、マラルメ先生がお作りになるわけではないし……。ア

ツノさん、すみませんが、もう一度いきます。

えいっや！

bath。「こんなん出ましたけど～」 「きょうは2度も、おねだりしちゃいました。かたじけない」

おお、またもや、bath ですか。「入浴」のほかに、「沐浴 (=もくよく)」という意味が、あったけど。もしかして、「モクヨク」？ それを並べかえて「ヨクモク」→「ヨックモック」なんちゃって。まさか。いくら、マラルメ先生が薄給だったとしても、このブログで「お菓子」のアフィリエイトを始めるなんて、「おかし」なことがあるはずがない。それにしても、あのお菓子、食べていないな、シェーだもんなあ。そんなアルジャンないじゃん。

bath——、何だろう？ うーむ。うーん。絶句。マラルメ師は、沈黙して、こっちを見ているだけ。

あっつ、読めた！ 読めましたよ、アツノさん。

交信「浴」=口唇「浴」 (=こうしんよく)

きっと、そうです。間違いない。きのうの日記の(1)ですよ。さっそく、コピペして引用します。

> (1) 「他の人と、〇〇をかわし、その行為をきっかけに、つながり」 =交信=口唇=つながる=かわす=～しあう=相互=まじわる=くちびる (※唇は必ず「何か」と接する部分です。接する行為以外に目的はない、とも言えます)

そう、これこれ。「交信=口唇」。「こうしん」を浴びる。シャワーのように浴びる。惜しみもなく、浴びる。浴びりまくる。やっぱし、

交信浴＝口唇浴、

だ。

そういえば、そういう人、最近、多いと聞きました。分かっちゃいるけど、やめられない。どうにも止まらない。そんな状態になって、苦しんでいる人が多いらしい。大変なんじゃないですか、ひょっとして、そういう人って、

つらいんじゃないですか？

自分なんか、うつですから、そうしたメンタルヘルス関連のことは、他人事とは思えません。

ケータイ依存症

と、いうらしいですね。依存症――。煙草依存症、パチンコ依存症、お酒依存症、薬物依存症、共依存なんていうのもありましたね、自分なんかブログ依存症でしょうか？こんなに長い記事を毎日書いているなんて――。だから、偉そうなことを言える立場には、ぜんぜんないのですが、ケータイ依存症については、ちょっと気になるというか、心配です。

唇がさみしい。人と話したい。常に誰かと、つながっていたい。

自分は、ケータイは持っていますが、事情があってほとんど利用しないのですが、唇がさみしい、という気持ちは分かるような気がします。

昔、1人暮らしをしていたころ、夜なんかに、無性に人肌恋しいというか、唇がさみしい、そんな気持ちをよく経験しました。当時は、ケータイは今ほど普及していませんでした。部屋に電話はありましたが、受話器を通してではなく、誰かと一言でいいから、直接に言葉を交わしたい、と思うことが、しょっちゅうありました。

それで、深夜のコンビニに出掛けて行って、エビセンとか、ジュースを買って、レジの人が「どうも、ありがとうございます」と自分に向かって言ってくれるのを聞いて、こっちは、「どうも」とか、ぼそっとつぶやく。でも、それだけで嬉しくなり、心が安定して、部屋に帰り、あとは爆睡、なんてことが何度もありました。

専門家ではないので、ここで、アドバイスはできませんが、ケータイ依存症でお悩みの方、グーグルで検索するなりして、正確で適切な情報を入手し、依存症からの脱出への一歩を踏み出しませんか？

最初の一步、を。

当ブログでは、心の病、言語、哲学の3本を柱に、ああでもない、こうでもない、と言葉を書きつづっています。長い文章で、しかも細かい文字の日記ばかり書いていますから、まさか、ケータイでこの日記を読んでいる方は、いらっしゃらないと思います。でも、パソコンのモニターでご覧になっている方の中に、ケータイのやりすぎで悩んでいる方がいることは、十分考えられます。あるいは、あなたのお友達の中に。

先週、「なぜ、ケータイが」2009-01-22という文章で、ケータイについて触れました。そのときには、ケータイの是非は問わない、と書いたのですが、ケータイのやりすぎは、まずいと思います。ケータイという器械を通してではなく、直接、他の人と顔を合わせて話す、実際に会ってつながりを持つ（※「出会い系」の話ではありませんよ、念のため）、そんな付き合い方を見直しませんか？

*

あっつ！

忘れていました。きょうは、「わかる」について書くって、きのう書いたことを、すっかり忘れていました。「わかる」——これって、大切な問題なのです、少なくとも自分にとっては。あすこそ、「わかる」について書いてみたいです。

この行まで読んでいただいた方、どうもありがとうございました。

オバマさんとノッチさん（続・ケータイ依存症と唇）

> 「分かる（わかる）」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」

きのうは、「わかる」について考えてみる予定だったのに、話が飛んでしまいました。ですので、きょうは、まず、一昨日の記事に書いた重要個所を、上記のようにしっかりと冒頭にコピペして、忘れないようにしておきます。

で、この「わかる」ですが、先週、哲学してみた「知覚」と深い関係がありそうです。上の○=○=○=○をじっと、見ていたら、ある言葉を思いつきました。

分別

です。「ふんべつ」とも「ぶんべつ」とも読めるところが、実に、あやしい。何か、ありそう。何だろう？ 哲学、できるだろうか？

でっきるかな、でっきるかな、○○○○○○～（※○部分は忘れました。とすっとぼける。みなさん、歌詞や曲には著作権がありますので、十分気をつけましょう）。

でしたっけ？ ここんとこ、死語と化したと思われる、ギャグを

死後復活＝死語復活

させるべく、私語をまじえず真剣に、このブログで紹介しております。「泉アツノ」さんの「こんなん出ましたけど〜」、「松鶴家千（しょかくやち）とせ」師匠の「わかるかなー、わかんねだろうな、イエーイ」、「少年アシベ」に登場するゴマフアザラシの「ゴマちゃん」の「キューツ」、「おそ松くん」に出てきたイヤミさんの「シェー」という具合ぞんす。リユースしましょう、リサイクルしましょう、エコしましょう、リフォームしましょう。

で、

きょうは、「ノッポさん」こと高見映（たかみえい）さんの「できるかな」を、ご紹介しております。懐かしいですね。もっとも、かつてのノッポさんは終始無言でしたけど。「ノッポさん」って誰？ ご不明の方は、ウィキペディアで検索いただければ、高見さんも、さぞかしお喜びになると思います。さて、分別（＝ふんべつ・ぶんべつ）を哲学することが、

できるかなあ？

何とか、できそうです。「分別（＝ふんべつ）」とは英語で「sense」じゃありませんか。マラルメ先生に鍛えられて、最近英語に凝っております。きのうみたいに、アツノさんの力を借りて、マラルメ師のサイコロを振らなくても、きょうのテーマの取っ掛かりが出てきました。できました。よかったー。

「sense」は、何と「知覚」という意味でもあるのです！ 嬉しいです。「知覚」は、先週のテーマじゃありませんか。ワラコインシデンス（＝What a coincidence!）。何たる偶然！ こうなると、「あれ」をするっきゃない。「あれ」とは、このブログのバックナンバーである「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 でやったことなのですが、別に参照いただかなくても大丈夫です。これから、いたしますので。ちょっと、面倒なんですけど、やってみます。

★ 「sense」：名詞、動詞。

(1) 感じる、つまり、「あん、あ〜ん、うっ、おっ、うっふん、びくっ、ぴくり、ピクピ

ク」って感じ。感覚、五感、知覚。本当は遠くにあるのに、「近（ちか）く」にあるって錯覚が知覚（ちかく）。第六感を含む説あり。

↓ ↑

(2) 本気かよ、正気かよ、つまり、「あんた、ここ、大丈夫？」「気は確か？」「あやうくない？」「マジか？」「マジすか？」「おい、おれの声、聞こえるか？」「自分の名前を言っ
てごらん」という感じ。また、「意識・無意識」の意識の異も含む。

↓ ↑

(3) 感じ、感触、つまり、「とにかく、〇〇って感じなのよー、わかる？」「こう、何て
言ったらいいか、〇〇って気がするんだけど、わかるか？」「この肌触りなのよ、これじゃ
なきや、いや」「これだなー！」という感じ。

↓ ↑

(4) サトリ、勘、つまり「ピンときたのよ」「わからんか？ まだまだ修行が足りんのう」
「なるほどね」「ユーレイカ（※幽霊か？ じゃないです、念のため、ただし、ちょっと似
てます、言う人によっては）」「あんた〇〇してきたわね、ピンと来た」という感じ。

↓ ↑

(5) 理解、つまり「勉強になりました」「〇〇ちゃん、きょうは、がっこうで何をおそ
わってきたのかな～？ ママに教えて」「ばっちりです、あす、数学で100点取る自信あ
ります」「キミ、この論文、なかなかよく書けているじゃないか。これでケインズは卒業
だね。はっはっはー」という感じ。

↓ ↑

(6) 分別、思慮、良識、判断力、つまり「やっつで、オトナらしいあいさつができるようになったわね、ママ、嬉しい」「市長、今年の成人式は、無事に済みましたね。おめでとうございます」「いいセンスしてるね、キミ（※これは、そのものズバリですね）」「さすが、日本経済に関する予測が的中したじゃないですか、今は大不況ですよ、先生、講演料で稼げるうちに儲けましょうよ」という感じ。要するに、無鉄砲、無軌道、乱痴気騒ぎ、でたらめ、無責任、「わかっちゃいるけど、やめられない」の反対って感じ。ただし、運にも左右されることあり。ちなみに common sense というのは「社会共通の分別」→「常識」で、この辺りに含まれます。

↓ ↑

(7) 意味、意図、つまり「(CE? 知りません。そんなことは、〇〇ちゃんには、まだ早い。さあさあ、おやつ食べて)」「何だって? そんなことは、辞書で調べなさい、パパは忙しいんだから」「紙の辞書持参って言ったでしょう? 電子辞書は、この授業では使用禁止です。で、〇〇さん、このセンテンスに出て来る sense の意味は、何ですか?」という、状況で必死に調べるものという感じ。また、「それ、どういう意味なんだ、ええ?」という意味での意味という感じ。

↓ ↑

(8) 価値、意義、つまり「ナンセンス = nonsense = ノンセンス = 無意味 = 無価値 = 無方向 = 無軌道 = わけわかんない = くだらない」などから、ネガティブな要素を除いたものという感じ。言い換えると、真面目、まとも、おもしろくないもの。要するに、赤塚不二夫、ベケット、不条理、アホ、吉田戦車、マザーグース、オヤジギャグ、ダジャレ、ギャグ、ルイス・キャロル、シュールなどと無縁なものやこと。

↓ ↑

(9) 世論、大方の意見、つまり、「た、大変です。△対▽で、ひ、否決されました、ソーリ。まことに、アイムソーリでございます」「〇〇するのに賛成が★%という調査結果が、(CE)新聞の朝刊に出るという連絡が、バン記者の□□君から内密にケータイで入りました」というシーンが好例。

↓ ↑

(10) 方向、志向、指向性、方角、(数学におけるベクトルの) 向き。自分、数学、苦手です。ここは、だいたい、こんなものでしょう。

お疲れさまでした。

で、何をやっていたのかと申しますと、「わかる」という日本語の言葉と、英語の sense という単語のコアイメージを、sense の語義を大きめの英和辞典を見ながら、日本語に訳すという作業を通じて、比較してみたのです。

けっこう、疲れますよね、こういうのを読むってことは。こんなん、書くほうも書くほうですけど。で、

わかるかなあー？

って、松鶴家千とせ師匠なら言うところですよ。こっちとしては、

わかるかなあ？

という感じで、ちょっと自信ないです。上でくださと書いたようなことは、難しいですよ。「わかんねーよ」って言いたくも、なりますよね。で (※「で」、が多すぎますよね、このブログを書いているアホの口癖なんです、ごめんなさい、これを使わないと先に進めないんです、困ったことに)、「分かった」ことは、

sense と「分かる (=わかる)」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」は、かなり、かぶる、だぶる、重複する、

ということです。要するに、上に挙げた sense という語のコアイメージ、つまり中心的

なイメージの中では、「分」「別」「解」「判」という漢字(=感字)が、やっぱり出てきたということです。ワラコインシデンス(= What a coincidence!)。何たる偶然! うれしい。

これって、チョムスキーあたりと関係あるんでしょうか? それとも、自分が苦手で敬遠しているユングあたりとも? つまり、全世界のヒトたちは心の奥でつながっているっていう、イヤーなイメージ。なぜ、こういうのが「イヤーな」なのかは、いつか書きます。きょうは、やめときます。

で、チョムスキーとの関係ですが、専門家ではないので、「勘」で言っているだけですが、関係ありそうな気がします。これは、「でまかせ」です(※「出るに任せる」ってやつです、だらしないですね)。チョムスキーと関係がありそうだという説には、たぶん大した「意味」はないでしょう。ああ、「ナンセンス= nonsense = ノンセンス」。

「わかる」について、英語の sense という単語のコアイメージを用いて見てきましたが、それだけでは心配です。いちおう、念のために、日本語でも、「わかる」のイメージを確認しておきましょう。では、いきます。

★「分かる (=わかる)」= 「別る」= 「解る」= 「判る」

「分」⇒ わける、バラバラにする、わきまえる、おのれを知る、わけて配る、デリバリー、というイメージですね。「分別(ぶんべつ)」「分解」「分離」「分裂」「野分」「分水嶺」「分析」「微分」「通分」「分類」「分家」「部分」「五分五分」「春分」「秋分」「身分」「分際」「区分」「分割」「分配」「分譲」「分担」……

「別」⇒ わかれる、バイバイ、さよなら、ちょぴりさみしい、離れる、他とは違う、ゴーイング・マイウェイ、ああ何と薄情な、わかる、というイメージですね。「別離」「死別」「別居」「送別」「餞別」「特別」「格別」「別格」「区別」「分別(ぶんべつ)」「判別」「大別」「差別」「千差万別」「識別」「鑑別」「別荘」「別個」「別記」「個別」……

「解」⇒ とく、バラバラ、わかる、帯なんかをほどく、よかったね、ゆるゆる、どろど

ろ、自由にしてやる、バイバイ、余計なものを取り除く、脱がしちゃう、説明する、謎をとく、なっとく、わかる、なるほど、やっぱり、そうだったのか、というイメージですね。「解体」「分解」「解剖」「和解」「溶解」「融解」「解放」「解禁」「解散」「解雇」「解毒」「解熱」「解消」「解除」「解決」「理解」「誤解」「難解」「不可解」「氷解」「解明」「読解」「明解」「詳解」「凶解」「解釈」「見解」「解説」「解析」「解答」……

「判」⇒わかる、ガッテン、なるほど、われる、明らかになる、白黒をつける、暴露される、さばく、けちをつける、ポンと押す、印をつける、というイメージですね。「判断」「判別」「判定」「判明」「判読」「判決」「裁判」「判事」「公判」「審判」「判例」「批判」「談判」「評判」「判子」「血判」……

漢字ばかり見ていると、目が、しょぼしょぼ、してきました。ちょっと、気分を変えましょう。

>オギャー！！

>ウギャー！！

「またかよ、きのうもやったじゃないか」(※これ、幻聴の声です)。はい、またです。

>「(お乳なんかを) もらいたーい」AND「(おしっこやうんちなんかを) 出したーい」

「やっぱし、きのうと同じじゃないの」。はい、同じです。

>「もらう」「出す」

「ネタぎれか？」いえ、別に、そういうわけでは――。

ただ、きょうは、ちょっとジャック・ラカンしてみたいのです。

赤ちゃんは、お乳や離乳食を「もらう」。そして、その代わりに、おしっこやうんちや笑み、を「返す」。で、親子ともに、ハッピーになる。これも、一種の「交換」である。

でしたよね。

きのうの話です。それに、少し付け足したいことがあるんです。ジャック・ラカンっていう人は、そうした赤ちゃんと母親（および、その代理人）との間に、「視線を交わす」という点があることに、注目したそうです。それを、「鏡」とか「鏡像」という言葉を使って説明しています。いわゆる比喻ですね。この点に関しては、自分もよく分からないところがあるので、専門家の方々のさまざまな意見を、お読みください。グーグルで「ラカン」「鏡像」をダブルでキーワードにして検索なされば、目的とする複数のサイトにたどり着けるはずですよ。

そこで、ラカンの説について、素人なりに感じることを書きます。

「未熟児」として「早産される」運命にあるヒトという種は（※お気を悪くされた関係者の方、ごめんなさい）、「分かる＝知覚する」という機能＝能力を身に付けるのに、いくつかの段階を経るらしい（※ヒトが未熟児として早産されることについて、興味を持たれた方は、このブログのバックナンバー「交信欲＝口唇欲」2009-01-26をお読み願います）。そして、その段階は、1つ超えたから「はい、卒業、おめでとう」というものではなく、階段をのぼりながらも、一段一段をのちのちまで引きずり続ける（※つまり、卒業なし）という、妙な仕組みになっているらしい。いつまでも「食べたい」が続く、後引きスナックみたいなものか？

のぼっても、のぼりきれない階段

あるいは、

人生に卒業なし

または、

ヒトは成熟や成長なんてしない。

そんな感じです。言えてる、と思います。自分のことを考えると、よく納得できます。ここで思い出した言葉があるので、ちょっと視点を変えます。

「身分け」「言＝事分け」という言葉を思い出しました。

チャーミングな用語で、自分は大好きでした。故・丸山圭三郎氏の造語です。丸山圭三郎氏がどんな人だったのか、をご紹介します。実体とか真理とかいう、狂ったサルがでっちあげたデタラメに、生真面目に義理を立てることなく、言の葉の表層で戯れた人でした。あの人は、ソシユールするだけでなく、デリダしていたなあ、ラカンしていたなあ、フロイトしていたなあ、マラルメしていたなあと、今になって思います。興味のある方は、「丸山圭三郎」「身分け」（※「見分け」ではありません）をダブルでキーワードにして、グーグルなりで検索されれば、適切なサイトにたどり着けるはずです。お勧めします。別に、面倒なら、検索しなくても、オーケーです。念のため。

で、「身分け」「言＝事分け」という便利な言葉の「イメージ」を拝借しますと、次のように、言えるのではないのでしょうか？

(1) ヒトは、言葉を使って考えることができる（※「言葉で考える」ではありません、「言葉の助けを借りて考える」という意味です、思考と言語との関係には、まだコンセンサスはないもようです）。これが「言＝事分け」です。

(2) ヒトは、体（※当然のことですが、頭も、お腹も、膀胱も、胃も、五感も、手足も、皮膚も体内にある何もかもを含みます）を使って考えることもできる。これが「身分け」です。

で、今のヒトに欠けているのは、(2)ではないかと、自分は強く感じています。ラカンの理論とこじつけて、そう思っています。言い換えると、「わかっていいはずのこと」を、誰もが「わかろう」と努力していないのではないかと、ということです。だから、体や心を病む。もちろん、自分を含めての話です。

で、さっきの「sense」と「わかる」の比較に戻ります。まとめてみましょう。

★「sense」：中心となるイメージは、「気づく＝感じる＝あ～ん」。静的。控えめ。受動的。要するに「知覚する」こと。

★「わかる」：中心となるイメージは、「とく＝ほどく＝どれどれ見せてごらん」。動的。強引。能動的。要するに「解く」。

以上を、言い換えると、「sense」はじっと堪えて、感じるのを待つ。感じたら、これまた堪えて、その「感じ」を維持しながら味わう。エロいですねー。一方、「わかる」は、帯（おび）なんかを解いて脱がす。挙句には、素っ裸にする。これも、エロいか。ベートーヴェン作「エロイカ」（＝英雄）。英雄、色＝エロを好む。だからエロイカ。ひとり納得。きょうは、勉強しちゃいました。哲学しちゃいました。

それにしても、sense＝「分別」くらいで、ワラコインシデンス（＝What a coincidence!）、何たる偶然！などと、はしゃいでいた自分が恥ずかしいです。やっぱり、「わかる」を、複数の漢字に直して確認しておいてよかった。

「sense」と「わかる」とは、似ているところもあれば、似てないところもある。

つまり、ダブるところもあれば、ダブらないところもある。ということが、わかりましたもんね。いつか、「知る」、「悟る」、「know」「understand」なんかの、コアイメージの分析を、元気がいい時に＝「消えてしまいたい指数」が低い時に、やってみたいです。

ところで、「sense」と「わかる」とは、どれくらい似ていて、どれくらい似ていない

のでしょうか？ 似たものを挙げてみます。

カレイとヒラメ、区別できますか？ タヌキとムジナは、どうですか（※自分は、区別できません）？ カレーライスとライスカレー（※後者は、死語ですか、古い言い方ですか）はどうですか？ アン・ルイスとアン・ライス（※この人たち、ご存知ですか？）は？ ブロッコリーとカリフラワー（※ちょっと、離れてきましたようで）は？ オバマさんとノッチさん。うーん。これだ、決まりました！

オバマさんとノッチさん

くらい、「sense」と「わかる」は似ているし、似ていない。かぶるし、かぶらない。

わかっていただけましたか？ やっぱし、ナンセンスですか？

で、あすは、「わかるということ」について、以前から不思議だと思っている、或る「わからないこと」について書いてみるつもりです。個人的な疑問なので、何とか自分なりに、けりをつけてみたいのです。おそらく、けりはつかない予感がしますが。何とか、やってみます。

もしかして、出来レース？（続・オバマさんとノッチさん）

「わかる」って不思議だと思いませんか？ 自分には不思議で不思議でたまりません。「わからない」も、不思議です。きょうは、「わかる」ってことは、いったい、どんな「仕組み＝からくり」なのかを、考えてみたいです。哲学してみたいです。たまにはオヤジギャグなど、バンバン飛ばしながら、うつを紛らわしたいです。

ところで当ブログ日記では、やたら、くだらないギャグを飛ばしています。くだらな

いことは、十分承知しております。と、念のため言い添えておきます。で、自分なりに、ギャグが決まった時には、自己満足ですけど、とてもとても嬉しいです。「マンモスうれP = I'm very very happy.」です。きのうも書きましたが、このところ、

死語復活キャンペーン

を、ひとりで「展開＝転回＝空回り」しております。いつ終わるやら、この回転扉は（※独り言です）。きょうは、「いただきマンモス」なんかでおなじみだった、のりピー、こと、酒井法子さんを思い出しましょう。ご不明の「ヤング（※これも死語ですか?）」がいらっしゃいましたら、「酒井法子」をウィキペディアなどで検索してください。面倒くさい方は、今書いたことは、お忘れください。

さて、「わかる」と「わからない」ということの「仕組み＝からくり」ですが、自分にとっては、昔から気になってしかたがない問題の1つです。こういうややこしいことは、科学者や、哲学者や哲学学者などに任せておけばいい、という考え方もあるでしょう。そうした意見のあることを重々承知したうえで、素人として素人らしく、あえて取り組んでみようと思存します。

で、ついでに説明しておきますが、哲学者と哲学学者とは違います。いわゆる哲学者は、「主に」自分の頭と体で考えたことを、書くなり、他の人に話したりします（※ここでは、後述のように「オリジナリティの有無」を問題にしません、文字通りに取ってください）。一方、哲学学者は、「主に」他の人の考えたことを、書くなり、他の人に話したりします。ここで、大切なのは「主に」です。「主に」は、「ほとんどの場合に」と同じくらいだと理解してください。

なぜかと申しますと、

ヒトに「独創性＝オリジナリティ」などは、備わっていない

からです。

ヒトにとって、

知識や情報は、すべて既に誰かが言ったり書いたりした言葉だ、

という意味です。

あらゆる知識や情報は、誰かの言葉の引用か、寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝
ごった煮なのです。

せいぜいできることと言えば、これまで集積された言葉と想念を、ああでもない、こ
うでもない「組みかえる」手仕事＝ブリコラージュです。最近、発想法とか、創造的思
考とかいう類の本が売られていますよね。イメージ的には、ブレインストーミングのパー
ソナル版という感じです。要するに、めちゃくちゃ、こじつけでもいいから、いろい
ろな言葉や想念を組み合わせる。言葉は下品ですが、頭の中を乱交＝オージー状態にし
てしまうことです。

節操とか、正しい正しくないとか、真面目不真面目なんて、気にしてはいけません。と
にかく、一か八かで「賭ける」のです。そのうちに「こんなんでしたけど～」と妙案が
浮かぶという、ギャンブル＝ゲームを実践すること。それが思考すること、思想するこ
と、あるいは哲学することだと思います。

その意味では、マラルメのやろうとしたことと、ちょっとダブります。マラルメにとっ
て、詩作＝思索＝試作だったのです。話が、それでした。ヒトには「独創性＝オリジナ
リティ」などは備わっていない、という話でしたね。

いや、そんなことはない。オリジナリティは存在する。特許権や著作権があるじゃな
いか。

と言う人たちもけっこういます、未だに。でも、その人たちは大変です。「オリジナリ
ティは『存在しない』』ということを否定しちゃうと、その人たちは、

「オギャー！ ウギャー！」

と産声をあげて以来、自分自身がたったひとりで生きてきたことを、証明しなければならなくなります。とりわけ、母語を真似る＝学ぶことなく、ひとりだけで習得したことを証明しなければならなくなります。また、たとえば、太陽が地球の周りを回っているのではなく、地球のほうが太陽の周りを回っていることを、自力で知ったということを証明しなければならなくなります。

頭のいい人なら、口がうまいですから、証明しちやいそうな気がします。言葉を用いれば、何とでも言える。何でもあり。言い換えるなら、黒を白と言いくるめることができる。というのが、言葉の特徴ですから、上記のことを言葉を用いて証明しても、ぜんぜん不思議はありません。だからこそ、人間様は、ここまできたのですもの。なお、特許権と著作権に関しては、究極的にはお金とハンコの問題だ、とだけ言っておきます。この点については、いつか詳しく書きたいです。気になる方は、当ブログのバックナンバー「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16 と、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 をご一読願います。

で、さっきの哲学者と哲学学者の話に戻ります。「死語復活キャンペーン」のついでに、このブログでは記事を書き始めた初回から、一種の、

「哲学を庶民の手に」キャンペーン

みたいなことを、独りでやっています。「自分の頭と体で考える」とか、「哲学がしたい」が標語なのですが、「自分の頭と体で考える」というのは、比喩でして、きのうの記事の最後のほうで書いた、

> (1) ヒトは、言葉を使って考えることができる（※「言葉で考える」ではありません、「言葉の助けを借りて考える」という意味です、思考と言語との関係には、まだコンセンサスはないもようです）。これが「言＝事分け」です。

> (2) ヒトは、体（※当然のことですが、頭も、お腹も、膀胱も、胃も、五感も、手足も、皮膚も体内にある何もかもを含みます）を使って考えることもできる。これが「身分け」です。

のうちの、(2) くらいの意味です。オリジナリティというものが存在する、という意味では、ぜんぜんありません。念のために申し添えておきます。現に、これまで、このブログで書いてきたことは、すべてが誰かの言葉の引用か、その言葉の断片の「寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮」でした。そうした作業を「手仕事＝ブリコラージュ」として、やっていたのです。「乱交＝オージー」していたんです。ヒトの書くもの、話すことで、そうでないものやことはありません。

で、さきほど書きました「哲学を庶民の手に」キャンペーンですけど、視点を変えてみましょう。現在の、政治家と呼ばれる人たちを思い浮かべてください。ついでに、現在活躍している作家と呼ばれる人たちを思い浮かべてください。できれば、その人たちの、経歴まで知っている、いいんですけど、ふつうは知りませんよね、気にしませんよね、そんなこと。で、先週書いた「お口を空けて、あーん」2009-01-23 という文章で、やや詳しく触れたことを、ここでかいつまんで説明します。

政治をやってお金を稼ぐことも、小説を書いて生計を立てることも、今では、いわゆる「偏差値」(※イヤな言葉です)の非常に高い、一部の大学出身者だけの特権ではなくなっている。つまり、エリートだけが独占する職業ではなくなっている。と、いうことを強調したいのです。昔は違いました。政治家や作家は、たいてい、いわゆる「いい大学」や「いい学校」を出た人たちがなる職業でした。もちろん、例外的な人物はいましたけど、少数でした。

国語の教科書を思い出してください。教科書に載っている文章を、読まされますよね。各文章の後ろのほうで、写真入りの作者の経歴って見かけませんでしたか？ 自分は、国語が苦手で、授業も退屈だったので、よくそういう写真の顔にヒゲをつけたり、マユを鉛筆で濃くして、

ギャハハー！

なんて、ひとりで受けて喜んでいました。そういう写真の下とか横に、その文章を書いた小説家や詩人や評論家という肩書の人たちの略歴が載っていませんでしたか？ やたら、東大とか、京大とか、早稲田大とか、慶応大とか、書いてありませんでしたか？ あれです。そのことを、言いたかったのです。お分かりいただけただしょうか？ ちなみに、今挙げた大学名が、関東に集中しているのは、日本が中央集権国家を目指したからです。なお、私立の早稲田や慶応義塾は、国立の帝国大学への抵抗勢力でしたが、昔、そうし

た私立大学に通えたのは、裕福な家の子弟であったり、またはエリートだったと考えられます。

今は、違いますよね。試しに、現在の国会議員の一覧表なんかを検索して、学歴の部分だけでも見てみると、よく分かると思います。へーえ、と思う発見があるはずです。

もちろん、上で挙げた大学出身者は、現在も中枢を占めています。ただ、全体的に偏差値がかなり低くなっていることは、確かでしょう。ここで、偏差値などという、差別的な尺度を使って、話を進めなければならないのは、とても残念で悲しいことです。でも、こうした残念な事態を論じ、ひいては現状を打破するためには、現実を直視しないわけにはまいりません。ご理解いただければ幸いです。もっとも、政治家の場合には、二世や三世問題や、お金や、コネなどが絡みますので、事は以上述べたほど単純ではありませんが。

一方、文学の業界については、本屋さんに出向いて、ずらりと並んでいる文庫コーナーで、作者の略歴を片っ端から見ると、へーえと思うことがあるに違いありません。この業界では、かつての意味での「エリート」は、マイノリティになりつつあります。

で、哲学ですけど、哲学者とか哲学学者は、まだまだ、一部のエリートの特権という感じです。キャリアと呼ばれ、天下りや渡りで有名な上級の公務員といい勝負です。今、思い出しましたが、

日本人は思想したか？

というフレーズを読んで、反発を覚えませんか？ これって高飛車で、挑発的な響きを持つ文句ではありませんか？「あんた、すべての日本人に会って確認してから、そんな質問しているの？」とか、「そんな偉そうなこと、他人に尋ねる度胸がよくあるね」とか、言い返してやりたくありません？ ならないですか？ そうですよ。ふつう、こんなこと言われても、無視しますよね？ それが、今という時代でしょう。

「日本人は思想したか？」って、実は本のタイトルなんです。自分は読んでないので、何が書いてあるのか、誰が書いたのかも知りません。ただ、昔、新聞の下のほうにある本の広告で、その文字を見かけて、今、思い出しただけです。ところで、みなさん、思想し

てますよね？ 思考していますよね？ 哲学もしていますよね？

「思想」も「思考」も「哲学」も、別に難しいことではありません。それをしないで、ご飯が食べられないことは確かです。子どもを育てられないことも、確かです。誰もが、毎日やっていることなんです。「思想」も「思考」も「哲学」も、とどのつまりは、「よく考えること」。それも、頭だけではなく体を使って考えることだ、と個人的には解釈しています。

読んでもいない本のタイトルに、いちゃもんをつけるなんて、サイテーです。反省しています。でも、あと、ちょっとだけ言わせてください。「日本人は思想したか？」の答えが、その本の中で YES か NO か、または YES AND NO かは知りませんが、日本人を総称すると取られかねないセンテンスをタイトルにした以上、「思想したか？」と、過去形ではありますが、その「日本人」の中に、このブログを書いているアホや、あなたや、自分たちの身近な人たち、あるいは自分たちの先祖が含まれていることを願っています。というか、「日本人」を総称するなら、それくらいの他者への配慮と謙虚さをもって発言するべきではないでしょうか。お高くとまるのではなく。

なんて、難癖をつけているのは、今朝の散歩で犬の糞を踏みつけたから八つ当たりしているわけではなく、「自分・自分たち＝思想界（そんなものがあるとしての話ですけど）＝思想会」的なエリートの発想のにおいがしたからです。というか、自分の頭の中にまで土足で踏みこまれて、ジュッパヒトカラゲにされるのは、ごめんだ——。そう言いたかっただけです。

さて、「思想」や「思考」や「哲学」は、人それぞれにとって違う意味を持っています。これも確かなことです。というわけで、自分はこのブログで、自分なりに「哲学」しています。かなり、気まぐれで無精で省エネで、「頑張らない」をモットーにしてネガティブにぼちぼちとやっています。ただし、本気です。正気だとは言う自信はありませんが、本気です。

何だか、遠回りしちゃいました。きょうは、

> 「わかる」ってことは、いったい、どんな「仕組み＝からくり」なのかを、考えてみたいのです。

って、冒頭に書いたのでしたね。じゃあ、ぼちぼちいきます。で、結論というか、いちばん大切だと思っていることを、先に書きます。

すべては、「わかる」ように出来ている、

のではないのでしょうか？「はあ？」と感じられる方が、たくさんいらっしゃると思いますので、説明します。ヒトは、生まれて以来、いろいろなことを学びながら、育ちますよね。「学ぶ」＝「真似る」だという話を聞いたことがありますか？ 発音からして似ています、もんね。「まなぶ＝まねる＝まねぶ」。ダジャレっぽいですが、何となく、分かるような気がしませんか？ 大昔から比較的最近まで、いろんな国々に生きていた哲学者（※哲学学者も含めて）たちだけでなく、数学者たちや物理学者たちにいたる人たちまでが、

ヒトは、忘れていることを思い出すだけだ、

分かっているのに、うっかりして、分かっていることに気づかないだけだ、

思い出したことを、悟りだとか、発見だとか、名づけて大騒ぎしているだけだ、

とか、

「自分は分かんない」ってことを知るのが、大切なことだ、

分かんないことは、分かんないんだから、言葉にできない、

ヒトには「わかる」ことの限界があるし、「わからないこと」にも限界がある、

という意味のことを、書いたり、言ったりしてきた。そして、それを他の誰かが読んだり、聞いたりして、書いたり、言ったりしてきた、らしいのです。

自分は怠け者なうえに、忘れっぽいので、詳しいことは知りません。ですので、ただ「そうらしいのです」とだけ書いておきます。もっとも、上のような意見を述べた人は、少数派だという気はします。自分自身を、無知だとか忘れっぽいなどと認める、哲学者や哲学学者は、あまりいない、と考えられるからです。何しろ、お鼻が高い方々が圧倒的に多いみたいです。

でも、もし上に書きつらねたような、哲学者や哲学学者や数学者や物理学者たちが言ったり書いたことが、「言えている＝本当らしい」としたら、笑えませんか？ 少なくとも、自分は笑っちゃいます。場合によっては、爆笑するかもしれません。だって、「やらせ」みたいなもんじゃないですか？ 本当は「わかっている」のに、または「忘れた」だけなのに、「わからない」とか「難問・難解だ」とか言って、額にしわを寄せ深刻そうに、のたまうなんて。これって、

もしかして、出来レース？

うっかり者たちの出来レース？（※「うっかり者たち」を「健忘症の人たち」と書こうとしたのですが、記憶障害は病態や症候のようなので、使用を差し控えました）

「やらせ」「出来レース」「八百長」までは言わなくても、ほんの少し忘れっぽいからだ、と言えば笑えませんが、さもないや笑っちゃいますよ、やっぱり。

要するに、「わかるということ」について、以前から不思議だと思っていたことは、

「わからない」って本当？

っていう、疑問なんです。ちょっと、ここでお断りしておきますが、今問題にしているのは「わからない」であり、「知らない」ではありません。両者はかなり似ていますが、違います。「知らない」については、いつか書きます。で、「わからない」ということですが、これは、「!？」ということですから、当然のことながら、この文章を書いている自分にも、わからない。つまり、疑問。要するに、忘れちゃっている！「えっと、えっと、何だっけ」状態なわけです。なお、笑っちゃいますよね。

ただし、この疑問については、頭と体の中を整理する必要があるので、後日、できれば、あすにでも詳しく書きたいです。マラルメさんとアツノさんに、ご登場願わなければなりません。きょうは、お二人とも、お忙しいそうです。ですので、いちおう、

ここまで書いたことのポイントを、箇条書きにしてまとめます。

(0) ヒトは、わからないことを、わかると信じているらしい(※これが、原点です)

(1) ヒトは、わかることしか、わからないらしい(※これじゃ、身も蓋もないですね、ちょっと細工をしましょう)

(2) ヒトは、わかっていることしか、わからないらしい(※少し、元気が出ませんか?)

(3) ヒトは、わかっているのに、とぼけているらしい(※何だか、悪者にされた気分になりますね、じゃあ、こんなのは、どうですか?)

(4) ヒトは、わかっていたことを、忘れていているらしい(※いくらか責任が軽くなった気がしませんか?)

(5) ヒトは、わかっていたことを、忘れそうになっているらしい(※いくぶん救われた気持ちになっていただければ幸いです)

以上です。

念のために、再度書きますが、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

またもや、だらだらとした長い文章になりました。きょうは、特に後半が読みにくかったことを、お詫び申し上げます。今のところ、自分には、あのようには書けません。できれば、あす、あの続きを書きたいです。

カジノ人間主義（続・もしかして、出来レース？）

ヒトは、分かっていることを、すっとぼけて分かっていないと言い張っているらしい。あるいは、分かっていることを、うっかりして分かっていないと勘違いしているらしい。

ということは、「うん、分かる、分かる」「そうか、分かった！」「なるほど」「おお、すっきりした」というのは、結果として一種の「やらせ」、または「出来レース」なのではないか。

以上が、きのう書いたことの要約です。

*

で、きょうは、きのうみたいに、ややしい文章にしたくないので、結論からズバツと書きます。

やっぱり、「分かる・分かっている」とは、「出来レース」、または「八百長」らしい。

です。

「なるほど、おお、すっきりした」と、言っていただけますでしょうか？

駄目ですよ。

やらせで、いいから、せめて、「分からないわけでもないけど……」くらいは、どなたかに言ってほしかったんですけど、やっぱり駄目ですね。

「畏（おそ）れ多くも、人間様の「分かる」という、いとなみを、「やらせ」だの「出来レース」だの、「八百長」だのなんて言うやつなど、無礼極まりない不届き者だ。打ち首にいたす」

あるいは、

「それを言っちゃ、おしめえだよ、このばかたれめが。ひっこめ」

といった幻聴が、難聴の耳に聞こえるんですけど。よく考えれば、確かに「出来レース」なんて言ったら、

「夢もチボーもないよ」

という状況に陥ります。ちなみに、チボーは、「キボー＝希望」が訛ったものらしいです。ロジェ・マルタン・デュ・ガール作の『チボー家の人々』という、たくさんの人たちが出てくる、とてつもなく長い小説とは関係ございません。で、これって、きょうの、

死語復活キャンペーン

なんですけど、古いですよー。自分も、うろ覚えです。気になる方だけ、「東京ぼん太」をウィキペディアで検索してください。もう、お亡くなりになった方です。うっすらとお顔とお姿を覚えております。何だが、涙が出そうです。「夢もチボーもない」って、今の経済状況そのものじゃありませんか。歴史は繰り返す。でも、東京ぼん太さんは、ど

ういう状態を指して、「夢もチボーもないね」と、おっしゃっていたのでしょうか？ 確か、高度成長時代真っ只中に活躍されていたのに。不思議だなあ。いつか「夢もチボーも」ある時に、調べてみようと思います。

*

きょうは、それどころじゃないのです。いずれにせよ、夢も希望もないような、どっちらけ（＝極度に興ざめである＝非常にしらけたさま）、のお話をしているんですよ。さっき聞こえた幻聴のように、それを言ったらおしまいだ、みたいなお話をしているのです。で、きょうもマラルメ師ならびに泉アツノさんがご多忙だということなので、マラルメ師の噂話を、ここでこっそりしてみたいと思います。で（※相変わらず「で」が多くですみません、この癖、なかなか直らない＝治らないようです、「で」ないと先に進めないんです）、

マラルメは（※いらっしやらないと、いきなり呼び捨てです）、フランスの詩人でした。当然のことながら、詩を残しています。そのマラルメの、とある詩について、とある発見があったということ、今思い出しました。記憶は定かではありません。ほぼ、次のような話だったと思います。

マラルメを扱った卒論か修士論文かで、ある学生がマラルメの詩を分析した。で、その詩のなかに、ステファヌ・マラルメの姓だか名だか忘れましたが、とにかく名が織り込まれていたというお話です。

ソウ・ホワット？（英）エ・アロール？（仏）ナ・ウント？（独）で、それがどうした？（日）

という、感じですよ。普通の反応は――。でも、いちおう、これって大発見だったわけですよ。遠く離れた東洋の端っこ（※ファー・イースト＝極東＝何という、侮蔑的な表現！）に位置する島に住む一学生が、「難解＝わけ分かんない＝これ『なんかい』のう？」で、本国フランスの人たちでさえ読みもしない、マラルメの詩を「解読」した？ アンクルワヤブル＝アンビリバボ＝信じられない！ と、おフランスでも、一部の方々がお騒ぎになったとか、ならなかったとか、いうお話ざんす。

要するに、マラルメさんも、自作の詩に署名を忍ばせるなんて、おちゃめで粋なことをやっていたのね。というだけの、お話ざんす。

*

ちょっと話をずらします。定型詩って、お聞きになったこと、ありませんか？ 難しいことじゃありません。ほら、「5・7・5 プラス季語」の俳句という、定型詩。「5・7・5・7・7の三十一文字（=みそひともじ=アラサー）」の短歌という、定型詩。この国にも、昔からありますよね。苦勞して音節の数を合わせて、「できたー！」なんて言って喜ぶ。あれ、です。

ただ、フランスや、他のヨーロッパの国々の定型詩の場合には、「韻を踏む」とか、「音節の数を合わせる」とか、ちょっとややこしいんです。自分も大学時代に、英語やフランス語の詩を、授業で読まされたり、暗唱させられたりしました。慣れると、母語でないにもかかわらず、それなりに「口に出して読んでみると、心地よいなあ」という気分の一端に触れることができます。「韻を踏む」は、漢詩にもあるんですけど、覚えていらっしゃるいませんか？ 個人的には、ちんぷんかんぷんでした。このダジャレって、漢語＝中国語と関係あるらしいのですが、漢文で苦勞した自分には、そのダジャレの「わけ分かんない」イメージが分かるような気がします。

ここまで話したのですから、思い切って「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」っていう、ヨーロッパの定型詩の「一端＝ちょっとだけよー」（※あっ、加藤茶のギャグだ！）——。突然ですが、

死語復活キャンペーン

に入らせていただきます。

「ちょっとだけよ～。アンタもすきねえ」

を覚えている方、いらっしゃるいませんか？ お若い方だと、ご存じないかもしれません。

*

さて、さきほどの続きです。

>ヨーロッパの定型詩の一端

に、触れてみませんか？ えっ？「触れるなんて、あんたも好きね」ですか？ この幻聴は聞かなかったことにします。で、「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」ですが、自分は専門家ではないので、自分なりにリフォームして説明いたします。ただイメージだけ（※ちょっとだけ）、感じ取っていただければ、それでけっこうです。例を挙げて、やってみますね。では、いきます。

(例1)

セブン (3)

イレブン (4)

イイキブン (5)

(例2)

スカット (3 or 4)

サワヤカ (ka) (4)

コカ (ka) (2)

コオラ (ra) (2 or 3)

上の2つの例を見て、なんとなく、分かるような気がしませんか？ どれも、

語呂がいい。覚えやすい。

ですね。

この記憶しやすいということが、ポイントです。そもそも、

暗唱しやすいように、「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」という定型が作られた

という話です。詩はもとは口承文学（※口づてに語り継がれ歌い継がれてきた神話や昔話や詩歌）だったようですから、その名残でしょうか？ で、(例1)の「ブン」「ブン」「ブン」っていうのは、完璧に「韻を踏んで」います。(3)(4)(5)は、音節の数です。(例2)の場合には、(ka)(ka)(ra)と、(a)が共通していますね。こういうのも、あります。「韻を踏んで」います。

ちゃんとした定型詩の場合には、たとえば、「ブン」「ブン」「パラ」「パラ」「ブン」「ブン」とか、「ブン」「パラ」「ブン」「パラ」「ブン」「パラ」みたいに、きれいに並びます。すごいですね。ダジャレと同じくらい、作るのが大変そうですね。ダジャレと「韻を踏む」は、基本的に同じ作業だと勝手に理解しております。

ただし、(例1)(例2)ともに、音節の数は不ぞろいです。ちゃんとした定型詩では、音節の数をそろえなければ、ならないんですよ。上の例のような短い詩がヨーロッパにはあるわけないみたいですから、音節の数は、10とか20くらいはざらにあったと記憶しておりますが、正確なことは、すっかり忘れちゃいました。いずれにしても、

オヤジギャグと同じく、それなりの苦勞がありそう

です。ご苦勞さまって感じます。

*

以上、すごく大ざっぱに「韻」と「音節の数」をそろえるということを、説明しました。専門家からは、「この、でたらめやろうが！」と罵倒されそうです。ここでは、イメージ

だけさえ、何となくつかめばいいのですから、悪態をつかれても知らん顔しておきます。

でも、不思議に思いませんか？ どうして、上で書いたみたいに、「韻」と「音節の数」をそろえるのに、血道をあげたり、中には命をかける人もいるんでしょう？ 理由は2つくらい、ありそうです。

1つは、さきほど述べたように、口調をよくして記憶しやすくする、ためです。起源が、口承文学ってやつだからです。確かに、「セブン、イレブン、イイキブン」なんて、語呂がよくて「いい気分」になり、しかも覚えやすいですね。それは、納得できるような気がします。

2つめの理由は、そういうダジャレ、いや、「芸=技=テクニク」が上手だと、尊敬されるそうなんです。「わざ」とらしさが、「芸」や「術」になる。ふーん、そんなもんですかね。

マラルメの話に戻ります。以上見てきたように、ヨーロッパの定型詩には、面倒くさい約束事があります。俳句や和歌（わか）を考へても、「わか」るように、偶然性=accident=アクシデントに左右されます。運にも左右されます。難しく言うと、偶然と必然の間を彷徨（ほうこう）（=うろうろさまよう）するわけです。

偶然と必然

哲学っぽいですね。「存在と無」みたいに。で、マラルメって人は、偶然性と必然性との、非常に意識的だった詩人なんです。あれほど、偶然と必然にこだわって詩作=思索=試作した人はいなかったんじゃないか、なんて思ったりもします。ウィキペディアで「マラルメ」を検索して、ざあっと目を通せば、だいだいの感じがつかめます。それだけで十分です。考へて読んじゃ、駄目です。絶対に深入りしてはなりません。深入りすると、あそこが危うくなりますよ。内緒の話ですけど。

偶然と必然っていうと難しそうに聞こえますが、簡単に言えば、

ダジャレやオヤジギャグも、偶然と必然の間で、おろおろ、うろうろしながら、作る

と言えそうです。

賭け事＝ギャンブルも、同じ

です。

ギャンブルの達人には、偶然の中に必然を読む特殊な才能がありますね。うらやましいなあ、格好いいなあ、なんて自分は思います。イ・ビョンホン主演の、ギャンブラーの生きざまをテーマにした韓国ドラマを見ての感想ですけど、この気持ち分かっていただけましたでしょうか？

ものすごく単純化して説明します。サイコロを振ったとします。2の目が続けて2回出て、その次に3の目が3回出たと仮定しましょう。2 2 3 3ですね。あるいは、最初に2の目が出て、次に3の目が出て、その次に2が出て、さらに3が出たとします。2 3 2 3ですね。すると、「にーにーさんさん」「にーさんにーさん」という2つの「おにいさん」というタイトルの短い詩ができたことになります。

馬鹿みたいな説明ですが、そんな感じです。

*

で、サイコロだと、そうした目が出る確率はかなり低いでしょう。でも、サイコロの目が語の数くらいたくさんあったと考えてください。韻を踏んだり、音節の数を合わせることのできる確率は、相当高いのではないのでしょうか。そう考えると、ヨーロッパでおびただしい数の定型詩が作られてきたのは、当然だという気がします。何しろ、サイコロを振った場合には、6つの目のいずれかしかでないのに比べ、

言葉＝語という「サイコロ」（※言うまでもなく比喩です）を振る

ならば、韻を踏み音節を合わせた語の連なりなど、本物のサイコロに比べれば、比較的簡単に定型詩を作ることができるはずです。

定型詩を作る行為とサイコロを振る行為の共通項＝偶然と必然とのからみ合い＝マラルメがこだわったこと――

とは、そんな感じですか。以上は、ど素人の与太話でした。

*

で、言葉が「書ける」という不思議な感じが（※よく考えると不思議じゃありませんか？ えっつ、ぜんぜん不思議じゃない？ 失礼しました）、「賭ける」（＝ギャンブルをする）に限りなく近いということに関しても、マラルメほど意識的な詩人はいなかった。何しろ、「エイヤッ」とサイコロを振る名人ですから。いきなりですが、

カジノ資本主義

って、言葉をお聞きになったこと、ありませんか？ このブログでは、「投資って何だろう？ お金って何だろう？」2009-01-12 という文章で、ちょっとだけ触れました。自分は、経済や経済学には、めちゃくちゃ弱いのですが、

カジノ資本主義というのは、資本主義がいくところまでいっちゃって、ギャンブルみたいにゲーム化しちゃった。

そんなイメージで勝手に理解しています。また、

ケインズの経済学の研究と、ケインズの株式狂いとの関係は、投資と投機（＝ばくち）との関係によく似ている。

つまり、両ペアは酷似＝激似＝ほぼ同じ、と勝手に理解しています。ですので、そうした素人の出まかせとして、この続きを読んでいただきたいのですが、よろしいでしょう

か？

*

で、思うんですけど、やっぱり資本主義って、やりすぎではないでしょうか？ 金融工学か証券化か投資か市場か相場か、何だか知りませんが、ギャンブルしてませんか？ どさくさにまぎれて小細工していませんか？ 素人を馬鹿にした玄人が、人の禪（ふんどし）で相撲をとっていませんか？ 一部の人が甘い汁を吸っていませんか？ 国同士のレベルでも国民間のレベルでも、貧富の格差が大幅に拡大してきていませんか？ でも、いったん始めちゃったし、世界中に広まってしまったし、中国までやってるし、イスラム圏もやっているし——もう、降りられない状態になっちゃっているのでは、ないでしょうか？ ヒトは、本質的に、

ギャンブル依存症

では、ないのでしょうか？

*

都合により、ここで、変調します。これから先、多少、ノイズが入りますが、気にしないで読み進んでください。

*やっぱり、出来レース、やらせ、八百長らしい。気づいているくせに、あるいは、気がついていないふりをして、または、すっかり忘れて、やらせを本当だと思いこんでいる、もしくは、思いこもうと自分をだましている。

*ある種のスポーツ（※あえて、名指ししません）や、ある種のテレビ番組（※あえて、名指ししません）と同じです。嘘、作りもの、フィクション、編集済み、情報操作されたもの、筋書きなしに見せかけて本当は筋書きがあるもの——そういうものを見て、ヒトは何とも思わなくなっている。心の底では、嘘だと分かっているけど、嘘だと思えると楽しめないから、「ただ見ている」。実質的傍観者状態。重度の思考停止状態。

*悪いと分かっている、間違っていると分かっている、正しくない分かっている、正直じゃない分かっている。とどのつまりは泥棒や搾取だと分かっている。でも、都合が悪いから、そういうことは忘れる、あるいは、忘れたふりをする、または、すっかり忘れてしまっている。

*思い出そうと努力すれば、思い出すことができる、学び直すこともできる、再発見することもできる、「分かった！」と叫ぶこともできる。そうなのに、忘れている。思い出そうとしていない。そうした気迫も努力もみられない。都合が悪いから、必要がないから、という言い訳が心の奥底にある。

*へたなことを口にしたたり、実行に移すと、他のヒトたちから、寄ってたかっていじめられたり、場合によっては、消されるから、思い出さないし、分かれようとしなないし、実際に忘れてしまっているし、分からなくなっている。

*「分かる」は「分ける」ことだから、見えたり手にしているものは断片だけ。細切れ状態。要するに、現実も事実も真実も、まだらにしか分からない。「分かる」「分からない」ということは、ふるいにかけて、選（よ）り分けること。そのふるいに、かからないものは、分からない。そういう仕組みになっている。

*ヒトは、まだら模様の世界を見ている。おそらく、そのまだら模様はヒトに共通している。だから、ある程度、話が通じる。ただし、通じ合えないこともかなり多い。ひょっとすると、相手に通じているという認識は、個人レベルの錯覚かもしれない。

*ヒトは、知覚され記号化され信号化されデジタル化された情報を、シナプスとかいう導線と回路を通して、まだらに脳で処理している。その導線も回路も、無限ではなく有限の質と量のものしか通さない。ノイズは、抑制されている。そうやって、脳の過熱による機能不全を防ぐ仕組みが存在する。それでも、ノイズは駆逐できない。除去できない。

*カジノ資本主義というものは、上に書きつづったヒトの行動とすごく似ている。激似。酷似。かなりの部分がダブっている、かぶっている、そっくりと言ってもいい。

*答えが最初から出ている、出来レース。筋書きが最初からある、やらせ。何か黒い目的があって仕組まれている、八百長。

*すべてがぴったり当てはまり、すべてが正しいとされ、すべてが分かるような仕組みができています。「分かる」は言葉、ヒトが勝手に自分を基準にして決めたもの。だから、「分かる」と「分からない」とは反意語ではなく、表裏一体。観測者の位置によって見え方が変わる、玉虫色。

*真理や実体なんて、哲学や科学の出来レース。それを支えているものが、表象という名の代理人。何でも代行屋さん。まいどありー。おおきに。儲けさせてもらっております。

*Aだと思っているものは、括弧にくくられたA、つまり「A」。それを、(括弧なしの)Aだと思いこんでいる。さもなきゃ、人間=ヒトなんて、やってられないよー。確かにね。その通りだ。それこそが真理だ。トゥルースだ。ヴェリテだ。誰も否定できない真実だ。

*だから、大丈夫。このままで、大丈夫。「仕組み」とか「からくり」なんて、ちゃちゃを入れる、ふざけたやつは、くたばってしまえ。二葉亭四迷。浮雲。そんなやつは、人間様じゃない。ひとでなしだ。

*

とにかくヒトには出来レースが多すぎやしませんか？ その原因は、Aの代わりに「Aではないもの」を代用するという、「表象の働き」にほかならない。代用品を使っているから、ぶれるし、ずれる。これ、当たり前のこと。カツラと同じ。

だから、「表象という仕組み」をかかえて生きるしかない、偶然と必然の間で「うろろうおろおろ」するしかない、こうしたヒトのギャンブラーぶりを、このブログでは、

カジノ人間主義

と呼ぶことにします。Casino-Homo-sapiensism。カジノ・ホモ・サピエンシズム。そんなことを言っている自分もヒトの子ですから、さっきから、あちこち、ぶれています。ぶれまくっております。標的は狙っているつもりなのですが、ぶれて、ずれて仕方ない。このへんで、ブレを修正し、「分かる」「分からない」に的を絞ります。

*

では、軌道修正します。

★ 知覚：とりあえず、必要のあるものしか知覚しない。都合の悪いものは知覚しない。たとえば、「見る」「聞く」という行動が、いかに選別と排除に満ちたものであるかは、誰もが日々体験している。テレビを例にとれば、すぐに分かる。画像と音声伝える全情報を、視覚と聴覚が残らず知覚していたら、そのヒト、頭＝脳が爆発してしまうでしょう。

★ 知る：ゲーデルさんの何とか定理や、ヴィトゲンシュタインさんのつづやき集を持ち出すまでもなく、ヒトの知にはリミットがある、枠がある、囲いがある。つまり、知ることが可能なことしか、知ることはできない。ひっくり返して言うなら、知ることができることだけ通す、便利な「回路＝ふるい」が存在する。それ以外のものは、通しません。でも、どういうわけか、ノイズというものが入り込む。どうやら、ヒトの「分かる」は欠陥品らしい。とはいうものの、リコールや回収してくれる存在が見当たらないため、「ま、いっか」でやるしかない。

★ 学ぶ：これは、手垢の付いたダジャレ＝語源に習えば、「まねる」ことである。赤ん坊のころから、ヒトは真似が実にうまい。真似られないことは真似ない習性が、しみこんでいる。三つ子の魂百まで。人類は、みな、きょうだい。だから、水中でエラなどつかって、「生きる＝息る」真似など、できっこないのは、先刻承知。仙石イエス。やっぱり、都合のいいこと、必要なことしか、ヒトは学びません。何しろ、ヒトは、賢くて抜け目がないのです。

以上、3ケの★が、きょうのまとめです。ただ、こういうことを書いてると、罰（ば

ち)が当たります。どういうことかという、「不毛」な状況に到達します。不毛は文字通り、毛が生えない、けなし、なさけない。実が実らない状態。みなし(※ご、とは差別語になるから、付け加えません)。かわいそうな、ハッチ。

ここまで、お読みくださり、どうもありがとうございました。感謝しています。よかったら、また、来てください。待ってます。

◆かわる

かわる (1) ~ (5)

◆かわる (1)

かわる。

こうやってひらがなでぽつりと書いてみると、漠然として、とりとめのない感じがするのは、日本語が大和言葉系の言葉と漢語系の言葉から成り立っているからだと思われます。変わる。代わる。換わる。替わる。漢字に置き換えてみると、ひらがなだけの「かわる」が、いろいろな意味やイメージを担（にな）っているさまが浮き彫りになります。辞書で「かわる」を引いて、いくつかに分かれた意味の項目と定義と、それに当てる漢字との関係を見ていると、不思議な思いに駆られます。

もともと日本語には文字がなかったという説が有力です。だから、中国語の文字である漢字を変形して、ひらがなとカタカナを作ったそうです。かつてはどう発音され、どういう活用をしていたかは知りませんが、「かわる」や「かえる」に相当する言葉が、前後関係だけを頼りにコミュニケーションの道具として使われていた時代、つまり文字のなかった時代を想像してみましょう。

そう言われても、これまた漠然として、とりとめのない感じがしますね。想像しようにも、とっかかりになるものがありません。では、発想の転換をしましょう。文字が存在しなかった昔のことなどを考えようとするから、話がややこしくなるのですよね。やめましょう。よく考えてみると、日常生活の会話でのレベルならば、「かわる」と「かえる」の使用法については、現在でも状況はそれほど変わらないのではないのでしょうか。

「ねえ、そろそろカーテンを新しいのにかえようよ」、「あっ、もうすぐ信号が赤にかわるよ」、「ほんとう？ また、あの人、仕事がか変わったの？」、「このお味噌汁、おかわりして

もいい?」、「この会社では、専務にとってかわる、これぞという人物がいないことが最大の問題だ」、「最近の〇〇ちゃん、ここに初めて来た時とくらべると、ずいぶんかわったね」、「じゃあ、そのかわりにあなたがお風呂掃除をしてね」、「かわりばんこに運転しながら、大阪まで行ったの」、「きょうは、わたしがお母さんにかわって夕ご飯をつくります」、「君のおじいちゃんって、かなりかわった人だよね」

このように、しゃべっている分には不自由はしないと思われま

ところが、以上の例文での「かわる」と「かえる」に漢字を当てようとすると、自信を持って漢字をまじえた文に変換できるものもあれば、かなり迷うものもあるのではないのでしょうか。変、代、換、替のうちのどれを当てるのか? パソコンのワープロソフトには、当然のことながら変換機能がついています。変換に迷った時に助けとなるような、簡潔な説明や例が示してあるので役立ちます。それでも、迷うことがあります。そんな時には、辞書を引きますが、それで解決することもあれば、とりあえず、最も適切と思われる漢字を当てたり、自信がないのでひらがなのままで書くこともあると思います。

漢字の読み書きのテストを除けば、いざとなったらひらがなで書けばいい。こう思うと楽ですね。これが日本語の有り難い点でもあるのです。



◆かわる (2)

「かわる」という言葉にこだわってみたいと思います。一日に一度は口にしたり書いたりしそうな言葉であり、さまざまな意味や記憶やイメージを呼び起こしてくれる言葉です。「かわる」という言葉を言い換えるとすれば、どんな言葉を思い浮かべますか? 「変わる」「代わる」「換わる」「替わる」とワープロソフトを用いて変換すると、意味が具体性を帯び、イメージが膨らんできませんか。それは

* 「かわる」がわかってくる

からです。「かわる」が「わかる」とは、言葉の遊びです。もっと遊んでみましょう。

*わかる。分かる。判る。解る。別る。

こうすると、「わかる」がわかってきませんか？「わかる」でも、できそうです。

*わかる。分ける。別ける。

さらに、「わかる」もわかることができそうです。駄洒落となるのを覚悟でもっと遊んでみます。

*わかる。沸ける。湧ける。涌ける。

わけがわからないですね。せっかくここまで来たんですから、さらにエスカレートさせてみるのもいいでしょう。

*わく。沸く。湧く。涌く。粋。惑。和久。ワク。わくわく。waku。WAKU。

突拍子もないものまで出てきて、並列されています。「かわる」が「わかる」、「わかる」が「わかる」、「わかる」が「かわる」、さらに「わかる」を「わかる」ことで「わく」がわいて、わくわくしてきた、という感じでしょうか。

駄洒落やオヤジギャクと呼ばれているものは、こういう脈絡を欠いた言葉の連なりを意識的に、あるいは無意識のうちに頭に浮かべながら、作られるのかもしれませんが。この種の作業に、わくわくする人がいます。ここにもいます。あなたは、どうですか？ くだらない？ そう思われる方のほうが、多いのではないのでしょうか。それはそれで、よくわかりますけど。

*

いずれにせよ、

*「かわる」という言葉の意味やイメージが、漢字を当てることによって「わかる」ようになる

という過程は、駄洒落のようでありながら、ある程度「言えてる」ことだと考えられます。ちょっと理屈をつけたくなりましたので、やってみます。

「かわる」という「多重的な=多層的な=多義的な=ぐちゃぐちゃした」「話し言葉=音声」、

および、

ひらがなで表記された「言葉=書き言葉=文字」、

つまり、

「とりとめのない記号=まぼろし」

が、

「わかる」という「多重的=多層的=多義的=ぐちゃぐちゃした」「話し言葉=音声」、

および、

ひらがなで表記された「言葉=書き言葉=文字」、

つまり、

「とりとめのない記号=まぼろし」

によって、

わけられる=分けられる=分類される=分別される=区別される=整理される=理解される=意識される=知覚される。

そのさいに、

大きな役割を果たすのが、漢字=感じ=感字=かつての中国語である。

簡単に言えば、

*ひらがなが漢字の助けを借りて意味がとりやすくなる

という一例です。こう書くと、つい「もしも」と考えてしまいます。もしも、日本語が歴史的経緯によりひらがなだけで表記される言語であったとしたら、日本と日本語はどうなっていたでしょう？ この疑問文の「ひらがな」を「ローマ字」に置き換えても、いいでしょう。

実際、かつて日本語をローマ字表記にしようとする運動があったと聞いた覚えがあります。また、朝鮮半島におけるハングルの使用、そして中国での表記のアルファベット化運動も、頭に浮かびます。

上述の日本語についての「もしも」について考えると、思わずうなり声が出てきて、キーボードを叩く指が止まってしまいます。あなたは、どうお感じになりますか？



◆かわる (3)

* 「わかる」というひらがなで書かれた言葉に、漢字＝感字を当てる、つまり、漢字をまじえることで意味が分類される＝区別される＝明確になる。

このように書くと、いいこと尽くめのような印象を抱きそうになりますが、果たしてそうでしょうか？

ところで、寄り道になりますが、ここで「感字」という言葉について説明をする必要を感じます。このブログでは、既に何度か用いていましたが、「感字」のように辞書に載っていない言葉遣いや言葉を使用するさいには、よくグーグルなどで“○○”というふうには括弧でくくって検索してみます。すると、想像したよりもヒット数が多くて驚くことがあります。また、ヒットしたサイトをのぞいてみて、その使われ方と自分の使い方とを比較してみるのもおもしろいです。似ている場合も、まったく違う場合もあります。

辞書に載っていない言葉遣いや言葉というのは、メディアで見聞きした新語や流行語の類であったり、メディアを通して、あるいは日常生活において誰かが口にするなり文字にした表現を見聞きし、「へえーっ、そんな言葉があるんだ」くらいの気持ちで受けとめたものです。あるいは、自分で造語したと思いついて入っているものという意味です。今、「思いついて入っている」と書いたのは、グーグルなどで検索してみると、既に誰かが造語している場合がよくあるからです。

「感字」という言葉については、初めて見聞きしたのが、いつなのかは覚えていません。手元にある複数の辞書には載っていないことは確かです。グーグルで調べた限りでは、かなり普及している言葉だと思います。個人的には、感字は夏目漱石の当て字をイメージして使っています。漱石の感字＝当て字には感心させられるものが多く、自分なんかは「漱石の感字のファン」だと言っても言いすぎではないと思っています。

さて、さきほど書いて宙吊りになったままの問いを、少し変えて繰り返します。

ひらがなだけで書かれた言葉に漢字を当てることは、便利なことでしょうか？

意味が明確になるのだから、便利というか、良いことに決まっているのではないか。勝手に、そんな返答を想像してしまいます。書き言葉であれば、ひらがなだけで書くよりも、辞書的に「正しい」とされている表記にしたがって書くことが求められる場合があることは確かです。

この文章を書いているパソコンの脇に『朝日新聞の用語の手引』という本があります。かつて仕事で文章を書いていたころには、それにしたがって表記するように指示されました。たとえば、出版関係の仕事にたずさわる人のために手本＝標準となるような表記法があることは納得できます。でも、メールや、ブログ、手紙といった私的な文書において、漢字をまじえた「正しい」表記法は便利なものと言えるでしょうか？

自分の好きなように書けばいい。

結論をいうなら、そう思います。もちろん、程度や限度はあるでしょう。ただ、コミュニケーションの道具としてなら、想定する相手に通じればいい。日記のような自分だけのものなら、自分がわかりさえすればいい。

「正しい」と「正しくない」は、そういう区別が好きな人同士や、かつての国語審議会の役割を果たしている文化審議会国語分科会が勝手にやっていたらいい（※ただし、後者では税金が使われていることを忘れてはなりません）。そう思っています。

と書いたところで、疑問が浮かびました。そもそも、言葉遣いが「正しい」とか「正しくない」とはどういうことなのでしょう？



◆かわる（４）

言葉遣いが「正しい」か「正しくない」かを、送り仮名の付け方に絞って考えてみましょう。簡単に言えば、たとえば「わかる」にどんな漢字を当て、ひらがなの配分を

どうするかです。手元にある複数の辞書と新聞社系の用字用語集を参考にして、以下にまとめてみます。

* 「わかる」 = 「分かる」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」

このように、「わかる」を表記することが「可能」であり、「標準的には」「分かる」と表記するように「なっている」ようです。「なっている」を「勧めている」と理解する人もいるでしょうし、「決められている」と受けとめる人もいるでしょうし、「強制されている」と感じる人もいるでしょう。

いずれにせよ、「分かる」と表記するのが「正しい」と考えているのに近いスタンスだと思います。みなさんの中に『「分かる」だけを使うなんて、もったいないなあ』と感じる方は、いらっしやいませんか？ 次の表みたいなものをご覧ください。

* 「分」⇒ わける、バラバラにする、わきまえる、おのれを知る、わけて配る、デリバリー、というイメージ。「分別 (=ふんべつ)」「分解」「分離」「分裂」「野分 (=のわけ)」「分水嶺」「分析」「微分」「通分」「分類」「分家」「部分」「五分五分」「春分」「秋分」「身分」「分際」「区分」「分割」「分配」「分譲」「分担」……

* 「別」⇒ わかれる、バイバイ、さよなら、ちょっぴりさみしい、離れる、他とは違う、ゴーイング・マイウェイ、ああ何と薄情な、わかる、というイメージ。「別離」「死別」「別居」「送別」「餞別」「特別」「格別」「別格」「区別」「分別 (=ぶんべつ)」「判別」「大別」「差別」「千差万別」「識別」「鑑別」「別荘」「別個」「別記」「個別」……

* 「解」⇒ とく、バラバラ、わかる、帯なんかをほどく、よかったね、ゆるゆる、自由にしてやる、バイバイ、余計なものを取り除く、脱がしちゃう、説明する、謎をとく、なっとく、わかる、どれどれ見せてごらん、なるほど、やっぱり、そうだったのか、というイメージ。「解体」「分解」「解剖」「和解」「溶解」「融解」「解放」「解禁」「解散」「解雇」「解毒」「解熱」「解消」「解除」「解決」「理解」「誤解」「難解」「不可解」「氷解」「解明」「読解」「明解」「詳解」「図解」「解釈」「見解」「解説」「解析」「解答」……

*「判」⇒わかる、ガッテン、なるほど、われる、明らかになる、白黒をつける、暴露される、さばく、けちをつける、ポンと押す、印をつける、というイメージ。「判断」「判別」「判定」「判明」「判読」「判決」「裁判」「判事」「公判」「審判」「判例」「批判」「談判」「評判」「判子」「血判」……

以上は、複数の漢和辞典などをもとにして、「わかる」に当てはめることが「可能な」各漢字のイメージを調べて分類してみたものです。何ぶんにも素人のやっつけ仕事であることを、ご承知おき願います。また、こうした分類は漢和辞典によっても、微妙に異なることも付け加えておきます。「とりあえず」、こんなふうにも「わけられる」、あるいは、このブログを書いている者の「感想」くらいに受け止めてください。

「いやに、ごちゃごちゃしているなあ。すっきりいこうよ。『わかる』は『分かる』でわかるじゃないの。これで決まり」

といったふうにお「感じ」になりましたか？ それとも、

「これで『わかる』の意味が整理できたような気がするけど、『分かる』だけじゃなくて、場合によっては『別る』や『解る』や『判る』もあっていいかな」

とお思いになりましたか？ 個人的には、「わかる」に当てる漢字として「分」だけを採用して、「別」「解」「判」を捨てるなんて「もったいないなあ」という気持ちが強いです。あなたは、どうお「感じ」になりますか？



◆かわる (5)

いつの間にか、

「かわる」の話が「わかる」の話

になってしまいました。

「かわる」から「わかる」にテーマが変わり、

「かわる」に代わって「わかる」が登場し、

「かわる」の話が「わかる」にすり替わった

ということです。とはいえ、というよりも、したがって、一貫して「かわる」について書いているつもりなのですが、分かっていただけますでしょうか？

というわけで（※どういうわけなのでしょう？）、「かわる・かえる」という言葉について、「わかる・わかる」と同様の表みたいなものを作りたいと思います。そうすれば（※どうすればなのでしょう？）、「わかる・わかる」と「かわる・かえる」が、シンクロ状態＝重なり合っている様（さま）がわかるはずなのです。では、さっそく試してみます。まず、前提です。

* 「かわる」＝「変わる（or 変る）」＝「代わる（or 代る）」＝「替わる（or 替る）」＝「換わる（換 or る）」

以上が、送り仮名で見た「かわる」のとりあえずの全貌です。次に、上で使われている個々の漢字にまつわるイメージを、複数の漢和辞典や、国語辞典、用字用語集を参照しながら、アマチュアの立場からまとめてみます。

* 「変」→ものごとの状態や質や内容が以前と異なった状態になる、変化する、良し悪しは別にしてこれまでとは違うことは確か、化ける、あれあれ、あれよあれよ、ふつう

じゃない、うへっ、尋常ではない、不気味だ、いやだあ、異様だ、あらまあ、変だ、おかしい、2つ（※あるいはそれより多い数）のものがそれぞれ違っている、妙なことが起きる、突然起こる、わざわい、困った困った、何だこれは、どうなってるんだ、乱れる、くるう、時があらたまる、場所がうつる、動く、ありゃいつのまにかこんな（or あんな）ところに、というイメージ。「変化」「不変」「変革」「変容」「変移」「変質」「変調」「変転」「変貌」「豹変」「激変」「劇変」「臨機応変」「変装」「変相」「変速」「変性」「変成」「変声期」「変名」「変節」「変心」「変身」「変遷」「変更」「変異」「異変」「凶変」「地変」「事変」「政変」「変死」「変幻」「変人」「変質者」「変種」「変則」「変体」「変態」「大変」「変乱」「変事」「変換」「変動」……

*「代」→AのかわりにBを用いる、かわって引き継ぐ、今度はこれを使うのね、〇〇と申しますよろしく、みがわり、〇〇（or 〇〇たち）になりかわりましておつとめさせていただきます、入れ違い、新しいのはいいけどこんなんで大丈夫かしら、かわるがわる、いれかわりたちかわり時は過ぎる、時世、あれのかわりにこんなにもらっちゃった、あたい、これとあれが同等だっていうことなのか、かち、ねだん、というイメージ。「代理」「(交代)」「(身代わり)」「代人」「名代」「代表」「代行」「総代」「代官」「代議士」「代議員」「代議制度」「代用」「代書」「代筆」「代講」「代弁」「代々」「世代」「時代」「歴代」「上代」「末代」「古代」「近代」「現代」「当代」「先代」「初代」「稀代」「希代」「代償」「身代」「代金」……

(※ () は別の漢字を当てる場合があるものです)

*「替」→Aに入れかわってBになる、今度はこっちの番、入れ違い、今度はこんなのが来たよ、〇〇と申しますよろしく、おっ新顔だね、これが駄目になったから捨てちゃう、あっちにしよう、時があらたまる、というイメージ。「(交替)」「(替え玉)」「(身替わり)」「(引き替え・引替え・引替)」「(取り替え・取替え・取替)」「(組み替え・組替え・組替)」「(入れ替え・入替え・入替)」「(言い替え・言替え)」「(借り替え・借り替え)」「(着替え)」「(差し替え・差替え)」「替え歌・替歌」「両替」「為替」「鞍替え・鞍替」「付け替え・付替え」「クラス替え」「商売替え」「国替え・国替」「組織替え」「吹き替え・吹替え」「振り替え・振替え・振替」「月替わり」「年度替り」「日替わり」……

*「換」→AとBとをかえる、とりかえる、入れ違い、差し引きゼロ、〇〇さんだと思ってお相手しますからね、〇〇さんだと思って何なりとお申し付けください、新しく来たものの役目と役割を重視する、これで役に立たなかったらクレームどころか返品だ、というイメージ。「交換」「(換え玉)」「(引き換え・引換え・引換)」「(取り換え・取換え・取換)」「(組み換え・組換え・組換)」「(入れ換え・入換え・入換)」「(言い換え・言換え)」「(借り換え・借換え・借換)」「(着換え)」「(差し換え・差換え)」「(置き換え・置換え)」「変換」「転換」「置換(ちかん)」「換気」「乗り換え・乗換え・乗換」「換言」「換金」「兌

換」「換算」……

以上は、即席に作成したリストなので、だいたい感覚的にはこんなものではないか、くらいに理解してください。さて、

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」がシンクロする＝かぶる＝ダブる＝重なる＝関連し合う部分がある

ことに、お気づきになったでしょうか？ 上のリストを眺めていて、次のように思いました。

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」のイメージを比較してわかるように、言葉はでたらめ＝いい加減＝ほぼ支離滅裂と言っていいほど、ぐちゃぐちゃした構造を備えているらしい。そのぐちゃぐちゃから、ヒトは自分の都合に合わせて、理路整然＝論理的＝すっきりした意味をくみ取っているらしい。その意味において、ヒトという生き物は頭がいい＝高度な情報処理能力を有していると言えそうだ。

です。

(つづく)

かわる (6) ～ (10)

◆かわる (6)

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」にそれぞれ漢字を当てることによって、両者の

持つイメージ、つまり意味の広がり＝構造がわかるような気がします。かつて自前の文字を持っていなかったらしい日本語に、中国の文字が加わったという入りこんだ状態になった。そして、漢字の形を少し変えてひらがなとカタカナを作ったというようなことを、学校で習った覚えがあります。

こうした経緯についての専門的な知識はありません。したがって、あくまでも素人として、手持ちの知識を動員して自分なりに考えてみたことを書いてみます。話し言葉だけで存在していた大和言葉に、漢字を当てる過程では、大雑把に言って次のような作業が行われていたのではないのでしょうか。

漢字は表意文字だと言われています。文字通り受けとれば、意味を表す文字ですが、当然のことながら、音声もまた表しています。その漢字に、音声だけで存在していた大和言葉を当てる、という作業をしたわけです。これは、このブログで何度か用いてきた

「感字」

にほかなりません。

「kawaru」にこの漢字を当ててみようじゃないの

という感じです。音の似ている中国語に、大和言葉の音を当ててみたのです。そして、「かな＝仮名＝仮の名」を作ったということでしょうか。「仮の名＝かりのな」を「借りた名」と当て字してみたい誘惑に駆られます。

昔々に、こんなことができたなんて、きっと当時のインテリ階級の人たちでしょうね。正確に言うと、バイリンガルな少数の知識人たちです。帰化人もいたかもしれません。そういう人たちの「輪＝ネットワーク＝サークル」があったのではないかと想像します。そうだとすれば、ある程度の統一性＝共通性のある表記が定着しつつあったのではないかとまで推測できます。

もし、すでに漢字を變形して仮名ができていたとするなら、次の段階は、音ではなく、大和言葉の意味を表すために、仮名と漢字を「当ててみた＝組み合わせてみた」。つまり、

「kawaru」の意味に「近い＝相当する」中国語の「文字＝漢字」と仮名を当ててみた。

この場合の「当ててみる」とは、たぶんくっつけてみることだと考えられます。

その結果として、

「かわる」＝「変わる・変る」＝「代わる・代る」＝「替わる・替る」＝「換わる・換る」
ができた。

要するに、いわゆる「送り仮名」が決められた。そして、誰かによって決められた「当て字と送り仮名」が普及すると、それが手本＝見本＝標準＝規範＝いわゆる「正しい」表記法となった。きわめて大雑把ですが、簡単に言えば、そうした作業が行われたのではないのでしょうか。

感字とは、論理的であるようで、意外と感覚的＝いい加減＝テキトー＝暫定的＝とりあえず的な作業だ

と思っています。現在の慣用的な表記もまちまちですが、とにかくその複数の慣用的な表記法ができるに至るまでには、きっと紆余曲折を経てきたことでしょう。文部科学省といったお役所も、出版界といった導き手も、文壇という権威も、全国ネットの新聞社という知識・情報の普及の担い手もなかった時代のほうが、ずっと長かったのですから、そうにちがいません。

*

要するに、

*日本語の表記はばらばらだった

のです。それが、現在になって一応の落ち着きを見せている。でも、あくまでも「一応」です。お役所や、権威や、知識・情報の普及の担い手などが、ちょっとした違いはあれ、せつかく「統一された」表記法を完成させたのに、20世紀の終わりに「強敵＝手強い掟破り」が現れたのです。

「強敵＝手強い掟破り」とはネットです。

インターネットやケータイが「国語を乱し始めた」

のです。感字という、ダイナミックス＝運動＝活動＝勝手きままな動き＝「何だか知らないけど、みんながやり始めたからやってみよう」＝「おもしろい、この言い方（or 書き方）」「こんなのは、どうかなあ」＝「ねえねえ、こういう言い方（or 書き方）が流行っているんだって、うちらもやってみようよ」が、ネットによって加速化＝激化＝活発化＝活性化されてきたように感じます。

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」に話を戻します。両者のイメージを、リスト化＝チャート化＝見える化してみても、言葉がいかにぐちゃぐちゃした＝ほぼ支離滅裂状態にあるかがわかりました。具体的には、「かわる（4）」2009-03-27では「わかる・わかる」を、そして「かわる（5）」2009-03-27では「かわる・かえる」のぐちゃぐちゃぶりを調べてみました。

*

そういうわけで、ここでは、「わかる・わかる」も「かわる・かえる」も、ぐちゃぐちゃしているという前提で、話を進めます。その「トリトメのない＝テキトーな状態」に、とりあえず「理屈＝道筋＝ルール＝約束事」をつけて「感字 or 当て字 or 送り仮名」を採用することにより、何とか整理がつき、ぐちゃぐちゃしているなりに、多くの人たちに納得 or 妥協 or 追随 or 支持される形で、慣用的な表記法が仮設されたというべきでしょうか。

もっとも、「仮設」ではなく「確立」ではないか、と主張なさる方もいらっしゃるに違

いありません。でも、現在の日本人が明治時代、江戸時代、あるいは平安時代と同じ言葉の話したり書いたりしていないのですから、「仮設」としておきます。

で、「仮設」という語を採用したことからおわかりになるように、少しばかり、あやういんです。カーテンを「取り替える」とするか、「取り換える」とするか？ 中には「取り変える」でいいんだ、と言い張る人もいそうです。じゃあ、中をとって「取りかえる」にしておこう、と言う人も多いでしょう。一方で、ネット上では「今日、部屋のカーテン、とっかえた」とか「きょう、部屋のカーテン、CHANGEしたっス」なんて書かれていても、全然不思議ではありません。

いずれにせよ、これくらいのレベルでは、大した問題にはなりません。たとえ、これ以上のレベルで言葉遣いの変化をしたとしても、何とかやっていけるでしょうし、実際にやってきたのであり、現にやっているのではないのでしょうか。

「ぐちゃぐちゃ」から「すっきり」へ。正確に言うと、「ぐちゃぐちゃ」であるのに、「すっきり」だと勘違いしてしまう。そうした「勘違い＝錯覚＝思い込み」ができるのですから、ヒトはやっぱり、頭がいいです。いずれにせよ、ああでもない、こうでもない、ああでもある、こうでもある、と言いながらも、それなりに＝テキトーに、ヒトはコミュニケーションをしてしまうのです。

さて、今回は、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」のシンクロする＝かぶる＝ダブる＝重なる＝関連し合う部分について書いてみたいと思います。



◆かわる (7)

AとBという2つの言葉＝語のグループがあったとします。グループと書いたのは、1つの言葉＝語を辞書で引いてみるとわかるように、複数の意味がある場合が多いからです。日本語では、特に大和言葉系の語の意味が厚い、つまり多層的＝多義的である傾向がみられますね。さて、AとBが別々の言葉＝単語として扱われているとします。

辞書でも別の項目として記載されているし、普段使いながらも意味は別の言葉だとたいていの人が思っているとします。ところが、このAとBの「意味＝辞書の定義」や、それぞれの言葉の使用例をみると、深い関連性があるような気持ちになってくる。大きな辞書で語源を調べてみたけれど、どうやらつながりはなさそうだ。でも、似ているというか、何かつながっている気がしてならない。今回は、そうした話をテーマにしてみます。

「かわる」と「わかる」という2つの言葉のイメージ＝意味＝使われ方を調べて、いかにもアマチュアらしい簡単なリスト＝見取り図をつくってみて、上で述べたAとBという言葉のような印象を抱きました。実は、以前から、そんな気がしたのですが、わざわざ2種類のリストを作って見比べるまではしませんでした。

で、いざ、試してみたところ、共通点というより、何か関連性があるように思えるのです。このブログの過去の記事（「かわる（4）」2009-03-27と「かわる（5）」2009-03-27に載っている、「わかる・わかる」と「かわる・かえる」の見取り図もどきを参照していただくと、これから書くことの意味をとる助けになるかと思えます。

2つの言葉のグループから、キーワードを取り出して並べてみます。それぞれの言葉のリストには、見出しが付いています。

(a) (表象・認識・知覚)「代理」－「交換」－「理解」－「判断」

(b) (学問)「代理」－「変換」－「理解」－「誤解」－「解釈」－「分析」－「分類」－「識別」－「判断」－「判明」－「解明」

(c) (経済)「交換」－「変動」－「代金」－「為替」－「換金」－「兌換」－「換算」－「判子」

(d) (社会・生活)「代理」－「分類」－「区別」－「差別」－「解明」－「理解」

(e) (政治・立法・行政)「代理」－「代行」－「代表」－「代議士」－「代議制」－「変

化」－「変革」－「変節」－「変心」－「判子」－「変身」－「政変」－「事変」

(f) (司法)「代理」－「代行」－「解明」－「理解」－「解釈」－「分類」－「区別」－
「代表」－「判事」－「裁判」－「判決」－「審判」

とりあえず、6種類のリストを作ってみました。6種類の見出しと関係のある言葉を取り出したものです。以上のリストから、次のようなことが言えるように思います。

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」は深く結びついているらしい。その結びつきは、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」という動作＝運動＝身ぶりが、シンクロ＝連動し合っていることから生じているらしい。

*

ところで、2つ以上のものの中に共通点や関係性を見出し、それに理屈をつけたり、規則性を当てはめることを、「こじつけ」と言います。

「こじつけ」

がポジティブに受けとめられると、

「法則」とか「理論」とか「説」

という榮譽ある言葉を与えられることがあります。ネガティブに受けとめられると

「でたらめ」とか「でまかせ」とか「めちやくちや」とか「ばーか」など

の罵声が浴びせられるか、単に無視されます。

それはそれでいいとして、みなさんに考えていただきたいことがあります。

「かわる」および「かえる」と、「わかる」および「わかる」という2種類、数え方によれば4種類の「動作＝運動＝身ぶり」に「共通性 or 関係性」があるでしょうか？

それを知るためには、想像力が必要になります。というわけで、あくまでも、「kawaru」「kaeru」「wakaru」「wakeru」という音声として、それぞれの「動作＝運動＝身ぶり」をイメージしてみましょ。

とりあえず、上の(a)から(f)の6種類のリストは、いったん忘れちゃってください。シンプルに、「かわる」「かえる」「わかる」「わかる」をそれぞれイメージしてみてください。頭だけで考えていると難しいですよ。では、体を使って表現してみましょ。

*

自己流にジェスチャーやパントマイムを試みるのです。つまり、自分の母語が通じない他言語の話し手に、4つの言葉＝語の意味を説明する、あるいは伝えるために、身ぶり手ぶり、場合によっては表情や顔芸を用いてみるシミュレーションを実行してみましょ。一瞬の動作である必要はありません。物語性がある時間がかかる動作でも、一向に構いません。

また、「おーっ」とか「はっ」くらいなら、声を出してもいいことにしましょ。物は試しと言います。実際に、ひとりでこっそりと試してみませんか。他人様(ひとさま)に提案しておいて、自分は何もしないのは失礼ですので、こちらでも、その作業をしばらく実行してみましょ。本当は、こちらの動作を見て受けとめてくれる相手がいるとベストなのですが.....。

蛇足とは思いますが、このブログではいったい何をやっているのだとお思いの方のために、ここでお断りしておきます。本気です。正気とは申しませんが、本気です。念のため。



◆かわる (8)

ヒトが用いている言葉というものが、どんな仕組みを持ち、どんな働きをしているかを知るためには、1つの方法として、「言葉の発生」という「物語＝神話＝フィクション＝作り話」を自分なりに考えてみるのがいいと思います。なぜ「作り話」なのかと申しますと、言葉の発生を実証的に知る手段がないからです。タイムマシーンに乗って「言葉の発生」する現場に行き、確かめることなど不可能だからです。超能力に頼ろうとするヒトたちもいるでしょうが、その方々が成功されたさいには、世界を驚かせてほしいと思います。

また、なぜ「自分なりに考えてみる」なのかと申しますと、「言葉の発生」を確かめることができず、定説もないのであれば、自分で想像して自分なりに納得すれば、きっと得るものが多いと信じるからです。専門書（※辞書や話し方・プレゼンの指南書や文章読本の類）を読むとか、専門家（※国語学者であったり、コミュニケーションの達人と呼ばれるヒトなど）の話聞く。そういう選択肢もあります。

でも、しょせん他人の「作り話」です。専門家の意見が「正しい」とか「偉い」というのは、言葉に関する限り肩唾物だと個人的には思っています。参考にする程度ならいいでしょうが、妄信するのは疑問に感じます。大切なことは、自らの実践と試行錯誤ではないでしょうか。

物理学や数学の用語・法則・知識とは異なり、言葉（※手話やボディランゲージ、表情、赤ちゃんの仕草や泣き声などを含む、かなり広い意味でとってください）は、言葉を使うことのできない一部の障害者の方々を除き、たいていのヒトが日々使っているものであり、誰かの占有物ではありません。

さらに言うなら、ヒトは一人だけで言葉を使っているわけではありません。言葉は、コミュニケーションや、知識・情報を得るための道具であると言われていています。つまり、他人との関係において用いられるものです。ヒトは一人で生きてはいません。とはいうものの、

言葉に関しては、誰もが「専門家」

なのです。誰もが自分の使う言葉に責任を持つべきである一方で、自分の好きなように言葉を使ってもいい自由を持っているという意味です。本来は、素人と専門家の区別などないのです。

*

さて、「かわる」「かえる」と「わかる」「わかる」ですが、これを言葉が通じない他の言語の話し手に伝えようと、「自分なりに考えてみる」ことを実践し、その4つの言葉を「動作＝運動＝身ぶり」を用いて相手に伝える努力を「体」を使って実行してみることは、擬似的に「言葉の発生」に身を置く体験になります。いわゆるシミュレーションになります。

「動作＝運動＝身ぶり」に意味を付加しようと、自分の想像力（＝頭）と顔を含めた体の動きを動員してみる。知恵を絞り、体を動かし汗をかいてみる。これが大切ではないでしょうか？

たとえば、脳梗塞や脳出血などで言葉を失ったヒトがリハビリをするさいには、頭（＝脳）だけでなく、体全体を使った機能回復が必要だと言われています。重労働らしいです。言葉の仕組みと働きを知るためには、ただ考えているだけでは、得られるものは少ないと思います。身体全体を動かすことが大切です。

かつてフランス語をフランス語で教えるフランス政府公認の学校に通っていたことがあります。そこでは、やたら体を使うのです。日本語に訳して教えるのではありませんから、当然です。頭だけを使って習う中学や高校での英語の授業とは大違いの方法でした。個人的には、大きな収穫がありました。

「演技」

および

「演じる」

という言葉を使い出しましょう。

* 「演じる」とは、自分が別の「もの（※物であり、者です）やこと」になる様（さま）を想像し（＝シミュレートし）、その想像を体で実際に示す（＝表現する）こと

です。言い換えれば、ある「ものやこと」を自分なりに「わかった」と仮定し（＝台本を手にし）、自分をその「ものやこと」に「かえて」みること、あるいは、自分がその「ものやこと」に「かわって」みることです。

* 「ものやこと」を「わけ」、「かえて」みる。＝「ものやこと」に対して、「わかる・わかる」と「かわる・かえる」という動作を加える。

今、「＝」を用いて書いた2つのフレーズは、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」の関係を、自分なりに言い表したものです。この2つのフレーズは、

言葉の仕組みと働きを、「たとえ」＝「演技」として表現するための「たとえ」＝「演技」でもある

のです。ややこしい言い方になりました。次のように言い換えることもできるかと思います。

* 言葉を使うとは、森羅万象（＝ものやこと）を知覚して（＝わけて）、音声（＝話し言葉）や文字（＝書き言葉）や身ぶり（＝手話や身体言語など）に置き換える（＝かえる）ことである。

そのさいに、決定的な役割を果たす言葉の「仕組み」および「働き」とは

* 「Aの代わりにBを用いる」という、「動作＝運動＝身ぶり」＝「たとえ＝装うこと＝演技」

なのではないでしょうか。

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」という、言語の仕組みと働きについてきわめて象徴的な意味を持つ言葉を、知恵を絞り想像力を働かせると同時に、実際に体を動かし汗をかいて演じてみる。これは、このブログの記事「かわる (7)」2009-03-28 で提案したことです。

これを実行なさった方なら、以上書いたことの意味がわかっていただけると信じています。これが、言葉の仕組みと働きを考える第一歩だと考えています。よろしければ、さらにこの先を一緒に歩いていただければ、うれしいです。



◆かわる (9)

言葉の仕組みと働きを説明するのに、

「かわる・かえる」

と

「わかる・わかる」

という言葉を使うのが便利だということが、偶然の一致なのか、何か因縁めいたものがあるからなのかは、わかりません。単に、そのように思い込んでいるからなのではない

か。そうも思います。

いずれにせよ、この4つの言葉（※数えようによっては2つですが）を用いて、言葉の仕組みと働きを説明するために、どれだけのこと（＝こじつけ）ができるか、試して（＝遊んで）みます。

*わかるからかわる。＝分かるから変わる。＝わけてかわる。＝分けて変わる。＝理解（＝判断＝識別）することで変化（＝変心）する。

*かわるのがわかる。＝変わるの分かる。＝かわってわかる。＝変わって分かる。＝変化（＝変動＝変心）することを理解（＝判断＝識別＝解釈）する。＝変化（＝変動＝変心）することにより理解（＝判断＝識別＝解釈）する。

以上の2例から、

「わかる・わかる」が「知覚＝認識＝思考すること」

そして

「かわる・かえる」が「身体の運動や動きや働き、大きく言えば生きるといういとなみ」

を指し示している

と言えそうな気がします。つまり、言葉とヒトの間にある基本的な関係を言い表しているのではないのでしょうか。めちゃくちゃこじつけている、と言われれば返す言葉がありません。とはいうものの、たとえば大和言葉に漢字を当てる「感字」という作業がかなりのこじつけめいた行為であったことを思い返すと、これくらいのこじつけは許してもらえるかな、とも思います。

*かわるからかわる。=変わるから変わる。= かわってかわる。= 変わって変わる。= かえてかえる。= 変えて変える。=変化するに伴い変化する（=連動・シンクロナイズ・連鎖反応）。=変化し、さらに変化する（=連続・加速化・長期的な変貌）。=改変（=改革）し、さらに改変（=改革）する（=発展=発達=進歩=進化）。

以上の「動作=運動=身ぶり」は、ヒトの普遍的でさまざまな行動・ヒトの経済活動・半ば一人歩きしている状況にある経済の動き・さまざま面から見たヒト（=人類）の歴史・ヒトとは無関係の森羅万象の変化（=変動）など、かなり広範囲な「動き」にこじつける（=当てはめる）ことができそうな気がします。

*わかるからわかる。=分かるから分かる。= 分かるから分かるへ。= わかってわかる。=分かって分かる。=一度理解することによって次々と理解が深まる（=進歩）。=理解が理解を呼ぶ（=コミュニケーション=伝達=ネットワークの拡大=輪の広がり=平和=和解）。=解釈が解釈を呼ぶ（=進歩=発展=深化=議論・論争・対立・批難の拡大）。

以上の「動作=運動=身ぶり」は、特にヒト同士の関係性と、人類としてのヒトのいとなみにまで、こじつける（=当てはめる）ことができそうな気がします。

ここまで書いてきたことから、次のようなことが言えるのではないかと思います。

*「かわる・かえる」ことなしに「わかる・わかる」ことはない。

*「わかる・わかる」ことなしに「かわる・かえる」ことはない。（※ヒト以外の生物でもそうですが、特に無生物の場合には「分かる・分ける」を「分解・分裂・分割・分離・解体・溶解」のイメージで考えてください。）

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」とが、「シンクロ＝連動している＝関連し合っている」、あるいは、見方を変えれば、「重なり合っている＝かぶっている＝関連している部分がある」と、先に書いたのは、こういう意味だったのです。

いくらかわかっていただけたでしょうか？「このブログを書いている、うさんくさいやつは、いったい何を考えているんだ」という思いが、ちょっとだけでも変わってきたでしょうか？ 妙な文体で、ややこしいことを書いているのは承知しております。でも、少しでも構いません、ご理解いただけたなら、うれしいです。



◆かわる（10）

こじつけることが好きなヒトがいます。大好きなヒトもいます。ここにもいます。「こじつける」とは、どういう行為なのでしょう。いい語感はありませんね。今、辞書で意味を調べてみましたが、案の定、自分がこれまで何度も浴びてきた類の悪態もどきの言葉が書かれていました。

普通、批判や罵倒されたり罵声を浴びるとすぐにへこんでしまう性質（たち）なのですが、「こじつけ」「屁理屈」「牽強付会（けんきょうふかい）」といった類の言葉には、免疫・耐性ができているらしく、その種の文句を投げつけられても、さほど傷つくことはありません。やはり、好きなのです。逆に喜んでしまいます。

*ヒトはこじつける生き物である。

たった今書いたフレーズは、日ごろから感じていることを文字にしたものです。これまでの経験から、むっとなさる方が多いだろうと想像します。「こじつける」という言葉を「脱色＝解毒＝中和＝中性化」できないのでしょうか？ たとえば、「こじつける」を「複数のものごとに関係性を見いだす」なんて言い換えてみてはどうでしょう。少しは響きがよくなりましたか？

「複数のものごとに関係性を見いだす」と書いたとたん、思わず笑ってしまいました。「こじつける」の強引さと、図々しさと、ちょっと恥ずかしいという気持ちが薄れて、迫力がなくなったというか、間が抜けた感じがするのです。どう言えば、わかっていたでしょう。そう。普段は正装などしないのに、おめかしをして、やたら気どった表情をして鏡の前に立った時の気分似ています。とってつけたようで、似合わないのです。やはり、「こじつける」でいきます。

*

広い意味で言葉を考えてみましょう。話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、さまざまな標識や記号などをいっしょくたにして、「言葉」と、ここでは呼ぶことにします。自分とは違う言語を話すヒト、いわゆる言葉の通じないヒトに、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」という言葉＝動作を、ボディランゲージを用いて伝えてみよう。そんなお遊びというか実験をやってみませんか、このブログの記事「かわる(7)」2009-03-28で、みなさんに呼びかけました。

伝えるのは別の言葉や動作でもよかったのですが、

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」の持つ、言葉の根源的な動態＝有り様（※あくまでも個人的な意見で、単なる思い込みかもしれません）を頭（＝想像力）と体全体（＝体力）を使って演じてみるのが、言葉の仕組みと働きを考えるうえで、助けになるに違いない。

と思ったからでした。さて、そんなややこしいことは抜きにして、たとえば、ペン、パソコン、ケータイ、消しゴムといった身の回りのものや、朝ご飯を食べる、歯医者へ行く、風邪を引く、乗るつもりだった列車に遅れる、といった日常的な動作や状況を、身ぶり手ぶり表情などを用いて、誰かに伝えるつもりになって演じてみる。そんなお遊びをしてみませんか？ きっと、「こじつける」という、ちょっとワルな響きのある言葉を体感できると思います。

具体的には、

*我流の「ジェスチャー＝身振り・手振り＝ボディランゲージ」

が考えられます。あるいは、

*手話

という言葉（※念のため、駄目押しに強調させていただきますが、たとえば日本語や英語と同じく、手話は言語です）を学ぶことも視野に入れてよいのではないかと思います。

ここで、話を飛躍させます。上で述べたような「広義の言葉」を使う（※既にあるもの＝手本を使う）、あるいは、作る（＝自分が表現したいものごとを表現する手本がなかったり、伝えたいものごとを伝える手本がない場合には、工夫して自前で作るしかありません）さいには、その前提に「こじつける・こじつけ」があるのではないのでしょうか。

考えてもみてください。Aというものがあれば、それを相手に見せれば、それで済みます。でも、Aが手元や近くにないために、A以外のものでAを表すのです。これって、こじつけではないのでしょうか。それこそ、こじつけだという言葉が返ってきそうですが、さきほど書きましたように、幸いにして免疫・耐性があるみたいで、めげたりへこんだりしません。というわけで、さらに性懲りもなく、いけしゃあしゃあと、こじつけをさせていただきます。

*言葉とは、Aの代わりにAでないものを用いるこじつけである。言葉というこじつけが、ヒトをヒトとならしめている。

そうこじつけてもいいのではないのでしょうか。つまり、こじつけをこじつけているわけです。「こじつける・こじつけ」という言葉が、どうしても気に入らない。人間様である自分のプライドが許さない。そんなふうにもわれる方のために、解毒済みバージョンを用意しました。

* 言語の使用とは、Aの代わりにAでないものを用いるという、人類の英知から生じた崇高なとなみである。言語を使用するという行為が、人間を人間ならしめている。

いかがなものでしょうか。言い「かえて」みました。お「わかり」いただけたでしょうか。

以上をもちまして、「かわる」(1)～(10)の締めくくりと致したいと思います。

◆まぼろし

ああでもあり、こうでもある

◆ああでもあり、こうでもある

そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。このブログでは、そういうことについて、このところ考え続けています。飛び入りの方も大歓迎ですので、ご一緒に、ああでもない、こうでもない、だけでなく、ああでもあり、こうでもある、と欲張りながら考えてみませんか？ たった今、

「ああでもあり、こうでもある」

と書きましたが、きょうはそんな感情から出発したいと思っています。で、思い出したのですが、心理学では、同一の対象に相反する感情を抱くことを、

「アンビバレンス = ambivalence = 両面価値 = 双価性 = 両価性」

と呼んでいるそうです。

よく考えれば、貪欲ですね。積極的で頼もしくもありますね。「2度おいしい」という言い方を、連想しちゃいます。あれって、いろいろな場面が想像できるし、いろいろな意味にとれて、2度に限らず、何度もおいしい体験ができることにまで夢がふくらんだりして、わくわくしませんか？ エッチな響きも感じるのは、自分だけでしょうか？ お恥ずかしいです。

さて、

＞そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。

と、冒頭に書きましたが、本＝書物も、そうですね。書店、あるいは図書館で実際に目にもすることもできるし、手で触れることもできます。本＝書物が、商品であることは言うまでもありません。だから、お金と交換して購入し、消費される対象になります。溜め込む＝保存もできますし、廃棄＝処分されもします。その意味では、スーパーの棚に並んでいるケチャップ、または電気製品の量販店に陳列されている洗濯機と同じです。

資本主義経済が、あらゆるものを商品にしてしまう

ことは、みなさんをご承知の通りです。ヒトがいい例ですよ。テレビという商品で、毎日みなさんをご覧になっている、芸能人、ミュージシャン、コメンテーター、モデル、政治家も、広義では全部商品です。

一人ひとりが違うヒト＝人格ではないか？

とお思いになる方もいらっしゃるでしょう。確かに、そうです。でも、テレビやメディアに登場して、その映像なり「発言＝音声」の見返りとして、出演料やギャラ（※政治家の場合には、間接的なお給料＝ギャラ）をもらっている限りにおいては、やはり、商品です。

購入され、消費され、保存され、いつかは廃棄される

運命をたどります。

テレビの番組がいつせいに入れ替わるさいに特番のバラエティーが組まれますが、大きなスタジオにありとあらゆるジャンルの、芸能人や有名人が登場しますね。あれを思い浮かべてください。ヒトが商品であることを実感できる絶好のチャンスですよ。お笑い芸人、元お笑い芸人、俳優、元俳優、スポーツ選手、元スポーツ選手、歌手、元歌手、

モデル、元モデル、元専業弁護士、元専業大学教授、元専業政治家、元専業作家、分類不可能でタレントとしか言えなくて存在価値がよく分からないヒト、元からずっと分類不可能でタレントとしか言えなくて存在価値がよく分からないヒト……切りがないですね。そうしたヒトたちのごく一部が、一堂に会しているさまを見て、やはり、

一人ひとりが「違う個性的なヒト＝人格」だ

とお感じになりますか？ もしお感じになるとすれば、ご家族とか、親しい方とか、お知り合いが、そうした番組に出ている、あるいは、かつて出ていらっしやった、または、自分がすごく臍頂（ひいき）にしているヒトがいる、という特殊な思い入れが、そう言わせているのではないのでしょうか？ こんな言い方は、失礼ですよ。ごめんなさい。ですので、ちょっと不快に思われる方がいらっしやるのを承知のうえで、あえて申しますが、今例に挙げたような特番に出ている方々は、

取り替え可能＝インターチェンジアブル＝interchangeable、つまり disposable＝ディスプレイザブル＝使い捨て可能

ではないのでしょうか？ 広い意味での差別発言になりますね。重ねて、お詫び申し上げます。真面目なお話をしている途中で、ぽろりと出てしまった失言＝暴言として、お許しくださいませ幸いです。

失言と言えば、現総○の失言、ちょっとひどすぎやしませんか？ この国は、あの国に追随する傾向がありますが、お馬○さんをトップに選んでしまったという点でも、一足おくれて追随していますよね。Wことブッ○ユ（※父子の、特に子のほうです）だなんて、言ってませんよ。念のため。書いてはいますけど。

で、現○理ですけど、あのヒトの失言は、受けようとしてやっている過失なのでしょうか？ そうだとすれば、ほんまもんでっせー。まだ「確信犯」のほうが救われます。そうで、あってほしいです。ご本人が本拠地だと勘違いなさっているアキバを始め、ハローワーク、市場、街頭、学校、いろんな所に出現するのはいいのですが、その都度、失言しちゃうのですよね。何だか、出現＝失言、出没＝陥没、神出鬼没＝露出沈没という感じ、じゃないのでしょうか？

あのヒトは極端な例ですけど（※ほんまかいな？）、この国の内閣総理大臣および各大臣ならびに副大臣そして国会議員たちは、みんな

取り替え可能＝インターチェンジابل＝ interchangeable、

つまり

disposable = ディスポーザブル＝使い捨て可能

という気がしませんか？ 実際、敗戦以後の歴史を振り返ってみると、これまでがそうであったという思いが強いのは、自分だけでしょうか？

あるヒトがいなくなっても、その代わりを務めるヒトがすぐに見つかるから大丈夫。他のヒトとの組み合わせも簡単。理系、工学、および経済・経営の分野でいう「モジュール」という言葉と似ていませんか？

*

さて、

> そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。

> ああでもあり、こうでもある

> 2度おいしい

> 取り替え可能＝インターチェンジابل＝ interchangeable、つまり disposable = ディスポーザブル＝使い捨て可能

でしたね。

みなさん、以上並べたフレーズたちが、どう結びつくのかと、疑問を抱いていらっしゃるのではないのでしょうか？ ややこしいことなので、どのように言葉で説明したらいいのか、自分でも悩んでいるのですが、要するに、

ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違うことへの欲求を抱く習性がある

と言いたいのです。分かっていたらいいのでしょうか？ 言葉を換えると、

「制服＝ユニフォーム＝uniform＝画一的＝そっくり」を着ることの気楽さと一体感も「いい＝快感である」し、「私服＝私だけは別＝他の人とは違うのよ」を着て自己主張や自己顕示をするのも「いい＝快感である」

となります。ここでのキーワードは、「いい＝快感である」です。なんだかんだ言っても、結局は、

ヒトは快か不快かを基準にして行動する生き物

です。つまり、「どっちが気持ちいいか」を選択しながら生きている。もう少し理屈っぽく言いますと、

「気持ちいい」を選択し、「気持ちよくない」を排除しながら生きている

と言えそうな気がします。でも、こう書いたところで、果たして本当にそうだろうかという疑問を、自分は抱いてしまうのです。というのも、

「気持ちいい=快」と「気持ちよくない=不快」とは、反意語=反対語=対義語だろうか

で迷っているからなのです。言葉を使って思考を「処理=整理」し、文章として固定化
する場合には、

言葉が欠陥品であることに敏感であり意識的でなければならない

と常に思っています。言葉が欠陥品であるということは、言葉を作り出しているとされ
るヒトという生物の知覚および情報処理能力に限界がある、ということにほかなりませ
ん。その意味では、

言葉はヒトを真似て作ってある

とも言えます。逆に、

ヒトは言葉を真似て知覚し思考している

とも言えます。

自らが作ったものに振りまわされるというのは、ヒトが古今東西を問わず経験してい
る「状態=常態」ではないでしょうか？ その典型的な例として、反意語=反対語=対義
語を挙げたいのです。ここで、蓮実重彦=蓮實重彦という名を思い出しました。自分は、
同氏の著書と訳書から、今述べたようなものの見方を、学びました。突然ですが、

あなたはSですか、それともMですか？

この質問をエロい意味でとってください、けっこうです。どうでしょう？ あなたは
サディスト（or サディスティック）ですか、それとも、マゾヒスト（or マゾヒスティッ
ク）ですか？ どちらでも、ないですか？ 両方の要素がありますか？ 時と場合によりま

すか？ TPO次第で変わるから一定していない、ですか？

ジル・ドゥルーズという人の書いた本の邦訳である『マゾッホとサド』の訳者が、蓮実重彦＝蓮實重彦氏です。内容や詳細はすっかり忘れてましたが、要約すると、

いわゆるSとMとは反意語でない

ということが書かれていたと記憶しています。比喩的に言えば、反意語というより、両者のベクトルが違うという意味だったような気がします。これもまた、蓮実重彦＝蓮實重彦氏が、何か書いていらっしやったことですが、マルセル・ブルースト作の、例のとてつもなく長い小説『失われた時を求めて』は、「長い」の反対が「短い」ではないことをめぐって書かれた作品である、という意味の文を読んだ覚えがあります。間違っていたら、ごめんなさい。

というわけで、正直なところ、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」を反対の感情、あるいは感覚としてとらえていいのかどうか、整理がつかないのです。みなさんは、どうお考えですか？ ややこしいですね。たぶん、言葉が欠陥品であるということに加えて、ヒトが言葉という欠陥品に「慣れきっている＝依存しきっている＝疑いを持たなくなっている」ために、いわば「落とし穴＝陥穽＝罟」に、はまり込んでいるのではないか、と思えてならないのです。

たとえば、ここで「超常現象」の対義語が「日常」だと仮定してみましよう。日常の中で――その真偽は別にして――たまに超常現象という話題をテレビや本や雑誌で見聞きするからこそ、わくわくどきどきもし、不思議だという気持ちを堪能できるのではないのでしょうか？ また、曲芸や類まれな才能の話もしましたよね。曲芸やサーカスは、本来、「ハレ＝晴れ＝非日常」の時に催されるものだった、という考え方があります。

一方、「ハレ＝晴れ＝非日常」の反対は、「ケ＝曇＝日常」だとされています。「ケ＝曇＝日常」の世界に生きるヒトが、たまに「ハレ＝晴れ＝非日常」の時空を作り、そこでお祭りや儀礼を行い、その刺身のつまとして、曲芸やサーカスや芝居＝劇といった娯楽＝芸能を催すからこそ、そうした娯楽＝芸能が妖（あや）しげで、これまた、わくわくどきどきするものだったのではないのでしょうか？ 毎日が正月やお祭り、毎日が超常現象だったら、ヒトは飽きるどころか、不思議を堪能できなくなり、たぶん、辟易（へきえき）＝閉口＝うんざりしてしまうでしょう。

ですので、

「AかBか」だけでなく「AもBも」という際のAとBとは、「一見」相反するものでなければ、ヒトは満足＝納得できない。

そんな気がします。この「一見」が曲者（くせもの）ですね。ヒトが、反対だと思いこんでいれば、それでいいのだ。そのように大雑把に考えるのが楽なのですが、そういうスタンスを「杜撰（ずさん）＝いい加減＝テキトー＝手抜き＝ちょっと違うのではないか」と、自分なんかは感じてしまうのです。損な性格だと思います。こんなことを考えても、いいことなど、これっぽっちもないのですから。でも、やっぱり、考えちゃうんですよ。困ったものです。

反意語＝反対語＝対義語については、保留したほうが、よさそうです。近いうちに、また、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある、と考えながら書きたいと思います。

で、そのところを保留したうえで、

>ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違うことへの欲求を抱く習性がある

と、

>「制服＝ユニフォーム＝uniform＝画一的＝そっくり」を着ることの気楽さと一体感も「いい＝快感である」し、「私服＝私だけは別＝他の人とは違うのよ」を着て自己主張や自己顕示をするのも「いい＝快感である」

だけを、きょうは、手っ取り早く、片づけてしましましょう。何だか、にわか大工さんのやつつけ仕事みたいですが、実際このブログは、素人の「哲学がしたーい」ですから、致し方ありません。間借りしているブログサイトの文字数制限も、気になりますので、そ

ろそろまとめに入ります。

ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻（おり）に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

なんていう説明で、きょうの記事を終えたいと思います。キーワードは「飽きやすい」でした。

差別化

◆差別化

＞ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻（おり）に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

きのうは、上にコピペした文章で、記事を終えてしまいました。今読み返してみると、第1センテンスと第2センテンスに、かなり無理な跳躍がみられます。第2センテンスと第3センテンスのつながりも、しっくりきません。お恥ずかしい限りです。きょうは、第1および第2センテンスの飛躍の修復から始めたいと思います。で、キーワードが「飽きやすい」だということは確かなのです。ですので、たとえば、ヒトの特徴を2つ挙げろと言われたら、自分なら次のように答えるのではないかと思います。

*ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である。

これは日々実感しています。自分の言動を考えても、まわりにいる人たちの言動を見ても、テレビや新聞やウェブサイトを見ても、つくづくそう思います。で、きのう書きましたように、反意語＝反対語＝対義語＝異義語であると、とりあえず共通の認識があるらしい数々のペアの言葉たちに対し、自分はかなり疑問を抱いているのです。

自分が見聞きするすべてのペアについて、そうした不信感を持っているのですから、大変です。別に、そんなことを気にせず生きていくのが楽に決まっています。それは百も承知です。百歩譲って、そうしたペアが反対であると認めてしまい、たとえば、このブログで記事を書いていくとか、そんな心持ちでやり過ごしていくとか、そんなことができれば、気楽だし、うつも悪化しないだろうなあ、と思います。でも、できそうもないのです。

ただ、いちいち反対語のペアが出てくるたびに、それ突っかかっていたら、しんどくて仕方ありません。ですので、反対語のペアを、このさい十把ひとからげにして、気持ちの整理だけをしておこうという姑息な手段を選択しようと決めました。で、次のような仮説（かせつ）を仮設（かせつ）しておきたいと思います。以下のAとBは、いわゆる反意語＝反対語＝対義語＝異義語のペアだと考えられているものです。

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。写真のネガとポジが代表的な例。AからBへ、BからAへの移行が、ほぼ瞬間的に可能であるという特徴を持つ。また「一瞬にして自分を変える」「ポジティブをネガティブに転じる」に類似した、ある種の分野で用いられている、レトリック＝言葉の遊び＝キャッチコピー＝宣伝文句＝惹句＝作り話＝トリック＝錯覚＝嘘という、応用例もある。この中に含めてよさそうなペアの候補としては、愛と憎、快と不快、「いや＝だめ」と「ええ・はい＝いいわ・いいよ」、幸と不幸、うれピーとかなピー、味方と敵、友達と見知らぬ人、痴漢とたまたま電車内で隣合わせた人、前進と後退、進化と退化、などが怪しい。

(2) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「範囲語」であるらしい。AとBの意味の素（もと）は、かなり混じりあっているにもかかわらず、言葉の響きによって、反対の意味であるという印象を招いていると推測される。つまり、構成要素が同じ「範囲＝枠」の中で入り乱れている。構造的には、連続体という比喩も有効であろう。また、時間的推移により、構成要素間での位置関係が変化しやすい。また、そもそもペアが反意であるという根拠＝理由が薄い＝弱い場合も、ここに含めていいと考えられる。変化に

注目した場合には、プリズムのイメージに近い。見方や視点を変えると、異なったもののように知覚されるという特徴がある。正規品と類似品、オトナとコドモ、単数と複数、悪人と善人、聖人と禿神（とくしん）者、聖人と俗人、超人とふつーの人、すごいヒトと凡人、本物と偽物、本人と影武者、本人と偽者、天動説と地動説、「ヒトは空を飛べる」と「ヒトは空を飛べない」、幽霊の存在の肯定と幽霊の存在の否定、「(人間関係における)上」と「(人間関係における)下」、などが典型例かもしれない。この中に含めてよさそうな他のペアの候補としては、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、ハレとケ、「本当です」と「間違えました」などが怪しい。

(3) AとBは、「反対語」というよりも、むしろ「相対語」であるらしい。AとBの間には、反対関係ではなく、相対的な「位相＝段階＝階段＝雛壇（ひなだん）」が存在すると推察される。したがって、その階段のどこにいるかによって、反対関係とは言えない関係が生じる。多くの場合、測定器や測定用機器によって物理的に観察でき、かつまた数値化可能だという特徴を備えている。以下の典型例は、比喩としてではなく、物理的に確認可能な場合を想定していることに注意されたい。熱いと冷たい、暑いと寒い、右と左、無痛と苦痛（※SMではなく医学的意味で）、厚いと薄い、高いと低い、長いと短い、遠いと近い、「でかい」と「ちっちゃい」、「これだけ」と「こんなに」、東洋と西洋、速いと遅い、すっぴんと厚化粧、など。

ここで、ひと休みしてよろしいでしょうか？ みなさんも、お疲れになったのではないのでしょうか？ 少しだけ、話をずらしましょう。反対の意味を表すのに、漢語系の日本語の単語に「無」「不」「反」「非」「脱」といった語を頭に被せますよね。まるで、「否定のかつら」みたいです。英語にも、ありますよね。

unhappy「不幸な」、immoral「不道德な」、antisocial「反社会的な」、disorder「無秩序」、irregular「不規則な」、illogical「非論理的な」、ignorance「無知」、deodorant「脱臭剤」、nonsense「無意味」、anarchy「無政府状態」

よく見ると、おなじみの単語が透けて見えませんか？ おもしろいですね。一見するだけでは、どうなっているのか分からないものもあります。たとえば、上記の ignorance「無知」ですが、これは語源的には i- という「否定のかつら」＋「gnor(ance) = know」と考えるらしいです。だから、無知＝知らない、となるみたいです。なるほど、という感じですね。

最後に挙げた anarchy「無政府状態」は、アナーキーと読めば、なんだあれかあ、という感じの単語ですが、手元にある辞書によると、a- という「否定のかつら」＋「archy＝指導者」と説明してあります。ですので、monarchy とは「モノクロ (=単色)」や、このブログみたいな「モノブログ (=孤独ブログ)」の「モノ」、つまり、「1つ、1人」＋「指導者」で、「君主制、君主国」となるとのこと。なるほど。

アナーキーという言葉を知ると、懐かしい思いがしませんか？ 学生運動なんか盛んだったころに、大学生たちとは別に、新宿駅の周辺に、たむろしていた方々でした。自分は、当時はまだ小さくて、参加できなかったのですが、何をなさっていたのですか？ シンナーとか吸っている若い人たちの映像を、数年前にNHKアーカイブスかなんかで見ました。みなさん、髪が長かったですよね。

それに、こう申し上げては失礼かと存じますが、清潔とは言えない身なりをなさっていらっやいました。ギターをかかえて、反戦歌なのか労働歌なのかナンセンスソングなのかフォークソングなのかロシア民謡なのか、分かりませんが、けだるそうに歌っているさまが映し出されていました。ラップズボンというのですか、今でいうベルボトム。それに、ちょっと風変わりな形のサングラスがトレードマークみたいでしたね。

学生運動とは違った意味での反体制、アナーキーという感じでした。フーテンというのは、寅さんとはまた違った意味なんですか？ それとも、ある程度、かぶる＝ダブルののですか？ 米国のヒッピーとの影響も、考慮すべきなのですか？ そんな理屈は関係なし、という乗りを感じましたが、それでよろしいでしょうか？

新宿のフーテン族さんたちの存在を、当時の自分が知った時には、何をなさっているのかは分かりませんでした。もう少し早く生まれていて家を自由に出ることがきるのなら、ぜひ、あの仲間に加わりたいたい、などと思っていました。それほど、学校とか、規則とか、社会のしがらみとか、体制とかが、何か窮屈だなあ、という鬱屈した思いを抱いていたことは確かです。アナーキー——懐かしい言葉ですね。センチメンタルな思い出に浸った後は、さきほどのお話に戻ります。

で、

(4) AとBは、「対義語」というよりも、むしろ「大儀語」であるらしい。AとBの間に、対立関係ないし反対関係を見出すことは容易に見えて、実は難しい。哲学、論理学、倫理学、数学、ひいては「言葉遊び＝レトリック」のテーマとして、しばしば論じられてきたが、結論は出なかったもよう。これから先も、結論は出ないと予想される。この種の議論は、七面倒くさく、骨がおれ、徒労に終わることが特徴。一部のマニアおよびオタク向け。脳科学に救いを求める向きもあるが、その有効性は未知＝絶望的。典型例は、存在と無、有と無、虚と実、戦争と平和、現実と非現実、現実と仮想現実、フィクションとノンフィクション、事実と虚構、嘘と真（まこと）、始まりと終わり、身体と精神、平面と局面、点と線、直線と曲線、罪と罰、天国と地獄、この世とあの世、オトコとオンナ、キミたち女の子とボクたち男の子（※ただし、ここではオスとメスという生物学的要素を除いた抽象語）、など。

(5) AとBは、「対義語」といよりも、むしろ「大疑語」であるらしい。大いに主観的な解釈が、さまざまな人たちによってなされている、極めていかがわしいペアである。と解釈できる点が、いかがわしさに輪をかけていると言えなくもない。(1)(2)(3)(4)、および次の(6)と重複する。典型例は、幸と不幸、前進と後退、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、虚と実、現実と非現実、嘘と真（まこと）、など。

(6) AとBは、「異義語」というよりも、むしろ「異議語」であるらしい（※両者の漢字の違いをよく見てください）。反対関係にあるのではなく、複数の利害関係者＝ステークホルダー間の意見の相違や虚偽や策謀などが根底として存在する、「混乱＝闘い＝戦い＝喧嘩＝生存競争＝仁義なきたたかい」であると推測される。口語体＝悪態＝罵倒で、表現されるのが特徴。利害関係に基づくものであるために、しばしば同一ないし同様の表現として立ち現れる。例は以下の通り。「言った」と「言っていない」、「やったろー」と「やってねー」、「良かった」と「悪かった」、「関係ねー」と「責任とれ」、「おまえが悪い」と「おまえが悪い」、「失礼しちゃうわ」と「失礼しちゃうわ」、「とんでもないわ〜」と「とんでもないわ〜」、「おだまり」と「おだまり」、「馬鹿野郎」と「馬鹿野郎」、「今に見ている」と「今に見ている」、「某国の将軍様」と「某大都市の知事」、「真似すんな」と「真似すんな」など。

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。世界を「まだら」状にしか知覚および認識できないヒトが、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると「誤解＝事実誤認＝錯覚」されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、きれいと汚い、可能と不可能、シャチャョーとペーパー、お偉

いさんと市民、濃いと薄い、あそこここ、善と悪（※倫理的意味ではなく、この惑星に対してのヒトの影響度）、神と悪魔（※ただし、諸説あり）、ヒトと動物、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、「某国の将軍様」と「某大都市の知事」（※また出ちゃった）など。

(8) AとBは、反意語=反対語=対義語=異義語というよりも、むしろ「別物」であるらしい。しかし、存在である以上、根本においては、つながっているとも推測される。ベクトルが違うのに、歴史的経緯や、ゴタゴタ=騒動や、錯誤や、陰謀によって、反対の関係があるとみなされているとおぼしきペア。典型例は、資本主義と共産主義、塩と砂糖、社会主義と共産主義、SとM、〇〇教と△△教、〇〇派と△△派、〇〇流と△△流、一時期のテレビと一時期のラジオ、シロとクロ、まなとかな、タロとジロ、など。

なお、以上の8つの定義のそれぞれの出だしの総括的センテンスの語尾が、すべて「らしい」となっているのは、それを一つひとつ検証するのが、実にしんどそうだからです。自分は、哲学と「心中する」（※比喩です、当ブログは自〇サイトでは断じてありません、念のため）気はあっても、反意語=反対語=対義語と「心中する」（※比喩です、当ブログは〇殺サイトでは断じてありません、念のため）気は毛頭ありません。

*

さて、

>ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である。

でしたよね。いったん、さきほどの話題に戻りますが、

*反意語とは、ヒトが本当は体で分かっている、あるいはかつて体で知っていたことを忘れた結果として陥っている錯覚から生じる言葉のペアである

と、簡単にまとめさせてください。何しろ、

*ヒトは、「○△X」という言葉を作り、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである

からなのです。

で、次のお話に移ります。きのうは、

>ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違うことへの欲求を抱く習性がある

と、

>「制服=ユニフォーム= uniform =画一的=そっくり」を着ることの気楽さと一体感も「いい=快感である」し、「私服=私だけは別=他の人とは違うのよ」を着て自己主張や自己顕示をするのも「いい=快感である」

という2つの仮説から、本日の文章の冒頭で引用した

>ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない=飽きやすい=好奇心が強い=浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻(おり)に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

という新たな仮説へと、話を強引に持って行ったのでした。その強引さ=大雑把さ=杜撰(ずさん)さの裏には、

>正直なところ、「快=気持ちいい」と「不快=気持ちよくない」を反対の感情、あるいは感覚としてとらえていいのかどうか、整理がつかないのです。みなさんは、どうお考

えですか？ ややこしいですよ。たぶん、言葉が欠陥品であるということに加えて、ヒトが言葉という欠陥品に「慣れきっている＝依存しきっている＝疑いを持たなくなっている」ために、いわば「落とし穴＝陥穽＝罟」に、はまり込んでいるのではないか、と思えてならないのです。

ときのう書いた迷いがあったからです。

で、さきほど反意語について、いちおうのケリをつけた結果、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」は、上述の

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。

に該当するのではないかと、とりあえずの結論を得ました。ですので、「表裏一体」について、もう少し説明を加えさせてください。「表裏一体」の関係にあるAとBとは、たがいにほぼ瞬間的にAからBへ、またBからAへと移行＝変化＝転換することができます。「AでありBでもある」という説明の仕方も可能だと思います。ただし、

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

とは、違います。(7)は、あくまでも「A=B」であり、「表裏一体」よりは「一心同体」というイメージです。(1)と(7)は確かに、非常によく似ています。何が似ているかと申しますと、「そっくりだ」という点がそっくりなのです。おふざけに聞こえたら、ごめんなさい。

で、ようやく、きょうお話したいことにたどり着きました。きょうは、以前から気になっている、ある言葉について、考えてみたいのです。それは、

「差別化」

です。この言葉を初めて読むか目にした時には、どきりとしました。なにしろ「サベツ」

に「化ける」です。インパクトがありますよね。

「差別化」とは、コモディティ化した商品や製品、つまり、ある個性＝特性＝特徴を売りにしていた商品が、「ありふれたもの」になってしまった場合に、対策として用いるマーケティングの一つの「手法＝戦略」である

ですよね。

自分は、経済とか経営関連の分野にはめちゃくちゃ弱いので、事実誤認をしている可能性が高いです。ですので、その点をご理解とご配慮いただいたうえで、とりあえず、上記の定義というか前提で、話を進めさせてください。

で、

＞そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。

という状態にある商品が、「ありふれたもの」になってしまったとすれば、売れなくなってしまうことは当然だと思います。そうなった原因としては、自社の商品が大量に出回り、それが長期化し、しかも、競合他社によって類似品が大量に出回っているといった事態が、考えられます。

そこで、「そっくりなものがずらり」＋「ありふれてしまった」＋「似たものがずらり」の三重苦を打破するために、「違ったものにする」「作業＝操作＝戦略」、つまり「差別化」が登場するのだと理解しています。何しろ、上で述べたように、ヒトはすごく「飽きっぽい」生き物なのです。そこで、冒頭の引用を、再び引用します。

＞ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻（おり）に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

この舌足らずな文章に手を加え、自分の言いたいことが伝わるように、修正したいと思います。

*ヒトは、「みんなと同じでありたい」と同時に「自分だけが目立ちたい」という、相反する気持ちを持っている。また、ヒトは「飽きっぽい」と同時に「忘れっぽい」生き物でもある。そうした習性があるために、ヒトは、落ち着く暇がなく、「同じ=そっくり」と「違う=目立つ」の転換をえんえんと繰り返す。つまり、知覚の対象と、自分自身を差別化し、次にはそれらがコモディティ化するという半永久的な運動に、無意識のうちに巻き込まれている。この習性と運動を抑制された場合、ヒトは、極度の不安感からパニック状態に陥るに違いない。それほど、この習性と運動は、ヒトにとって根源的なものになっている。これは、ヒトが「トリトメのない記号」の発するまぼろしに導かれて生きていることと、深い関係がある。

この、「ヒトをとらえている半永久的な運動」と「トリトメのない記号」の関係について、できれば、あす、さらに言葉を紡いでいきたいと思っています。

飽きっぽくて、忘れっぽい

◆飽きっぽくて、忘れっぽい

>*ヒトは、「みんなと同じでありたい」と同時に「自分だけが目立ちたい」という、相反する気持ちを持っている。また、ヒトは「飽きっぽい」と同時に「忘れっぽい」生き物でもある。そうした習性があるために、ヒトは、落ち着く暇がなく、「同じ=そっくり」と「違う=目立つ」の転換をえんえんと繰り返す。つまり、知覚の対象と、自分自身を差別化し、次にはそれらがコモディティ化するという半永久的な運動に、無意識のうちに巻き込まれている。この習性と運動を抑制された場合、ヒトは、極度の不安感からパニック状態に陥るに違いない。それほど、この習性と運動は、ヒトにとって根源的なものになっている。これは、ヒトが「トリトメのない記号」の発するまぼろしに導かれて

生きていることと、深い関係がある。

以上が、きのうの記事の最後のほうで書いた文章です。

で、きょうテーマにしたいのが、

* 「ヒトをとらえている半永久的な運動」と「トリトメのない記号=まぼろし」の関係
(※ 「トリトメのない記号」の発するまぼろしを、「トリトメのない記号=まぼろし」と変更します)

なのですが、ややこしいです。どう、言葉にしたらいいか、迷っています。でも、この記事を読んでいただいている方々に、分かってもらえるように努めます。

で、「トリトメのない記号=まぼろし」の「記号」ですが、「記号論」や「記号学」という既存の分野で研究されているさまざまな定義については、自分是不案内です。かと言って勉強しようという気力もありません。正直言って、お勉強が嫌いなのです。こうした傾向は、小学生のころからありました。「人の話を聞かない」「落ち着きがない」などと、通知表に何度書かれたことでしょう。

せっかちなんでしょうか。授業で、何か新しいことをするとしますね。すると、先生の説明を半分も聞かなくちから、その作業をこっそり始めてしまうのです。肝心なところを聞かずに始めるのですから、当然失敗します。そして、やり直しをさせられる。そのたびに先生に叱られるのですが、また別の機会に同じようなことする。その繰り返しでした。

ですから、本を読むさいにも、じっくり読むのが苦手。斜め読みや、飛ばし読みをして、だいたいの見当をつける。「速読」と呼ばれているものとは、また違うのではないのでしょうか。たぶんですけど。速読にも、いろいろな流派があるみたいですね。自分は、その種の講座を受けたことも、ハウツー本を読んだこともないので、分かりません。

で、たぶん「人の話を聞かない」「落ち着きがない」の延長として、新聞の下にある本の広告で、興味深い言葉を並べたタイトルを目にすると、もう頭の中がトリップ状態に

なってしまいます。いろいろ妄想しちゃうんです。今はお金がないですから、当然のことながら、本を買うなどという贅沢はできないわけですし、本の広告を眺めながら、ぼけーっとすることが数少ない楽しみの一つになっています。

ところで、みなさん、

*ヒトは本を読めない

という説を、お聞きになったことがありますか？ どういうことかと申しますと、「文章＝テキスト（＝テキスト）＝text＝textile＝織物」を読むという行為は、実に不確実で不安定なものであり、誰一人として、「書かれたもの＝意味するもの」には到達できないし、解釈は各ヒトによって異なる、という当たり前と言えば当たりの「屁理屈＝本当すぎる＝論破できない説＝当たり前すぎてうさん臭い話＝正論」なのです。

だからこそ、1冊の本についての読書感想文は、各ヒトによって異なるわけですし、学者の世界では、あるカリスマ的なギョーカイ人が何かを書くと、それをめぐっていろいろな意見を吐くヒトたちが現れ、「喧々諤々（けんけんがくがく）＝キリのない口喧嘩」をするわけです。それだけ意見が分かれるのならば、

ヒトは1冊の本さえちゃんと読めていないのだ

と断定しても、的外れな意見とは言えないでしょう。

テキストで思い出しましたが、文学なんかでは、作品を批評するさいに、「アンビグイティ＝ambiguity＝両義性＝多義性＝あいまいさ」という考え方で、分析をすることがあります。昔、エンプソンという英国の人の書いたSeven Types of Ambiguityという本の存在を教えてくれたのは、「学魔」こと高山宏氏でした。

後に邦訳が出たそうですね。自分は怠け者なので、原書も邦訳も読んでいません。ただ、タイトルを思い出しながら、何が書いてあったのだろうか？なんて、今ごろになって空想＝妄想するだけです。Seven Types of Ambiguity＝「あいまいさに、7タイプがある」とは、どういうこっちゃ？ おもしろそうですね。いつか、自分勝手にじっくり考え

てみたいです。

で、

読むという行為の不可能性

に過度にこだわったのが、たとえば、ステファヌ・マラルメ、ジャック・デリダ、モーリス・ブランショだったらしいのです。一方で、その

不可能性に快樂を見出す

というおもしろい曲芸を見せてくれたのが、たとえば、ロラン・バルトという人でした。フランス語で書いた人ばかり挙げて、ごめんなさい。ほかの言語圏にも、この手の人は、たくさんいるはずですよ。

さきほど触れたエンブソンさんも、その中に入りそうな気がしますけど、勘違いでしょうか？

ニュー・クリティシズム

と呼ばれた、英米の文芸批評運動の草分けの草分けでしたもんね。そうそう、ノースロップ・フライなんて、カナダ生まれの人もありました。あの人は、なかなか器用な職人さんでしたよね。フランスの

ヌーベル・クリティック

に負けないくらい、いい仕事をしていらっやったと聞きます。

ただ今述べた英米のギョーカイ情報は、すべて、かつて少壮気鋭の英文学者だったこ

ろの高山宏氏からの受け売りです。一方、この国では、たとえば、情報の鮮度の古い自分には、蓮実重彦＝蓮實重彦氏くらいしか、思い浮かびません。ただ、ギョーカイで、

「表象」とか「表象文化論」とか「表象作用」

という言葉たちを頻繁にお使いになる中堅や若手の方でしたら、読むことの不可能性には、ある程度敏感なのではないでしょうか。学生さんが、この記事をお読みでしたら、先生選びの一つの目安にしてください。

*

ちょっと寄り道をして、マニアック＝オタクっぽい話をしてしまいましたが、その道草中に、

> 「文章＝テキスト（＝テキスト）＝text＝textile＝織物」を読むという行為は、実に不確実で不安定なものであり、誰一人として、「書かれたもの＝意味するもの」には到達できないし、解釈は各ヒトによって異なる

と書きました。これって、きょうテーマにしたい「トリトメのない記号＝まぼろし」と大いに関係していることに気づきました。「記号」について考えるさいに、

★「意味するもの＝たとえば言葉＝シニフィアン＝表現＝見た目＝外見＝表面＝皮＝殻」

と、

★「意味されるもの＝たとえば言葉の意味＝シニフィエ＝意味＝内容＝中身＝殻の中の空白・空間」

とに分ける、作業＝手続き＝段取り＝演出＝プレゼンをする場合があります。前者を「能

記」、後者を「所記」とする立場の人たちもいます。個人的には、「能記」→納期→農機→農期→のんき→「ははのんきだね」という連想、そして「所記」→書記→総書記→アホ→暑気→食器→ママレモン→「あんた正気かい？」という連想がなぜか働き、苦手です。要するに、好みの問題で、深い意味はありませんので、お気になさらないでください。

で、以上のように、記号を2つに分ける一方で、その分けられた両者の関係を、

★「意味作用＝記号作用＝シニフィカシオン＝記号表意作用＝さようでござるか」

と名づける作業もあります。個人的には、苦手です。自分のイメージしている「哲学」というよりも、「お勉強」を連想させるからだと思います。

ですので、「人の話を聞かない」、「落ち着きがない」、しかも、「ヒトは本を読むことなどできない」などと思っているうえに、お勉強嫌いで友達が少なく無職で、「自分の頭と体を使って、哲学がしたーい」なんて、ほざいている素人1匹である自分としては、上で★印をつけた言葉＝専門用語＝ギョーカイ語＝ジャーゴン＝ジュゴン＝職業語＝仲間言葉＝隠語＝インドりんご＝一種の方言を、このブログでは使わないと思います。たぶんです。場合によっては、拝借するかもしれませんが。

特に、シニフィアンとかシニフィエとかは、うつで難聴者の自分には「死に不安」とか「死にてー」と聞き間違えそうで、気味が悪く危なっかしくて、とうてい使えそうもありません。「意味するもの」「意味されるもの」くらいなら、分かりやすいし、偉そうにも聞こえないし、ギョーカイ語的な響きがないので、使えそうです。

ちなみに、自分の書いた言葉を口にした時や、自分の口にした言葉を、自分自身が聞き間違えるなどという冗談みたいなことが、自分にはよくあります。現に、きのう取り上げた「差別化」ですが、記事を書きながら、ふと「差別化は差別か？」とつぶやいたところ、「キャベツ化はキャベツか？」と聞き間違えました。

零細的なシニフィアンのとちくるい現象でしょう。ふと、不遜（ふそん）にも、マラルメさんやデリダさんやラカンさんの、壮大な意図的シニフィアンのとちくるい運動＝実践＝キャンペーン＝業績を、思い出しました。いずれにせよ、シニフィエとかシニフィアンとかシニフィカシオンだけは、発音しにくい、つまり、言いにくくもあり、言えそ

うもありません……。言える、言えない、言えれば、ん？ 言えない？ と言えば。

「いえねえ、いえねえ、もう、いえねえ」

みなさん、覚えていらっしゃるでしょうか？ きょとんとされている方のほうが、多いかもしれません。「せんだみつお」さんの、数あるギャグ作品のうちの1つです。あの人はうるさいし、うざいですが、自分にとっては憎めないタイプのタレントさんです。あの人のギャグで代表的なものは、「なはっ」とか、「せんだ、えらい」ですよ。

で、「いえねえ、いえねえ、もう、いえねえ」というのは、確か、日テレの「うわさのチャンネル」とかいう、お笑いバラエティー番組でやっていたワンパターンギャグの1つです。あの番組では、和田アキ子さんが「ゴッド姉ちゃん」と呼ばれていて、タモリさんとか、せんださんとか、なぜかプロレスラーのザ・デストロイヤーさんとか、なぜかガッツ石松さんとか、山城新伍さんとか、「木の葉のこ」さん+「マギー・ミネンコ」さんとかいう、最近全然テレビで見ない女性とか、とにかくたくさんレギュラーがいました。わけの分からない番組でした。「木の葉のこ」さんなんて、個人的には好きなタイプだったので、その消息がとても気になります。

今、一生懸命にあの番組の内容を思い出そうとしているのですが、やたら多かったワンパターンのギャグの断片だけが、頭の中で乱舞しています。收拾がつきそうもありません。めちゃくちゃアナーキーでしたねー。好きでした。ああ、あのワンパターンを見たい。ただそれだけが目的で、毎週金曜日の10時を待っていた記憶があります。いったい、あの番組は、なんだったのでしょうか？

で、せんださんだけに的を絞ろうとしているのですが、これまた、的が絞れないのです。あの人がやっていたのは、なんだったのでしょうか？ と再び自問するしかないのです。いずれにせよ、せんださんのギャグは、意味がありそうで、ないところが、気に入っていました。いわゆる「ナンセンス＝ノンセンス＝無意味＝くだらない＝アホちゃうか？」です。何の意味もない、つまり

「意味されるもの」がなくて、「意味するもの」だけが、「とちくるっている＝踊りまくっている」

感じがして、好きでした。

あのわけの分からない番組のことを考えていたら、「判断停止＝思考停止＝エポケー＝えっ？ ぼけーっ」状態になりかけたので、きょうのテーマをコピペしておきます。

>＊「ヒトをとらえている半永久的な運動」と「トリトメのない記号＝まぼろし」の関係

です。

あれっ？ ん？ 今、きょうのテーマに戻ろうとして、いきなり、デジャビュ＝既視感→筋弛緩＝でれーっとした感じを覚えました。自己分析してみます。このテーマと、何やら、そっくりの体験をしたと思ったさいに、ダブって＝カブって見えたのは、さっきの「いえねえ、いえねえ、もう、いえねえ」にまつわる記憶でした。ただ今、焦りつつ、自分の思考を整理しようとしております……。そっくりです。激似です。酷似です。そっくりな点がそっくりなのです。頭の中が少し整理できてきましたので、思っていることを書きます。

バラエティー番組のワンパターンたち、お笑いタレントのワンパターンたち、先ほどの「いえねえ、いえねえ、もう、いえねえ」に代表される元・流行語および新語たち、次々と社会に登場した現象や風俗に貼られたラベル＝レッテルたち、スーパーに並ぶ大量生産された商品の数々、電気製品の量販店に並ぶ大量生産された製品の数々、テレビに続々と登場しいつかは消えていくさまざまな肩書の人たち、この国の歴代の内閣総理大臣たちおよび国務大臣たち……。みんな、やっぱり、そっくりです。

そっくりな点がそっくり

なのです。

つまり、

*ヒトによる選別と排除を経た、そっくりなものがたくさん並んでいる、あるいは、ほかにたくさん「ある・いる」と考えられる「もの・ヒト・こと・さま」たちという「トリトメのない記号=まぼろし」たちの存在、

そして、

*自らが選別し排除した結果として、たくさん並んでいる、そっくりなものたちが個々に備えているはずの差異をあっさり忘れ、そっくりであることに飽き飽きし、そっくりなものたちを差別化あるいは入れ替えるという方法で、自らの飽くなき欲望を満たそうとするヒトの半永久的な運動、

さらに、

*自分自身さえも、そっくりなもののみなし、そっくりであることに満足する一方で、ほかのヒトたちと自分とが異なっていることまでも、同時に欲し、その両義的な欲望を満たすために、自らを差別化する、あるいはパーツを入れ替えるか改変するという方法で、自らの飽くなき欲望を満たそうとするヒトの半永久的な運動

といった、現象および事態が、

*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を、実現=出現=現出させている

あるいは、

*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を、「蜃気楼」=「まぼろしのパノラマ=スペクタクル」のように構築=仮設=捏造している

のではないかと自分は思うわけです。

なお、「大いなる存在の連鎖」とは、アーサー・ラヴジョイという人が書いた「The Great Chain of Being」のタイトルの邦訳です。この書物自体の邦訳では「存在の大いなる連鎖」となっています。原書の名を教えてくれたのも、上述の高山宏氏です。邦訳が出版される前のことでした。勉強嫌いの自分は、もちろん原書も邦訳も読んでおりません。たった今、上の文章を書いているさいに、確か便利な言葉があったはずだと思い、運よく、それらしき言葉が頭に浮かんだので、さっそく使ってみました。想像力を喚起し刺激してくれそうな、いいフレーズだと思います。

「大いなる存在の連鎖」

何でも強引につないでくれそうなイメージがあって、自分は大好きなフレーズです。高山宏氏も、きっと大好きなのではないかと、勝手に決めつけています。高山氏のご本は、どれも、すごいとしかいいようのないものなので、自分は敬遠してきました。高山先生、ごめんなさい。何度か、お昼をごちそうしていただきながら、「食い逃げ」状態で、先生の前から姿を消してしまったことを、心よりお詫び申し上げます。先生の相手をするには、自分には荷が重過ぎました。あれっ、何だか、変な方向（ほうこう）にこの文章が彷徨（ほうこう）してまいりました。ぎゃおーなどと咆哮（ほうこう）してしまいそうなので、急いで話を戻します。

要は、

*ありとあらゆるものが「トリトメのない記号=まぼろし」である

ということです。そのことに敏感で、しかも、そのことを「書くという行為」を通じて分析=実践してみせたのが、ロラン・バルトという人でした。バルトが、「トリトメのない記号=まぼろし」の例として分析の対象にしたものを挙げれば、文芸作品（※文芸批評家でしたから、当然です）、娯楽小説、ファッション=衣服、広告写真、写真一般、映画、プロレス、UFO、シトロエン、エッフェル塔、演劇、俳優、JAPONという記号の国などです。実を申しますと、自分は大学の卒論にバルトを選びました。卒論のコピーが、家の押入れかどこかに保存してあるはずなので、いつか見つけたら、読み返してみたいです。

*

で、とりあえず、上に挙げた「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」についてのメモみたいなものを、以下に書き連ねてみます。

*あらゆる情報が、「トリトメのない記号=まぼろし」になり得る。

*「トリトメのない記号=まぼろし」となったあらゆる情報は、そのコンテンツとは無関係に=テキトーに、また、そのコンテンツを配布するさいの目的=意図=企みに沿う形で、あるいは逸脱する形で、あちこちに「並べられる=陳列される=展示される=羅列される=遍在する」か、「彷徨（ほうこう）する=さまよう=うろちよろする」

*ニュース（※政治・経済・社会・企業・スポーツ・おくやみ・国際・新製品・IT・出版など）、うわさ、ゴシップ、政府発表による公報、自治体による広報、口コミ、マーケット情報（※株式市場・為替市場・債券市場など）、花粉情報、井戸端会議（※もう死語ですか？）での話題、公園におけるママたちの立ち話、生活情報（※医療・健康・ファッション・食生活・住まい・子育て・教育・エコ・求人・マネー・流行など）、映像（※通信社やメディア提供=配給のもの、YouTube、投稿写真、投稿映像など）、ネット（※PCのみならずケータイを含む）を通じての情報（※上記のものすべてに加えて、たとえば、スピリチュアル、超常現象、宗教、小説.....ありすぎて記載不可能）などの、情報・データすべてが、「トリトメのない記号=まぼろし」として、購入されたり、無料配布されたり、流出したり、漏洩（ろうえい）したりした後に、消費されたり、パスされたり、廃棄処分されたり、忘却されたり、保存されたり、想起されたりする。

*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を成立させている裏=根底には、ヒトに備わった飽きやすく忘れっぽい習性がある。

*ロラン・バルトは、非常に飽きっぽい人だった。次々と、「クルージング=とっかえひっかえ=ハッテンバ巡り」しまくっていた（※これ、意味深です）。その意味では、部分的に、ミシェル・フーコーとそっくり（※これ、スキャンダラス=ゴシップ雑誌的です）。故人のご両人に鞭打っては、失礼というもの。ただし、フーコーさんなら、無知ならぬ鞭ペンペンを喜んで、例のおサルさんのような笑い声を上げるかもしれない。キッキ、ヒッヒなんて。ところでフーコーさんとポールソンさんてそっくりじゃありません？ いずれにせよ、ごめんなさい、バルトさん、フーコーさん。なお、バルトさんが忘れっぽかったかどうかは、不明。

ありゃー。そろそろ、このブログサイトの文字数制限にひっかかりそうです。またもや冗長になった記事の、この行まで読んでくださった方、ありがとうございました。また、来てください。お待ちしております。

まぼろし

◆まぼろし

>*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」。

>*ありとあらゆるものが「トリトメのない記号=まぼろし」である。

>*あらゆる情報・データが、「トリトメのない記号=まぼろし」になり得る。

>*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を成立させている裏=根底には、ヒトに備わった飽きやすく忘れっぽい習性がある。

以上が、きのう書いたことの中で、自分にとって大切だと思われることです。

で、きょうは、その4つのフレーズのどれにも含まれている「まぼろし」という言葉について、考えてみたいです。このブログでは、以前には、

>すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している

と書いていました。それが、現在では

> 「トリトメのない記号=まぼろし」

と書いています。言葉は「何とでも言うための便利な道具」であると同時に、「何とでも言う結果として、その何とでもが、デタラメ=嘘になる欠陥品」でもあるという、表裏一体の性質を備えています。つまり、

便利=重宝=満足=こりゃいいわ

でもあり、

欠陥=不足=不満=駄目だこりゃ

でもある。

以上のように考えてみると、ヒトが知覚し言語化している森羅万象（※ヒトが作ったものたちや、ヒトが作ったものではないものたち）が、上述の両面性を備えていると言えるわけで、そうした両面を、再度ヒトが「知覚する=認識する=実感する=勝手に思考する」のは、多分にヒトの「勝手=都合」に依存しているとも、言えます。すると、

*ヒトは、森羅万象を相手に独り相撲をとっている

という、トホホな言い方も当然のことながら、できるわけです。

ですので、ヒトはその「トホホ状況」を忘れるために、神や仏や超越者や宇宙の摂理や真理や進歩や希望……といった

自分たちの「上に立ってくれる＝メタな」存在を「空想＝想像＝妄想＝捏造（ねつぞう）」

して、

自分たちはその「代理人＝代行者＝偽者＝虎の威を借りる狐＝張子の虎＝この惑星の官僚・管理人・大将」

を務め、その

「見返り＝報酬＝良かったね＝ごまあ見ろ」

として

「メタメタ＝めちゃめちゃ状況」に陥っている

わけです。

ヒトは、世界をまだら状にしか知覚できず、また、1度に1台の「テレビ受像機＝意識＝認識」の画面しか見られないのが普通ですし、しかも極めて忘れっぽい＝アバウトでテキトーな生き物ですから、

(1)「メタメタ＝めちゃめちゃ状況」の都合のいい部分だけを見て、「幸せ＝平和＝自己満足＝虚栄心＝人間様にとって良ければそれでいいのだ」と、はしゃいでいるヒトたちが多数います。

その一方で、

(2) その「メタメタ＝めっちゃめっちゃ状況」の都合のいい部分だけでなく、都合の悪い部分にも目を向け、「危機だ＝大変だ＝罰（ばつ）だ＝罰（ばち）だ＝人は罪深い存在なのだ＝悔い改めよ」と考えこむヒトたちも多数います。

ところで、みなさん、あなたは、上述の（1）と（2）のうちなら、どちらですか？その時によって違いますよね、たいていは。○か⊕か、1か0か、SかMかなんて、簡単に選択なんてできませんよね。そうです、TPOという要素を考えに入れるべきです。一概に結論を出す必要など、全然ないのです。

ですので、このブログでは、短絡的に「みんな幸せになろうね。さあ、お布施、お布施」とか「悔い改めよ。さあ、お布施、お布施」などという、勧誘も恐喝も洗脳もいたしません。ただ、

「自分の体と頭を使って、哲学がしたーい」

だけを実践いたしております。人畜無害でございます。どうか、ご安心くださいませ。

*

で、まぼろし、です。以前にこのブログで書いたことを、以下にコピペします。

>*幻＝まぼろし＝間ぼろし＝間滅し＝魔ぼろし＝魔滅し

>*テレビに映る「まぼろし」は、遠くにあるということ、つまり、「距離＝間」を滅ぼします。ほら、television = tele（遠く）+ vision（見ること）、ですよね。距離をなくして見えるようにする、ということです。だから、「間滅し」なんです、自分に言わせるとですけど。で、テレビは、「人面管＝ブラウン管を使って、テレビ放送を受信する機械」から、「人面壁＝壁のように薄型化された画面で高精細度テレビ放送（＝ハイビジョン）を受信する機械」に進化しました。簡単に言うと、「人面管から人面壁へ」と出世したのです。その時に、「魔＝ゴースト＝醜さ＝見にくさ＝ノイズ」を徹底的に取り除いて、すごくリアルできれいな画面を実現したのです。だから、「魔滅し」なんです、個人的な意

見ですけど。

以上の2つの文章は、このブログのバックナンバーである「人面管から人面壁へ」2009-02-10 から引用しました。万が一、興味を持たれた方は、ご一読願います。面倒だと感じていらっしゃる方は、お読みいただかなくても、いっこうに支障はありませんので、このままお読み続けてください。

で、

まぼろし

です。久しぶりに、「記号」について考え始めたとき、「記号がまぼろしを発する」とイメージしていたのですが、そうすると記号のトリトメなさを演出できない気がしてきたために、

「トリトメのない記号＝まぼろし」

というふうに、「お色直し＝衣替え」をしてみました。そのほうが、自分としては、しっくりくるのです。みなさんは、どうお思いになりますか？ どうでもいい、ですか？ そうですよね、失礼いたしました。

「まぼろし」と「トリトメのない記号」を等号で結んじゃたんですが、その根拠だったのが、

(A)「距離＝間」を減ぼす

(B)「魔＝ゴースト＝醜さ＝見にくさ＝ノイズ」を取り除いて減ぼす

という、テレビ受像機を「比喩＝たとえ」として使用したさいの、お古の「作業＝操作＝

こじつけ」でした。比喩というのは、あるものごとを説明するのに別のものごとを用いるという、すり替え＝詐欺をすることです。

ですから、注意していないと、比喩を使うほうも、比喩を使うのを見聞きするほうも、話がすり替わっていることに気づかず、ころりとだまされてしまう、という事態にしばしば陥ります。よく考えれば、そうなるのは当たり前です。で、今はテレビではなく、「トリトメのない記号」をテーマにしているわけですから、「まぼろし」＝「トリトメのない記号」とするからには、「トリトメのない記号」という視点から、「まぼろし」を再度考えて検証してみたいのです。

変なことにこだわっている、とお思いでしょう。ごめんなさい。こういう性質（たち）なんですよー。どうにも、ならないんですよー。ですので、手短にまとめてみたいと思います。

(1) ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして、他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち。たとえば、スーパーに陳列されている大量生産された商品たち。そこそこのお金さえあれば、これほど身近で入手しやすいものはない。つまり、「距離＝間」を減ぼす。また、キュウリやカボチャたちも商品である。よく見ると、それぞれが個性的な形をしている。しかし、店頭に並べられると、みな同列に扱われる。差異を無視する。つまり、「距離＝隔たり＝間」を減ぼす。したがって、「間減ぼろし＝まぼろし」と、とりあえず呼んでみる。

(2) 身近で、誰もが簡単に入手し、利用できるものは、その使い道や用途がなくなれば、用済みとなる。愛着や執着をそれほど覚えることなしに、廃棄＝処分できる。これを捨てたら、「化けて出るぞー」とか「罰が当たるぞー」とかいう、恐れや後ろめたさは、全然感じない。つまり、魔物めいたものが、いっさい感じられない。したがって、「魔減ぼろし＝まぼろし」と、とりあえず呼んでみる。

めっちゃめっちゃこじつけ、やってますよね。自分でも、そう思います。でも、好きなんですよー、こういうことが、とつても。「まぼろし＝幻＝マボロシ」。この言葉、大好きです。ひらがなでも漢字でも、字面がいいと思います。カタカナだと、イマイチかなって、感じ。何だかマーボー豆腐のロシア風という感じがしませんか？ そんなのがあったら、どんな味なんでしょう？じっくり煮込むのでしょうか？ボルシチみたいに、西洋赤蕪（＝ビート）やキャベツやトマトなんか入っていそうですね。当然、お豆腐は、最後

のほうでスープに放り込む。そして、サワークリームで仕上げる。うーむ。案外、いけるかも。ブログの神様、こうちゃんなんか、レシピを紹介してくれそうですね。話を戻します。

「まぼろし=幻」。やっぱり、いいなあ、この言葉。以前、当ブログで、「うつせみ=空蟬=現人」と「あなた=彼方=貴方」という2つの言葉が大好きだと書いたことがあります。「うつせみ=空蟬=現人」を少し大きめの辞書で、引いてみてください。じーん、と胸にくる意味があります。

一方の「あなた=彼方=貴方」には、(1)「彼方」、つまり、「かなた=向こう側=遠く=遠い世界=遠い昔」という系列と、(2)「貴方=貴女」、つまり、「あちらの方(ほう)にいらっしゃるお方(かた)=目の前にいらっしゃる貴方または貴女=「ねえ、あなた」の「あなた」という系列の、2つがあります。「ねえ、あなた」……。

「ねえ、あなた」で思い出しましたが、

「山のアナ、アナ、アナタ、アナタ、もう寝ましょうよ」

みなさん、覚えていらっしゃいますか？ これも、古い話で恐縮です。このギャグは、当時、三遊亭歌奴(さんゆうていうたやっこ)、現・三遊亭圓歌(さんゆうていえんか)師匠の新作落語の一節です。実は、この「山のアナ、アナ、アナタ、アナタ、もう寝ましょうよ」については、2つお断りしなければならないことがあります。

(A) もともとは、カール・ブッセというドイツの詩人の詩の一節であり、上田敏という人が「海潮音」という訳詩集の中で「山のアナタの空遠く、「幸(さいわ)い」住むと人のいふ」と訳した部分が出典です。

(B) 「アナ、アナ、アナタ」と発声されているのは、現・三遊亭圓歌師匠が、吃音(きつおん)という発声障害を苦労して克服され、晴れて落語家になられた体験を、逆にとり、一種のギャグとされたという経緯があります。

で、B)の中で触れた「吃音」というのは、自分の場合ですと「難聴」と同じで障害

です。好きでなったものではありません。また、生活したり生きていくうえで、不自由や差別も経験します。そんなわけで、三遊亭圓歌師匠は、あの落語の演目（＝作品）を、現在では差し控えられているようなのです。その点では、立派だと思います。自分なんか、このブログで、自分自身の聞き間違いをネタに、おふざけをしておりますが、中には、そうしたことに不快な気持ちを抱かれている方々もいらっしゃるわけです。微妙な問題ですよ。

いずれにせよ、当時の思い出をお話ししますと、とにかく、おもしろかったです。自分は、小学生くらいでしたが、よく真似をしました。「あな、あな」というところや、「あなた寝ましょうよ」という部分に、ちょっとエッチな響きを感じて、やたら、にやにやしなながら、喜んで口にしていた記憶があります。ませていたんでしょうね。あるいは、思春期への助走という感じですか。コドモって、そういうことに、案外、敏感なんですよ。あなどれないです。子育てをされている方は、日々感じていらっしゃるのではないのでしょうか？

さて、

「トリトメのない記号＝まぼろし」

の1つというより、代表選手の1つが、

言葉

です。このことに注目して先駆的な仕事をしたのが、フェルディナン・ド・ソシュールというスイスの言語学者でした。ご存知のように、スイスでは複数の言語が使用されていますが、どちらかというフランス語で仕事をなさっていた人です。

フランスの詩人、ステファヌ・マラルメは、ソシュールに大きな影響を受けて詩作＝思索＝試作した人です。たった今書いた、「詩作＝思索＝試作」（＝しさく）は、「言葉の意味」に関係づけて、「言葉の字面」に注目した、半分おふざけ、半分マジな試みです。ですから、ソシュールやマラルメともつながるわけです。こういうことが、自分は大好きなのです。だから、このブログの文章は読みにくくなるわけで、そういう意味では、ごめんなさい、と謝るしかないのです。

*

で、さきほど商品を例に挙げて説明しましたことから、「トリトメのない記号＝まぼろし」という言葉がどうして出てきたのかを、ご理解いただけたでしょうか？ あと説明を加えたいのは、

「トリトメのない」

という部分です。みなさんは、「トリトメのないもの」と聞いて、何を連想なさいますか？ このブログですか？ あれ、まあ、言えていますね。思わず納得しちゃいました。確かにそうですね。ほかには、どんなものを思い浮かべますか？

おしゃべり、話、日記、毎日の生活、日常、日々、会話、雑談、小説、論文、レポート、コラム、エッセイ、随筆、文章、記事、つぶやき、独り言、愚痴、ぼやき、考え、話題、テーマ、議題、会議、ミーティング、会合、議論、授業、講義、公演、ギャグ、妄想、夢、たわ言、感想、思い、追憶、出来事、ニュース、番組、痴話喧嘩、夫婦喧嘩、映画、ゲーム、試合、写真、絵、会議、サイト、ブログ、プロフ、世界、社会……何でもあり状態になってきましたね。これって、やっぱり、

>ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして、他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち

つまり、「記号」ではないでしょうか？

どうりで、トリトメがないわけです。かわりばえのしない、だらだらとした、退屈で、刺激がなく、次々と同じものやことが続くような感じ。これが、「トリトメのなさ」のイメージではないでしょうか？

みなさん、どうして、ヒトは、「記号」に「トリトメのなさ」を感じるのでしょうか？

それは、やはり、

ヒトは、飽きっぽく、忘れっぽい生き物だ

からではないでしょうか。最初のうちは、目新しく、うきうきどきどきしていたのに、そのうきうきどきどきに慣れると、うきうきどきどきという感情を忘れてしまう。飽きてしまう。そこで、もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒトという「記号」たちを対象にした「差別化=変身=転換=トッピングの追加」に、ヒトは血道をあげるのです。以下に、「差別化」の具体例を、挙げてみます。

髪型を変える、髪の色を変える、美容院を変える、病院を変える、スカートの丈の長さを変える、お気に入りのブランドを変える、転職する、ジムに通ってからだを鍛える、付き合う人（=仲間、恋人、配偶者）を変える、眼鏡のフレームを変える、生き方を変える、家出する、お酒を飲む、違った占い師に頼ってみる、こわいけどやばいことをやってみる、ペットを飼ってみる、別のシャンプーとリンスを試してみる、住まいをリフォームする、引越しをする、避妊をやめてみる、避妊をすることにする、一線を越えてみる、美容整形手術を受ける、違う宗教を試してみる、財布を変える、ヒゲを生やしてみる、かつらをつけてみる、植毛のために金をつぎ込む、よく行くパチンコ店を変える、イメージチェンする、化粧品を変える、違った香水をつけてみる.....

上に並べられた例を見ていて、何か気づいたことはありませんか？

別に意図して、書き連ねていたわけではありませんが、次のようなことに気づきました。箇条書きにしてみます。なお、「差別化」という言葉を使っていますが、その対象である「記号」は、もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒトなど、つまり、あくまで広い意味でとってください。

*男性より女性のほうが、差別化を実行しやすい

*会社員より自営業のヒトのほうが、差別化を実行しやすい

*フリーランス的な立場のヒトのほうが、差別化を実行しやすい

*生徒や学生より生徒や学生ではないヒトのほうが、差別化を実行しやすい

*経済的に余裕のあるヒトのほうが、差別化を実行しやすい

*子持ちのヒトより子どもいないヒトのほうが、差別化を実行しやすい

*所帯持ちより独身者のほうが、差別化を実行しやすい

*正社員よりフリーターのほうが、差別化を実行しやすい

以上は、個人的な感想です。でも、何となく、そういう傾向がみられるような気がしませんか？ もし、そうだとすれば、なぜでしょう？ たぶん、

*差別化の敵は、しがらみ＝世間体＝社会の目＝自分のまわりの空気（※K Yの空気です）である

からではないでしょうか？ また、こうも言えないでしょうか？

*もっとも差別化を実行しにくいのは、「ちゃんとした」職について、「ちゃんとした」仕事を与えられていて、「ちゃんとした」家庭をもって、「ちゃんとした」行動をするようにまわりから求められている会社員や公務員である

と思えるのです。だから、たとえば、

*ビジネス書などで、「差別化」とか「特化」とか「自分のブランド化」とか「ブランド人」とか「自己変革」とか「自己啓発」とかがキーワードのハウツー本が氾濫し、多数の「ちゃんとした」および「ちゃんとしていない」社員が、それらを多量に購入し、消費し、保存し、いつかは、廃棄する、という状況が恒常化している

と言えるわけで、すごく大雑把な言い方をすれば、

*サラリーマン（※ウーマンも増えつつあるが、マンのほうが依然として偉そうにしている）は、昇進とサラリーの増額を目指して「差別化」のノウハウを、必死になって次々と求めるといふ、さまよえる＝おろおろうろうろしている「トリトメのない記号」の代表例となっている

と言えるだろうし、また、

*女性は、男性と比較して「トリトメのない記号」をまとい、消費する機会に恵まれていて、自分自身が、あらゆる意味での「差別化」を積極的に推進する、頼もしい「トリトメのない記号」として、社会において確固とした地位を築き上げている

ということは、要するに、

*「差別化」に関して言えば、女性に比べて、男性は圧倒的にトホホ状態にある

と言えるのではないかと？ そうだとすれば、まことにおめでたいことだとも言えなくもない。

またしても、長くなりすぎました。ここまで読んでいただいた方に、深く感謝します。また、来て、遊んでいってください。

トリトメのない話

◆トリトメのない話

＞*サラリーマン（※ウーマンも増えつつあるが、マンのほうが依然として偉そうにしている）は、昇進とサラリーを増額を目指して「差別化」のノウハウを、必死になって次々と求めるといふ、さまよえる＝おろおろうろしている「トリトメのない記号」の代表例となっている

＞*女性は、男性と比較して「トリトメのない記号」をまとい、消費する機会に恵まれていて、自分自身が、あらゆる意味での「差別化」を積極的に推進する、頼もしい「トリトメのない記号」として、社会において確固とした地位を築き上げている

＞*「差別化」に関して言えば、女性に比べて、男性は圧倒的にトホホ状態にある

以上が、きのうの記事の結論めいた部分を引用したダイジェストです。ここで、お断りというか、確認しておきたいことがあります。再び、引用させてください。

＞なお、「差別化」という言葉を使っていますが、その対象である「記号」は、もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト、つまり、あくまで広い意味でとってください。

ということなのです。

で、きょうは、まず、「トリトメのない記号」に「自分自身」が含まれるという点に注目したいと思っています。あらゆるもの＝森羅万象が「トリトメのない記号」になり得ると考えた場合に、人間様を除外するのは不公平というものです。さらに、人間様のうちで、唯一自分自身でその存在を確認できる「自分自身」を除外するわけにはまいりま

せん。

そうなんです。この記事を書いている自分も、あなたも、「トリトメのない記号」としての側面を持っているのです。えっ？ わたしが？ はい、残念ながらと申しますか、幸運にもと申しますか……。あっ！「えっ？ わたしが？」と言えば……。

思い出しました。

「わたしってブスだったの？」

です。

みなさん、これは覚えていらっしゃるのではありませんか？ 15年くらい前に、放映されていたテレビドラマのタイトルですよね。みなさん、そのころは、どうなさっていましたか？ 自分は、まだうつではありませんでした。でも、いつそうなっても、おかしくない過酷な条件下で、フリーランスの仕事をしていました。

で、「わたしってブスだったの？」ですが、当時お仕事で海外赴任、または、ご留学とかご遊学とか長期のご旅行で、この国を留守になさっていたなら別ですが、それがテレビドラマの題名だとは知らなくても、タイトルのフレーズだけは、聞いたことがあるのではないのでしょうか？ 実は、自分は、たった今ググって、「わたしってブスだったの？」というのが、松田聖子ちゃんの主演していたドラマ名だと知りました。お恥ずかしい限りです。

でも、思春期以後は、めったにテレビドラマを見なくなった自分が、そのフレーズを知っていることから推測すると、そのころには、ちょっとした流行語になっていたのではないですか？ ですので、流行語だった、ということにしておきましょう。えっ？ それって流行語だったの？ なんて、おっしゃっている方が、ネットの向こう側にいらっしゃるような気もしますが、見逃して、いや、聞き逃してください。なにしろ、これは、自分の見たことないドラマでもありますので、あっさりとお話を戻します。

「わたしって「記号」だったの？」

はい、そのようでございます。もっと正確に申しますと、「わたしって「トリトメのない記号」だったの？」となります。

「ばっかみたい！」バシッ！

あれ〜っ！

女性が相手の場合には、きっと、ほっぺをビンタされることでしょう。自分は、そういうことで快を感じる性質ではありませんので、きっとへこんで、後で一人ひっそりと涙を流すでしょう。Yes, you are a「トリトメのない記号」。だなんて、よく考えれば、失礼ですよ。まだ、YES, TAKAXX CLINIC. のほうが威勢がいいし、広告代理店さん作だけあって語呂もいいし、「自己差別化」の決定打になりそうで、ましだと思います。

奇しくも聖子ちゃんとひろみさんが、こんなところでかち合っちゃいましたね。「あら、おひさ」。「あーちっちっ」。なんちゃって。昔の話ですね。いろいろ噂があったのは.....、何を言っているのでしょうか、自分は？

えっと.....。そうでした。

*誰もが「トリトメのない記号」になり得る

というお話でしたね。これは、いくら強調してもしすぎることはない、大切なことだと思います。よく考えてみましょう。自分自身が「トリトメのない記号」になるとすれば、他の人たちと一緒にたにされて、「ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして、他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち」の1ケになるわけで、「スーパーに陳列されている大量生産された商品たち」や「農家で多量に栽培されたキュウリやカボチャたち」や「漁師さんが捕獲したサンマやイカたち」や「デパートで売られているブランドものの服や靴やバッグたち」と同じになるということです。

あなたの労働や時間やスキルや愛情などが、自分以外の誰かによって、お金や他の価

値ある何かと交換される。あるいは、只で、そうなる場合もあるでしょう。そのうえで、

*あなたという「トリトメのない記号」は、時間を拘束されたり、身柄を拘束されたり、利用されたり、搾取されたり、するのです。つまり、消費される

のです。そして、ご用がなくなれば、

*いつかは、処分=廃棄=バイバイされる

のです。これって立派な売買（バイバイ）じゃないですか。消費じゃないですか。

それが、えんえんとお亡くなりになるまで、繰り返されるかもしれないし、1度だけで終わるかは分かりません。セ・ラ・ヴィ。人生って、そんなものなんじゃないですか？ もし、そうなら、楽しく消費されたいですね。同時に、楽しく、森羅万象（=いろいろな、もの・こと・さま・他のヒト）を消費したいですね。ケ・セラ・セラ。なるようにしかならない、なんて投げやりにならないで、CHANGE の精神で、ポジにいきましょうよ。

ただし、ポジにやりすぎて、ネガにならないように、くれぐれも気をつけてください。ネガとポジは反意語ではなく、表裏一体の関係にあるのです。一瞬にして天国、一瞬にしてどん底なんて、冗談ではなく、マジであり得るのです。ここに、ポジからネガへの墜落の生きた見本が1匹=1ケいます。ほんまでっせー。信じておくなはれ。うつは、しんどいでっせー。自分自身が「トリトメのない記号」になる、というお話は、これくらいでええと思いますねん。

*

失礼いたしました。

で、きょう、もう1つ考えてみたいことがあります。以前の「こんなマヨじゃ、いやだ！」2009-02-12 という記事で、少し触れたことなんです。いちおう、リンクは貼って

おきましたが、ご面倒をおかけしても、なんですので、以下に、肝心な部分だけを引用します。なお、前後関係を説明しますと、マヨラーさんがマヨネーズにこだわるという話の途中で、書いたことです。冒頭の「そのもの」というのは、「トリトメのない記号」の一つである商品だをご理解願います。

＞（２）そのものではなくて、そのものの「機能＝用途＝役目＝使い道」を購入し、消費する

＞ちなみに、商品の使い道うんぬんよりも、どちらかという「もの自体」に愛着を覚える、というヒトもいますね。そういう現象は、「フェティシズム」とか「フェティッシュ」と呼ばれることがあります。何だか、風俗っぽい響きがありますよね。エロい予感がしませんか？ 実際、エロいんですけど、エロいヒトも、楽しんでます。エロいというのは、いわゆる「お上＝政治家＝官僚」みたいに威張っているのではなく、学問という業界でひな壇なんかを作って、威張っているほうの「エロい」なんです。つまり、哲学・文化人類学・社会学・宗教学だけでなく、経済学においてもテーマにされている「お話＝学問分野＝フィクション＝作り話＝紙芝居」なんです。おもしろい紙芝居なので、いつか書いてみたいと、かねがね思っています。

引用は以上です。

というわけで、「いつか書いてみたい」の「いつか」が、「きょう」みたいなんです。で、「フェティシズム」とか「フェティッシュ」について、書いてみたいと思います。簡単に言うと、

*ある「もの自体」の使い道より、その「もの自体」のとりこになってしまう

ことです。ちなみに、検索エンジンで「フェティシズム」とか「フェチ」なんてキーワードにすると、とんでもないエロサイトに紛れこんでしまい、とんでもない方向（ほうこう）に彷徨（ほうこう）し、未知（みち）の道（みち）に目覚めてしまい、その道に奉公（ほうこう）しちやって、「うふっ」とか「うひょーっ」とか咆哮（ほうこう）し、学生さんの場合には放校（ほうこう）される憂き目にあうことも、なきにしもあらずです。

ですので、検索する場合のコツを書きます。「フェティシズム」と「フェティッシュ」をダブルのキーワードでググるなり、ヤフるなりするのをお勧めします。くどいようですが、「フェティシズム」＋「フェティッシュ」ですよ。「フェティシズム」＋「フェチ」では、ありません。もっとも、未知の道に分け入りたい、あるいは目覚めたい方は、別ですけど。どうなっているんだろう。おお（or あら）、こんなの初めて、なんて具合に。

で、「フェティシズム」ですが、これは、上で簡単に説明した通りです。一方の、「フェティッシュ」は、「もの自体」、つまり、「フェティシズム」の対象を指します。ヒトは、いろいろな「トリトメのない記号」を「フェティシズム」の対象にするみたいです。その辺は、個人によって違いますね。誰でも、複数の「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」を対象に、一線を越えるくらいの愛着を示すことがあります。これは、

*ヒトとして、ごく自然な欲求だ

というのが、個人的な意見です。ですので、何も恥ずかしがらなくてもいいと思います。ちょっと後ろめたいとか、ちょっと他人には隠しておきたいとか、そういう感情が「快」を高める面も、確かにあります。ただし、他人に迷惑をかけるとか、犯罪行為につながるとなると、それはブレーキをかける必要があるでしょう。あまり、お説教めいたことは書きたくないの、みなさん、自分の両親（りょうしん）と良心（りょうしん）に恥じない程度で、お楽しみください。

「フェティシズム」というのは、誤解を招きやすい言葉ですね。オタク、マニア、趣味＝ホビー＝自分へのご褒美、道楽、コレクション、マイブーム、「ああ、これだなー」、十八番、おはこ、特技、暇つぶし、ひつまぶし、などと呼ばれているものも、れっきとした「フェティシズム」です。「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」であれば、何でもありなのです。

そのうち、対象が「自分というヒト」であれば、ナルシスト（＝ナルシシスト）でしょう。一方で、「他人」でしたら、好きで好きでしかたないヒトですが、ちょっと間違えばストーカー行為にまでエスカレートしますね。また、あるヒトになりきって、その格好から服装から趣味まで真似る場合もありますね。あれって、対象が「自分＋他人」という感じでしょうか？ 多分にナルシスト的だし、多分に熱狂的ファンのだし、ややこしいケースですね。

以上のように考えれば、後ろめたさなんか、感じる必要が全然ないことが、わかっていただけるのではないのでしょうか？ ね、みなさん、楽しみましょうよ。

*人生はおいしい

のです。おいしいものに満ちているのです。

*「トリトメのない記号」も、おいしいものになり得る

のです。購入したり入手したりして、使い道=用途を消費し、用済みになったら廃棄=ポイ捨てる。それだけでは、もったいないではないですか。それ以外の楽しみ方が可能なものが、たくさんあるはずですよ。具体的には、申しません。人それぞれですもの。自分の想像力（そうぞうりょく）と創造力（そうぞうりょく）を發揮して、探しましょうよ。

こんなことを書いている自分にも、「フェティッシュ」があります。やっぱり、言葉です。言葉といっても、音声と文字の両方ですから、2度おいしいですよ。たった今、上で書いた言葉で、さかんにダジャレ=言葉遊び=オヤジギャグしていましたね。あれって、言葉を対象にした「フェティシズム」以外の何ものでもありません。

*

きのう、自分の大好きな言葉2つ、「うつせみ=空蟬=現人」と「あなた=彼方=貴方」を紹介しました。そう思うと、今、やっていることって、あれの続きですよ。きのうは、そのうちの「あなた=彼方(=あなた・かなた)=貴方」について、説明しました。

で、「うつせみ=空蟬=現人」と「あなた=彼方=貴方」には、意味がいく通りかあって、それが微妙につながりあって、不思議な雰囲気や漂わせているのです。何だか、とても、幻想的なんです。おや、「幻想的」という字にも「まぼろし=幻」を見つけました。こういう多重的=多層的な意味を持つ言葉を、「意味するもの=文字や音声としての言葉」の「舞い=ダンス」に見立てて、その字面や音がかもし出すイメージを味わうことが、自分の数少ない楽しみの一つなのです。

今、思い出しましたが、「うつせみ＝空蟬＝現人」については、当ブログのバンクナンバー、「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03の中で、少しだけ触れました。ご興味のある方だけ、ご参照ください。さて、おとといの記事で、

＞ちなみに、自分の書いた言葉を口にした時や、自分の口にした言葉を聞き間違えるという冗談みたいなことが、自分にはよくあります。現に、きのう取り上げた「差別化」ですが、記事を書きながら、ふと「差別化は差別か？」とつぶやいたところ、「キャベツ化はキャベツか？」と聞き間違えました。零細的なシニフィアンのとちくるい現象でしょう。ふと、マラルメさんやデリダさんやラカンさんの、壮大な意図的シニフィアンのとちくるい運動＝実践＝キャンペーン＝業績を、思い出しました。

と書きました。その中の

* 「シニフィアンのとちくるい現象」

について、説明を加えさせてください。簡単に申しますと、

* 「言葉の意味」とは無関係に、または、関係づけて、「言葉の持つ字面の表情や、言葉の持つ音としての響き」に注目すること

です。もっと分かりやすく言えば、さきほども述べた通り、ダジャレ、言葉遊び、オヤジギャグです。こういえば、ピンとくるのではないのでしょうか？ 以前は、このブログは、ダジャレとオヤジギャグに満ち満ちていました。自分でも、こんなにやって大丈夫だろうか？ 果たして、正気なのだろうか？ と何度も、不安を抱きました。でも、やっちゃんですよね。どうにもとまらない状態に、なっちゃんですよね。今でも、やっていますが、これでも、だいぶ、おとなしくなったんです。

そう言えば、フランスの詩人だったステファヌ・マラルメさんには、以前、このブログに頻繁にご登場いただき、かつて占い師としてご活躍された泉アツノさんのご協力を得ながら、さいころを使った言葉遊びをいたしておりました。もちろん、妄想ですよ、念のため。今、振り返ると、いったい、あれは何だったのかと思うと同時に、あれはあれ

でマジでやっていたなあ、などと感心してしまいます。そうか、あれは

*言葉を対象とした「フェティシズム」だった

のか、とも言えそうです。ひとりで納得しちゃいました。いずれにせよ、尋常ではなかったことは確かだと、認めざるを得ません。でも、また、いつか、やってみたいです。自分が、

えいやーっ！

とか言って、さいころを投げる。すると、目が出る。その目というのは、「1～6の数」ではなくて、「言葉」なのですけど。そこで、すかさず、泉アツノさんが、

「こんなん出ましたけど」

と合いの手=愛の手を入れてくださるのです。それをマラルメ師=氏が、目を細めながら見守ってくださるのです。で、出てきた言葉をいじりながら、めちゃくちゃなこじつけで哲学をする。

こんなん、あやういですか？ やっぱり、そうお思いになりますか？ でも、楽しかったんですよー。いちおう、哲学できたんですよー、自分なりに。そう言いつつも、ちょっと恥ずかしくなってきたので、いつの記事とは申しませんが、お時間のある時に、このブログ記事のダイジェスト版である、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19、「こんなことを書きました（その2）」2009-02-02、「こんなことを書きました（その3）」2009-02-16 を斜め読みしながら、それらしき日記のタイトルを見つけ、中身を覗いてみてください。

くだいですが、けっこう、マジだったのですよ。本気でした。正気だったという自信はありませんが、本気でした。ちなみに、今も、本気です。正気とは申せませんが。

やはり、きょうも、トリトメなく終わってしまいました。この行まで読んでくださっ

た方、どうもありがとうございました。

◆かく・かける

かく・かける (1)

◆かく・かける (1)

2009-05-14 08:56:02 | 言葉

賭け事や占いが好きか、と尋ねられたとしましょう。好きにしろ嫌いにしろ、答えるさいに、何か気おくれに似た気持ちをいだきませんか？ 就職試験の面接、または、多くの人たちを前にした公の場で、「はい、好きです」と素直に答えられるでしょうか。うーん。仮に好きだとしても、勇気が要りますね。どうしてなのでしょう。賭けは博打（ばくち）、占いは迷信といったステレオタイプ化したマイナスのイメージがあるからかもしれません。

ただ、それだけではなく、もっと深いところに「気おくれに似た気持ち」の源があるのではないかと考えています。賭けと占いとは、多分に似たところがあるように思えます。「好きだと他人に言っても、ぜんぜん、後ろめたさは感じないよ」と、おっしゃる方もいらっしゃるにちがいありません。残念ながら、多数の人に尋ねて回った経験はありませんが、おそらく、大多数の人が、賭け事と占いが好きだと他人に言う場合に、何か気おくれを感じるのではないかと。そういう想定のもとに話を進めてみます。

*

さて、

* 「賭ける」と「占う」の背後＝根底には、「負ける」＝「降伏」と「任せる」＝「服従」がある。

のではないかと考えています。では、何に「負け」、何に「任せる」のでしょうか？「負ける」と「任せる」が語源的につながっているのかどうかは、手元の辞書で調べたかぎりでは、よく分かりません。ただ、「自分の身をゆだねる」という点で、きわめて接近した意味があるように感じられます。というわけで、

*何に、自分の身をゆだねるのか？

と言い換えて考えてみましょう。これは、それぞれの人が何を信仰しているかにも、関係がありそうです。ただし、この国は、一神教が生活・文化・政治などあらゆる面で、強い影響力をもつ濃密な風土にはありません。年末年始に、キリスト教の教会、神社、お寺を平気で「はしごする」という、宗教的には希薄な風土が存在する国です。欧米でも、占いに関しては、自分の信仰する宗教とは違ったレベルで接するヒトたちがほとんどのようですから、賭け、占い、宗教をあまり強く結びつけて考える必要はないかもしれません。

賭けと占いにおいて、何に自分の身をゆだねるか？ ですが、こんな答えが予想されません。

*神、神々、仏、先祖、霊、教祖、超越者、天、イワシの頭、宇宙、宇宙の摂理、人知を超えた力、運命、カルマ、確率、あるいは「無」……。詳しくはないのですが、たとえば、競馬、宝くじ、血液型占い、星占いにおいては、お馬さん、数字、血液型、星の運行自体

に、自分の身をゆだねるといっても、そうした

*表面に現れている＝表れている現象や物事

そのものではなく、その

*背後にある「何か」

に身をゆだねているという気がします。

背後にある「何か」に、身をゆだねるとするのなら、これは大変なことです。「背後にある」のですよ。「何か」なのですよ。これじゃ、「わけが分からない」ではありませんか？
それこそ、

*背後にある「何か」そのものが、賭けと占いの対象になり得る。

というギャグみたいな状況になるような気がします。いや、ギャグというより、見方を変えれば、

*初めに「負ける」「任せる」ありき。

とも言えそうです。

つまり、

*初めから負けっぱなし＝全面降伏

ということです。圧倒的に「強い・崇高な」存在。こうなると、対処するための切り札は1つしかありません。

*信じるのみ

です。

ありゃー、という感じです。このレベルになると、絶句、つまり、どんなに言葉を重ねても意味はない事態となります。言うことなし。問答無用。出口なし。行き止まり。思考停止。エポケー＝判断中止。ここから先へ侵入するべからず。おしまい。ピリオド。

それくらい、「信じる」という行為は強い。手強い。どうにもならない。なすすべがない。でも、これって、ヒトにとってはなくてはならない「いとなみ」＝行動＝心理ではないでしょうか。計算式を立てるなら、

*ヒト - 「信じる」 = 0 = ゼロ (何も残らない) = ヒトでなし

と表しても、算数のテストで◎をもらえるのではないかと、という気がします。

この場合の「信じる」は、かなり広い意味にとってください。宗教的なレベルだけの話をしているわけではありません。無神論者でも、生後間もない赤ちゃんでも、状況は同じです。「意識する」＝「知覚する」に近いレベルまで含むものとして、「信じる」を広く考えましょう。すると、

*生後間もない赤ん坊も、「賭けたり」「占ったり」している。

と言えるように思います。

*

一昨日まで、「信号」と「信号論 or 信号学」というツール＝玩具をつかって、いろいろなことを考えたり、いろいろな現象に当てはめる＝つなげる＝こじつけるという「お遊び」＝楽問＝ゲイ・サイエンスをしていました。慣れない「学問ごっこ」をして、しんどかったことは確かですが、とても面白かったことも事実です。そこで、この「かく・かける」シリーズでも、「信号」という言葉をぜひ使いたいのです。たとえば、

*生後間もない赤ん坊は、さまざまな「信号」を相手に、「賭けたり」「占ったり」している。

みたいに使いたいのです。

そこで、今後このシリーズで使いそうなツールを、ここで説明させてください。お断りしておきたいのは、以下に挙げる3語は、別個のものであるというより、森羅万象を対象にした「切り口」＝「切り分け方」だということです。そして、その「切り分ける」作業に先立ち、「目的」があることが重要な点です。

(1)「表象」:「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」という代理＝代行という働き＝仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

(2)「トリトメのない記号＝まぼろし」or「記号」:「そっくりなものがずらりと並んでいる」and「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」and「お母さんのコピーとして生まれたものの、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーのコピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。森羅万象が「記号」になり得る。

(3)「ニュートラルな信号」or「匿名的な信号」or「信号」:「ノイズと熱が常に存在する環境において、「まなざし＝合図」の発信と受信が、一方的、または双方向的に行われる」というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

以上のツールのなかで、さっそく使いたいものがあります。「表象」です。

半端じゃなく強い存在に、ヒトは太古から気づいていたふしがあります。その圧倒的に強い「何か」(※いろいろなヒトたちがいろいろな名で呼んでいるので、中を取って中立的に「何か」と呼んでおきます) 対して、大昔のヒトたちはどう対処してきたのでしょうか？ 歯向かうとか、戦うなんて、馬鹿なことはしませんでした。なかには、そうしたお馬鹿さんもいたでしょうが、ここでは無視します。

*

この問題について、「1カ月前、ひな祭り」2009-02-03 という記事のなかに、「占い」と宗教の発生がらみで書いた部分がありますので、横着をして、自己輸入＝自己引用＝コピーをさせていただきます。ちょっとおふざけ気味の文体ですが、それは内容のシリアスさを薄めるためです。本気で書いたものですので、そここのところをご理解願います。

★「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きもの。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよ。ハンコペタペタのペーパーワーク。このへんが不明の方は、当ブログのバックナンバー、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 を参照、願います。面倒な方は、このまま、引き続き、どうぞ。「ひな壇」は「虎の威＝衣」とセットで、クラス分け、棲み分けして、暮らすわけ。これが代々続けば、2世、3世、そして、世襲。仲間うちで譲ったり、譲り合えば、天下り、渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威＝衣」は「虎の位」であり、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物まで、多岐にわたる。引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえる。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんでこれのご奉公？ 公僕、最後のご奉公？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり、騒がないのも、究極には「表象の働き」の奥深さがあるのではなかろうか？ もっと考えてみたいけど、きょうは、それ以上考える暇なし。貧乏暇なし。なぜか、突然、なるほど、

「タモちゃんのお代理様」

は、やっぱり言えている、と思う。

言えてるどころか、きっと、そうに違いない。「でまかせ」ではなく、「言えている」とか「きっとそうだ」にしてもいいでしょうか、偶然と必然のオーソリティー（＝権威）だったマラルメさん？ ここで権威にすぎない自分が、情けない。それはともかく、ヒトよりも、もっともっと偉い存在がいて、ヒトはその代理を務めたいという、願望、欲求、祈り、野望、をもっているのではないのでしょうか、マラルメさん？ Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面をかぶり、表情をまね、ときにはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、これだけ化ければ、〇〇様なんて、呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

という具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「おとうさんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁にいけますように」、「亡くなったあとに天国に行けますように」、「元気が出ますように」

「お任せあれ。任せとき。だいじょうぶ。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ このあいだは、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合が悪くなったときには、仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらもとって、わたしは代理ですと言って責任を転嫁すればいい。または、「あんたの信心がたりんからじゃ」と、これまた、責任を転嫁すればいい。「代理人 = 代行者」は、気楽で、いい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

★から、以上までが、引用部分です。

*

宗教と、占い＝預言＝予言と、半端じゃなく強い「何か」の威＝衣を借りて、他のヒトたちの上に立つという「政（まつりごと）＝支配体制＝政治」の成立というシリアス

な問題を、紙芝居的に描いたおとぎ話です。きょうのテーマの1つである、「占い」のメカニズムもご理解いただけたのではないのでしょうか。

さて、今度は、歴史ではなく、1個のヒトの成長という視点から、特に「赤ちゃん期」に注目しながら、考えてみましょう。

*生後間もない赤ん坊は、さまざまな「信号」を相手に、「賭けたり」「占ったり」している。

に話をもどします。

健常者の赤ちゃんは、さまざまな形の「信号」を、主に五感、および第六感（※もし、そのようなものがあればですけど）を総動員して、発信し、受信＝知覚しています。そのさいに、

*赤ん坊は、「賭け」と「占い」という行為のなかへと、否応なしに、いわば「投げ込まれている」。

と言えそうです。

それほど、ヒトの赤ちゃんという存在は無力なのです。

生後 or 孵化後、数時間で、オトナのミニチュアのような容姿となり、立ち上がったたり、動き回ったりする、たとえば、お馬さんの赤ちゃんや、イカさんの赤ちゃんを思い浮かべれば納得できると思います。もちろん、程度の差はあります。ある期間中、お母さんの腹部にある袋（＝育児嚢（いくじのう））で保護されているカンガルーさんの赤ちゃんや、巣の中で毛の薄い頼りなげな姿で巣立ちまで過ごしている鳥類の赤ちゃんも確かにいますね。

なお、ヒトの赤ちゃんの「よるべなさ＝無力さ」には、「ネオテニー（＝幼形成熟）」という現象が関係しているという説があるそうです。語弊を覚悟で申しますと、ヒトは「早

産」し、子を「未熟児」として産むということらしいです。だから、自立するまでに長期間を要するという理屈みたいです。このへんの事情については、他の問題とからめて「交信欲＝口唇欲」2009-01-26、「オバマさんとノッチさん」2009-01-28 でも少しだけ触れましたので、ご興味のある方は、ご一読ください。

*

さて、ヒトの赤ちゃんが「賭けたり」「占っている」というのは、「ニュートラルな信号」を「合図」という形で発している、つまり、「オギャー」と叫んだり、笑みを浮かべたり、じっと「まなざし」を向けるという具合に発しているのは、オトナの目から見て、

*期待＝欲求というメッセージ

を送っているという意味です。

*期待と欲求は、これから先の出来事に向けられている。

と考えれば、「賭ける」「占う」との関連が分かると思います。

ここで大切な点は、

*期待・欲求 → これから先の出来事＝未来の出来事 ← 予測・予想

と図式化するさいに用いることも可能な、「→」と「←」という符号＝「信号」にあります。何を言いたいのかと申しますと、

*「→」と「←」という符号＝「信号」は、「向き」＝「方向」を示している。

という点が大切なのではないか、ということなのです。

さきほどの「信号」の定義で、森羅万象が「信号」になり得る、とあったのを思い出してください。「→」と「←」も、立派な「信号」です。「向き」＝「方向」を示しながらも、それ自体は「ニュートラル」な「長短の3本の線の組み合わせ」でしかないのです。

*たとえ何かのメッセージを担おうと、「信号」は、あくまでも「ニュートラル」であり、「匿名的」なものである。

という特性は、いくら強調してもしすぎることがないくらい、重要です。言い換えると、そうではないと思われやすいということです。

「信号」の担う「メッセージ」が、「色づけ＝意味づけ（＝ニュートラルではない）」され、「ある特定の目的を志向する（＝匿名的ではない）」ということは、「信号」が然るべき「経路」へと「向かう（＝「→」と「←」）」という点においてのみ、「意味」があり、「必然性」が認められるという、「きわめて不安定な基盤」に立っているのです。もちろん、それとは逆に、これを「安定した基盤」に立っているとみなす考え方もあるでしょう。

でも、ヒトの赤ちゃんを例に取れば、現在の日本という国の比較的恵まれた好条件＝好環境を基準にするかぎりにおいて、「安定した基盤」に立った「信号のやりとり」を行っていると言えるにすぎず、この惑星の圧倒的多数のヒトの赤ちゃんたちと、ヒト以外の生き物たちの赤ちゃんたちと比べた場合には、きわめて「きわめて不安定な基盤」に立っていると言ったほうが、残念ながら、適切だと思われます。いわゆる

*生存率という確率

を思い出してください。いかに、赤ちゃんの「賭ける」と「占う」が危ういかが体感できるかと思います。

*

このように、

* 「ニュートラルな信号」が、然るべき「経路」にまで「向かう (= 「→」と「←」)」過程をとらえるには、確率というツールが不可欠になる。

と言えそうです。事態はそれだけにとどまりません。ここで、「信号論 (3)」2009-05-12で利用した、きわめて大雑把な私的「カンニングペーパー」を、コピペさせてください。

A : ノイズ+熱 ⇒ ニュートラルな「信号」: 合図・視線・まなざし・表情・刺激

↓

B : ノイズ+熱 ⇒ 経路・通路 (光・電波・波動・電線・管・ニューロンなど): 線・糸・揺れ

↓

C : ノイズ+熱 ⇒ 回路・知覚器官・知覚組織・解読版・グリッド: 色づけ・分ける・知覚・見る・解読・解釈・識別: 網・濾過記=フィルター・カメラ・マイクロホン

↓

D : ノイズ+熱 ⇒ スクリーン・膜・細胞・機械・器械・画面・スピーカー・発信装置=受信装置: 幕・器

↓

E : ノイズ+熱 ⇒ 映像・音声・震動・運動・動作: 動き・まぼろし・イメージ

↓

F : ノイズ+熱 ⇒ 賭け・ギャンブル・偶然 (accident) / 成功=不成功・当たり=外れ・作動=誤作動・正常=異状 or 異常・順調=不調・OK=エラー

上の図を見ていると、話がしやすいのです。正確さという点からは、まったく信用できない「トンデモもの」ですが、このブログ自体がいわゆる「トンデモ本」の親戚の「トンデモブログ」みたいなものですので、恥を忍んで掲載させていただきます。

さて、いったん発信された「ニュートラルな信号」は、上図のAからEまでの全過程において、確率に大きく左右されています。

* 「信号」の「ニュートラル性」とは、「信号」が常に確率に左右されている状態だ、と言い換えることができる。

とも言ってもよい、とさえ考えています。

正直申しますと、自分は確率・統計は大の苦手なのです。かつて一種の売文業をしていた頃に、仕事上、どうしてもこの分野の知識を使わざるを得ない事態に陥り、3冊の参考書をもっていますが、今読んでも、さっぱり分からないのです。こういう場合には、「確率」と書いてあっても、比喩であったり、お飾りであったり、はったりであったりしがちですので、せいぜい、「比喩」くらいで使っているのだと理解していただければ、幸いです。

*

では、きょうのまとめをします。

「賭け事」「占い」の背後には、たいてい「後ろめたさ」がつきまとっている。それは、何ものかに自分の身をゆだねているという心理があるからだ、と考えることができる。「身をゆだねる」というのは、体（てい）のいい表現であり、ぶっちゃけた話が全面的に「任せている＝負けている」という負い目である。

この「負け」はヒトにとって、根本的で、始原的とも言えるものがある。ヒトは太古から無力であり、圧倒的に強い「何か」に対し、その「代理」を務めるという方法と、その代理人に「占い＝預言＝予言」をしてもらうという方法を考え出した。また、ヒトは1個の生体としても、生まれて以来無力な存在として存在する。頼りになるのは、自分の「期待・欲求」を伝えるために発する「信号」である。しかし、その「信号」が然るべき「経路」を経て、受信され、最終的にその目的を達することは、「賭け」「占い」である。つまり、確率に左右される。

という感じです。こう考えると、「信号」をちゃんと受けとめてもらえる赤ちゃんって、幸せですね。母親や母親に代わるヒトのせいでほったらかしにされていたり、そうした保護者とは無関係の何らかの事情によって、メッセージが届かず不幸な目に遭う赤ちゃんが、この世界にはたくさんいるのにちがいません。

みなさん、身のまわりにいる赤ちゃんを見守ってやりましょうね。うちの近所にも、赤ちゃんたちがいます。裏の家の軒下に巣を作っているツバメさんちの赤ちゃんです。4羽います。かわいいです。でも。なかには、巣から落ちこちちやう子っているんですよ。悲しいです。あれも、自然の摂理ってやつでしょうか。いずれにせよ、あまり近寄らず、距離をおきつつ、見守っているところです。

さて、きょうは、ちょっとですが、引用部分にマラルメさんにも出演していただいたため、元気が出ました。あの人は、以前の記事では常連の賓客だったのです。「賭け」と「ダジャレ」の名人です。このシリーズでは、お手を借り、ご活躍を願おうと思っております。

あすも、引き続き、「かく・かける」をテーマに書く予定です。ぜひ、また、この楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくお勉強しよう」サイトに遊びに来てください。お待ちしております。

かく・かける (2)

◆「かく・かける (2)」

2009-05-15 08:55:33 | 言葉

ギャンブルという英語の語源は諸説があり、そのなかでゲームと親類だという説に興味をもちました。「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」と並べてみると、「なるほど」と領きたい気分になります。もっとも、gameにはいろいろな意味があります。大きめの辞書で意味を調べると、驚くような語義もあり、想像力を刺激されます。いったい、どうつながっているんだろう、という感じです。

個人的には、お金がらみの賭け事も、ある規則に沿った遊びという意味でのゲームにも、興味も縁もありません。いわゆる賭け事を最後にしたのは、大学1年のときに生まれて初めて1回だけやったパチンコでしょうか。宝くじは、もらったことはありますが、買ったことはありません。いわゆるゲームを最後にしたのは、10年ほどまえにPCでやった「ぶよぶよ」くらいでしょうか。囲碁、トランプはまったくやりませんし、自分が参加するスポーツもありません。

にもかかわらず、さきほど挙げた「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」とつくづく感じているので、実際には、自分は何れっきとしたギャンブラーであり、ゲーマーであると信じています。だから、自分にとっては、毎日がギャンブルであり、毎日がゲームなのです。真剣勝負です。

*ヒトである以上、「賭け」と「ゲーム」には無縁ではられない。

これは実感です。「賭け」とは、きのうの記事で述べた、半端じゃなく強いパワーをもつ「何か」に自分の身をゆだねることです。「ゲーム」とは、半端じゃなく強い拘束力をもった規則のようなものに従って生きることです。自由意志という言葉がありますが、そんなものが通用するような状況に、ヒトは置かれていない、という「諦め」に似た意識を

強くいただいています。神仏は信じていないつもりですが、

*半端じゃない「何か」

を信じているのは確かなようです。

特定の言葉を用いて何と呼ぼうと、とにかく、その「何か」としか言いようのないものが気になって仕方ありません。精神衛生上は、その「何か」を世の中に流通している＝よく使われている言葉で特定し、その言葉を用いている人たちと一体感を共有するのが、いいに決まっています。でも、その特定の言葉が、今のところ見つからないのです。というわけで、個人的には、「人生は賭けだ」&「人生はゲームだ」くらいで、当面はお茶を濁しておきたいと考えています。

*

さて、きょうは、「かく・かける」と、それと関係深そうな「かかる・かかり・かかわる」を、言葉のレベルで整理してみるつもりです。

*「かく」：書く・描く・画く・搔く・欠く・掛く・懸く・繫く・構く・舁く・駆く

*「かける」：掛ける・架ける・懸ける・賭ける・駆ける・駈ける・翔る

*「かかる」：掛かる・懸かる・繫かる・架かる・罹る・輝る

*「かかり」：係り・掛かり合う・掛り・繫り・懸り

*「かかわる」：関わる・係わる・拘る

以上の言葉の羅列を見ていると、「かく・かける」と「かかる・かかり・かかわる」の多義性＝多層性＝豊かさに、あらためて驚かされます。すごいです。基本的に表音文字である大和言葉系のひらがなが、「漢字＋ひらがな」という大発明である送り仮名で処理され変貌している様は、実に感動的です。奇跡に立ち会っていると云ったら、大げさでしょうか。でも、そんな感じなのです。

とはいえ、ふと気づいてみると、何げなく使っているPCのワープロソフトの文字変換は、その「大発明」を機械が代行してやってくれているのです。この事実を嘯みしめると、すごい、としか言いようがなくなってしまいます。実際、日本語を処理するワープロソフトはすごい。

で、さきほどの言葉の羅列ですが、国語の専門家として、言葉をながめているわけではないので、その羅列をにらみながら、自分は自分なりに気になる点だけを、以下に書きとめておこうと思います。要するに、記事を書くためのメモ作成です。

* 文字や文章を「書く・書ける」ということと、「賭ける」こととの「係わり合い」。

* 「書く」と「引っ掻く」の「掻く」との「係わり合い」。

* 「書く」と「描く（＝かく・えがく）」とはどう違うのか？

* 書き表す・書き込み・書き記す・書き付け・書き留める

* 「掛ける」の多義性＝多層性をチェック。

* 駆け引き・駈け引き・掛け引き

* 「掛詞＝懸詞（＝かけことば）」における、「掛ける・懸ける」が非常に「気に掛かる」。
気掛かり・心掛かり

* 願を懸ける・命を懸ける・神懸かり＝神憑り・神に懸けて誓う

* 賭け事・金品を賭ける・社運を賭ける・賭けに勝つ

* 生活が懸かる・優勝が懸かる・メンツに懸けて・神に懸けて・賞金を懸ける

* 目を懸ける⇒めかけ・妾

* 目掛ける・めがく

* 掛け合わせ（＝交配）・○と△を掛け合わせて新種をつくる・掛け算（※割り算）

* かき回す・引っかき回す・掻き混ぜる＝掻き雑ぜる・掻き分ける

* 十字架・仮空⇒架空

* 架け橋を渡る（※具体的）・夢の懸け橋（※比喩的）・未来への懸け橋（※比喩的）・友好の懸け橋（比喩的）

* 「□とかけて○と解く。して、その心は……」のメカニズムは？ このフレーズでの「かける」の意味は？

* 医者に掛かる

* 声を掛ける・掛け声・掛け合い漫才

以上は大和言葉と漢字の戯れに注目しましたが、次に、気になる漢字を漢和辞典で調べ、特に「解字」（＝文字の成り立ちの説明）に焦点を当ててみます。

*書：聿（※筆・ふで）＋音符の者。一箇所に定着させる。紙や木簡に筆で字を定着させる。

*賭：貝（※財貨）＋音符の者。集中する、つぎこむ。

*掛：圭（※ケイ）は、△型に高く土を盛るというイメージ。そこから転じて、／＼型に何かを高くかけるイメージ。卦（※カ）はト（※うらない）のしるしをかけるの意。掛＝手＋音符の卦で、／＼型にぶらぶらさせておくイメージ。

*懸：県は、首をひっくり返した形。つまり、首を切って宙ぶりのイメージ。縣（※ケン）は、県＋糸（※ひも）の会意文字で、ぶらさげるということ。懸は、心＋音符の縣だから、心が宙ぶり状態、つまり気持ちが決まらず、気がかりとなる。

*搔：かゆいかゆいの蚤（※のみ）と関係あり。蚤の上の部分は、爪（※そう）、つまり「つめ」の形。それに虫が下の部分にある。つめでかきたくなるくらいかゆいかゆいの元となる蚤。搔＝手＋音符蚤となり、「手の爪で搔く」となる。

蛇足とは思いますが、こうした「お勉強」は、

*「正しい」vs.「正しくない」ごっこという学問

をやっているのではなく、

* 「正しくなくていいんだよ」の精神での、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しいお勉強ごっこ」

でやっているのです。

ですので、上の文字の羅列や、漢字の解字は、

* こじつけて、めちゃくちゃ面白いし、楽しい

という気持ちで実行しています。

もちろん、こうした「こじつけ」＝「ほぼ学問」＝「アラガク」＝「around 学問」が苦手な方もいらっしゃるでしょう。どうか、あまり、真面目に＝真剣に、肩間にしわを寄せたり、肩に力を入れたりなさらないように、お願いいたします。

以上の記述が面倒くさいと思われる方は、読み飛ばしていただいて、いっこうにかまいません。

*

で、「かく・かける」を各種の送り仮名バージョンでながめたり、「かく・かける」に「当てた」漢字の解字を見ているうちに、「かく・かける」の中心的なイメージ＝コア・イメージを自分なりに感じました。それは、

* 芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の1シーンに似ている。

つまり、

* 半端じゃない圧倒的なパワーの手から垂れた糸につかまって、ぶら下がっているヒト

というイメージです。

芥川の短編にある前後のストーリーは無視してください。ただ、

*ヒトが細いの糸につかまって宙ぶらりん

という状況だけが肝心なところなのです。そんなイメージを膨らませていると、一方で、糸にぶら下っているのがヒトではなく、クモにも思えてきました。

*何かに引っ掛かった細い糸に宙ぶらりんとなって、空気の流れに身をまかせて揺れ動いているクモ

クモは糸を出して巣を作ります。その巣を英語では web と言いますね。そうです。インターネット = Internet の net の親戚の WWW = World Wide Web のウェブです。あなたとこのブログの開設者を結んでいるネット = ウェブ。web には、「織物」という意味もありますね。「織物」と言えば、text = テキスト = テキスト、つまり書かれたもの。

*クモの巣 = web = 織物 = text = テキスト = 書かれたもの

とつながってしまいました。

こじつけ = ダジャレ = 言葉の遊び = 「存在の大いなる連鎖」 = でたらめ = でまかせ = 偶然などと、何とでも呼んでください。

クモをイメージした場合には、巣を

*かける

という能動的な表現もある一方で、風に飛ばされて、糸が引っ掛かる、つまり、

*かかる

という、受動的＝風まかせ的＝なりゆきまかせ的＝身をゆだねる的な、言い方もできません。実際、そんなふうに関に飛ばされて「引越しをする」クモを見たことがあります。個人的には、その受動的なイメージが気に入っています。うん、

*宙ぶらりん

でいきましょう。

これが「かく・かける」のコア・イメージです。

*

いろいろ書いてありましたが、個人的に興味があるのは、特に、マラルメがらみの、

*「書く・書ける」と「賭ける」

なのです。

この問題については、またじっくり取り組むことにし、少しだけ話題を変えましょう。

「もらって嬉しいもの」の話です。「信号論(1)」2009-05-10でも触れましたね。病気以外なら、たいてい、何をもらっても嬉しいのではないかって話です。「もらう」というと、ふつう、具体的な「物」を思い浮かべませんか？消費期限がある、生菓子に代表される

「物」。スナック菓子みたいに比較的保存がきく、賞味期限がある「物」。

これらはだいたい食品ですが、電気製品のように保証期間が明記された、保証書付きの「物」。手作りの「物」。調度とも呼ばれる、家具や道具などの「物」。こうした「物たち」を、よその家の人や、身内からいただくということはよくあります。今、挙げた「物たち」の特徴は、

*手で触れたり、突いたり、場合によっては叩いたりできる

ということです。

でも、「もらう」ものがすべて、そうかという、どうやら、そうでもなさそうです。コドモの頃を思い出してください。小学校時代に、

*○や◎

を、もらうのってとても嬉しかったですよね。

「よくできました」とか「たいへん、よくできました」なんて書いてあるスタンプを押して「もらう」のも、嬉しかったです。そのスタンプの延長上に、通知表の数字があります。5段階評価なら、「5、4、3、2、1」の順で、嬉しいとなります。もっとも、2や1だと、嬉しいというわけにはいかないかもしれませんが。

「○や◎」に、話をもどしますが、次のようなことを何かで読んだ記憶があります。確か、外国の小学校の話です。ある女性の先生が、児童のテストや宿題の「丸付け」をするさいに、赤インクではなく、青インクを使っていた。なぜなら、

*赤で「Eや/」のしるしを付けると、人の心を傷つける

からだ、というのです。

正直言って、意外でした。なるほど、とは思いませんでした。あくまでも、個人的な感想です。みなさんは、今の話を読んで、どうお感じになりましたか？ 赤のインクで記された「E や /」を先生からもらって、それが単に「赤い」という理由で「グサッ」とか、「グサリ」とか、こころが傷ついた方は、いらっしゃいますか？「うんうん、わかる、その気持ち」なんて、しきりに頷いている方がいても、驚きはしません。

ただ、自分には意外な話でした。個人的には、色よりも、むしろ、大きく「E や /」と描いてあったほうが、大きなショックを受けそうな気がします。絶対そうです。今、小学生にもどった気になって想像してみたら、実際に涙が出そうになりました。理屈より自分のからだを信じます。思いっきり大きな「E や /」が描かれたテスト用紙や宿題帳が返ってきたら、きっと泣いちゃいます。「赤い」からではなく、「でかい」からです。

*しくしく ⇒ めそめそ ⇒ わーん！

でしょうね。

それはそうと、青のインクやフェルトペンで描かれた「O や ◎」や「E や /」って不気味じゃないですか？ これも、個人的な感想ですけど、自分はそんなふうに感じます。もしかすると、現在のように、ピンク、薄めのグリーン、柔らかい色調のパステルカラーなどのボールペンや色鉛筆やフェルトペンがなかった時代の話だったからかもしれません。自分が、パステルカラーの水色で「E や /」をもらったとしたら、強いショックを受けることはないのでは？ と想像します。

少々話がそれてきましたが、何を言いたいのかと申しますと、

*もらって嬉しいものとして、物体のほかに「印（しるし）」がある。

逆に言うと、

*もらって嬉しくないものとして、物体のほかに「印（しるし）」がある。

ということなのです。この理屈でいえば、お祝いや励ましの言葉、癒やしに満ちたメッセージなども、もらって嬉しいものだと言えます。逆に、悪態、罵倒、呪いの言葉などを、もらって嬉しくないことは言うまでもありません。

で、ここでは、話が広がりすぎないように、あくまでも、

*何かの物体に、印した「印（しるし）」

に的を絞ります。

「印（しるし）」とは、もとはと言えば、尖ったもので引っ搔いた跡、筆で書かれた or 描かれた墨の残りかす、染料や顔料の残りかす、乾いたインクの細かい粒、鋭いもので彫られた or 刻まれた痕跡などであったりするわけで、「物体」とみなしてもいいわけですが、そこまで厳密には考えないでおきましょう。

*目で知覚できる痕跡

くらいに定義し、具体的には、

*ちょっとした「目じるし」から「文字」や「印鑑の跡 or 像 or 形」（※印鑑や判子そのものではありません）や「刻印されたものに映じる視覚的な像」

を指すものとします。つまり、視覚的イメージを重視します。

*

さて、言葉のフェティシストとしては、ここでまた、言葉＝文字いじりがしたいです。短いものです。すみませんが、ちょっと、お付き合いください。

*しるし・印・標・徴・験・記し・著し

*しるす・印す・標す・記す・誌す・認す

*しるべ・標・導・知方

以上です。

3つめが上の2つと語源的に関係があるかどうかは不明ですが、楽間では、どうでもいいことです。上の言葉たちをながめていると、いろいろな考えやイメージが浮かんできます。それが楽しいのです。さて、さきほど定義したように、

*「印（しるし）」は「物体」ではなく、「視覚的イメージ=像=形」である。

とします。

「印（しるし）」のなかでも、日常的に使用され、しかも、きわめて重要な役割を担うものとしてハンコ=印鑑があります。このハンコについては、「あなたら、どうしますか？」2009-01-16 と「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 で、「表象」という考え方から詳細な分析をしていますので、ご興味のある方は、ぜひ、お読みください。

で、ハンコ的一种である「よくできました」というスタンプにしる、赤インクの「○や◎」にしる、通知表の上位の数字にしる、なぜ、もらって嬉しいのでしょうか？ また、教室にある自分の机に「ばか」とか「あほ」と書かれた文字や、通知表の下位の数字や、赤インクの「Eや／」や「O（0点という意味です）」をもらうと、どうして嬉しくないのでしょうか？ たとえば、小学生時代にもどったつもりで考えてください。しよせん、「印（しるし）」です。数字です。文字です。なぜなのでしょう？

きのうの記事で書いたばかりの文章なので、まことに恐縮ですが、どうしても必要なので、ここで以下にコピペさせていただきます。

(1)「表象」:「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」という代理=代行という働き=仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

(2)「トリトメのない記号=まぼろし」 or 「記号」:「そっくりなものがずらりと並んでいる」 and 「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」 and 「お母さんのコピーとして生まれたものの、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーのコピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。森羅万象が「記号」になり得る。

(3)「ニュートラルな信号」 or 「匿名的な信号」 or 「信号」:「ノイズと熱が常に存在する環境において、「まなざし=合図」の発信と受信が、一方的、または双方向的に行われる」というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

以上の(1)から(3)までが引用です。

「印(しるし)」をもらって嬉しかったり嬉しくなかったりするの、「印(しるし)」が表象だからです。何の「表象」、つまり「代わり」なのかと言えば、成績、つまり、ある人のある時点でのある学科での出来具合であったり、ある人に対しての、おそらくクラスの誰かがいっているネガティブな感情であったりするのです。同時に、「印(しるし)」は、「トリトメのない記号=まぼろし」であり、さらには「ニュートラルな信号」だとも考えられます。

「印(しるし)」を「記号」と考えた場合には、採点する先生は、学校の休み時間や、家での家事の合間に、せっせと赤ペンを走らせたり、その学期の各児童のテストの点数とにらめっこしたりして最終決断を下すという意味です。語弊があるかと思いますが、そっくりな製品を「流れ作業」で作るように、次々と採点し、次々と成績を決めるわけです。

教師という仕事には、そうした単純作業の側面もあるのです。また、いじめっ子は、それなりに「流れ作業的」に、ある標的に対して「ばか」とか「あほ」とか書くという「仕事＝作業」を終え、同じクラスメートに対して別の「仕事＝作業」をするか、別のクラスメートを標的にして新たな「仕事＝作業」に移るわけです。

「印（しるし）」を「信号」とみなす場合には、教師は、まさに曲線と直線から成る形を、ペンとインクという材料を用いて紙の上に記し＝描いた形＝像に、「成績」＝「よくできましたねー or だめでしたねー」というメッセージを担わせたり、あるいは、偽装や偽造を防ぐために、5種類の数字のスタンプを、「通知表」と書かれた紙にポンポンと押していくのです。

一方、いじめっ子は、標的のいない教室でこっそりと、または、他の児童の目などぜんぜん気にすることなく、にやにやしなながら「ばか」なり「あほ」なりと、標的の机の上に、ボールペンか鉛筆かシャープペンで書くというわけです。「ばか」も「あほ」も、単なる曲線と直線からなる形であることは言うまでもありません。「信号」というレベル＝「考え方」においては、その「信号」自体に意味やメッセージはありません。

*

以上、見てきたように、

* 「表象」「記号」「信号」とは、森羅万象を対象とした「切り口」＝「物の見方」である。

と考えていますので、たとえば、「印（しるし）」という対象を、3通りに切り分けることが可能です。この3つのツールを、その目的に即して使い分けることで、何かを説明するさいに、説明がしやすくなります。「かく・かける」というシリーズでも、今後、適宜に使い分けようと思います。

これまでのブログ記事では、「表象」⇒「記号」⇒「信号」という具合に、3つのツ-

ルが支える形で、あるいは、生まれる形で、ブログのテーマの流れが形成されてきました。さきほどは、3通りのツールを用いて「印（しるし）」を説明してみましたが、今後の見通しとしては、

* 「書く・書ける」と「賭ける」の係わり合い

という、以前から考え続けている、自分にとって非常に大きな問題をどういう「切り口」で書こうか、あるいは、どういうふうに「切り分け」ようか、迷っているところです。

きょうは「かく・かける」という多義的=多層的な意味をもつ大和言葉系の言葉のうち、

* 「書く」および「描く」と表記される「印（しるし）」

について考えてみました。

「書く」という行為を、考古学のおよび歴史的視点から論じられることもできるでしょう。つまり、ピクトグラム（=絵文字）・トークン（=粘土製証票）・象形文字・楔形文字・エジプトヒエログラフ（=聖刻文字 or 神聖文字）・漢字などに注目するわけです。

でも、自分としては、そうした作業に関心はありません。歴史が苦手なのです。むしろ、「今、ここにある」ものに注目し、手もちの知識と情報で間に合わせるといって、きわめて無精で横着な方法を取る癖が身についているのです。

* 「素人だから」

といえばそれまでですが、それを、

* 「素人だからこそ」

に転じる、図々しさ＝厚かましき＝鈍感さで、ゲイ・サイエンス＝楽問＝「楽しいお勉強ごっこ」していこうと思っています。

あすこそは、「賭ける」について「書ける」といいなあ、と願を「かける」つもりです。マラルメ師のご降臨を、ひたすら待つのみという感じです。

かく・かける (3)

◆かく・かける (3)

2009-05-16 11:07:24 | 言葉

ポル・ポトという人名を覚えていらっしゃるでしょうか？ 1970年代後半にカンボジアで共産党政権を樹立し、大粛清（だいしゅくせい）＝大量虐殺の首謀者となった政治家です。仏印という古い言葉があります。かつてフランス領であったインドシナ3国、つまり、現在のベトナム、カンボジア、ラオスを指します。フランスの植民地だったために、高齢者のなかにはフランス語を理解できる方々がいらっしゃいます。かつて、フランスへ留学した人たちも多数いたとのこと。その1人がポル・ポトでした。

このブログでよく出てくるフランスの詩人マラルメと、ポル・ポトの接点は、その留学にあります。留学時にマラルメの研究をしていたとかいないとか、そんな噂話を聞いた記憶があります（Pol Pot と Mallarmé でネット検索してみると、噂の出所の一つはスラヴォイ・ジジェク（Slavoj iek）のようですけど）。かつて、自分が大学で文学を学んでいたころ、フランス文学の研究者に、旧フランス領の出身者が数多くいるという話を聞いたことがあります。

自然の成り行きだと感じました。また、イランにも優秀な研究者が複数いるとも耳にした記憶があります。これは、少し意外に感じました。イランとフランスの関係についてはよく知りません。ただ、かつてイラン・イスラム共和国の最高指導者であったホメイ

ニ師が、イラン革命の前に一時期亡命していた国がフランスなのです。なぜなのでしょうね。

ふと思い出しましたが、1970年代前半に中国に亡命していたカンボジア国王、シアヌークが、旧宗主国フランスの言語を流暢（りゅうちょう）に話している様子を中高生のころに、よくテレビのニュースで見聞きしていました。シアヌークとポール・ポトとの関係も、一筋縄ではいかない複雑なものがあります。

歴史的経緯を見ていると、敵味方という単純な割り切り方ができません。シアヌークが、フランスではなく、共産党の支配する中国に亡命し、フランス語で世界に「信号」を送り続けていた様を、ブラウン管をとおして不思議に見ていた記憶がよみがえってきました。

フランスへの亡命という話はよく見聞きします。例の「人民の人民による人民のための政治」（※このフレーズ中「人民の＝ of the people」の翻訳には異論がありますね。ofを「所有格」と取るか「目的格」と取るか、なのですが、ここでは触れません）とそっくりなフレーズが、フランス共和国憲法の第1章「主権」の第2条にある「原理」としてあります。

両者にまつわる歴史的経緯は知りません。また、植民地だった米国が、英国から独立した記念にフランスが「自由の女神像」を贈ったことは有名ですね。「基本的人権」という考え方を、言葉だけでなく、実行に移そうという仕組みが、国家のアイデンティティのレベルで働いているのかもしれない。

思い出すのは、かつてアルゼンチンに軍事政権が樹立されたとき、多数の人たちがフランスへの亡命を認められました。そういえば、現仏大統領サルゴジ氏の父親は、ハンガリーの貴族の生まれで、ソ連の赤軍から逃れる形でフランスに亡命したと聞きました。そうしたことを許容する土壌（どじょう）が、あの国にあるのでしょうか。

つい最近まで、東欧諸国は、事実上、旧ソ連の「植民地」でした。パリは、そうした土地からの追放者をはじめ、亡命者、移民、そして自発的な異郷生活者＝exile（※一時期のヘミングウェイが好例です）であふれている都市だったし、今もそうであると聞きます。

*

このように、植民地政策をとっていたヨーロッパの国々のあらゆる面で、かつて植民地 or 半植民地として支配していた、あるいは、大きな影響力を及ぼしていた国や地域がらみの話は、枚挙にいとまがありません。つまり、支配する側と支配される側、そして「敵」と「味方」(※この対立は表面的なものでしかありませんが)とが、多面的=多層的にからみ合っているという意味です。

当然と言えば当然の現象です。ただ、その係わり合いが理解しにくい。どうつながっているのかが分からない。予想外な結びつきを発見することがしょっちゅうある。そうした発見をするたびに、疑問をいだくと同時に、複雑な心境になります。このように国際情勢や国際問題をニュース記事という媒体をとおして見ていると、

*さまざまな「信号」がめくばせし合っている。第三者である自分には、そのめくばせの意味=メッセージが分からない。ひょっとすると、めくばせを送っている者たち自身にも分からないのではないか。

とさえ思えてきます。

それくらい、世界は分からない。ネットにどっぷり浸かってニュースを追ってみても、どうなっているのかが分からない。経済とは、また違った意味で分からない。「信号」だらけなのに、分からない。「信号」だらけだから、分からないのかもしれない――。

国家、文化圏、言語圏、民族、政治集団、宗教などといった、さまざまな要素が、ニュートラルな「信号」を、垢(あか)や汗や血やその他の体液や言語や思想・主義・宗教という言葉でいかに「汚そう」=「色づけしよう」とも、「信号」はあっけらかんとした表情をまとい、熱とノイズにさらされながら、ただ飛び交うだけ。言い換えれば、

*「ニュートラルな信号」たちは、この惑星の王者を決めこんでいるヒトのてんてこ舞いをあざ笑いもせず、ただ「まばたき」「めくばせ」するだけ。

です。

*

国際関係とか、国際政治という分野がありますね。以前に、一種の売文業をしていたころ、仕事に少し関係があったので、興味を持っていたのですが、現在は疎いです。でも、本や文献を通してですが、一時はいろいろ勉強しました。

外交や交渉といった「ばかし合い」と「裏切り合い」、「インテリジェンス＝諜報やエスピオナージ＝スパイ活動」という名の「さぐり合い」と「違法行為・犯罪行為」。まさに「魑魅魍魎（ちみもうりょう）の跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）。

たとえば、交渉の現場では、各種の「信号」が飛び交います。めくばせ、ボディランゲージ、文書の文言、テーブルでの席順、私語、無駄話、トイレに立つ、突然の怒り、突然の笑い……。そうした一挙一動が「信号」になり得る。

交渉期間中の会場以外での「信号」にも、注視しなければなりません。ホテルでの盗聴、盗撮なんて当たり前。ちょっと観光のつもりで、ホテルの近辺を歩いていたら、スリに遭った。美女 or 美男 or 子供が話しかけてきた。買い物をしたら、おつりに妙な硬貨が混じっていた。レストランで食事をしていたら、妙な味のサラダが出た……。といった感じです。四六時中、気を許すわけにはいかないのです。

繰り返しますが、「信号」は、あくまでもニュートラルなものです。ある意味やメッセージが託されているかもしれませんが、その意味やメッセージが発信者の思惑通りの作用＝効果＝働きを発揮するかは、誰にも分かりません。

国際関係・国際政治という大きな枠内でも、外交・交渉や、インテリジェンス＝スパイ活動といったレベルでも、飛び交う「信号」は、ことごとく「解釈」「読み」「判断」を裏切る。その意味では、

* 「信号」に「正しい」「正しくない」、つまり「正解」「不正解」はない。

と言えそうです。

「信号」だと思った「こと・もの・さま」を相手に「解釈」を試みてもほとんどの場合、「無効」です。せいぜい、「勘違い」が「正解」に限りなく近い、上出来なパフォーマンス＝成績＝仕事ぶり。そんな感じらしいです。国際政治には、詳しくはありませんが、少しかじってみて、個人的にはそんな感想をいただきました。

*

どうして、こんな話を書いているのかと、不思議に思われるでしょう。実は、あるお方を待っているのです。ポール・ポト、ホメイニ師、仏蘭西（フランス）という、意味ありげで、それでいて実は匿名的な「信号」を呼び寄せ、国と国、文化と文化といったテリトリーを「ニュートラルな信号」が易々と飛び越し、無化＝無効化する様（さま）を思い出すことにより、

*偶然と必然との「間（＝あいだ・あわい）」

そして、

*意味と無意味との「間（＝あいだ・あわい）」

に成立しているであろう

*「何か」＝「間（＝あいだ・あわい）」

あるいは、「AとB」というフレーズの「間（＝あいだ・あわい）」にある

*「と」＝「間（＝あいだ・あわい）」

としか呼ぶしかないものの持つ「匿名的でニュートラルなパワー」が訪れるのを待っているのです。あやういですね。それは百も承知なのですが、この儀式なしには、あのお方は訪れてくれそうもないのです。おふざけではありません。本気です。もう少し、お待ちください。

*

「国際」という言葉の「際」は「間（＝あいだ・あわい）」という意味と重なります。「間（＝あいだ・あわい）」という言葉は、「関係＝係わり合い」の「関」とも係わり合います。

* 「さい＝際＝賽＝賽子＝骰子＝さいころ＝采」⇒「骰子一擲（とうしいってき）＝サイコロの一振り」＝「賭け」＝「賭ける」＝「詩作＝思索＝試作」

以上は、おまじないみたいなものです。さいころが出ました。いや、「出した」と言うべきでしょう。やらせなのです。マラルメ師のさいころです。

* マラルメのサイコロ

については、「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21、「なぜ、ケータイが」2009-01-22、「ケータイ依存症と唇」2009-01-27、「カジノ人間主義」2009-01-30 で、いやというほど出てきます。本人としては、せっぱ詰まった状況で、真剣にサイコロを振っているのですが、その性質上、どうしても、他人様の目からはおふざけに見えてしまうのです。いずれにせよ、

* 「さい＝際＝賽＝賽子＝骰子＝さいころ＝采」⇒「骰子一擲（とうしいってき）＝サイコロの一振り」＝「賭け」＝「賭ける」＝「詩作＝思索＝試作」

は、

*めちゃくちゃなこじつけ

を行った結果としての、おまじないです。

でも、この記事を書くためには、絶対に「欠かせない」ものです。これがなければ、「何か」の力が「書かせない」というほど、不可欠なものなのです。サイコロは、自分にとって、とても大切なものです。もし、サイコロを振る学問があれば、お勉強してみたいです。サイコロを勉強するのだから、

*サイコロジ

となりそうですが、あいにく、その言葉は「予約済み」＝「満室」状態です。psychology (英) も psychologie (仏) も、ダメということです。

じゃあ、賽学、骰学、采学？ それはそうと、もう、「采(さい)は投げられた」のでしょうか。そうです。今は、ギャンブルをやっているのです。その「さい」ちゅうです。

でも、お金はかけられていません。何をかけているのか。その答えを知るために、かけているのだと言っても、現在の状態を言い表すのに不正確な言い方だとは思いません。

*

話を少し飛ばします。

さきほどの国際政治の話のなかで、インテリジェンスという言葉が出てきました。ちなみに、CIAのIはintelligence ですね。また、ITのIはinformation ですね。今挙げた2つの語は日本語では、

*「情報」

と訳す場合があります。「信号」という観点に立つと、この「符合（※ふごう）」を、「符号（※ふごう）」＝「信号」＝「しるし」として見ることになります。何やら、意味深に思えてきます。

*この符合＝符号は、只事ではない。

という感じです。そもそも、

*符合

とは、割符（※わりふ）（＝「しるし」を2つに割ったもの）の片割れ同士がぴったりと合うことから来ているそうです。要するに、2つのものが

*かみ合う ⇒ からみ合う ⇒ かかわり合う ⇒ くっつき合う ⇒ つながる ⇒ あう

というわけです。

インテリジェンスでもインフォメーションでも、多種多様な「信号」がめくばせし合い、何かを引っ掛ける＝ナンパしようとして、わくわくどきどきや、びくびくびくびくや、ぼけーっとしています。何を期待してめくばせし合っているのか？ これから先へと目を向けて、何を懸けた＝賭けたたうえで、何に懸けて＝賭けているのか？

マラルメ師の気配を感じます。すぐ、そばにいるような気もすれば、遠くで見ている視線を感じているだけのような気もします（オカルトめいてきましたが、本人はそういう感じではないつもりなのですけど）。

IとIとで、相合傘。とはいえ、Iと相と合と会と遭は「あった」としても、愛だけは絶対に「ない」だろうという予感があります。そもそもが、ポール・ポトとホメイニ師との話から始まった記事です。その2人の名のもとに、どれだけ多くの人たちの命が失わ

れたことか。

実に、きな臭く生臭い＝腐臭に満ちた固有名詞ではないでしょうか。両者の間（＝あいだ・あわい）に仏蘭西＝フランスという国名で「符合」があったとしても、それは「不幸」と「不合＝不仕合せ」の別称＝蔑称でしかないのではないのでしょうか。

*

かなりシリアスな問題を、きつとおふざけだと取られそうな文章でつづり、さまざまな「ニュートラルな信号」を散りばめ、その「信号」たちの交し合う「めくばせ＝合図」に目を向けてみたものの、あの人、いや、あの固有名詞が訪れる気配は、まことに頼りなげな「しるし」として「知るし」かない。ここに登場させた、

* 「信号＝符号」たちの「符合」は、仕組まれた「必然」＝necessity＝「必要性」なのか、奇しくも表れた＝現れた＝顕れた、「偶然」＝accident＝「事故」なのか？

それを「知る」ためには、

* 「やらせ」を試みることで、「やらせ」＝「必然と偶然の間（＝あいだ・あわい）」を引き寄せる＝引っ掛ける＝ナンパする。

これしかない。そんな気がします。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「かく・かける（4）」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしく願い申し上げます。】

かく・かける (4)

◆かく・かける (4)

2009-05-16 11:13:27 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「かく・かける (3)」の続きです。】

きのうの記事「かく・かける (2)」で、

* 「かく・かける」のコア・イメージ (=中心となるイメージ) は、「宙ぶらりん」である。

という意味のことを書きました。

あれから、いろいろ考えてみたのですが、自分という一匹のヒトのはしくれが「宙ぶらりん」であるせいか、ヒトあるいは人類という存在自体が「宙ぶらりん」であるように思えてなくなりました。

「わたしは宙ぶらりんなんかではない。まして、人間は宙ぶらりんな存在では決してない」。そんなふうに、憤 (いきどお) りを覚え、お気を悪くされた方には、深くお詫び申し上げます。単なる愚者 or 狂人の戯言だと思って (※思うどころか、実際、そうみたいなのです)、以下の文章をお読みください。

きのうは、

* 「印 (=しるし)」は「物体」ではなく、「視覚的イメージ=像=形」である。

とも書きました。

言い換えると、「ニュートラルな信号」という意味です。

*その「ニュートラルな信号」が、メッセージを担った「合図＝めくばせ」であったり、

*そっくりな仲間たちとともに、あちこちに存在する「トリトメのない記号」であったり、

*それ自身ではない、何かの代わりとして存在する「表象」であったりする。

という話もしました。

たった今、「書きました」「言い換えると」「話もしました」と「述べました」が、実際には、パソコンのキーボードのキーを叩くという形で、「書いている」わけです。

ただし、2009年という時点で、「書く」という作業は、多様な形で存在しています。歴史が苦手な自分は、やたら、「太古」とか、「大昔」とか、あいまいな表現を用いますが、その「太古」や「大昔」にヒトは、おそらく、「引っ掻く」「傷つける」「削る」「彫る」「並べる」「塗る」「貼り付ける」といった工作で用いる作業や動作で、「書く」という「行為」をおこなっていたものと想像できます。それは「描く・かく・えがく」「印す・しるす」と大差なくおこなわれていたものとも、考えられます。

そして、現在では、上で挙げた作業＝動作に加えて、たとえば、キーを

*叩く or 押す

あるいは、液晶画面に

* 触る or 押す

という形で「書く」という作業をおこなっています。ある種の障害者向けに、画面に

* 目線=視線=まなざしを、向ける=置く=据える

という形で「書く」作業を可能にしている機器があるらしいことも、知りました。また、
スピーカーに向かって、

* 話す

ことにより、文字を「書く」ことができることは、もう常識になりつつあります。もっと、ほかの形態もあるでしょうが、思いつきません。

*

以上が、現在の「書く」なのです。特に過去 10~20 年間の科学技術の発展は、「書く」と「文字」の形を飛躍的に広げました。これから先も、その範囲はさらに拡大するでしょう。とはいうものの、基本は、

* しるす・しるし

ではないかと思っています。

「しるす・しるし」の語源は、手元の辞書を引いても分かりません。こういう場合、きの

うも書いたように、素人は、素人であるからこそ、かっこうをつけたり、気兼ねをすることなく、

* 「今、ここにある」ものに注目し、手もちの知識と情報で間に合わせる

という方法も取れるわけです。

気取っていえば、クロード・レヴィ＝ストロース「印」の「ブリコラージュ」もどき。これって、カーネル・サンダースおじさん手製のフライド・チキンっていうのと、似た響きがありませんか？ ブランド（＝商「標」＝焼「印」＝烙「印」）ぽいという意味です。ちなみに、レヴィ＝ストロースという、フランス式の発音を英語風に言えば、リーバイ・ストラウス、つまりリーバイスという商「標」をもつ会社名＝創業者名になります。ユダヤ系です。

いずれにせよ、もちろん、ほかの選択肢もありそうですが、身の程をわきまえ、無精者は無精なやり方で楽問します。「正しい vs. 正しくない」ごっこを職業としているわけではないので、「正しくなくていいんだよ」or「正しくなくていいじゃんか」のスタンスでいく、という意味です。

*

で、思ったのですが、辞書で「しるす・しるし」のあたりを見ていたら、「しる・知る・領る・痴る・汁」なんていうものもあって、そのうちの

* 「しる・知る・領る」

に言い知れぬ魅力を感じ、その項を読み耽っているうちに、糟汁（かすじる）を口にしただけで足元がふらつくほどの下戸（げこ）である自分が、その魅力に酔い痴れてしまったのです。あとは推して知るべし。神のみぞ知る。知らぬが仏。Don't be silly. = silly + ass = serious（「なぜ、ケータイが」2009-01-22 からの自己パクリです）というわけで、マジで、

* 「これって、もしかして、つながっているのとかやうか」

と思い込んでしまったのです。

どういふことかと申しますと、辞書によれば、

* かつて、「しる・知る・領る」とは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、という意味だった。

ようなのです。

実に欲深くてジコチュー。いかにもヒトらしい。人間らしい。ヒューマン (human) かつヒューメイン (humane)。

この発見＝見解には、少々、不満（「ふまん」）はあるが、犬のフンを「踏まねー」でも済みそうだ。こりゃあ、ウンがいいワイ。ハウ・ラッキー・アイ・アム！＝ワイはなんてウンがいいんや。きっとそうだ。そうにちがいない。間違いない。言えてる。言えすぎ。上杉謙信。お家（うち）はやっぱり杉（すぎ）で建てるといい（※このあたりは、真剣に読んだり、深読みなさらないでください、ただ景気づけをしているだけなのです）。

簡単に申しますと、「ワイ＝私＝わたくし」ならぬ、ワンちゃんやネコちゃんの

* マーキング行動

を思い出したのです。

* おしっこ（しる＝汁）をかける（＝「かける」）

ことで、「ここは、わたしのテリトリー」と主張＝意思表示する。ネコちゃんの場合には、おしっこ（＝「かける」）以外に、あちこち、

* 「引っ掻く」＝「かく」

こともあります。いずれにせよ、「おしっこ」が出てくるくらいだから、辞書に「知る・領る・痴る」といっしょに並べてあった

* 「汁」

も、つなげて、仲間に入れてやっても、罰は当たらないのではないか。そうすると、おやおや、ワラ・コインシデンス＝What a coincidence!＝「何という偶然であろうか!」。駄洒落を通り越して、ばればれのヤラセですね。牽強付会（けんきょうふかい）とも言いますよね。はい。

で、念のために、

* マーク＝ mark

を英和辞典で調べてみたのです。

凶星でした。楽しみは独り占めしたくないので、みなさん、中型以上の辞典で、markを引いて、そのいろいろな意味を斜め読みし、語源の部分にちょっとだけ目を通してみてください。やっぱり、ヒト＝人間様も生き物のはしくれだったのです。文字通り、お里が「知れた」わけです。

*

ヒトは、

*テリトリーを持ちたがるし、いったん持ったと決めたなら、ペペッと唾をつけて、自分のものだという「しるし」をつけておきたい。

どうやら、寡黙なマラルメ師は、そばにいるらしい。そんな気持ちになってまいりました。待った甲斐がありました。国際政治の話（「際」とは「間（＝あいだ・あわい）」のことにほかなりません）で、道草＝無駄話をしながら待った甲斐がありました。

ダムみたいに無駄ではなかったのです。『ゴドーを待ちながら』のように、デジャ・ヴュを伴う繰り返しのめまいを覚えながら「待った＝舞った」甲斐がありました。

そういえば、バイリンガル作家を余儀なくされたサミュエル・ベケットは、『ゴドーを待ちながら』を英仏両語で書いたという噂を思い出しました。Waiting for Godot と En attendant Godot の間（＝あいだ・あわい）には、何があるのでしょうか？

また、本日掲載した「かく・かける (3)」で出てきた（※いや、「出した」というべきでしょう、あれは「やらせ」を引き寄せるための「やらせ」だったのですから）、サイコロジ＝ psychology と、プシコロジ＝ psychologie との間（＝あいだ・あわい）には、何があるのでしょうか？

さらに言うなら、やはり「かく・かける (3)」で出した、information と intelligence の間（＝あいだ・あわい）には、何があるのでしょうか？ ちょっと見てみましょう。

*間（＝あいだ・あわい） I・i・Y・y ⇒ in ⇒ inter ⇒ inform ⇒ information

*間（＝あいだ・あわい） I・i・Y・y ⇒ in ⇒ inter ⇒ intelligent ⇒ intelligence

ちなみに、Y y は、フランス語では「i grec」＝イ・グレックと読み、「ギリシャ風の i」という意味です。「I・i」（フランス語ではほぼ「イ」と発音しますね）と、「Y・y」との間（＝あいだ・あわい）には、間（＝あいだ・あわい）しか存在しません。なぜ、

アルファベットに「イ」が2つ必要なのか、今も不思議です。

日本語の表記で、「い・ゐ・イ・ヰ」「え・ゑ・エ・ヱ」「お・を・オ・ヲ」があるのと、似ていませんか？ アルファベット同様、あいうえお表に今述べた文字のペアがある（ないのが普通ですけど）のは、やはり不思議です。たぶん、お勉強をすれば、その経緯は分かるのですが、勉強嫌いなので、「不思議だな」とどめておきます。

*

それは、さておき、上記の2つの*に連なる「間」に関する「ニュートラルな信号」たちが並ぶ必然性に似たものも、あるいは意味に似たものも、見せ「掛け」にしからずしません。

in は、中学1年生の教科書で出てくる単語です。「.....の中に（で）、間に（で）」という意味になり得ます。その兄弟の inter は international（国「際」的）でおなじみですが、その inter = 「際」も、「.....の中に（で）、間に（で）」という意味になり得ます。

で、inform には「知らせる」という意味がありますね。だから、information には、「お知らせ・ご案内」=「知識」という語義もあります。一方の intelligence は、スパイ活動という意味の「情報=諜報」に加えて、A I = artificial intelligence =人工知能の「知能=知性」という語義もありますね。

以上が、「しる・知る・領る」につながり、マーキングとテリトリーにとにからみ、「かく・引っ掻く・掻く・書く」という係わり合いを見せ、「かく・かける・掛ける」と手をつなぎ、「掛け」にまで来たという次第です。

*

誰かに頼まれたわけでもないのに、わざわざ律儀に、他人様から見れば「とちくるった」=「常軌を逸した」文章を、解説し弁解しているのは、性分でしょうか。ポル・ポトから始まり、国際関係・国際政治についてのくださった話に移り、途中で妙なことを

書き出した、あんな紛らわしい文章は、適当に書き改めるなり、削除するなりして、肝心のところだけを記事にしておけばいいのかもしれませんが。

でも、自分にとっては、あのお待ちする「儀式」の過程こそが大切なのです。削除すると、言霊が怖いという気持ちも、正直申しまして多分にあります。でも、あの文章は、ここまで来るのに絶対に必要なものだったのです。

*必然なのか、偶然なのか

という、

*宙ぶらりんな

問題＝状況＝事態を、「かけた・掛けた・懸けた・賭けた・書けた」「欠くこと・書くこと」ができない文章なのです。

問題は深刻です。少なくとも、自分にとってはマジで深刻なのです。その問題＝状況＝事態を、「掛け」＝「賭け」と言葉にしたところで、何の意味もありません。このブログに書かれている言葉たちと、その書き手の「あやうさ」を、万が一（※たぶん、そんなことはないだろう、とは思いますが）、気に「懸けて」いらっしゃる方のために、以上、とりあえず記しておきます。ややこしいと思われた方は、お忘れになってください。

*

さて、ちょっとシリアス（serious）な感じになってしまったので、少々 silly + ass 気味に「軌道修正＝シンコペーション」します。

★あすこそは、「賭ける」について「書ける」といいなあ、と願を「かける」つもりです。マラルメ師のご降臨を、ひたすら待つのみという感じです。

と、きのうの記事の最後に書いただけのことはありました。

実は、きょうの記事を「書く」ことは、「賭け」だったのです。まったくの「でまかせしゅぎじっこうちゅう」だったのです。ちなみに、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」は、かつて短期間やっていたブログタイトルです。日テレの「笑点」的内輪受けギャグになって、申し訳ありません。

で、「書く」と「印す」については、何とか「書けた」のですが、肝心の「賭け・賭ける」について、「書ける」状態にある兆（きざ）し＝「しるし・印・標・徴・験・記し・著し」はありません。さきほど、リーバイスとKFCの話あたりで、ちょこっと出た＝漏れたくらいです。でも、

*必然と偶然について思索＝詩作＝試作を重ねた

マラルメ師がそばにいる気配がする以上、このまま「でまかせしゅぎじっこうちゅう」を続けられれば、

*何とかなる

という気もしないわけではありません。

ですので、書き続けてみます。そこで「賭ける」を辞書で調べていたところ、『掛ける』を見よ』みたいな、素っ気ない記述があり、指示に従ってある項目を読んでみたところ、たいした収穫はありませんでした。

トートロジーというんですか？「AはAだからAなのよ、わかったかしら」みたいな感じで、テキトーにあしらわれてしまいました。でも、テキトーは嫌いじゃないので、イヤな気分になることはありませんでした。むしろ、言葉に関しては、テキトーがトーズンだと、あらためて痛感＝納得しました。

辞書、特に国語辞典って、そういうテキトーな記述が多いですね。調べたい言葉の

意味の説明というより、調べたい語をちょっとだけ言い換えてあるだけだったり、「○○を見よ or 参照」とか書いてあって、馬鹿正直にその「○○」を見る or 参照すると、ほぼ同じ言葉が書いてあるだけ。そういう失望を何度か味わうと、辞書なんて、もう引きたくなくなります。ですから、辞書を引きたくない、と言う人たちの気持ちは、よく分かります。

で、「賭ける」については、宙ぶらりんな状態に置かれてしまいました。

むっ、……。

出ました。というか、もよおしてまいりました。マラルメ師の気配を感じます。宙ぶらりん、たとえば、「あれ」ではないか——。さっそく、きのうの記事から「あれ」、つまり大切な部分を自己輸血＝コピペさせてください。

というわけで以下は引用です。

*かかる

という、受動的＝風まかせ的＝なりゆきまかせ的＝身をゆだねる的な、言い方もできません。実際、そんなふうな風に飛ばされて「引越しをする」クモを見たことがあります。個人的には、その受動的なイメージが気に入っています。うん、

*宙ぶらりん

でいきましょう。これが「かく・かける」のコア・イメージです。

以上が引用でした。

そうでした。もう、きのう、ヒントが用意されていたのです。これを必然と呼ぼうと、偶然と呼ぼうと、やらせ＝出来レースと呼ぼうと、どうでもいいことです。肝心なのは、

*「賭ける」とは「宙ぶらりん」である。

だけです。

ちょっと想像力を働かせてみましょう。あるいは、実際に、洗濯ロープか何かを、高いところにある釘のようなものに引っ掛ける。いや、これだと首吊りを連想させてヤバいので、やめましょう。それより、単に、椅子に腰かけて、椅子の脚を部分的に浮かせてみてもいいでしょう。宙ぶらりん状態か、それに近い状態を作るのです。

今、PCのそばで立ち上がって、一本足で立ってみても、

*ほぼ宙ぶらりん状態

を体験できます。できれば、つま先で立ちましょう。

*おっとっと。危ない。あやうい。やばい。やべー。マジヤベ。たよりない。よるべない。馬鹿みたい。あほちゃうか。こんなんでいいのかい？ 助けてくれー！

それが、「賭ける」なのです。というより、むしろ、

*「賭ける」の原点＝原風景

なのです。

体感できましたでしょうか？ 何となくからだで感じれば、それでいいのです。理屈な

んで、いざとなったら、役に立ちません。特に、「賭ける」においては、理屈は無力です。イ・ビョンホン主演の「オールイン」を見ていて、そう感じました（※あのドラマのビョンホン、かっこよかったです）。何しろ、

*半端じゃなく強い「何か」から垂れ下がった糸に、しがみ付いて＝引っ掛かっての「宙ぶらりん」

なのですから。

以上が原点＝スタートライン＝「位置について、よーい、ドン」です。「何だ、そんなことだったのか」とお思いになっている方々も、いらっしゃるにちがいません。でも、「そんなこと」で済ませられる問題ではありません。

この先、

*何に何をかけるか

は、あなた次第です。このあとが大切なのです。「何に何をかけるか」は、あくまでも個人の問題です。しかも、大問題です。ただし、原点だけは同じです。

*「宙ぶらりん」が原点だ

ということです。ヒトも、ヒト以外の生き物たちすべてにとっても、原点だけは同じです。

ところで、ひょっとして、まだ、つま立ちしているあなた、ひっくり返らないように気をつけてください。

かく・かける (5)

◆かく・かける (5)

2009-05-17 10:47:18 | 言葉

英語やフランス語が、26 の表音文字で表記されている、と考えると不思議な気持ちになります。たったこれだけで、あれだけのことが書けるのか、という不思議さです。日本語が、漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記されているのも、摩訶不思議です。日々、体験しているはずなのに、よく考えるとどうなっているのか、さっぱり分からない。

前者も後者も、言葉や理屈では分かった気になっても、それでは分かったと言えない、という感じがします。たとえば、英語やフランス語を母語とする人たちが、漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記される日本語を想像するのは、至難の業（わざ）だと思います。

その逆の場合も、そうでしょう。実際に、ある水準まで習得しないかぎり、「分かる」に近い感触を得るのは難しいのではないのでしょうか。その「分かる」にも、いろいろなレベル=段階、あるいは側面があると考えられます。

*

複雑な文字変換を、PCという機械とワープロソフトという仕組みに代用してもらいながら、今、この記事を書いている自分の場合でも、

*漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記される日本語

とは、どういうものなのかと問われると、言葉に詰まってしまいます。

どう説明したらいいのか、見当もつきません。日本語をぜんぜん知らない人に、分かるように説明する自信がない、という意味です。ところで、日本語は、どれくらいの数の人たちによって使われているのでしょうか？

「使う」という広い言葉を用いると、いろいろなケースが想定されます。「読み、書き、話す」という動作＝行動で分けると、その3種類の動作＝行動がすべてできる人もいれば、事情があって2種類だけ、または1種類だけという人もいるでしょう。

また、母語か、母語ではない、という分け方も可能です。バイリンガルや、トライリンガルや、それ以上の言語を、ほぼ同等に使える人たちも実際にいます。逆に、複数の言語のどれもが満足に使えない人もいます（※ちなみに、これは深刻な問題です）。

*

いつもの悪い癖で、話が広がりすぎました。話題を絞ります。ぎゅっとしぼって、きょうは「書く」こと、そのなかでも韻文＝定型詩を書くことに話を限定します。マラルメというフランスの詩人の

* 詩作＝思索＝試作

について、考えていることを書きたい思いがありますが、まだ煮詰まっていません。26の表音文字を用いて、さまざまな規則に沿って詩を書くという、英詩やフランスの詩について不案内である。これが最大の問題点なのですが、別にヨーロッパの言語の詩について専門的な研究をするつもりも能力もぜんぜんないわけで、

* ある制約のもとに何かについて書く

という行為のメカニズムを探ってみたいという、強い好奇心があるだけなのです。そのメカニズムについて深く考えをめぐらしたらしい、マラルメという人というより、

* マラルメという固有名詞＝言葉＝信号を、媒介＝シャーマン＝巫女（みこ）として、自分のあたまとからだという磁場において、匿名的な言葉＝ニュートラルな信号と戯れてみたい。

と願っているのです。困難な作業であるという強い予感があります。でも、やってみたいです。以前から、気になって仕方がないからです。

この作業に近いことは、「カジノ人間主義」2009-01-30 で、1度試みました。記事のタイトルから想像がつくかもしれませんが、そこでも「賭ける」＝ギャンブルと「書ける・書く」という言葉が、重要な役割を果たしました。必然と偶然についても触れています。

あの問題を、もっと深く掘り下げてみたいです。でも、まだ、煮詰まっていません。というより、まだ、機が熟していないというか、マラルメというシャーマンが近くに感じられないのです。オカルトめいた言い方になりましたが、そんな感じです。

きのうは、一時的ですが近くに、その気配を感じました。この「かく・かける」シリーズでは、きのう、「書ける・賭ける」について、ちょっとややこしい記事を2本続けて書きました。お読みになった方は、そのダジャレ＝こじつけの多さにうんざりなさったことでしょうか。申し訳ありません。

あのようになら、あのテーマを書く方法を思いつかなかったのです。その結果「書けた」＝「賭けた」のが、きのうの記事です。書いた後は、ぐったりしていました。

*

きょうは、日本における韻文＝「定型詩・短歌・俳句」に話を限定しようと思います。きのう書いたことを、日本の韻文に当てはめて、なるべく具体的に、分かりやすく書こうと努力しますので、どうかお付き合いをお願いします。きのうは、話を広げすぎたと反省しています。そこで話を絞ろうとしているのですが、

* 詩作＝思索＝試作

という点では、日本語とフランス語との違いを超えて、共通する部分について考えることもできそうな気がします。

というわけで、韻文です。韻文の反対は、散文と呼ばれていますね。あまり使われていない言葉です。散文とは、要するに普通の文。たとえば、このブログの記事も、散文のはしくれです。

一方の、韻文とは、さきほど述べたように、「定型詩・短歌・俳句」を指します。まず、短い俳句なんかを例にとれば、分かりやすいのではないかと思います。俳句にも、流派みたいなものがあり、比較的自由なものもあれば、厳密さを要するものもあります。ここでは、

* 5・7・5の音＝音節（＝拍＝モーラ）から成る短い詩

くらいのゆるやかな定義をし、季語、切れなどは考慮に入れないことにします。これだけでも、立派な定型です。定型とは、約束事＝規則＝「おきて」＝ルールです。

* 規則とは、自由ではない

という意味にも取れます。「何でもあり」の定型詩なんて、あるわけがありません。

* 規則で縛ることにより、ある種の緊張感と規律を保ち、同時に余韻や響きを持たせる

わけです。

*

ここで、きのうまでの記事で盛んに用いていた言葉を持ち出します。

*宙ぶらりん

です。

*「ち・ゆ・う・ぶ・ら・り・ん」

かろうじて7音になりそうですが、そうではなく、次のような細かい規則があります。

「ちゃ・ちゆ・ちょ」といった拗音（ようおん）は、それで1音と数え、「はっば」の「はっ」といった促音（そくおん）は2音、つまり「はっば」は3音と数える。また、「ノート」であれば、長音の「ー」は1音と数えますから、全部で3音となり、「ん」という撥音（はつおん）も1音に数えるらしいです。

こういう音節の扱いは、「モーラ」というそうです。これで、だいたいのところは網羅（もうら）されたと思います。以上は、まさに規則です。したがって、

*「ちゆ・う・ぶ・ら・り・ん」（6音）

宙ぶらりんが、1音足りずに宙ぶらりんになってしまいますが、「てにをは」を付ければ、「宙ぶらりん」も俳句のなかで何とか詠めそうです。一句浮かびました。

*マラルメとちゅうぶらりんでがちんこか

という具合です。なんのこっちゃ？ とても、読めたものじゃありませんけど、とにかく詠めました。

*

こうやって、ある規則のもとに、言葉を組み合わせて、意味のあるフレーズを作っていく作業が定型詩＝韻文なわけです。この作業＝動作＝身ぶり＝運動を見たり、実際に体験してみると、

*偶然

というものに支配されている自分を感じます。偶然とは、

*必然

と対を成して使われることが多い言葉です。

*偶然性・必然性

と手を加えると、また違った趣（おもむき）を感じませんか？ 個人的な感想を申し上げますと、ちょっと、気取ったような感じがします。こういう細部が、言葉では大切です。特に、俳句のような短い詩では、1音、あるいは1語を変えたり、ずらしたりすることで、趣ががらりと変わることがよくありますね。

*偶然性と必然性とに支えられて、匿名的であるはずの言葉の、意味と無意味とが立ち現れる。

さて、たった今、上のセンテンスを書きましたが、実は、いわば

*「でまかせ」

で言葉をつづりました。「でまかせ」というと「テキトー」「いい加減」「でたらめ」「たわごと」「支離滅裂」「めちゃくちゃ」などの親戚ですから、響きは悪いです。ネガティブなイメージがある言葉です。

でも、正直申しまして、自分が他人様に対し、何かを「話す」なり「書く」さいには、多分に「でまかせ」で話し書いていますと、ここで白状いたします。「でまかせ」とは、文字通り、

* 「出るに任せる」

ことです。自分は「でまかせ」を悪い意味で取ってはいません。この言葉を使うことに抵抗は感じません。ただ、他人様には聞こえが悪いだろうな、という気持ちはあります。両義的＝アンビバレントな感情というやつです。ここまで、話したので、さらに白状いたしますと、特に自分が書く場合には、「でまかせ」に「こじつけ」が加わります。その結果として、

* ダジャレ＝オヤジギャグだらけの文章

をよく書くことになります。

ダジャレはアートであり、芸（＝げい・ゲイ）であるとさえ、思うことがあります。マジです。ゲイ・サイエンス＝楽問＝「楽しいお勉強ごっこ」があるなら、

* ゲイ・アート＝楽術＝「楽しい言葉の曲芸（＝アクロバット）」

があってもいいのではないかと、考えたこともあります。

でも、しょせん、ダジャレは駄洒落です。とはいえ、ものは言いようでして、

* 比喻を多用した文体

と書けば、いくぶん響きがよくなります。かつてジャズが好きな時期がありました。ジャズのどこがいいのかというと、

* 即興性＝アドリブ

です。

これも、広義の「でまかせ」「こじつけ」だと信じています。何か、こうしたものに惹かれるのは、「体系的・論理的・終始一貫・筋道を立てる」ということが大の苦手で「直観・直感・飛躍・勘」に頼って、考えるというか、思うというか、空想するというか、妄想するタイプだからかもしれません。

このブログを読んでいる方は、それを実感なさっていることと存じます。お恥ずかしい限りです。

で、俳句ですが、これは、「でまかせ」と「こじつけ」にはぴったりの韻文＝定型詩ではないかと思うのです。なぜかと申しますと、俳句について調べていて、その起源が、

* 連歌（れんが）

および

* 俳諧（はいかい）

というものらしいと知ったからです。連歌と俳諧について調べていて、感じたのは、

* 連歌と俳諧は、テキトー＝でまかせ＝こじつけ＝いかがわしい＝わけわかんない＝ふ

かかい＝みだら、だった。

らしいということです。なにしろ、かつて、

*連歌は、「付合（つけあい）」＝「ほぼくっつけ合い」と称して、5・7・5や7・7を用いての、複数人物による乱行＝乱交＝オージー、および夜這い＝野合であった（俳句のように、言葉を相手に、「宙ぶらりん」のヒト1人で「くっつけ合い」をするのも大変なのに、複数でやるなんて、すごすぎます）。

また、

*俳諧は、5・7・5・7・7の和歌の形式を用いた、おふざけ＝お笑い＝ジョーダン＝ジャスト・ジョーク＝「えへへ」＝「うふふ」＝「くすくす」＝「あら、いやだあ」＝「何だ、これ？」＝「ん？」であった（※ここに、俳句に感じられる、シュール＝不条理＝ナンセンス＝ノンセンスの萌芽があるのかもしれませんが）。

らしいのです。そう勝手に感じただけですので、あくまでも「らしい」としておきます。「らしい」にしても、それを知って嬉しかったです。さらに嬉しかったのは、きのうの「かく・かける（3）」2009-05-16で、マラルメ師を待つまでに、うじうじぐずぐずしていたときに「でまかせで出てきた」＝「やらせで出した」、

*この符合＝符号は、只事ではない。

と、

*「信号＝符号」たちの「符合」は、仕組まれた「必然」＝necessity＝「必要性」なのか、奇しくも表れた＝現れた＝顕れた、「偶然」＝accident＝「事故」なのか？

というフレーズを、ついさきほどぼんやりと読み返していて、そのなかにあった「符合」という言葉を目にしてデジャ・ヴュを覚え、ありや、

*「符合（※ふごう）」と「付合（※つけあい）」は、激似である。

と感じたことです。こうなると、

*この符合（※ふごう）＝符号（※ふごう）＝付合（※つけあい）は、只事ではない。

と言うしかありません。やっぱり、マラルメ師が見守っていてくれるにちがいありません。

*

少々、うろたえています。きょうは、これから家事と親の介護をしながら、この

*符合（ふごう）＝符号（ふごう）＝付合（つけあい）

について、しばらく考えてみます。あすは、このあたりの不思議さについて、「不思議さを解明しよう」などという気持ちも意気込みも毛ほどもありませんが、いちおう、「こんなふうにならざるを得ない」という感じで、不思議さを整理してみる予定です。

なお、素人が、本当のことを知ろうともせず、玄人の苦勞を反故にするような形で、俳句や連歌について書きなぐりましたことに対し、玄人およびほぼ玄人、並びに、この道の通を自任なさっている方々にお詫び申し上げます。

事実誤認のご指摘は、馬の耳に念仏、いや、蛙の面に小便で、もったいなく存じますので、ご辞退申し上げます。このブログは、正しい、正しくないごっことは無縁でございます。

ないないに ないものねだる ないないばあ

失礼いたしました。

かく・かける (6)

◆かく・かける (6)

2009-05-18 08:35:13 | 言葉

「いないいないばあ」という、赤ちゃんを対象にした遊びがあります。ヨーロッパにも、あるらしく、フロイトも、fort / da というドイツ語の、この遊びに注目しました。fort (あっち=あれえ！？ =去って=いない) / da (ここに=ほら！ =いる=ばあ)、という感じでしょうか。本で読んだ覚えはありますが、フロイトがどういうふうに考えていたのかは、忘れました。個人的には、フロイトが、あの遊びに注目したということを知っただけで十分でした。

パリ・フロイト派だの、フロイトの大義派だのという「言葉=レッテル=ラベル=レーベル」がまつわりついている、ジャック・ラカンが考えていたことには、とても興味がありますが、ラカンは、ジャック・デリダ同様に「ダジャレ」=「比喩の多用」の名人=迷人ですから、フランス語から日本語に翻訳するのは無理でしょう。良心的で丁寧な解説書を読んだほうが、ましだと思っていますが、現在では、あいにくその方面に疎くて、解説書にもめぐりあっていません。

とはいえ、

「いないいないばあ」は、「いないない／ばあ」と分けることができそうです。すると、

* 「いないない／ばあ」 = 「□／■」 = 「0／1」 = 「無意味／有意味」 = 「偶然性／必然性」 = 「不条理／条理」 = 「無／有」 = 「ノンセンス (ナンセンス) / センス」 = 「志

向 or 指向／無方向」……

といった2項対立を連想してしまいます。

2項対立は、すっきりしすぎていて＝きれいすぎて＝話ができすぎていて、実に、あやしい＝いかがわしい＝うたがわしい＝うさんくさい感じがします。えっ？「うさんくさいのは、おまえだろう」ですか？確かにそうだと思います。返す言葉がありませんので、話を変えます。

*

と言いながら、似たような話を続けますが、きのうは、

*符合＝符号＝付合

という、個人的には只事ではない＝話ができすぎている＝うさんくさい事態に遭遇しまして、うろたえてしまい、記事を書いたのちにも、トリトメのないことをいろいろ考えていました。そこで、きょうは、きのうテーマにすることになっていて、中途半端な扱いで終わってしまった、

*俳句

について、ふたたび考えてみます。

5・7・5という音（＝音節＝モーラ）という枠＝規則＝約束事に当てはまるように、いくつあるかも知れない日本語の言葉たちを組み合わせる。簡略化すると、俳句とはそういう「遊び」＝gameです。gameとgambleが語源的に関係あるとかいう、あやしい話をあやしいなりに、とりあえず受けとめてみるのも、面白そうです。これを日本語に「かけて」とみると、

*遊び・遊ぶ=賭け・賭ける=書け・書く=掛け・掛ける

という感じになります。

ここで、これまでブログ上でいろいろな言葉たちと戯れた結果として生じた「痕跡=引っ掻いた跡=引っ掻き傷」を、整理してみたくになりました。現在は、コピーペーストという、とても便利で有り難い方法があります。さっそく、そのコピペを駆使して、これまで書いた複数の記事をもとに「考えるためのヒント=カンニングペーパーもどき」の図というか、リストを作ってみます。

一部、いや、多くの方々にとっては、うんざりするようなものになりそうなので、ざあーっと、斜め読みするだけで結構ですので、お目をお通しください。

A：森羅万象である、「表象」たち or 「トリトメのない記号=まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちの「間 (=ま・あいだ・あわい)」

「ま・魔・間」

「中・宙・柱・仲・躊・紐」

「うつお・空・殻」

「さい・際・賽・采」

「さい・さいころ・賽子・骰子」

「偶然・偶然性」

「魔界・空間・時空」

「無意味・不条理・無」

↓

B : 「しるし・印・標・徴・験・記し・著し」

「しる・知る・領る・痴る・汁」

「しるす・印す・標す・記す・誌す・認す」

「マーキング・おしっこをかける・唾をつける」

「しるべ・標・導・知方」

「知・知覚・認識」

「想像界・幻想」

↓

C : 「わかる・分かる・別る・解る・判る」

「分・分別・分解・分離・分析・分類・部分・身分・分際・区分・分割・分配・分譲・分担」

「別・特別・格別・別格・区別・判別・大別・差別・千差万別・識別・鑑別・別個・別記・個別」

「解・解体・分解・解剖・和解・溶解・融解・解放・解禁・解散・解消・解除・解決・理解・誤解・難解・不可解・氷解・解明・読解・明解・詳解・図解・解釈・見解・解説・解析・解答」

「判・判断・判別・判定・判明・判読・判決・裁判・審判・・批判・談判・評判・判子・血判」

↓

D : 「かく・書く・描く・画く・掻く・欠く・掛く・懸く・繫く・構く・昇く・駆く」

「かける・掛ける・架ける・懸ける・賭ける・駆ける・駈ける・翔る」

「かかる・掛かる・懸かる・繫かる・架かる・權る・輝る」

「かかり・係り・掛かり合う・掛り・繫り・懸り」

「かかわる・関わる・係わる・拘る」

「書・賭・掛・懸・搔」

↓

E : 「テリトリー・縄張り・領土・地所・辞書・お山の大将的気持」

「地・自・字・辞・事・路」

「場・縄・壤・城・畳・杖・定・条・帖」

↓

F : 「表象・代理・代行」

「かわる・変わる（※変る）・代わる（※代る）・替わる（※替る）・換わる（※換る）」

「変・変化・不変・変革・変容・変移・変質・変調・変転・変貌・豹変・激変・劇変・臨機応
変・変装・変相・変速・変性・変成・変節・変心・変身・変遷・変更・変異・異変・凶変・
地変・事変・政変・変幻・変種・変則・変体・変態・大変・変乱・変事・変換・変動」

「代・代理・交代・身代わり・代人・名代・代表・代行・総代・代官・代議士・代用・代
書・代筆・代々・世代・時代・歴代・代償・身代・代金」

「替・交替・替え玉・身替わり・引き替え・引替え・引替・取り替え・取替え・取替・組
み替え・組替え・組替・入れ替え・入替え・入替・言い替え・言替え・借り替え・借り替
え・着替え・差し替え・差替え・替え歌・替歌・両替・為替・鞍替え・鞍替・付け替え・
付替え・クラス替え・商売替え・国替え・国替・組織替え・吹き替え・吹替え・振り替
え・振替え・振替」

「換・交換・換え玉・引き換え・引換え・引換・取り換え・取換え・取換・組み換え・組換え・組換・入れ換え・入換え・入換・言い換え・言換え・借り換え・借換え・借換・着換え・差し換え・差換え・置き換え・置換え・変換・転換・換気・乗り換え・乗換え・乗換・換言・換金・兌換・換算」

↓

G:「あう・合う・会う・逢う・遭う・遇う・和う・壺う・敢う・饗う・あうん・阿吽=阿伝・「あ・うん」・ああ・嗚呼・噫・あわれむ・哀れむ・憐れむ・憫れむ・あわれ・もののあわれ・あい・愛」

「あい・愛・会い・合い・遭い・逢い・遇い・間（※あい）・相・哀」

「愛し合う・合鍵・合印・合札・合図・相図・合言葉・合間・合いの手・間の手・合気道・合口がいい・隣り合わせ・意味合い・色合い・兼ね合い・筋合い・組み合わせ・知り合い・付き合い・絡み合い・立会い・立ち会い・立会・御立会い・立ち合い・折り合い・兼ね合い・張り合い・手合い・肌合い・釣り合い・お見合い・寄り合い・間合い・気合・具合・度合い・歩合・地合い・地合・谷あい・山間・山あい・幕間・幕あい・合い方・合口（※あいくち）・ヒ首・逢引・合挽き・相挽き・合びき・出来合い・果し合い・試合・泥仕合・合鴨・間鴨」

「相對（※あいたい）・相容れない・相呼応して・相携えて・相変わらず・相異なる・相通じる・相打ち・相客・相部屋・相性・合性・相棒・相方・相次ぐ・相づち・相槌・相手・相半ばする・相まって・相乗り・合い乗り・相合傘・相々傘・相打ち・相撃ち・相討ち・愛相・愛想」

「気が合う・通じ合う・話が合う・意見が合う・合口がいい・道理に合う・理屈に合う・落ち合う・巡り合う・折れ合う・話し合う・付き合う・取り合う・計算が合う・間に合う・向かい合う・目と目が合う・張り合う」

「行き会う・行き合う・出会う・出合う・席に立ち会う・死に目に会う」

「災難に遭う・事故に遭う・ひどい目に遭う・盗難に遭う・反対に遭う・反撃に遭う・にわか雨に遭う・地震に遭う・返り討ちに遭う」

「和える・あえる・和え物・あえ物・ごま和え・ごまあえ」

「哀れむ・憐れむ・哀れ・憐れ・物の哀れ・哀れみ・憐れみ・憫れみ」

「間狂言（※あいきょうげん）・間柄・山間・山あい・谷間・谷あい・この間・間の子・合
いの子弁当・合服・間服・間の手・合の手・相の手」

「あいさつ・挨拶・相俟って・敢えて・敢えず・愛する・愛し合う」

「合・会・遭・和・間・相・愛・哀・憐」

「合・合弁・合札・合成・合同・合図・合体・合判・合併・合点・合奏・合流・合致・合
唱・合理・合掌・合意・合鍵・合議・化合・付合・会合・投合・併合・和合・架合（※か
かりあい）・配合・混合・接合・符合・符号・組合・頃合・都合・場合・集合・統合・複
合・総合・適合・調合・請合（※うけあい）・暗合・暗号・話合（※はなしあい）・縫合・
融合・顔合（※かおあわせ）・意気投合」

「会・会心・会合・会同・会見・会席・会悟・会得・会釈・会話・会談・再会・社会・参
会・協会・面会・宴会・都会・密会・集会・照会」

「遭・遭遇・遭逢・遭難」

「和・和平・和合・和気・和気藹々・和声・和睦・和解・和親・和韻・和議・不和・日和・
日和見・中和・付和・付和雷同・平和・共和・協和・柔和・唱和・穩和・溫和・調和・緩
和・融和・講和」

「間・間人・間者・間使・間諜・間接・間道・間隙・間疎・間隔・間歇・間欠・人間・山
間（※さんかん・やまあい）・仏間・広間・合間・中間・手間・世間・谷間（たにま・た
にあい）・林間・雨間・空間・夜間・昼間・峡間（※きょうかん・はざま）・期間・時間・
晴間・雲間・幕間・瞬間・隙間」

「相・相互・相生・相同・相当・相好・相似・相応・相伴・相对・相乗・相思・相克・相
殺・相術・相場・相棒・相違・相統・相聞・相貌・相談・相撲・人相・悪相・形相・手相・
世相・皮相・死相・色相・面相・骨相・家相・実相・真相・様相・滅相・瑞相」

「愛・愛人・愛好・愛用・愛惜・愛情・愛欲・愛着・愛想・愛憎・愛撫・愛護・仁愛・友
愛・恋愛・情愛・偏愛・割愛・最愛・博愛・溺愛・慈愛・熱愛・親愛・寵愛・同性愛・異
性愛・父性愛・母性愛」

「哀・哀心・哀史・哀哭・哀情・哀惜・哀悼・哀愁・哀歌・哀憫・哀憐・哀願・悲哀」

「憐・憐情・憐憫・可憐・哀憐」

↓

H：「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」＝森羅万象の一部として、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちになり得る

↓

(A)

じっと見てはいけませんよ。目に悪いです。特に、PCのモニターで見ていると、目が、しょぼしょぼします。軽いめまいも覚えます。実のところ、たった今、目薬をさしました。

最初のAグループと、最後のHグループを見るだけでも、十分かと思います。上の図をみていると、不思議です。はあーっとため息が出ます。自分で書いておいて、ため息をついているなんて、馬鹿な話ですけど、とにかく不思議なのです。

以前から、不思議だと思っていたことを、こうやって「チャート化＝見える化」してみると、とりあえず、不思議さが整理されますが、整理されたところで、不思議であることは変わりません。

*

俳句に話をもどしましょう。俳句を詠む場合、まず、Aグループ状態になります。空（※くう）に目を向ける。ぼけーっとする。宙ぶらりんである自分という存在を、ぼんやりと意識する。そんな状態です。ただし、ただの「ぼけーっ」ではなく、空（※くう）＝あるもの＝俳句にする対象物に、めくばせをしている＝視線を送っている＝ナンパをしようとしている。わくわくどきどきもするでしょう。そして、

* (中略) = ややこしいことは抜き

として、Hに話を飛ばします。5・7・5という定型詩が出来上がる。めでたしめでたし、というわけです。しかし、個人的には、ここで、ぜひとも強調したいことがあります。

* 作成された=詠まれた、5・7・5という定型詩=俳句は、現に物質としての言葉の連なり (= 森羅万象の一部) として存在し、俳句の規則という理にかなった有意味なものであるかのように装っているが、同時に、無意味で匿名的な言葉の連なりとして、規則などとは無関係に、中身のない殻=空 (※うつお・くう) を装って立ち現れてもいる。

という考え方です。

もちろん、個人的な意見にしかすぎません。ほかにも、これと似たような考えをした、あるいはしている、人たちの気配は感じます。でも、気配なだけで、会ったことも、言葉を交わしたこともありません。自分は交際がきわめて薄いです。とはいうものの、そういう人たちと、

* めくばせを交し合ったとか、目と目が合ったとか、すれ違いさまに、わくわくどきどきしている様子を感じ合ったという強い実感と記憶

があります。

否定しがたく、あります。書物やメディアやネットを通じての、抽象的なレベルでの具体的な話です。

さきほどの、*「作成された=詠まれた……」で始まる文章について、あれはHからAへと逆戻りしたという意味か？ と問われれば、たぶん、そうとも言えると思います、と答えます。でも、「逆戻り」にネガティブな響きを持たせるといふなら、そうではないと、きっぱり否定します。

よく考えてみてください。みなさんは、俳句を詠む場合、まずどうなさいますか？ 今まで俳句を詠んだことのない人が、俳句を詠もうとすると、5・7・5という規則だけをあたまに入れて、いきなり、森羅万象に目を向けるなんてことをするのでしょうか？ そのまえに、既存の俳句を読むだろうと思います。

*俳句は、いきなり詠むのではなく、まず読む。

のです。

*

和歌であっても、漢詩であっても、ヨーロッパの言語の定型詩でも、状況は同じだと思います。さらに言うなら、韻文だけでなく散文でも同じことが言えるような気がします。たとえば、基本的に何を書いてもいい、

*小説は、小説を読んでから書ける（＝掛ける＝賭ける）。

のです。

話を一気に飛躍させますが、ヒトの赤ちゃんは、いきなり言葉をしゃべりません。

*赤ん坊は、話し言葉を聞いてから話すようになる。

のです。

広い意味での「引用」という現象だとか、オリジナリティの不在＝否定の問題だ、とも考えられるでしょう。ただ、今挙げた、俳句、和歌、ヨーロッパの言語の定型詩、散文、小説、ヒトの話し言葉に、おそらく共通して言えるのは、さきほど、上で、Aグルー

プからHグループに話を、性急に移し、簡略化して説明したさいに、

* (中略) = ややこしいことは抜き

とした部分、つまり、

* B→C→D→E→F—G

において、かなり込み入った状況が展開されているだろう、ということです。でも、ここではその問題には、触れないでおきましょう。まずは、大まかな話をしておきましょう。そのほうが、結果的に、こちらでも説明しやすいですし、みなさんにも分かりやすいと思います。

*

ここで、少し道草をしませんか。

吉田戦車という漫画家の作品をご覧になったことがありますか？ 個人的には、ちょっとだけ好きです。数ページ読むだけで、もう十分だと言えば、ファンの方々に叱られそうですが、そんな感じです。

昔、不条理演劇というお芝居が流行りました。きのうの「かく・かける (4)」2009-05-16で触れたサミュエル・ベケットのほかには、ウジェーヌ・イヨネスコ、そして去年の暮れに亡くなった、ハロルド・ピンターという固有名詞があたまに浮かびます。

正直な感想を申しますと、「わけのわかんない」お芝居です。その意味では、このブログに似ていると言えそうです。いや、ベケットさんたちに失礼ですので、前言撤回します。ただ、言霊が怖いので、削除はしませんけど.....。

で、その不条理演劇ですが、そうですねー、5分から10分見て途中で帰るだけで、自

分には十分です。その意味では、自分にとっての能や歌舞伎に似ています。愛好者の方、こんな暴言＝妄言を書いて、ごめんなさい。根がアホなのです。野暮で無粋なのです。許してください。

無粋な自分には、松鶴家千とせ（＝しょかくや・ちとせ）師匠の「わかるかなー、わかんねえだろうな、イエーイ」のほうが合っていて、昔、テレビで食い入るように見ていました。

以上挙げたような漫画やお芝居や漫談を、よく「シュール」だとか言いますね。シュールレアリズム（＝非現実的でわけがわからない）の略らしいです。同じような趣の作品や芸を、「不条理」「ナンセンス＝ノンセンス」とも言う人がいます。「不条理」は、欧米で「不条理演劇」とか「不条理文学」と呼ばれるものが流行したときに、「absurd」（英語）「absurde」（仏語）経由で、古くから日本語にあった言葉が光を浴びた、という経緯がみとめられます。

で、個人的に注目したいのが、

*ナンセンス＝ノンセンス＝ nonsense

です。このナンセンス＝ノンセンス関連の本として、かつて、高山宏氏から、高橋康也氏の『エクスタシーの系譜』『サミュエル・ベケット』、そして、種村季弘氏の『ナンセンス詩人の肖像』を名著だから、と言って薦められて買い求めました。でも、残念ながら、ピンときませんでした。

ただ、ナンセンス＝ノンセンスとは、関係ありませんが、やはり高山宏氏経由で知った本で、種村季弘氏が矢川澄子氏と共訳した、グスタフ・ルネ・ホッケ著の『迷宮としての世界』は、すごく面白かったです。種村季弘氏が単独で訳した、ハンス・H・ホーフシュテッター著『象徴主義と世紀末芸術』と、グスタフ・ルネ・ホッケ著『文学におけるマニエリスム』も、刺激的でした。

*

話を、「ナンセンス=ノンセンス= nonsense」にもどします。なぜ、ナンセンスだけでなく、ノンセンスにこだわって表記したのかと申しますと、sense という英語の言葉に思い入れがあるからです。「オバマさんとノッチさん」2009-01-28 で、sense の中心となるイメージ (=コア・イメージ) や、この単語の多義性=多層性について調べた結果を書きましたので、ご興味のある方は、ご一読ください。

そこでも、少しだけ触れましたが、sense には「意味 vs. 無意味」というさいの「意味」のほかに、「正気」=「本気」=「常識」=「まとも」といった系列の語義があり、さらに「方向」=「方角」=「指向性」=「志向」という「向き」を表す一連の意味があります。

そのうちの最後に挙げた意味に注目したいのです。つまり、

* nonsense には、無意味=常軌を逸した=「ん？」=「わけがわからない」=「変だ」=「たがが外れている」=「ほぼエラー・不具合・故障」に加えて、「無方向」=「行き場を失った」=「行き先がわからない」=「よるべない」=「千鳥足状態」=「ふらふら・ぶらぶら」=「宙ぶらりん」という「意味」(※無意味に意味があるという「ん?」)がある。

あるいは、計算式を立てるなら、

* 無意味 - 意味 = 無 = m = n n = ん? ん?

ということです。さきほどのチャートのAを感じるのです。その意味で、俳句とナンセンスとは、自分のなかでは重なり合い=絡み合い=係り合います。

* 行き場を失った「信号」たちが、空しくめぐりばせを繰り返している

さまが、目に浮かぶのです。まるで、

* 切れかけた電灯が明滅している

ようにも思えます。

だから、「おかしい＝変だ＝ほぼエラー＝ほぼ故障中」であると同時に、「空しい＝どこかはない」のです。これがヒトのはしくれである自分が、「ニュートラルな信号」＝匿名的な言葉」に感傷的なまなざしを送っているだけだということは、承知しています。でも、そう感じてしまうのです。ヒトである以上、致しかたない＝当然＝自然です。

*

さて、俳句に話をもどします。俳句の魅力の1つは、このノンセンスだと思っています。たとえば、例の、

古池や蛙飛びこむ水の音

なんか、シュールで、不条理で、ナンセンスで、ノンセンスに感じられませんか？ もしも、松尾芭蕉の句だという知識がなかったら、「すごい」とか、「すばらしい」とか、「これは名句」だとか、おっしゃる自信はありますか？

それとも、芭蕉作であろうと、爆笑問題作であろうと、松尾伴内（※まつお・ばんない）作であろうと、そんなの「かんげーねー」「知ったことか」「俳句なんて、どーでもいい」とお思いですか？

突然＝唐突ですが、今、こういうお話をしていて、

*意味と無意味、必然性と偶然性の「間（＝ま・あいだ・あわい）」

の気配を感じませんか？

.....。

ですよ。やっぱりね。Alone again naturally ♪

かく・かける (7)

◆かく・かける (7)

2009-05-19 09:25:38 | 言葉

ブルガリというブランドがありますね。BVLGARIと表記されますが、どうしてだろう、と思われる方がいらっしゃっても不思議はありません。米国の玩具量販店「トイザラス」のロゴ「TOYS R US」も、遊び心があって面白いです。

日本のブランドや商品名でも、風変わりな表記を使ったものがあります。アンフィニという自動車のシリーズ名みたいなものがありますが、以前は英和辞典なんかで見かける、発音記号もどきの表記が用いられていた記憶があります。ちょっと話はちがいますが、「あ」に濁点「ㇰ」をつけるなんて表記も、最近、頻繁に目にします。

今、挙げた例は、それぞれ性格が違いますが、「変わっている」とか「人目を引く」という点では似た働きがあります。日本語の変った表記については、個人的には「大賛成」派です。一方で、新語や、言葉遣い、表記に限らず、異形(いぎょう)＝「今までとは違う」＝「よそのものだ」＝「変だ」＝「あやしい」と感じられる存在や現象に遭遇するたびに、ビビって目くじらを立てる人たちがいます。

また、「人権」や「〇〇主義」という言葉を聞くなり、現象のコンテキストや対象の個別性を無視し、思考停止状態になり、パブロフのワンちゃんみたいに、その道のプロ＝それでご飯を食べている人たちの言葉の受け売りである、ステレオタイプ化した罵倒や悪態を口にする人たちもいます。こうした人たちに共通するのは、考える、思う、感じ

る、想像する、という基本的ないとなみを一時的に放棄していることです。

思いやりのところを一時的とはいえ、失う人は憐れです。ある程度の年齢に達した人であれば、だらしなないです。ただ「うざい」と済ますこともできるでしょうが、個人的には残念です。「新しいもの or よそのもの」に媚びろと言っているのでは、ありません。人にとって、「新しいもの or よそのもの」なんてありません。

人の知覚は、すべてが出来レースみたいなものなのです（※このことについては、後述します）。異形（いぎょう）と感じられる存在や現象に対し、条件反射的にところを閉ざす、という行為もそうです。悲しいです。ステレオタイプ化した行為をいったんやめて、思いやるころを持ちたい。そう思っています。思いやったあと、どう判断し、どう行動するかは、その人次第です。ただ、短絡はやめましょうという意味です。

*

世間話は、ここまでにし、きょうの本題に入ります。このブログでは、きのう、おとといと、俳句について書いてきました。同時に、

* 「かく・かける・書く・賭ける・掛ける」とは、「宙ぶらりん」である。

らしい。

* 「宙ぶらりん」を、少し格好をつけて言うならば、「偶然性」とも言える。

のではないかと考えていました。

ところで、「偶然」という言葉に自分はかなり違和感を覚えます。「偶然性」にはしっくりしたものを感じます。「必然」と「必然性」との差には、あまりこだわりません。どうしてだろう？ と考えていたのですが、「偶然」というと何か、物質性を感じてしまうのです。自分にとって、「偶然」という「もの（＝物）」はなく、「偶然性」という「まぼろし＝ほぼこと＝（ほぼ事）」はある。言葉にすると、そんな感じです。

*世界は偶然に満ちている。

などというフレーズに出合ったりすると、なぜか、強い拒否反応を起してしまいます。

隠喩で使われているとしても、です。というより、隠喩として、いわば「確信犯的に」そう言っているのなら、なぜか、なおさら強い拒否反応を覚えます。さらに、「偶然」の対として用いられる「必然」について言えば、偶然の反対が必然だという気がぜんぜんしないのです。

*世界には、「偶然性」だけが屹立（きつりつ）している。

という感じなのです。もちろん、きわめて個人的な感想＝愚見＝妄言です。こんなふう
に強く感じるのは、

*「必然」とは、「ヒトのもの」＝「ヒトの幻想」である。

という思い込みが強いのではないかと自己分析しています。というわけで、「偶然 vs.
必然」「偶然性 vs. 必然性」という図式に沿って文章を書くこともありますが、内心では、
上で述べたような思いが非常に強いです。俳句についての記事を書きながら、常にあたまの大部分を占めていたのは、

*偶然性（※やはり、「屹立する偶然性」と言うべきだと感じます）

であり、話のついでにつづった「偶然」、「必然」、「必然性」という言葉たちは形式的に
並べたようなものです。「偶然性」は、

*宙ぶらりん

と同じで、自分のなかでは、非常に大きな位置を占める気掛かり＝気懸かりな言葉です。

で、家事や親の介護の合間にいろいろ考えていて、はっと気づいたことがあります。デジャ・ヴュのようにも思えるので、以前にもあたまたに浮かんだ、あるいは、何かで読んだか、どこかで聞いた話なのかもしれませんが、いちおう書いておきます。

*

古い話で恐縮ですが、「有楽町で逢いましょう」という歌謡曲が昭和 32 年頃にレコード化され、大ヒットしたらしいのです。当時は、歌の「賞味期限」が今よりずっと長かったので、多くの人たちによって、何年も愛唱されていたとのこと。

自分はその歌の出だしだけをはっきりと覚えています。著作権に触れるので、全部引用できませんが、あなたを待っていると決まって雨が降るみたいなことを言い、あなたがびしょびしょに濡れて、

* 「こぬかと、気にかかる」

という歌詞となります。ここが、どうやら掛詞（※かけことば）＝しゃれ＝言葉の遊びらしいのです（※あくまでも「らしい」です、勘違いである可能性が高いです）。

* 「来ぬか＝来ないか＝来ぬか＝こぬか雨」＋「気にかかる＝木にかかる」

という具合です。何かこれに似た、あるいは同じ掛詞を使った和歌が平安時代ごろにあったようなことを聞いた記憶もあります。また、ほかの歌謡曲でも、使われていた覚えもあります。「手垢の付いた」という手垢の付いた言い方がありますが、まさにあのしゃれは、手垢の付いた掛詞だったということです。

そういえば、「♪こぬか雨降る〇〇筋」という、大阪を舞台にした歌もありました。「来ぬか＝来ないか＝来ないかなあ⇒待つ or しのぶ」というふうには、「こぬか雨が降る」＝

「人を待つ or しのぶ」という、ワンパターン=受け継がれたパクリ=定型が存在するわけですね。

このブログでは、

*オリジナリティはどうでもいいというか、そんなものはない。

という立場を取っているので、パクリ、パクリについては詮索しません。フランク永井という歌手がヒットさせた、あの歌の歌詞をわざわざ取り上げた理由は、

*あのコドモ時代に聞いた言葉が、「掛詞=だじゃれ」だったと、オジサンとなった今になって気づいた。

からなのです。言い換えると、

*言葉の偶然性の産物である「掛詞=ダジャレ」に、偶然性に左右されて、かなりの時を経て気づいた。

ということです。

幼かったころの自分は、たぶん、あの歌詞の意味を理解していなかったと思います。その後、何度か、あの歌詞を聞いたり、自分でも口ずさむことがあったことは確かです。でも、ついきのうになって、はっと気づいたのです。さきほども申しあげましたように、デジャ・ヴュも感じますので、以前にも気づいた瞬間があるという気もします。それにしても、です。

*意味の知らない言葉の記憶が、何年も後になって、分かったり、それがしやれであったりすることに気づく。

という現象が「気にかかった」のです。

*

で、話は、ブルガリに飛びます。

*なぜ、BULGARIではなく、BVLGARIなのでしょう？

ブルガリが何語なのかは知りません。ヨーロッパの言語のうちの1つであることは確かでしょう。

*ABCDEFGHIJKLMN OPQRSTUVWXYZ

これは、英語で使われているアルファベット 26 文字です。これって、何なんでしょう？ というか、何のためにあり、どうしてこの順番で並んでいるのでしょうか？ これが、英語をつづる＝書くためのパーツだという、よく知られたことは別にしての話です。

偶然性の産物として、こういうふうに並んでいるのか？ それとも、何かの規則なり理由があるのか？ ネット検索をすれば、「正しい」答えが見つかる可能性は高いです。でも、このブログでは、あまりそうしたことはしません。書いている者が、無精だということもあります。偏屈だということもあります。とにかく、調べることはしません。

なぜなら、今、「かく・かける」シリーズをやっているからです。宙ぶらりん、でいいのです。このブログを何回かお読みになっている方は、薄々感じていらっしゃるかもしれませんが、

*このブログで書かれている文章、つまり、言葉たちの特徴として、言葉の身ぶり＝運動＝動き＝めくばせ＝表情といったものを、このブログでは、非常にというか、いちばん大切にしています。書かれている言葉たちの意味や内容や指し示すものは、二の次なのです。刺身のつま、なのです。

また、意味の固定化を嫌います。筋を通すことに、うさん臭さを覚えます。だから、やたら「＝」が文章に混じります。あれは、

*言葉が一定の方向を向いたり、1つの意味づけに固着したりしないように、言葉の「向き」をできるかぎり「揺らし」たり、似通った、あるいは、ときには正反対と考えられている言葉を「＝」でつなぐことにより、「意味」ができるかぎり「ずれる」ようにと、故意にしているのです。

どうしてこんなことを書いているのかと申しますと、当ブログのプロフィールにあるメールアドレス宛に、ある読者の方から、このブログの文章の「読みにくさ」について、質問というか、クレームを頂戴したからなのです。

その方宛に、「今は、あたまのなかが整理できておらず、即答ができないので、近いうちに、記事のなかで、なるべく分かりやすいように説明します」といった意味の返事を出しました。

〇〇さん、メールをありがとうございました。こんな説明しかできませんでしたが、お分かりいただけただけでしょうか？

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「かく・かける (8)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしく願い申し上げます】

かく・かける (8)

◆かく・かける (8)

2009-05-19 09:56:38 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「かく・かける (7)」の続きです。】

さて、話をもどしますと、現在、「宙ぶらりん」(※気取って言えば、「屹立する圧倒的な偶然性」)について書いているので、アルファベットの謎については、「宙ぶらりん」の状態、ただし(or つまり)自分の手もちの知識と記憶とでまかせを頼りに(※気取って言えば、「クロード・レヴィ＝ストロース印の「ブリコラージュ」もどき」に)書いてみます。

というわけで、謎は解けません、次のようなことを思い出しました。

中・高生時代に、NHKのテレビ・ラジオの外国語講座を全部視聴するという、あほ＝無茶をやっていたことについては、「あう (3)」2009-04-29 で触れました。その過程で、ヨーロッパの言語のアルファベットが26文字に限らないことも、当然知りました。

ロシア語で用いられている、ロシア文字＝キリル文字も覚えました。そのおかげで、なぜ、当時のソ連のバレーボール選手たちのユニフォームに「CCCP」と記してあるのかも分かりました。そのキリル文字が――NHKの講座にはありませんでしたが――現代ギリシャ語、および古代ギリシア語の文字に近いことも知りました。ちなみに、冒頭で挙げた「TOYSЯUS」の「Я」は、ロシア文字にありますね。

念を押しますが、「TOYSЯUS」は「お遊び＝デザイン＝しゃれ」です。深い意味なんてありません。

*

アルファベットについては、フランス語を勉強していた時に、Y y を i grec (「イグレック」みたいに発音します)と読み、「ギリシャ風の I i (ほぼ「イ」みたいに発音します)」という意味だと、講師が言っているのを聞き、「なんで？」と思ったことを覚えています。なんで、「イ」が2つもいるわけ？ という感じです。その謎は、お勉強嫌いな自分には、今も解けていません。で、もう1つ不思議なことがあったのです。アルファベットの発音を説明している時だったので、Y y の前に聞いた話です。

W w をフランス語では「ドゥブルヴェ」みたいに発音し、なんと「二重の=2つの V v (「ヴェ」みたいに発音します)」という意味だということです。そして、その講師は、続けて以下のような意味のことを話しました。

「英語ではダブリュー、つまり、ダブル・ユー、ユーが2つだって言いますよね。昔は、ユーとヴィー、フランス語ではユ (※カタカナでは書きにくいのですが、いちおう、こう書いておきます) とヴェですが、この2つは同じだったんです」

とあっさりと説明し、それ以上、教えてくださいませんでした。

でも、それを聞いた自分は、「ええっつ」という感じで一瞬、「宙ぶらりん」状態になりました。

- 1) 英語の W は Uが2つという意味。
- 2) フランス語の W は Vが2つという意味。
- 3) 昔々、U と Vは同じだった。

どういうこっちゃ？ この講師、もしかして冗談を言ってるのと、ちゃうか？

- 1) U は母音ではないか。
- 2) V は子音ではないか。

3) 昔々、U と V が同じだったって、どういうことなのか？

4) ただ、文字をよく見ると、W は V + V に見えるから、まんざら冗談でもなさそうだ。

というわけで、手もちの知識と記憶で説明すると、さきほどの、

*なぜ、BULGARI ではなく、BVLGARI なのでしょう？

の答えとしては、

*昔々、U と V が同じだったらしいので、「ブルガリ」は何語か知らないけど、BULGARI ではなく、BVLGARI とつづっても、変ではない。

ということになります。

きわめてテキトーな説明ですけど、そうらしいですよ。理由は、これ以上、聞かないでください。詳しいことは、知りませんので。と言いながら、思いついたことがあります。さきほど書いた、

*昔々、U と V が同じだったらしいので、「ブルガリ」は何語か知らないけど、BULGARI ではなく、BVLGARI とつづっても、変ではない。

って、

*日本語には、「い・イ」と「ゐ・ヰ」、「え・エ」と「ゑ・ヱ」、「お・オ」と「を・ヲ」がある。

のと似てませんか？ 単なる、出まかせですけど。詳しいことは知りません。

*

実は、冒頭でブルガリについて書いたのは、おとといから、日本の定型詩である俳句と同時に、ヨーロッパの言語の定型詩についても、考えをめぐらしていたからです。おとといの「かく・かける (5)」2009-05-17 の冒頭が、

*英語やフランス語が、26 の表音文字で表記されている、と考えると不思議な気持ちになります。たったこれだけで、あれだけのことが書けるのか、という不思議さです。日本語が、漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記されているのも、摩訶不思議です。日々、体験しているはずなのに、よく考えるとどうなっているのか、さっぱり分からない。

となっていたのは、そのせいです。

26 文字でいろいろな言葉を作って、いろいろなことを書けるのも、不思議ですが、そのパーツである 26 文字自体が、不思議というか謎なのです。そう書いた今、またもや、デジャ・ヴュに見舞われています。

あれです。正確な名称は知りませんが、「あいうえお表」とかいうやつです。「お口を空けて、あーん」2009-01-23 で、以下のような文章を書きました。少々長いですが、事態がぜんぜん変わっていませんので、コピペさせてください。

★「あいうえお表」っていうんですか。小さいころ、親の手製の表が、机の上の壁に貼ってあったのを覚えています。そのとき、不思議だったのが、「や行」と「わ行」です。親がつくってくれたものでは、確か、

(前略)

まみむめも

やーゆーよ

らりるれろ

わ——を

ん

となっていて、表を見るたびに、不思議に思っていました。

「なんで、あそこが、ぬけてんだろう？」

今でも、不思議なのは、国語のお勉強をしっかりしなかったからでしょう。あの穴は、たぶん「傷跡」なのだと、思います。かわいそうに……。作家でいえば、丸谷才一氏が、現在も実践している歴史的仮名遣いあたりと関係あるのではないか？ でも、よくわかりません。

これも、グーグルなんかで調べれば、謎が解けるのですが、自分は、これだけは謎のままにしておきたいんです。傷跡はそのまま、そっとしておいて、触れたくない気分です。いつか、傷跡の意味が解けることもあるでしょうが、今のところは、このままがいいです。怠け者だから調べないと言えないこともないんですけど、これだけは、不思議なままがいい。正直なところ、そう思います。一句浮かびました。

傷跡を舐める小猫に われ重ね

ここまで書いて、思い出したことがあります。親の書いてくれたものではなく、学校にあったものです。

(前略)

まみむめも

やいゆえよ

らりるれろ

わいうえを

ん

すっかり、忘れていました。こういうのも、見ました。懐かしい。で、今、こうやって、上と下のとを見比べてみると、あたまが混乱してきました。めまいに似ています。

いったい、どうなっているんだ！

と叫びたいくらい、今、うろたえています。

これもまた、専門の本なり、グーグルでしっかり検索しないと、解決しそうもない予感があります。ただ、きょうは、実は「消えてしまいたい指数」が高いんです。80くらいでしょうか？ 自分でも、きょうの文章は元気がないなあ、トーンダウンしているなあ、と感じます。だから、調べる気力はありません。やっぱり、謎は謎のままにしておきましょう。

★から以上までが引用です。

ぜんぜん、進歩していません。あいうえおの謎は謎のままです。抜けは抜けたままです。間抜けですね。無精ですね。だいいち、みっともないです。でも、事実だし、今も変わらない実感なので、長々とコピペしちゃいました。

さきほど書いた、

*日本語には、「い・イ」と「ゐ・ヰ」、「え・エ」と「ゑ・ヱ」、「お・オ」と「を・ヲ」がある。

と関係がありそうですね。とは言え、これも、きょうは調べる気力がありませんので、謎は謎のままにしておきましょう。謎にはどこか甘美なところがあります。

*

上述の、フランク永井の歌った「有楽町で逢いましょう」の出だしのように、はっきり覚えていながら、実は意味が分かっていなかったり、掛詞だと気づいていなかったりすることって、意外と多いのではないのでしょうか？

ただ、それに気がついていないだけ。アルファベットも、あいうえお表も、よく考えてみると不思議だらけ。にもかかわらず、無意識のうちに、これまでずっと高をくくっていた、そして、今も高をくくっている。そうに、ちがいありません。

こんなふうを考えていると、自分のまわりにある、慣れ親しんだものやこと、知っているはずのものやことが、「あ」に濁点「ㇰ」をつけた表記みたいに、異形（いぎょう）のものやことに感じられてきます。さっき「かく・かける（7）」のなかで、やんわりと批判した、パブロフのワンちゃん状態の、思考停止気味の人たちの、鈍感さや、「思いやる」気持ちのなさへの批判が、そっくり自分に返ってきます。

*考える、思う、感じる、想像する、という基本的ないとなみを一時的に放棄している。

これって、まさに自分のことだと思います。「一時的に」どころか、「いつも」です。異形を異形だと感じなくなってしまうているのです。当たり前だと感じてしまっているのです。書き換えましょう。

*考える、思う、感じる、想像する、という基本的ないとなみを、無意識のうちに長き

にわたって常に放棄している。

でも、これがヒトの常＝性（さが）＝習性だというなら、悲観する必要はないとも思われます。ヒトは、たくましく＝しぶとく＝厚かましい生き物です。その根底にあるのは、生来の、

*飽きっぽさ、諦めやすさ、忘れっぽさ

です。こうしたヒトの習性を思うと、

*屹立（きつりつ）する偶然性＝「宙ぶらりん」など、どうでもいい

とさえ、感じられてきます。

*屹立する偶然性＝「宙ぶらりん」について考えすぎたことへの反動

でしょうか？

*

ここで、再度、長めのコピペをさせてください。個人的にとっても愛着のある記事、「カジノ人間主義」2009-01-30 から、以下に引用します。

*やっぱり、出来レース、やらせ、八百長らしい。気づいているくせに、あるいは、気がついていないふりをして、または、すっかり忘れて、やらせを本当だと思いこんでいる、もしくは、思いこもうと自分をだましている。

*ある種のスポーツ（※ あえて、名指ししません）や、ある種のテレビ番組（※ あえて、

名指ししません)と同じです。嘘、つくりもの、フィクション、編集済み、情報操作されたもの、筋書きなしに見せかけて、本当は筋書きがあるもの—そういうものを見て、ヒトは何とも思わなくなっている。心の底では、嘘だとわかっている、嘘だと思おうと楽しめないから、「ただ見ている」だけ。実質的傍観者状態。

*悪いとわかっている、間違っているとわかっている、正しくないとわかっている、正直じゃないとわかっている。でも、都合が悪いから、そういうことは、忘れる、あるいは、忘れたふりをする、または、すっかり忘れてしまっている。

*思い出そうと努力すれば、思い出すことができる、学び直すこともできる、再発見することもできる、「わかった」と叫ぶこともできる。なのに、忘れている。思い出そうとしていない。そうした気迫がみられない。都合が悪いから、必要がないから、という言葉が、心の奥底にある。

*へたなことを口にした、実行に移すと、他の人たちから、寄ってたかっていじめられたり、場合によっては、消されるから、思い出さないし、わかろうともしないし、実際に、忘れてしまっているし、わからなくなっている。

*「わかる」は「わかる」ことだから、まだらにしか、わからない。「わかる」「わからない」ということは、ふるいにかけて、よりわかること。そのふるいに、かからないものは、わからない。そういう、しくみになっている。

*ヒトは、まだらの世界を見ている。おそらく、そのまだら模様は、ヒトに共通している。

*ヒトは、知覚され記号化された情報を、導線と回路を通して、まだらに脳で処理している。その導線も回路も、無限ではなく有限の質と量のものしか通さない。ノイズは、抑制されている。そうやって、脳の過熱による機能不全を防ぐ仕組みが存在する。

*カジノ資本主義というものは、上に書きつづったヒトの行動とすごく似ている。激似。酷似。かなりの部分がダブっている、かぶっている、そっくりと言ってもいい。

*答えが最初から出ている、出来レース。筋書きが最初からある、やらせ。何か黒い目的があって仕組まれている、八百長。

*すべてが、ぴったり当てはまり、すべてが、正しいとされ、すべてが、わかるような仕組みができています。

*真理や実体なんて、哲学や科学の出来レース。それを支えているものが、表象という名の、代理人。何でも代行屋さん。まいどありー。おおきに。儲けさせてもらっております。

*Aだと思っているものは、括弧にくくられたA、つまり「A」。それを、Aだと思いこんでいる。さもなきゃ、人間=ヒトやってられないよー。確かにね。そのとおりだ。それこそ、真理だ。トゥルースだ。ヴェリテだ。誰も否定できない真実だ。

*だから、大丈夫。このままで大丈夫。「仕組み」とか「からくり」なんて、ちゃちゃを入れる、ふざけたやつは、くたばってしまえ。そんなやつは、人間様じゃない。ひとでなしだ。

以上が、引用です。

*

今読んでみると、ずいぶん威勢がいいというか、元気がありますね。ヒトの宙ぶらりん状態を、逆説的な言い回しで、ポジティブに、つまり、裏を返せば、きわめてネガティブに風刺＝「弱虫の遠ぼえ」しています。きのう書いた、ややこしいチャート＝図表を読むさいの手引きにもなりそうです。以上の引用文で出てくる「出来レース」とか「やらせ」というのは、

*必然性とは無縁の、屹立する偶然性＝「宙ぶらりん」に内包されるもの

です。前にも書きましたが、「偶然の反対は必然だ」なんて嘘です。国語のテストだけで「正しい」とされるベテレンです。まだ、考えは煮詰まっていますが、おそらく、

* (偶然性 \cong or \neq 必然性) \Leftrightarrow 自由 (=幻想) = 不自由

だという気がします。

で、話をもどしますが、上の「*必然性とは無縁の.....」で始まるフレーズを、言い換えると、(以上の引用文で出てくる「出来レース」とか「やらせ」というのは、)

*いわゆる「自由意志」や「ヒトの無限の可能性」とは正反対 or 無関係の、「徹底した不自由さ」

です。

矛盾だらけで、ややこしいですが、とりあえず、そんなふうに感 (=勘=観) じています。思えば、「カジノ人間主義」2009-01-30 も、マラルメがらみで書いた文章でした。

*マラルメ = 魔羅縷奴って、もしかしたら、猛毒 = 毛毒 (※毛沢東) = 妄怒苦かもしれない。

そして、

*屹立する偶然性 = 「宙ぶらりん」って、ひょっとしたら、「身をゆだねる」 = 「身をまかせる」性質のものではなく、「身ががんじがらめにしぼる」 = 「身を侵す = 犯す」ものかもしれない。「賭け」も「書く」も「占う」も「知る」も「分かる」も、何もかもが、圧倒的な偶然性の「前では = もとでは」、無力で空しい。

ふと、今、そう思いました。

そう思ったとたん、何だか、悪寒がしてきたので、大事をとって、きょうはここで、失礼をいたします。実は、昨夜から今朝にかけて、あまり眠れなかったのです。

ポルポトに 我が身を重ね 見た夢は

書く・書ける (2) 【かく・かける (9)】

◆書く・書ける (2)

2009-05-22 09:19:21 | 言葉

さて、今回をもちまして、「かく・かける (1)～(8)」シリーズ (2009-05-14～2009-05-19) の補遺＝おまけ＝付録＝追加はおしまいです。ですので、「書く・書ける」というタイトルのもとに、このブログの顧問＝アドバイザーであるマラルメ師がらみに、

* 「書く・書ける＝賭ける」

という問題について、総まとめみたいなことをしてみようと思います。マラルメという人は、昔々生きていたフランス人で、日本の中学校にあたる学校で英語教師をしながら、一般の人たちからは「わけがわからない」と言われる詩を書いていました。実際、何を考えていたのか、わけがわからない人です。そもそも、誰でもそうですが、

* 他人様の考えていることなんか「わけがわかる」わけがない。

のです。

だから、勝手に想像=推測するしかないわけで、そうならば、いっそ、「□□さんが考えていたこと」なんか、無視して=放っておいて、自分が考えていることを一生懸命に追求したほうが、人としてはまっとうなのではないか、とも思っております。というわけで、というか、何となくというか、このブログでは、なるべく

*「▽▽さんがECEって言っていました or 書いていました」

は自粛して、

*今、ここにあるものやことや現象と、手持の知識と記憶を総動員する。

という、無精で=横着で=出まかせ主義的なやり方で、ああでもないこうでもないや、ああでもあるこうでもあるという具合に、のらりくらりとゴタクを並べております。とはいいながら、書いているものは、いつやら、誰かが言ったり書いたことと激似で、

*オリジナリティもクリエイティビティも、まったくなし

というパッチワーク=継ぎはぎ=ごった煮を書いています。もろ、言い訳になりますが、これって、仕方がないんです。

*物「事」を「書く」ということは、「事欠く」ことである。

というのは、誰も避けることができない仕組み=メカニズム=仕掛け=ネズミ捕りみたいなのです。

ですので、これから書くことも、いつやら、どこかで、誰かが言ったか書いたものにそっくりなものになると思いますが、いちおう、このシリーズのまとめとして書いてみます。

*

で、またマラルメが出てきますが、そのマラルメという人は、

*書くことは、「偶然性を装った必然」＝「人為的な偶然性」だ。人為的なものである以上、「賭け＝書け」は偶然の産物に見えて、実際は「やらせ＝出来レース」でしかない。したがって、ヒトは、その意味においてのみ、作品、たとえば、詩を「書ける」にしかすぎない。

みたいに考えていたような気がするのです。

マラルメの書いたものを原文のフランス語で読んだのは、20年以上も前のこと。それも、たいした読解力もないくせに、ちょっと読んだだけ。あとは、翻訳や、わりと質のいい解説書＝あんちょこ（※これって死語でしょうね）を読んだだけ。でも、すごく気になるので、過去の言葉の切れ端を大事に記憶しておいて、たまにあたまから引き出して、いろいろ考えてみる。ずっと、そんなことをしています。

言葉というのは、匿名的なもの＝誰のものでもないという特性があるため、本来なら、もう、マラルメなどという固有名詞にこだわることも、まして自分自身の名前という固有名詞に執着する必要性も、ぜんぜんないのです。でも、言葉には言霊という言葉で言うしかない、畏怖すべき側面があることを、ひしひし感じております。で、たとえば、外国語の名前をカタカナに変換しただけのものではありますが、

*マラルメ

という言葉に、ある種のパワーみたいなものがそなわっている「気がして」たまらないので、シャーマン＝巫女（みこ）みたいに、その名＝言葉を媒介にして、言葉を引き寄せる＝引っ掛ける＝ナンパするという悪さをしているのです。

ややこしいことを書いて、申し訳ありません。この文章をお読みになっている方は、さぞかし、ややこしいとお感じになり、うんざりなさっているだろう、とは十分承知しております。でも、このようにしか、書けないのです。

*

さて、ちょっと視点を変えます。

「かく・かける (1)」2009-05-14 の下のほうでA～Fのついた図表を描きました。いちおう、コピペをさせてください。

A：ノイズ+熱 ⇒ ニュートラルな「信号」：合図・視線・まなざし・表情・刺激

↓

B：ノイズ+熱 ⇒ 経路・通路（光・電波・波動・電線・管・ニューロンなど）：線・糸・揺れ

↓

C：ノイズ+熱 ⇒ 回路・知覚器官・知覚組織・解読版・グリッド：色づけ・分ける・知覚・見る・解読・解釈・識別：網・濾過記=フィルター・カメラ・マイクロホン

↓

D：ノイズ+熱 ⇒ スクリーン・膜・細胞・機械・器械・画面・スピーカー・発信装置=受信装置：幕・器

↓

E：ノイズ+熱 ⇒ 映像・音声・震動・運動・動作：動き・まぼろし・イメージ

↓

F : ノイズ+熱 ⇒ 賭け・ギャンブル・偶然 (accident) / 成功=不成功・当たり=外れ・作動=誤作動・正常=異常 or 異常・順調=不調・OK=エラー

以上なのですが、ちらりとだけ、見てください。

* ノイズ+熱

という文字が6つ見えますね。このもととなった「あう (6)」2009-05-02 の最後の3分の1ほどをまたもや、横着をして、以下にコピペしますので、これまた、ちらりとだけ、目をやってみてください。

* 論理というものは、案外、熱いものなのかもしれない。

* 哲学や論理学だけでなく、数学や物理学を含む自然科学でもいいが、そうした学問を学ぼうとか、研究しようとするヒトは、しばしば強い情熱（感情的、情動的といったほうが正確かもしれない）をこころに秘めている。

* コンピューターは以前には電子計算機と呼ばれていた。つまり、機械である。最先端のもの、そして未来のものは、違った素材が主体になるというが、現在の主流のコンピューターは金属や鉱物が素材である。機械やコンピューターというと、冷たいイメージを連想されがちだが、実際に機械やコンピューターを扱っている人にとって、いちばんの悩みは熱をどう下げるかだという。機械は作動、つまり動く。動くからには熱を発する。熱は機械そのものの素材を変形あるいは変化させる。すると誤作動が起きる。したがって、「熱を下げること」がきわめて重要な課題になる。

* コンピューターも、医療用のカメラやメスも、どんどん小型化されてきている。機械

や器材は、「動く」のが仕事である。動くためには熱を発しなければならない。熱になると動きに狂いが生じる。コンピューターに話を絞ると、コンピューターは、1か0の二進法で情報を処理する。1か0という仕組みを実現するためには、どんなにあがいても、何らかの移動、変化、反応という形態をとらざるをえない。分子、原子、電子、というナノの世界であっても、熱から逃れることはできない。

*数学者も、論理学者も、哲学者も汗をかく。禅僧も、修道士も、修道女も、教祖も、聖人と呼ばれるヒトも、みんな汗をかく。囲碁の名人も、チェスの達人も、汗をかく。コンピューターも、あっちっち。ナノテクも、それなりに、あっちっち。バイオテクノロジーもDNAも、それなりに、あっちっち。理論物理学も粒子も、それなりに、あっちっち。ノーベル賞も、きわめて、あっちっち。

*脳でも、事態は同じらしい。ヒトは生きている限り、熱を発する。食物を摂取し排泄をする存在である以上、必然である。沈黙思考、冷徹な思考などは、嘘だったのだ。

*プリズムは、勝手にきらきら輝くのではない。そんな魔法なんてない。見る者が、動くからきらめくのだ。

*コンピューターはもちろんのこと、「運動」(※つまり、移動、変化、反応)するものは、常に熱を発せざるを得ない。冷たいようで、実は熱い。死んだようで、実は生きている。比喩を用いれば、蓮實重彦氏の著作のタイトル『批評あるいは仮死の祭典』にある「仮死の祭典」と言える。死んだふりをして、熱い。死を装っても、うごめいている。

以上です。

*

どうですか？

*熱

と

*動く

という文字がいくつも散りばめてありますね。

実は、これが、このシリーズをまとめる=束ねるキーワードなのです。当ブログは、支離滅裂=出まかせ=でたらめにはちがいないのですが、それなりに「流れ」みたいなものがありまして、個人的な書きものですから、当たり前と言え、それまでなのですが、とにかく、「つながっている」のです。

で、結論から申しますと、ここに来て、またその流れのなかで1つの節みたいなものが出てきまして、それが

*熱=動き=然=燃 (≡ ノイズ)

なのです。

*

では、説明させてください。

このシリーズでは、偶然性と必然性について、一貫して考え続けてきました。そのさいに手掛かりとしたのが「かく・かける」という大和言葉系の言葉の多重性=多層性でした。これは、送り仮名を添えて「漢字+ひらがな」と表記することで、確認できます。

また、その作業の過程において、「当てられている」漢字の語義や「解字」を漢和辞典で調べることで、思いがけない発見もありました。で、ふと、「かく・かける」に当てる漢字だけでなく、

*偶然・必然

も「ついでに」調べてみたのです。で、びっくりしました。瓢箪（ひょうたん）から駒（こま）が出る。鳶（とび）が鷹（たか）を生む。という感じで、

*偶然に偶然出合って=出合って=出遭って=出逢ってしまった

のです。

それまで出そうで出ない感じだったものが、一気に出てしまった、と言ってもいいです。もよおすことなく出てしまった。つまり、漏れ出てしまった。お漏らしをしてしまった。粗相をしてしまった、とも、似ています。とにかく、

*偶然に、偶然に遭遇してしまった

のです。こういう時に、言霊の気配を感じちゃうのです。あれ一つ、という感じです。とにかく、結果を箇条書きします。

*偶然=遇+然

*遇：「あう」「遭遇=ひょっこりと思いがけずにあう」「もてなすことで、相手と関係し合う」「CHANCE」「たまたま=おとっと=ひょっこり=あら、まあ」「似たもの同士が出あってペアを組む」「符号=符合=付合」「合体・ドッキング・性交（※比喩）・交尾（※比喩）・つがう（※比喩）」「熱い！ やばい！ 間違いない！」（※ご不快なお気持ちをいだかれた関係者の方々に、お詫び申し上げます。でも、すごく言ってるんです）

*然：「イエス」「OK」「それしかない」「.....みたいよ」「でもねー」「でもさあ、でもさあ」「.....だとしたら」「でね」「熱くなる」「燃える」「似てると思うけど、『燃』って

字の親戚」「ジュージュー肉を焼く」「脂身を焼く」「『難』っていう字が意味する自然発火とも親戚」

*必然=必+然

*必：「ぜったいに（or きっと）……になる／間違いない！」「あたりめーよー」「何が何でも……するわ」「目じるしの棒くい（？）を、両側から当て木をして締めつけて（？）、動くことのないように、ずれることのないように、しっかり固定する（※なんのこっちゃ？ とにかく、力づくで動けない状態＝「ほぼテゴメ」にするらしい）」

複数の漢和辞典で調べた結果、以上のような意味のことが書いてあったのです。

個人的には、びっくりしました。さきほど、ちらりと見ていただいた、2つの記事に出てくる

*熱

という言葉が、どうして気に掛かって仕方がないのかが、ぼんやりと分かってきたからです。

*

さて、ここからは、飛躍します。

めちゃくちゃこじつけます。まず、チャート化＝図式化＝カンニングペーパー利用＝見える化します。

| 森羅万象=宇宙

| ↓ ↑

偶然性=遭遇=であう ↔ | 宇宙の揺れ=動き=膨張?

| ↓ ↑

| 熱の発生 (≡ ノイズの発生?)

└──────────┘

(知覚という枠内) (知覚という枠外)

└──────────┘

必然性=人為=ヒトの意思・意志 |

↓ ↑ | =自由=不自由

人工物=機械・器械・機具・言語 |

└──────────┘

以上のチャートを説明すると、以下ようになります。

*偶然性とは、絆（きずな）で結ばれた森羅万象のかけら同士が「であう」場=可能性である。

*偶然性とは、森羅万象のかけらである割符の片割れ同士が符合する場=可能性である。

*必然性とは、ヒトが偶然性を装った＝真似た結果として、作られた規則性＝整合性である。この前提には、ヒトが偶然性に必然性を見ている＝錯視しているという状況がある。この人為的な必然性の有効性は、ヒトが製作し操作している機械・器械類、およびそれらを利用するの諸システムにおいて、顕著に観察される。

*ヒトが自らに備った知覚、特に狭義の言語を通して見た（＝錯視した）場合には、必然性と偶然性とは相反する＝矛盾するものとして知覚＝認識される。

*森羅万象＝宇宙が、常に、揺らぎ動いている（＝膨張している？）結果＝原因として、熱が遍在している。

*森羅万象＝宇宙が、常に、揺らぎ動いている（＝膨張している？）結果＝原因として、遍在している熱と、やはり遍在しているノイズとが、同じものである、あるいは、同じ特性を備えているかは不明。

*熱とノイズとには、ニュートラル＝匿名的＝特性を特定できない、という共通点がみられるのではないか？

以上が、偶然性と必然性についての個人的考察＝妄察です。以下は、「書く・書ける・賭ける」についての個人的考察＝妄察です。

1) 森羅万象である、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちの「間（※ま・あいだ・あわい）」に、ヒトは「何か」を見る＝錯視する＝知覚する。その「何か」は個人としてのヒト、あるいは、特定の集団としてのヒトによって異なる。

2) ヒトは、1) の過程において、見る＝錯視する＝知覚する「何か」に対し、自らの所有物である「しるし」を「しるす」習性がある。これを「書く」という行為の源泉とみなすこともできる。

3) ヒトは、2) の過程の次の段階として、見る＝錯視する＝知覚する「何か」を「分かるもの」に転じる。ここで、知覚だけでなく、言語が重要な役割を果たす。多くの場合には、知覚器官を用いた知覚よりも、脳内に深くつながりを持つ言語のほうが、より優勢になり、脳を中核とした認識作用を促進させることになる。また、言語のうちの話し言葉よりも、文字を用いた書き言葉のほうが優勢な道具として機能することになる。それは、文字の物質性、つまり、文字が保存＝記録、携帯＝流通＝運搬＝伝達＝通信、複製（※筆写 or 印刷）される特性を備えていることが、大きく寄与していると考えられる。「かく」は、「掻く」あるいは「描く」を経て「書く」へと発展し、特権化されたたと考えられる。

4) ヒトは、3) の段階において、2) の段階において学習＝獲得した習性を、具体的な行動に移す。

5) ヒトは、3) の段階において、「表象」の認知と「表象作用＝代理・代行の仕組み」を無意識に、あるいは、意識的に学習＝獲得する。

6) ヒトは、3) の段階において、4) と5) でみた、言語を中核とした劇的な学習能力＝情報処理能力の獲得によって、テリトリーの発生と成長、集団行動の洗練化、および、コミュニケーションの高度化を急速に前進＝発展＝発達させる。

7) 6) での急激な変化＝発達は、特定のテリトリー内の「であい」とその深化を加速化するのみならず、複数のテリトリー間での「であい」を加速化させる。

8) 7) の結果として、ヒトは「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」という概念をいなくようになる。これにより、ヒトは、自らがこの惑星でもっとも優れ＝進化した存在であるという自信を得る。

9) 8) は、あくまでもヒトの幻想＝想像であり、ヒトが森羅万象の一部として、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちになり得る状況は変わらない。

10) ヒトは、森羅万象だけでなく、自らもまた森羅万象の一部として、知覚＝認識する。その結果、森羅万象と自らの両方を、1) で述べた、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちの「間（※ま・あいだ・あわい）」に、ヒトは「何か」を見る＝錯視する＝知覚する対象として扱うようになる。その「何か」は個人としてのヒト、あるいは、特定の集団としてのヒトによって異なることは、1) でみた通りである。

*

以上の1) から10) は、「かく・かける (6)」2009-05-18 にある、めまいを誘うほど長たらしい図表をご覧になりながら読むと、理解しやすいかと思います。いや、あの図はご覧にならないほうが、よろしいかとも思います。

ここまで、辛抱してお付き合いくださった方に、こころより感謝いたします。

奥付

奥付

空前の「純文学」ブーム

<https://puboo.jp/book/9891>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/9891>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/9891>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

{{
-}}

空前の「純文学」ブーム

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
